~~Lc 20-4~~
D42A
100
107

國勢院編纂

日本帝國第三十九統計年鑑

大正十年二月刊行

昭和五十三年四月一日経済研究所資料係より日本経済統計文献センターへ供用換

同局
昭和41年10月2日

緒　言

統計年鑑ハ行政各部ノ統計ヲ本院ニ蒐集シ之ヲ其ノ種類ニ依リテ數十科目ニ分類シ帝國全般ノ形勢ヲ大觀スルノ目的ヲ以テ編纂シタルモノニシテ明治十五年以降年々公刊シ今ヤ第三十九年鑑ヲ出スニ至レリ

行政各部ノ統計ヲ公刊シテ廣ク社會ニ頒布スルニ於テハ全般ニ亘レル統計年鑑ハ唯其ノ梗概ヲ收載スルニ止メテ可ナリト雖本邦官府統計ハ一般社會ニ頒布セラルヽモノ甚尠ク國民ハ統計年鑑ニ依リテ始メテ行政各部ニ關スル統計ヲ知ルヲ得ルノミ、故ニ統計年鑑ノ編纂方法ハ自ラ歐米諸國ト異リ各廳統計中一般社會ノ知ルヲ要スル事項即チ其ノ社會統計ニ屬スル部分ハ努メテ之ヲ收載シ且既往ノ推移ヲ明示セムカ爲ニ成ルヘク多ク累年ノ數ヲ列記シ以テ覽者ヲシテ遺憾ナカラシメムコトヲ期シタリ而シテ第三十九年鑑ハ其ノ科目ヲ分ツコト總テ三十四ナリ

統計年鑑ノ收載事項ハ學術ノ進歩ニ伴ヒ世運ノ推移ニ鑑ミ常ニ之カ更正ニ努メ以テ實社會ノ活用ニ適セシメサルヘカラス故ニ本院ニ於テハ隨時各科目ノ更正ニ就テ審査攻究ヲ怠ラス、常ニ全編ニ亘リテ繁冗ヲ芟除シ事ヲ簡明ナラシムルヲ期ス

歐米文明國ノ統計書ニハ其ノ內容ノ梗概ヲ記述シ卷頭ニ揭ケ以テ覽者ノ活用ニ便スルヲ常トス、然ルニ本邦ノ諸統計書ハ從來殆ト此ノ事ナク單ニ數字表ヲ揭クルニ止メタルヲ遺憾トシ第三十六統計年鑑ヨリ其ノ內容ニ就テ主任各統計官ヲシテ梗概ヲ記述セシメ之ヲ卷頭ニ揭ケタリ、但各科目中各廳ノ根本調査方法ニ就キ遺憾ナキ能ハサルモノアリ隨テ計數ノ正否疑ハシキモノナキヲ保セスト雖今ハ各廳ノ報告ニ信ヲ措キ記述セシメタリ、匆卒ノ起草ニシテ推敲ノ時ナク精粗統一ヲ闕クモノ多ク從テ不完全ノ譏ヲ免レサルヘシト雖庶幾クハ以テ活用ノ一助ト爲スニ足ラム乎

大正九年十一月

國勢院第一部長　牛塚虎太郎識

凡　例

本編ハ各官、公署ノ報告書類竝是等ヨリ蒐集セル材料ニ就キ其ノ必要ナル事項ノ計數ヲ轉載摘錄シ又ハ若干集計ヲ施コシテ編纂セリ而シテ其ノ比例、平均等ニ至リテハ右報告等ヨリ轉載セルモノ之アリト雖多クハ本院ニ於テ算出シタル所トス

本編ニ揭クル諸種ノ事項ハ之ヲ綜合シテ三十四科目ト爲セリ即チ次ニ示ス所ノ如シ

1. 土　地
2. 氣　象
3. 人　口
4. 農　業
5. 家畜及家禽
6. 山林及狩獵
7. 漁業及製鹽
8. 鑛　業
9. 工業及賃金
10. 外國貿易
11. 內國商業及會社
12. 產業組合及同業組合
13. 電氣事業及瓦斯事業
14. 交　通
15. 通信及郵便爲替貯金事業
16. 貨幣及度量衡
17. 銀行及金融
18. 保　險
19. 官廳使用現業員共濟組合
20. 救育及慈惠
21. 災　害
22. 衞　生
23. 敎　育
24. 社寺及敎會
25. 警　察
26. 裁判及登記
27. 監　獄
28. 陸　軍
29. 海　軍
30. 財　政
31. 爵位勳章及褒章
32. 議員選擧
33. 官吏公吏及恩給
34. 朝鮮臺灣樺太及關東州附北海道

本編各科ニ於ケル各項ノ事實ニシテ其ノ概要ニ屬スルモノハ遠ク既往ニ遡リテ累年ノ數ヲ列擧シ其ノ最近年ニ係ルモノ即チ主トシテ大正七年又ハ同六年ニ係ルモノハ概ネ土地、時及各種ノ事項ヲ細別揭載セリ

本編ニ於テ全國ト稱スルハ主トシテ北海道及三府四十三縣ニ屬スル事實ナリト雖往々朝鮮、臺灣、樺太ノ各植民地全部若ハ其ノ一部ヲ包含スル場合之ナキニアラス要スルニ是等ハ孰モ次表ニ於テ其ノ地方別ヲ揭クルヲ以テ其ノ異同ヲ識別シ得ヘシ

土地ノ區別ニ依ル事項ヲ揭クル場合ニ於テ其ノ土地排列ノ順位ハ隣接地方相互ノ現象ヲ對照比較スルニ便ナラシメムカ爲東北ニ位スル地方ヨリ西南位ニ在ル地方ニ向テ順次排列シ而シテ特ニ重要ナリト認メタル事實ハ數地方ヲ一團トセル區域(統計區畫)ノ要計ヲ揭出セリ但シ氣象科裁判及登記科等其ノ他二三ノ科目中土地ノ排列右ノ例ニ依ラスシテ各科特有ノ排列ニ依レルモノ亦之アリ

上記統計區畫各區ニ屬スル地方ハ次ニ示ス所ノ如シ

1. 北海道
2. 東北區—青森縣　岩手縣　秋田縣　山形縣　宮城縣　福島縣
3. 關東區—茨城縣　栃木縣　群馬縣　埼玉縣　千葉縣　東京府　神奈川縣
4. 北陸區—新潟縣　富山縣　石川縣　福井縣
5. 東山區—長野縣　岐阜縣　滋賀縣
6. 東海區—山梨縣　靜岡縣　愛知縣　三重縣
7. 近畿區—京都府　兵庫縣　大阪府　奈良縣　和歌山縣
8. 中國區—鳥取縣　島根縣　岡山縣　廣島縣　山口縣
9. 四國區—德島縣　香川縣　愛媛縣　高知縣
10. 九州區—大分縣　福岡縣　佐賀縣　長崎縣　熊本縣　宮崎縣　鹿兒島縣
11. 沖繩縣

本編諸表標題及表中ニ某年又ハ某年度ト書スルハ一周曆年間及一周年度間ノ事實ニシテ某年某月某日ト書スルハ該日現在ノ調査ナリ

本編實數ノ單位ハ概ネ「石」「圓」「斤」「貫」「反」「畝」「哩」「鎖」等ニ止メ以下ノ端數ハ之ヲ切捨テ又ハ四捨五入セリ高級數位ノ計數ハ往々千ヲ以テ單位トシ以下ヲ省キタルモノアリ又零ヲ以テ示スハ其ノ數量一位ニ達セサルモノナリ

本編中人口ニ對スル比例ノ算出ニ於テ人口調査ノ結果ニ依ル現住人口ハ調査ノ方法上ヨリ起レル誤謬ヲ包含スルヲ以テ之ヲ訂正セル乙種現住人口（乙種現住人口ノ由來及性質ハ略說人口科ノ部ニ詳ナリ）ヲ用ヒタリ但シ乙種現住人口調製以前（明治十七年以前）ノ各年及全國ノ事實ニ屬スルモノ及本籍人口ニ依ラサルヘカラサルモノハ本籍人口ヲ用ヒタリ

本編ニ揭クル計數ノ出所ハ之ヲ「計數出所目錄」トシテ本書卷末ニ其ノ書目ヲ擧ケ尙精密ナル計數ヲ知ラムトスル者ノ便ニ供セリ

本編中貿易諸表其ノ他往々外國ノ度量衡ヲ用フルモノアリ彼我ノ對照ヲ示セハ次ノ如シ

度量衡比較及合數

メートル法

度

粍	「ミリメートル」（「メートル」ノ千分ノ一）	3.30000 毫
糎	「センチメートル」（「メートル」ノ百分ノ一）	3.30000 分
粉	「デシメートル」（「メートル」ノ十分ノ一）	3.30000 寸
米	「メートル」	3.30000 尺
粁	「キロメートル」（千「メートル」）	550.000 間　9.10.000 町間

量

竓	ミリリットル（立方センチメートル）（「リツトル」ノ千分ノ一）	0.055435 勺
竏	「センチリットル」（「リットル」ノ百分ノ一）	0.55435 勺
竕	「デシリットル」（「リットル」ノ十分ノ一）	0.55435 合
立	「リツトル」（升ノ二千四百〇一分ノ千三百三十一）	0.55435 升

衡

瓩	「ミリグラム」（「キログラム」ノ百萬分ノ一）	0.26667 毛
瓲	「センチグラム」（「キログラム」ノ十萬分ノ一）	2.66667 毛
瓱	「デシグラム」（「キログラム」ノ一萬分ノ一）	2.66667 厘
瓦	「グラム」（「キログラム」ノ千分ノ一）	2.66667 分
瓩	「キログラム」（貫ノ十五分ノ四）	0.26667 貫

日本採用ヤード、ポンド法

度

吋	「インチ」（「ヤード」ノ三十六分ノ一）	0.83820 寸
呎	「フート」（「ヤード」ノ三分ノ一）	1.00584 尺
碼	「ヤード」（尺ノ一萬二千五百分ノ三萬七千七百十九）	2.01752 尺
鎖	「チエーン」（二十二「ヤード」）	66.38544 尺 11.0.38544 間尺
哩	「マイル」（千七百六十「ヤード」）	5310.835 尺 14.45.0.835＝0.40979 町間尺厘

量

瓦倫	「ガロン」（升ノ五萬分ノ十萬四千九百二十三）	2.09846 升

衡

弓	「オンス」（「ポンド」ノ十六分ノ一）	7.56000 匁
封度	「ポンド」（貫ノ三千百二十五分ノ三百七十八）	120.9600 匁
噸	「トン」（二千二百四十「ポンド」）	270.9504 貫

以上ハ農商務省中央度量衡檢定所編纂ノ度量衡比較表ニ據ル

浬	「マイル」	16.975 町
佛噸		266.6667 貫
擔	「ピコル」	100 斤

合數

哥	（グロツス）	144 箇
打	（ダズン）	12 箇

目　　錄

描　畫　圖

1. 人　　口
2. 敎　　育

略　　說

頁
I. 土　　地……1
II. 氣　　象……2
III. 人　　口……3
IV. 農　　業……10
V. 家畜及家禽……13
VI. 山林及狩獵……15
VII. 漁業及製鹽……17
VIII. 鑛　　業……21
IX. 工業及賃金……22
X. 外國貿易……27
XI. 內國商業及會社……29
XII. 產業組合及同業組合……31
XIII. 電氣事業及瓦斯事業……32
XIV. 交　　通……33
XV. 通信及郵便爲替貯金事業……36
XVI. 貨幣及度量衡……38
XVII. 銀行及金融……39
XVIII. 保　　險……44
XIX. 官廳使用現業員共濟組合……46
XX. 救育及慈惠……47
XXI. 災　　害……48
XXII. 衞　　生……49
XXIII. 敎　　育……51
XXIV. 社寺及敎會……55
XXV. 警　　察……56
XXVI. 裁判及登記……59
XXVII. 監　　獄……67
XXVIII. 陸　　軍……71
XXIX. 海　　軍……73
XXX. 財　　政……75
XXXI. 爵位勳章及褒章……80
XXXII. 議員選擧……81
XXXIII. 官吏公吏及恩給……82

統 計 表

I. 土 地

表號 頁
1 經緯度 …… 2
2 周圍及面積 (全國) …… 3
3 道府縣別面積 …… 3
4 郡市町村數及役所役場數 (全國、地方別) 自明治三十五年末至大正八年末 …… 4
5 民有地反別 (全國) 自明治二十一年末至大正九年首 …… 5
6 民有有租地地目別反別及地價 (全國、地方別) 自明治二十一年末至大正九年首 …… 6
7 民有免租地及民有年期地地種別反別 (全國、地方別) 自明治二十六年末至大正九年首 …… 8

II. 氣 象

8 氣象總覽 (測候所別) 大正八年 …… 10
9 中央氣象臺外十四測候所累年及最近一年ノ月別氣象 …… 14

III. 人 口

甲、人口ノ靜態
10 帝國人口總數及男女別 自明治五年至大正七年末 …… 20
11 本籍人口年齡別 其ノ一 (全國) 自明治三十一年末至大正七年末 …… 22
12 本籍人口年齡別 其ノ二 (全國) 自明治三十一年末至大正七年末 …… 23
13 本籍人口男女年齡各歲別 (全國) 大正七年末 …… 24
14 本籍人口男女有配偶者無配偶者 (全國) 自明治十九年末至大正七年末 …… 25
15 本籍人口男女有配偶者無配偶者年齡五歲階級別 (全國) 大正七年末 …… 25
16 本籍人口、現住戶數及現住人口 (地方別) 大正七年末 …… 26
17 現住人口 (地方別) 大正八年末同九年末 …… 27
18 現住人口階級別市町村數及其ノ人口 (全國) 自明治二十六年末至大正七年末 …… 28
19 市區現住人口及現住戶數 自明治三十一年末至大正七年末 …… 29
20 人口壹萬人以上ノ町ノ現住人口及現住戶數 大正七年末 …… 30
21 人口壹萬人以上ノ村ノ現住人口及現住戶數 大正七年末 …… 33
乙、人口ノ動態
22 婚姻、離婚、生產、死產、死亡 (全國) 自明治五年至大正七年 …… 34
23 婚姻、離婚、生產、死產、死亡 (地方別) 大正七年 …… 35
24 種類別婚姻 (全國、地方別) 自明治三十八年至大正七年 …… 36
25 婚姻者各自ノ年齡別 (全國) 自明治三十八年至大正七年 …… 37
26 種類別離婚 (全國、地方別) 自明治三十八年至大正七年 …… 38
27 夫婦關係繼續期間別離婚 (全國) 自明治三十八年至大正七年 …… 39
28 生產、死產男女及身分別 (全國) 自明治三十八年至大正七年 …… 39
29 生產男女及身分別 (地方別) 大正七年 …… 40
30 死亡者男女別 (地方別) 大正七年 …… 41
31 死亡者男女月別 (全國) 自大正三年至大正七年 …… 42
32 死亡者男女年齡五歲階級別 (全國) 自大正三年至大正七年 …… 42
33 死亡者男女年齡各歲別 (全國) 大正七年 …… 43
34 乳兒(滿一歲以下)男女別死亡 (地方別) 自大正二年至大正七年 …… 44
35 死亡原因別 (全國) 自大正三年至大正七年 …… 46
36 死亡者男女及職業別 (全國) 自大正三年至大正七年 …… 48
37 死亡者死因月別 (全國) 大正七年 …… 49
38 死亡者死因年齡別 (全國) 大正七年 …… 50

表號 頁
39 死亡者男女及死因別 (地方別) 大正七年 …… 51
40 現住人口五萬以上ノ市區及町別婚姻、離婚、生產、死產、死亡 大正七年 …… 55
41 生命表 (全國) (自明治四十一年至大正二年) …… 56
42 朝鮮臺灣樺太及國境外ニ於ケル道府縣在籍人ノ婚姻、離婚、生產、死亡 自明治三十八年至大正七年 …… 58
43 渡航地及目的別外國旅券下附人員 (總數、渡航地別) 自明治四十三年至大正七年 …… 59
丙、在外本邦人及在留外國人
44 外國在留本邦人男女別 大正八年六月末 …… 60
45 外國在留本邦人男女及職業別 大正八年六月末 …… 62
46 本邦在留外國人戶口 (全國、地方別) 自明治三十六年末至大正八年末 …… 63
47 本邦在留外國人國籍別 大正八年末 …… 68
48 本邦在留外國人職業別 (全國、地方別) 自明治四十一年末至大正八年末 …… 69
49 本邦在留各國大使館公使館及領事館人員 (總數、國別) 自明治四十年末至大正八年末 …… 69

IV. 農 業

50 主要農產物作付反別 (全國) 自明治十一年至大正八年 …… 70
51 主要農產物作付反別 (地方別) 米、麥、蚕、茶ハ大正八年他ハ大正七年 …… 72
52 主要農產物收穫高 (全國) 自明治十年至大正八年 …… 74
53 主要農產物收穫高 (地方別) 米、麥ハ大正八年他ハ大正七年 …… 76
54 主要農產物作付反別ー反歩ニ付收穫高 (全國、地方別) 米、麥ハ大正八年他ハ大正七年 …… 78
55 養蠶戶數、掃立枚數、產繭高及其價額 (全國) 自明治三十二年至大正八年 …… 80
56 養蠶戶數、掃立枚數、產繭高及其價額 (地方別) 大正八年 …… 80
57 主要果實收穫高 (全國、地方別) 自明治四十一年至大正七年 …… 82

V. 家畜及家禽

58 牛、馬、山羊、綿羊、豚總數及牝牡別並鷄鶩總數 (全國、地方別) 自明治十一年至大正七年 …… 84
59 牛ノ種類及牝牡、種牡牛ノ種類、乳牛 (全國) 自明治十一年末至大正七年末 …… 86
60 馬ノ種類及牝牡、種牡馬ノ種類 (全國) 自明治十一年末至大正七年末 …… 87
61 牛ノ種類及種牡牛ノ種類、乳牛 (地方別) 大正七年末 …… 86
62 馬ノ種類及種牡馬ノ種類 (地方別) 大正七年末 …… 87
63 牛ノ出產、斃死及屠殺頭數 (全國) 自明治三十二年至大正七年 …… 88
64 馬ノ出產、斃死及屠殺頭數 (全國) 自明治三十二年至大正七年 …… 89
65 搾乳場、乳牛(二歲以上)搾乳高 (全國、地方別) 自明治三十八年至大正七年 …… 88
66 屠場、屠殺頭數及價額 (全國) 自明治二十七年至大正七年 …… 90
67 屠場、屠殺頭數及價額 (地方別) 大正七年 …… 90
68 家畜市場ニ於ケル家畜ノ交易 (其ノ一、其ノ二) (全國) 自明治三十八年至大正七年 …… 91
69 家畜傳染病ニ係ル牛馬豚犬發病頭數 (全國) 自明治二十四年至大正七年 …… 92

VI. 山林及狩獵

70 森林及原野面積 (全國、地方別) 自明治三十二年度末至大正七年末 …… 93
71 保安林所有者及種類別 (全國、種類別、地方別) 自明治三十二年度末至大正七年末 …… 94
72 森林植栽反別伐採價額 (全國、地方別) 自明治三十二年度至大正七年度 …… 96
73 森林被害面積及價額 (全國) 自明治三十二年度至大正七年度 …… 97
74 狩獵免狀下付數 (全國、地方別) 自明治三十二年度至大正七年度 …… 97

VII. 漁業及製鹽

75 漁船數 (全國、地方別) 自大正四年末至大正七年末 …… 99
76 水產物ノ品目及數量、價額 (全國) 自明治三十九年至大正七年 …… 100
77 水產物品目別價額 地方別) 大正七年 …… 102

表號 頁
78 水產製造物ノ品目及數量、價額 （全國）自明治三十九年至大正七年……106
79 水產製造物品目別價額 （地方別） 大正七年……108
80 水產養殖場數、面積及收獲物價額 （全國）自明治三十三年至大正七年……111
81 製鹽 （全國、專賣支局別）自明治四十年度至大正七年度……111

VIII. 鑛 業

82 鑛種別鑛區及坪數 （全國、鑛種別） 自明治三十二年末至大正七年末……113
83 鑛種別生產鑛區數 （全國） 大正七年末……113
84 鑛種別砂鑛區及坪數 （全國、鑛種別） 自明治四十三年末至大正七年末……114
85 鑛夫現在人員及其勞役延人員 （全國）自明治三十二年至大正七年……114
86 鑛物產額及價額 （全國）自明治四十二年至大正七年……115
87 鑛物產額 （地方別） 大正七年……116
88 鑛山變災死傷人員 （總數、鑛山別、原因別）自明治三十二年至大正七年……118

IX. 工業及賃金

89 諸官廳直轄工場 （總數、所管別） 自明治三十八年度末至大正八年度末……119
90 工場數、使用人員、賃金、就業日時及其比例 （全國） 自明治三十三年至大正七年……120
91 工場數、使用職工種類別 （全國） 自大正三年至大正七年……122
92 工場數及使用人員 （地方別） 大正七年……125
93 各種工業戶數 （全國）自明治三十六年至大正七年……126
94 各種工業平均一日從業者 （全國）自明治三十六年至大正七年……127
95 各種工業生產高 （全國） 自明治三十六年至大正七年……129
96 各種工業戶數 （地方別） 大正七年……131
97 各種工業生產高 （地方別） 大正七年……134
98 製絲戶數及繅絲生產高 （全國、地方別） 自明治三十三年至大正七年……138
99 綿絲紡績事業 （全國）自明治三十三年至大正七年……138
100 綿絲紡績事業 （地方別） 大正七年……140
101 織物生產高 （全國、地方別） 自明治三十三年至大正七年……140
102 織物生產高種類細別 （全國） 大正七年……142
103 西洋紙製造工場 （全國、地方別） 自明治四十年至大正七年……142
104 肥料營業者及販賣價額 （全國）自明治三十九年至大正七年……143
105 發明特許、實用新案登錄、意匠登錄、商標登錄出願數及特許登錄數（總數） 自明治四十二年至大正七年……143
106 發明特許及實用新案登錄種類別 （總數） 大正七年……143
107 諸雜平均賃金 自大正三年至大正七年……145
108 諸雜賃金 大正七年……146
109 各種賃金指數 自明治三十三年至大正七年……148

X. 外國貿易

110 輸出輸入物品總價額 自明治元年至大正八年……149
111 內外國產別及特別輸出輸入物品價額 自明治三十一年至大正八年……151
112 輸出輸入價額國別 自大正六年至大正八年……152
113 輸出輸入物品價額物品種類大別 自明治四十一年至大正八年……153
114 輸出額百萬圓以上ノ品目別 自大正四年至大正八年……153
115 輸入額百萬圓以上ノ品目別 自大正四年至大正八年……156
116 輸出品目別數量及價額 大正八年……157
117 輸入品目別數量及價額 大正八年……161
118 內國產輸出品國別 自大正五年至大正七年……167
119 外國產輸入品國別 自大正五年至大正七年……178

表號 頁
120 內國產輸出及外國產輸入物品價額月別 自明治四十三年至大正八年……183
121 輸出輸入物品價額港別 自大正六年至大正八年……183
122 船籍別外國往來船舶積載輸出輸入物品價額 自大正六年至大正八年……184
123 輸出輸入金銀貨及金銀地金總價額 自明治五年至大正八年……185
124 輸出輸入金銀貨及金銀地金國別 自大正二年至大正八年……185

XI. 內國商業及會社

125 商業會議所 （全國、商業會議所別）自明治二十四年至大正七年……187
126 取引所 （全國、取引所別）自明治三十一年至大正七年……188
127 米穀取引所賣買高月別 （全國）自明治二十七年至大正七年……190
128 米穀取引所各月公定相場 （全國、取引所別）自明治二十七年至大正七年……190
129 物價其一 （東京市、大阪市）自明治三十三年至大正八年……194
130 物價其二 （樞要ナル都市別）大正七年、同八年……196
131 資本金高別會社數及其ノ拂込資本金 （全國） 自明治三十八年末至大正七年末……198
132 營業種類大別會社數、其ノ拂込資本金及積立金 （全國） 自明治三十八年末至大正七年末……200
133 營業種類細別會社數、其ノ拂込資本金及積立金 大正七年末……202
134 地方別資本金高別會社數及其ノ拂込資本金 大正七年末……204
135 地方別營業種類大別會社數其ノ拂込資本金及積立金 大正七年末……206

XII. 產業組合及同業組合

136 各種產業組合 （全國、地方別） 自明治三十三年末至大正七年末……208
137 重要物產同業組合及同聯合會 （全國、地方別） 自大正元年末至同七年末……210
138 漁業組合 （全國、地方別）自明治四十三年至大正六年……212
139 水產組合 （全國、地方別） 自大正五年末至同七年末……213

XIII. 電氣事業及瓦斯事業

140 電氣事業數 （全國） 自明治三十六年末至大正六年末……214
141 電氣事業ノ原動力別發電力 （全國） 自明治三十六年末至大正六年末……214
142 事業數及其ノ發電力竝原動力別發電力 （地方別） 大正六年……216
143 原動力、電壓及發電力別發電所數 （全國） 自明治四十年末至大正六年末……217
144 電線路亘長及電線延長 （全國） 自明治三十六年末至大正六年末……217
145 營利電氣事業營業決算期末事業數、資本金及電燈、電動機取附箇數 （全國）自明治三十六年至大正六年……217
146 電氣供給府縣別 大正六年末……218
147 電氣供給事業者別 大正六年……218
148 電氣事業故障災害件數 （全國）自明治四十四年至大正六年……222
149 瓦斯事業 （全國） 自明治十三年度至同四十三年……222
150 瓦斯供給府縣別 自明治四十四年末至大正七年三月末……222
151 瓦斯供給事業者別 大正七年三月末……224

XIV. 交 通

152 道路延長 （全國、地方別） 自明治三十五年末至大正七年末……226
153 橋梁數及其ノ構造種類別 （全國） 自明治三十五年末至大正七年末……226
154 鐵道開業線路及未開業線路 （全國） 自明治五年末至大正七年度末……227
155 鐵道停車場數、線路、車輛數及走行哩 （總數）自明治三十一年度末至大正七年度末……228
156 全國鐵道軌道延長、平均營業哩、列車走行哩、乘客數及貨物噸數 （經營者別） 大正七年度……228
157 國有鐵道職員 （總數、部局別）自明治四十一年度末至大正七年度末……232
158 私設鐵道及輕便鐵道職員 （總數） 自明治四十一年度末至大正七年度末……233
159 國有鐵道聯絡船舶運輸 大正七年度……233

表號 頁
160 鐵道資本金及營業收入支出 自明治三十五年度至大正七年度 233
161 鐵道事故件數及死傷人員 自明治三十四年度至大正七年度 234
162 電氣鐵道線路及車輛、乘客數（總數及經營者別） 自明治二十八年至大正七年 234
163 馬車鐵道線路及車輛、馬匹、乘客數（總數、地方別） 自明治十六年至大正七年 236
164 人車鐵道及汽動車鐵道線路、車輛、乘客數（總數、地方別） 自明治四十年至大正七年 236
165 諸車（全國、地方別） 自明治三十一年度末至大正八年度末 237
166 河川 238
167 港灣數（地方別） 大正八年十一月一日 239
168 官、公、私設航路標識（全國） 自明治六年末至大正七年末 240
169 入港船舶數及噸數 大正七年 241
170 噸數階級別汽船、帆船（噸數船）船數及其噸數（全國） 自明治三十二年末至大正七年末 242
171 石數階級別帆船（石數船）船數及其積石數（全國） 自明治三十二年末至大正七年末 244
172 登簿汽船船質船齡及登簿帆船、船齡（全國） 自明治三十四年末至大正七年末 246
173 登簿船異動（全國） 自明治三十二年至大正七年 246
174 帆船船數地方別 大正七年末 247
175 小船（全國、地方別） 自明治三十二年度末至大正八年度末 248
176 造船所數、船渠數及製造船舶（全國、地方別） 自明治三十二年至大正七年 249
177 造船奬勵認許證書下付船舶及奬勵金（總數、造船所別） 自明治二十九年度至大正七年度 250
178 海技免狀受有者（總數） 自明治三十二年末至大正七年末 250
179 遭難船月別及種類別 自明治三十二年至大正七年 251
180 遭難船遭難地別（總數、地方別） 自明治三十二年至大正七年 252
181 遭難船死傷人員及遭難種類別 自明治三十二年至大正七年 253
182 遭難船被救助人員及救助人員（全國、地方別） 自明治三十二年至大正七年 253
183 地方海員審判所取扱件數及人員（總數、審判所別） 自明治三十一年至大正七年 254
184 地方海員審判所裁決件數及人員（總數、事件種類別） 自明治三十一年至大正七年 254
185 高等海員審判所取扱件數人員及審判別（總數） 自明治三十一年至大正七年 255
186 高等海員審判所裁決件數人員事件種類別（總數、事件種類別） 自明治三十一年至大正七年 255
187 命令航路ニ屬スル汽船會社資本金、船數及運輸 自明治三十二年度至大正七年度 256
188 土木費費途別（全國） 自明治三十二年度至大正四年度 256
189 土木費中道路橋梁河川費ノ通常費及災害費別（全國） 自明治三十四年度至大正四年度 258
190 土木費負擔者別其ノ一（全國） 自明治三十二年度至大正四年度 258
191 土木費負擔者別其ノ二（全國） 自明治三十二年度至大正四年度 258

XV. 通信及郵便爲替貯金事業

192 郵便電信、電話局所、郵便函並職員（總數） 自明治三十五年度末至大正七年度末 260
193 通常郵便線路（總數） 自明治三十五年度末至大正七年度末 260
194 郵便及電信電話局所（地方別） 大正七年度末 261
195 通常郵便物（總數、地方別） 自明治三十五年度至大正七年度 262
196 外國通常郵便物（總數、五大洲別、國別） 自明治三十五年度至大正七年度 262
197 小包郵便物（總數、地方別） 自明治三十六年度至大正七年度 264
198 電信線路（總數） 自明治三十五年度末至大正七年度末 264
199 電報發著（總數、地方別） 自明治三十五年度至大正七年度 265
200 外國電報發著國別（總數、五大洲別、國別） 自明治三十五年度至大正七年度 266
201 電話線路（全國） 自明治三十五年度末至大正七年度末 266
202 電話加入人員及加入區域內外通話度數（全國、地方別） 自明治三十七年度至大正七年度 267
203 內國郵便爲替振出口數、金額及拂渡口數、金額（總數、地方別） 自明治三十五年度至大正七年度 268
204 外國郵便爲替（總數、聯合及特約國國別） 自明治三十五年度至大正七年度 270
205 郵便貯金、預度數、拂出度數、預人員及預金額（總數） 自明治三十五年度至大正七年度 271

表號 頁
206 郵便貯金、預度數、拂渡度數、預人員、預金高（地方別） 大正七年度 272
207 保管證券受入及拂渡度數、人員、額面金高（總數） 自明治三十五年度至大正七年度 273
208 保管證券受入及拂渡人員、額面金高（地方大別） 大正七年度 273
209 郵便振替貯金受拂高（總數、地方大別） 自明治三十八年度至大正七年度 274
210 年金恩給拂渡高給與金口數及金額（總數） 自大正三年度至大正七年度 275
211 年金恩給拂渡高口數及金額（總數） 自明治四十三年度至大正七年度 275
212 郵便電信電話收入（決算） 自大正二年度至大正六年度 276

XVI. 貨幣及度量衡

213 造幣局受領金銀銅地金 自創業至大正八年度 277
214 貨幣鑄造及發行高 自創業至大正八年度 277
215 貨幣鑄造及發行高種類別 自創業至大正八年度 278
216 小額紙幣發行及消却高 大正六年度至同八年度 279
217 度量衡器檢定箇數及合格數 自明治三十八年度至大正七年度 279
218 度量衡器需用高（全國、地方別） 自明治三十八年度至大正七年度 280
219 度量衡器第一種取締成績（全國、地方別） 自明治三十八年度至大正七年度 281

XVII. 銀行及金融

220 銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金（全國、銀行別） 自明治三十二年至大正七年 282
221 銀行預金、借入金及再割引手形（全國、銀行別） 自明治三十二年至大正七年 282
222 銀行貸出金、割引手形及荷爲替手形（全國、銀行別） 自明治三十二年至大正七年 284
223 銀行預ケ金、有價證券及金銀在高（全國、銀行別） 自明治三十二年至大正七年 284
224 日本銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十二年至大正七年 285
225 日本銀行兌換銀行券發行高準備及交換高（總數、月別） 自明治三十二年末至大正七年末 286
226 日本銀行預金 自明治三十二年至大正七年 286
227 日本銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別 自明治三十二年至大正七年 288
228 日本銀行割引手形 自明治三十二年至大正七年 288
229 日本銀行預ケ金、公債證書及金銀在高 自明治三十二年至大正七年 288
230 日本銀行諸手形 自明治三十二年至大正七年 289
231 日本銀行割引手形種類別 自明治三十二年至大正七年 290
232 横濱正金銀行支店出張所、拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十二年至大正七年 290
233 横濱正金銀行銀行券發行高及準備並月別 自明治四十年末至大正七年末 291
234 横濱正金銀行預金借入金及再割引手形 自明治三十二年至大正七年 292
235 横濱正金銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別 自明治三十二年至大正七年 292
236 横濱正金銀行割引手形 自明治三十二年至大正七年 294
237 横濱正金銀行預ケ金、有價證券及金銀在高 自明治三十二年至大正七年 294
238 横濱正金銀行諸手形（總數、地方別） 自明治三十二年至大正七年 294
239 横濱正金銀行割引手形種類別 自明治三十二年至大正七年 296
240 日本勸業銀行拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十二年至大正七年 296
241 日本勸業銀行債券發行高、償還高及年末殘高 自明治三十二年至大正七年 296
242 日本勸業銀行預金 自明治四十三年至大正七年 297
243 日本勸業銀行貸付金及割引手形 自明治三十二年至大正七年 297
244 日本勸業銀行年賦償還貸付金 自大正五年至大正七年 298
245 日本勸業銀行定期償還貸付金 自大正五年至大正七年 298
246 日本勸業銀行預ケ金、有價證券及金銀在高 自明治三十二年至大正七年 299
247 日本勸業銀行手形及種類別 自明治四十三年至大正七年 299
248 農工銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金（全國） 自明治三十二年至大正七年 300
249 農工銀行本店及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金及交付金（地方別） 大正七年 300

表號 頁
250 農工銀行債券發行高、償還高及年末殘高 （全國） 自明治三十二年至大正七年 301
251 農工銀行預金及借入金 （全國） 自明治三十二年至大正七年 302
252 農工銀行貸付金及割引手形 （全國） 自明治三十二年至大正七年 303
253 農工銀行年賦償還貸付金 （全國） 自明治三十二年至大正七年 302
254 農工銀行年賦償還貸付金抵當貸信用貸別 （全國） 自明治三十二年至大正七年 304
255 農工銀行定期償還貸付金年限別 （全國） 自明治三十三年至大正七年 304
256 農工銀行定期償還貸付金業體別 （全國） 自明治三十二年至大正七年 304
257 農工銀行定期償還貸付金抵當貸信用貸別 （全國） 自明治三十二年至大正七年 305
258 農工銀行短期貸付金業體別 （全國） 自明治四十三年至大正七年 305
259 農工銀行預ケ金、有價證券及金銀在高 （全國） 自明治三十二年至大正七年 305
260 農工銀行手形及割引手形種類別 （全國） 自明治四十三年至大正七年 305
261 北海道拓殖銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十三年至大正七年 306
262 北海道拓殖銀行債券發行高、償還高及年末殘高 自明治三十八年至大正七年 306
263 北海道拓殖銀行預金及借入金 自明治三十三年至大正七年 307
264 北海道拓殖銀行貸付金、割引手形及荷爲替手形 自明治三十三年至大正七年 307
265 北海道拓殖銀行年賦償還貸付金 自大正五年至大正七年 308
266 北海道拓殖銀行定期償還貸付金 自大正五年至大正七年 308
267 北海道拓殖銀行預ケ金、有價證券及金銀在高 自明治三十三年至大正七年 308
268 北海道拓殖銀行諸手形 自明治三十五年至大正七年 309
269 臺灣銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十二年至大正七年 309
270 臺灣銀行銀行券發行高及準備並月別 自明治三十三年末至大正七年末 310
271 臺灣銀行預金、借入金及信託金 自明治三十二年至大正七年 310
272 臺灣銀行貸出金及貸付金年末殘高抵當別、割引手形及荷爲替手形 自明治三十二年至大正七年 312
273 臺灣銀行預ケ金有價證券及金銀在高 自明治三十二年至大正七年 312
274 臺灣銀行諸手形 自明治三十二年至大正七年 313
275 臺灣銀行割引手形種類別 自明治三十二年至大正七年 314
276 朝鮮銀行入金、出金、純益金 自明治四十四年至大正七年 314
277 朝鮮銀行預金 自明治四十四年至大正七年 314
278 朝鮮銀行貸付金 自明治四十四年至大正七年 315
279 朝鮮銀行預ケ金、金銀在高 自明治四十四年至大正七年 315
280 朝鮮銀行諸手形 自明治四十四年至大正七年 315
281 朝鮮銀行割引手形種類別 自明治四十四年至大正六年 315
282 日本興業銀行支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 自明治三十五年至大正七年 316
283 日本興業銀行債券發行高、償還高及年末殘高 自明治三十五年至大正七年 317
284 日本興業銀行預金、借入金及信託金 自明治三十五年至大正七年 316
285 日本興業銀行貸付金及割引手形 自明治三十五年至大正七年 318
286 日本興業銀行預ケ金、有價證券及金銀在高 自明治三十五年至大正七年 318
287 日本興業銀行手形 自明治三十八年至大正七年 318
288 日本興業銀行割引手形種類別 自明治三十八年至大正七年 318
289 普通銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 （全國） 自明治三十二年至大正七年 319
290 普通銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 （地方別） 大正七年 319
291 普通銀行營業組織別 （全國） 自明治三十二年至大正七年 321
292 普通銀行預金、借入金及再割引手形 （全國） 自明治三十二年至大正七年 320
293 普通銀行預金、借入金及再割引手形 （地方別） 大正七年 322
294 普通銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別、割引手形及荷爲替手形 （總數） 自明治三十二年至大正七年 322
295 普通銀行貸付金及割引手形荷爲替手形 （地方別） 大正七年 324
296 普通銀行預ケ金、有價證券及金銀在高 （總數、地方別） 自明治三十二年至大正七年 325
297 普通銀行諸手形 （總數、地方別） 自明治三十二年至大正七年 326

表號 頁
298 貯蓄銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 （總數） 自明治三十二年至大正七年 328
299 貯蓄銀行本支店出張所及拂込資本金、積立金、入金、出金、純益金、配當金 （地方別） 大正七年 328
300 貯蓄銀行預金、借入金及再割引手形 （總數） 自明治三十二年至大正七年 330
301 貯蓄銀行預金、借入金及再割引手形 （地方別） 大正七年 330
302 貯蓄銀行貯蓄預金及預金者職業別並預金利子 （總數、地方別） 自明治三十二年至大正七年 332
303 貯蓄銀行貸出金、貸付金年末殘高抵當別、割引手形及荷爲替手形 （總數） 自明治三十二年至大正七年 333
304 貯蓄銀行貸付金及割引手形、荷爲替手形 （地方別） 大正七年 334
305 貯蓄銀行預ケ金、有價證券及金銀在高 （總數、地方別） 自明治三十二年至大正七年 335
306 貯蓄銀行諸手形 （總數、地方別） 自明治三十二年至大正七年 336
307 貯蓄銀行供託高 （全國、地方別） 自明治三十二年末至大正七年末 338
308 擔保附社債信託事業會社數及資本金、積立金 自明治三十五年末至大正七年末 338
309 擔保附社債信託契約年末現在 自明治三十八年至大正七年 339
310 擔保附社債信託契約高 大正七年 339
311 手形交換所手形交換高 （全國） 自明治三十三年至大正八年 339
312 手形交換所手形交換高 （月別） 大正八年 340
313 銀行預金利子高低 （全國、地方別） 自明治三十二年至大正八年 242
314 銀行貸付金利子高低 （全國、地方別） 自明治三十二年至大正八年 343
315 銀行手形割引相場高低 （全國、地方別） 自明治三十二年至大正八年 344
316 外國爲替相場 （全年平均、月別） 自明治三十一年至大正八年 345

XVIII. 保 險

317 保險會社 （內國） 資本金、積立金、收入金、支出金及事業ノ狀況 自明治三十四年度至大正七年度 348
318 在本邦外國保險會社事業供託金、收入、支出及事業ノ狀況 自明治三十七年度至大正七年度 352
319 簡易生命保險 其一 事業成績 （全國、種類別） 自大正五年度至大正七年度 354
320 〃 其二 月別 大正七年度 356
321 〃 其三 拂込年限別 大正七年度末 357
322 〃 其四 職業別 大正七年末 357

XIX. 官廳使用現業員共濟組合

323 組合數、組合人員及收入金、支出金並救濟金給與人員總覽 自明治四十年度末至大正八年度末 358
其一 印刷局現業員共濟組合
324 職名別男女組合員數 自明治四十二年度末至大正八年度末 359
325 收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十二年度至大正八年度 359
其二 鐵道院現業員救濟組合
326 種類別組合員數 自明治四十年度末至大正八年度末 359
327 收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十年度至大正八年度 360
其三 專賣局現業員共濟組合
328 職名別男女組合員數 自明治四十一年度末至大正八年度末 360
329 收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十一年度至大正八年度 361
其四 海軍造船造兵事業現業員共濟組合
330 職名別男女組合員數 自明治四十五年度大正元年度末至大正八年度末 361
331 收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十五年大正元年度至大正八年度 361
其五 爲替貯金局及地方遞信官署現業員共濟組合
332 職名別男女組合員數 自明治四十二年度末至大正八年度末 362
333 收入金、支出金及救濟金給與人員 自明治四十二年度至大正八年度 362

XX. 救育及慈惠

334 罹災救助基金救助費目別 （全國、地方別） 自明治三十五年度至大正七年度 363

表號 頁
335 救濟人員 （全國、地方別） 自明治三十五年至大正七年 364
336 救濟人員救濟事由別年末現員 （全國、地方別） 自明治三十五年至大正七年 366
337 救助金 （全國、地方別） 自明治三十五年至大正七年 367
338 養育棄兒及養育費 （全國、地方別） 自明治三十五年至大正七年 368
339 行旅病人及行旅死亡人 （全國、地方別） 自大正二年至同七年 369

XXI. 災 害

340 水災、潮災及暴風雨被害 （全國、地方別） 自明治三十六年至大正六年 370
341 火災度數及罹災戶數 （全國、地方別） 自明治三十二年至大正七年 372
342 火災月別 （全國） 自明治三十二年至大正七年 373

XXII. 衛 生

343 醫師、齒科醫師、藥劑師、產婆、病院、藥種商及製藥者 （全國、地方別） 自明治二十年末至大正七年末 374
344 十種傳染病患者及死亡者 （全國） 自明治二十年至大正八年 376
345 十種傳染病患者及死亡者 （地方別） 大正八年 376
346 十種傳染病患者季別 （全國） 自明治二十年至大正八年 378
347 第一期種痘人員 （全國、地方別） 自明治四十三年至大正七年 379
348 第二期種痘人員 （全國、地方別） 自明治四十三年至大正七年 380
349 種痘人員 （總數） 自明治二十年至同四十二年 381
350 寶藥方數及稅額 （總數） 自明治三十二年至大正七年 381
351 水泡 （全國、地方別） 自明治二十一年至大正七年 381

XXIII. 教 育

352 學齡兒童 （全國） 自明治三十四年度至大正七年度 383
353 學齡兒童就學、不就學ノ別 （全國） 自明治三十四年度至大正七年度 384
354 學齡兒童 （地方別） 大正七年度 384
355 學齡兒童(既ニ就學ノ始期ニ達シタル者)就學不就學ノ別 （地方別） 大正七年度 385
356 不就學學齡兒童 （地方別） 大正七年度 386
357 學齡兒童中盲及聾啞者 （全國、地方別） 自明治三十四年度至大正七年度 387
358 小學校及小學校學級 （全國、地方別） 自明治三十四年度至大正七年度 388
359 小學校教員男女及資格別 （全國） 自明治三十四年度至大正七年度 389
360 小學校教員男女及資格別 （地方別） 大正七年度 390
361 小學校兒童 （全國、地方別） 自明治三十四年度至大正七年度 392
362 幼稚園園數、保姆、幼兒 （全國、地方別） 自明治三十五年度至大正七年度 393
363 盲啞學校校數、教員、生徒、卒業者 （全國、地方別） 自明治三十五年度至大正七年度 394
364 師範學校校數、教員、生徒、卒業者 （全國、地方別） 自明治三十一年末至大正七年度 396
365 高等師範學校、女子高等師範學校、臨時教員養成所校數、教員、生徒、卒業者 （全國）
自明治三十一年末至大正七年度 397
366 小學校教員檢定合格者 （全國） 自明治三十三年度至大正七年度 397
367 師範學校、中學校、高等女學校教員檢定合格者 （全國） 自明治三十三年度至大正七年度 398
368 中學校校數、教員、生徒、卒業者 （全國、地方別） 自明治三十二年末至大正七年度 398
369 高等女學校校數、教員、生徒、卒業者 （全國、地方別） 自明治三十二年末至大正七年度 399
370 實科高等女學校校數、教員、生徒、卒業者 （全國、地方別） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度 401
371 專門學校校數、教員 （全國） 大正六年度同七年度 402
372 專門學校生徒、卒業者 （全國） 大正六年度同七年度 402
373 專門學校生徒及卒業者 （地方別） 大正七年度 402
374 高等學校校數、教員、生徒、卒業者 （全國學校別） 自明治二十八年末至大正七年度 403
375 帝國大學校數、講座、教員、學生生徒、卒業者 （全國、各大學分科大學別） 自明治二十六年末至大正七年度 404

表號 頁
376 帝國大學學生生徒學科別 （全國） 自大正三年度至大正七年度 405
377 實業補習學校校數、教員、生徒、修了者 （全國） 自明治三十二年末至大正七年度 406
378 實業學校校數、教員、生徒、卒業者 （全國） 自明治三十二年末(同三十二年度)至大正七年度 407
379 徒弟學校校數、教員、生徒、卒業者 （全國） 自明治三十二年末至大正七年度 409
380 實業專門學校校數、教員、生徒、卒業者 （全國） 自明治三十六年度至大正七年度 409
381 實業補習學校校數、教員、生徒、修了者 （地方別） 大正七年度 410
382 實業學校校數、教員、生徒、卒業者 （地方別） 大正七年度 412
383 徒弟學校校數、教員、生徒、卒業者 （地方別） 大正七年度 416
384 實業專門學校校數、教員、生徒、卒業者 （地方別） 大正七年度 417
385 諸學校本科入學志願者及本科入學者 （全國） 自明治三十八年度至大正七年度 417
386 各種ノ學校校數、教員、生徒 （全國、地方別） 自明治四十一年度至大正七年度 418
387 官、公、私立別校數、教員、生徒 （全國） 自明治四十一年度至大正七年度 420
388 諸學校外國人教員、學生及生徒 （全國） 自大正三年度至大正七年度 422
389 宮內省所管學習院、女子學習院、教員、學生及生徒、卒業者 自大正四年末至大正八年末 423
390 遞信省所管商船學校、教員、學生、卒業者 自大正四年度末至大正八年度末 423
391 海外官費留學生 自大正三年度末至大正七年度末 423
392 市町村立小學校教員月俸平均 （全國） 自明治三十三年度至大正六年度 424
393 府縣、郡、市、町村公學費 （全國、學校別） 自明治三十三年度至大正六年度 424
394 府縣、郡、市、町村公學收入 （全國、學校別） 自明治三十三年度至大正六年度 426
395 府縣、郡、市、町村公學資產 （全國、學校別） 自明治三十三年度至大正六年度 426
396 府縣、郡、市、町村公學費及公學收入 （地方別） 大正六年度 428
397 府縣、郡、市、町村公學資產 （地方別） 大正六年度 429
398 教育資金 （全國、地方別） 自明治三十三年度至大正六年度 430
399 市町村立小學校教員加俸資金及同加俸 （全國、地方別） 自明治三十三年度至大正六年度 430
400 市町村立小學校、公立實業補習學校教員及公立幼稚園保姆恩給基金及其收入支出
（全國、地方別） 自明治三十三年度至大正六年度 431
401 出版圖書種類別 （總數、種別） 自明治三十三年至大正七年 431
402 新聞紙及雜誌 （全國、地方別） 大正五年末同七年末 432
403 圖書館 （全國、地方別） 自明治四十年度至大正七年度 433

XXIV. 社寺及教會

404 神社及神職 （全國） 神社ハ自明治三十五年末至大正八年六月末 神職ハ自明治三十五年末至大正七年末 434
405 神社及神職 （地方別） 神社ハ大正八年六月末 神職ハ大正七年末 434
406 寺院及住職 （全國） 自明治三十五年末至大正七年末 435
407 寺院及住職 （地方別） 大正七年末 436
408 神佛道以外ノ宗教用會堂及講義所等 （全國、地方別） 自明治三十五年末至大正七年末 437
409 管長、教師及非教師、生徒 （全國、宗教宗派別） 自明治三十五年末至大正七年末 438
410 神佛道以外ノ宗教宣布者 （全國、教派別） 自明治三十五年末至大正七年末 439

XXV. 警 察

411 警察官署及其職員 （全國、地方別） 自明治三十二年末至大正七年末 440
412 檢舉犯罪人及警察犯處罰令諸犯則人員 （全國、地方別） 自明治四十二年至大正七年 442
413 盜難(全國、地方別) 自明治三十二年至大正七年 444
414 盜難月別 （總數、種別） 自明治三十二年至大正七年 445
415 被殺害者 （全國） 自明治四十二年至大正七年 446
416 災害其他ノ事故ニテ死セシ人員 （全國） 自明治四十二年至大正七年 446
417 自殺者手段 （全國、地方別） 自明治三十二年至大正七年 446

表號 頁
418 自殺者月別 (全國) 自明治三十二年至大正七年……447
419 自殺者年齡及因由(全國、因由別) 自明治三十二年至大正七年……448
420 自殺者因由 (全國) 自明治三十二年至大正七年……448
421 警察上賞與及賞詞 (總數、種別) 自明治三十二年至大正七年……448
422 巡査、警部補退隱料、遺族扶助料及其他給與 (全國、地方別) 自明治四十一年至大正七年……450

XXVI. 裁判及登記

423 裁判所職員 (全國、裁判所別) 自明治二十三年末至大正七年末……452
民事裁判
424 區裁判所取扱件數總覽 (全國) 自明治二十三年至大正七年……452
425 和解事件件數及其結果 (全國) 自明治二十三年至大正七年……453
426 和解事件終局件數種類別 (全國) 自明治二十三年至大正七年……454
427 督促事件件數及結果其種類別 (全國) 自明治二十四年至大正七年……455
428 第一審訴訟件數、其種別及結果 (全國、地方裁判所管轄區域別) 自明治二十三年至大正七年……454
429 金額又ハ價額ニ見積リ得ヘキ第一審訴訟件數金額別 (全國) 自明治二十三年至大正七年……458
430 第一審訴訟終局件數種類別 (全國) 自明治二十三年至大正七年……458
431 戸籍ニ關スル抗告件數及結果 (全國) 自明治三十一年至大正七年……459
432 區裁判所取扱强制執行件數、其終局件數及執達吏取扱强制執行件數並ニ終局人員及債權額 (全國) 自明治二十四年至大正七年……459
433 家資分產件數其人員及債權額竝ニ復權申立件數 (全國) 自明治二十四年至大正七年……460
434 非訟事件數及其終局件數ノ種別 (全國) 自明治三十一年至大正七年……461
435 地方裁判所取扱件數總覽 (全國) 自明治二十三年至大正七年……460
436 第一審訴訟件數其種別及結果 (全國、地方裁判所別) 自明治二十三年至大正七年……462
437 金額又ハ價額ニ見積リ得ヘキ第一審訴訟件數金額別 (全國) 自明治二十三年至大正七年……463
438 第一審訴訟終局件數種類別 (全國) 自明治二十三年至大正七年……464
439 控訴件數、其種別及結果 (全國、地方裁判所別) 自明治二十三年至大正七年……464
440 抗告件數及其結果 (全國) 自明治二十四年至大正七年……466
441 破產宣告件數、破產種別ノ終局件數及復權申立件數 (全國) 自明治二十七年至大正七年……466
442 控訴院取扱件數總覽 (全國) 自明治二十三年至大正七年……467
443 控訴件數、其種別及結果 (全國、控訴院別) 自明治二十三年至大正七年……468
444 上告件數、其種別及結果 (全國) 自明治二十三年至大正七年……469
445 大審院取扱件數、其種別及結果 自明治二十三年至大正七年……470
446 訟訴及和解事件、督促事件、終局件數其種類別 (全國) 大正七年……471
刑事裁判
447 刑事事件取扱總件數 (總數) 自明治四十二年至大正七年……470
448 犯罪搜査事件及豫審終結被告人 (全國) 自明治四十二年至大正七年……470
449 第一審總件數及總被告人及其終局未終局區分 (全國、地方裁判所管轄區域別) 自明治四十二年至大正七年……472
450 控訴裁判所控訴受理件數終局、未終局及終局被告人員 (全國、裁判所別) 自明治四十二年至大正七年……474
451 上告裁判所上告受理件數、終局、未終局及申立人 (全國) 自明治四十二年至大正七年……475
452 第一審刑法犯有罪被告事件罪名別 (全國、控訴院管內別) 自明治四十二年至大正七年……476
453 第一審刑法犯有罪被告人刑名別 (全國、控訴院管內別) 自明治四十二年至大正七年……476
454 第一審刑法犯有罪被告人罪名及刑名別 (全國) 大正七年……477
455 第一審刑法犯被告人ノ累犯加重、減輕及免除(總數、罪名別) 自明治四十二年至大正七年……478
456 第一審特別法犯有罪被告人罪名及刑名別 (總數) 自明治四十二年至大正七年……478
457 刑事略式事件 (總數) 大正七年……479
458 刑事略式手續法第三條第六條ノ規定ニ依ル第一審事件 (總數) 大正七年……479
459 違警罪即決事件(總數、犯罪別) 自明治四十二年至大正七年……479
460 各審ニ於ケル判決確定區分被告人 (總數) 大正七年……479

表號 頁
461 刑法犯有罪確定被告人刑名別及其比例 (總數) 自大正五年至同七年……481
462 刑法犯有罪確定被告人罪名別及其比例 (總數) 自大正五年至同七年……480
463 刑法犯有罪確定被告人犯罪地 (地方別) 大正七年……482
464 刑法犯第二審有罪被告人犯罪原因、年齡、配偶關係、教育、信教、資產、生計、月別及職業 大正七年……484
465 第一審刑法犯有罪被告人受刑度數 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正七年……492
466 刑法犯被告人ニ對スル刑ノ執行猶豫及其取消 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正七年……494
467 特別法犯有罪確定被告人罪名別及其比例 (總數) 自大正五年至同七年……495
468 特別法犯有罪確定被告人刑名別及其比例 (總數) 自大正五年至同七年……495
469 特別法犯有罪確定被告人終局區分 (總數) 大正七年……496
470 特別法犯被告人ニ對スル刑ノ執行猶豫及其取消 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正七年……496
471 體刑執行及財產刑執行末執行被告人 (全國、檢事局別) 自明治四十二年至大正七年……497
登記
472 登記件數及登錄稅 (全國、地方裁判所管轄區域別) 自明治三十八年至大正七年……496
473 土地ノ事由別登記件數 (全國) 自明治三十八年至大正七年……498
474 建物ノ事由別登記件數 (全國) 自明治三十八年至大正七年……499
475 家督相續及賣買ニ因ル土地及建物ノ登錄稅額 (全國) 自明治三十八年至大正七年……500
476 商事會社、產業組合、漁業組合ノ事由別登記件數 (全國) 自明治三十八年至大正七年……500

XXVII. 監 獄

477 監獄及職員 (全國、監獄別) 自明治三十二年末至大正七年末……501
478 在監人員 (全國、監獄別) 自明治三十二年末至大正七年末……502
479 月末在監人員 (總數、種別) 自明治三十二年至大正七年……503
480 入監出監人員 (總數) 自明治三十二年至大正七年……504
481 受刑者ノ入監出監 (全國、監獄別) 自明治三十二年至大正七年……504
482 罪名別在監受刑者 (全國) 自明治四十一年末至大正七年末……508
483 罪名別在監受刑者ノ比例 (總數) 自明治四十一年末至大正七年末……508
484 刑名別在監受刑者 (全國) 自明治三十二年末至大正七年末……510
485 刑期別懲役在監受刑者及其比例 (總數) 自明治四十一年末至大正七年末……510
486 罪名別新受刑者 (全國、監獄別) 自明治四十一年至大正七年……512
487 罪名別新受刑者ノ比例 (總數) 自明治四十一年至大正七年……516
488 刑名別新受刑者 (全國、監獄別) 自明治四十二年至大正七年……518
489 刑期別懲役新受刑者 (總數) 自明治四十一年至大正七年……518
490 新受刑者入監時年齡、飲酒嗜好ノ有無、資產ノ關係 (總數、罪名別) 自明治三十二年至大正七年……520
491 新受刑者ノ出生關係、教育ノ有無 (總數) 自明治四十二年至大正七年……522
492 新受刑者ノ養育者 (總數) 自明治四十二年至大正七年……522
493 新受刑者ノ累犯 (總數、罪名別) 自明治四十二年至大正七年……522
494 作業別在監人ノ一日平均作業者及工錢 (總數、作業別) 自明治四十二年至大正七年……524
495 在監人罹病者及其轉歸 (總數、病名別) 自明治四十二年至大正七年……526
496 在監人罹病者 (總數、監獄別) 自明治四十五年大正元年至大正七年……527

XXVIII. 陸 軍

497 壯丁身幹尺度 (實數) (全國、地方別) 自明治三十四年至大正八年……529
498 壯丁身幹尺度 (比例) (全國、地方別) 自明治三十四年至大正八年……530
499 壯丁普通教育程度 (全國) 自明治三十四年至大正七年……532
500 各學校教員學生生徒 (總數、學校別) 自明治三十四年末至大正七年末……533
501 憲兵隊人員 (總數、部隊別) 自明治三十四年末至大正八年末……533
502 憲兵取扱犯罪人員 (總數、種類別) 自明治三十四年至大正八年……535
503 衞戍監獄出入人員 (總數) 自明治三十四年至大正八年……534

表號 頁
504 衛戍病院、坪數及職員 （總數） 自明治三十四年末至大正八年末 535
505 患者數、治療日數及其轉歸 （總數、部隊別） 自明治三十四年至大正七年 536
506 兵種別患者數、治療日數及其轉歸 （內地部隊及諸學校） 大正七年 538
507 患者數、治療日數及其轉歸 （病名別） 大正七年 538
508 新患者所管別 （病名別） 大正七年 540
509 新患者兵種別 （病名別） 大正七年 540
510 新患者月別 （總數、部隊別、病名別） 自大正二年至大正七年 541

XXIX. 海 軍

511 軍艦 （總數、艦名別） 自明治三十四年末至大正八年末 542
512 水雷艇 （總數、艇名別） 自明治三十四年末至大正八年末 543
513 海軍軍人 （總數、官職別） 自明治三十四年末至大正八年末 544
514 官衙人員 （官衙別） 大正八年末 544
515 徵兵及募兵 （總數、所管別） 自明治三十四年至大正八年 545
516 各學校教員、學生生徒 （總數、學校別） 自明治三十四年至大正七年 546
517 監獄出入人員 （總數） 自明治三十四年至大正八年 547
518 患者所轄別 （總數、所轄別） 自明治三十五年至大正七年 548
519 患者兵種別 大正七年 548
520 患者病名別 大正七年 549
521 新患者及死亡者病名兵種別 大正七年 550
522 新患者及死亡者病名月別 （總數、病名別） 自明治三十五年至大正七年 551

XXX. 財 政

523 歲入歲出 （特別會計歲入歲出ヲ除ク） 自明治十九年度至大正九年度 552
524 歲入經常部 （實數、比例） 自明治十九年度至大正九年度 553
525 歲入臨時部 （實數、比例） 自明治十九年度至大正九年度 554
526 歲出總額 （實數、比例） （所管別） 自明治十九年度至大正九年度 555
527 歲出經常部及歲出臨時部 （實數、比例） （所管別） 自明治十八年度至大正九年度 556
528 歲入經常部 （款項別） 自大正五年度至大正九年度 558
529 歲入臨時部 （款項別） 自大正五年度至同九年度 559
530 歲出經常部 （款項別） 自大正五年度至同九年度 559
531 歲出臨時部 （款項別） 自大正五年度至同九年度 568
532 特別會計歲入歲出 （所管別） 自大正五年度至同九年度 572
533 所得稅納稅人員所得ノ種類竝第三種所得金額別 （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正八年度 574
534 所得稅ノ原ツク所得ノ種類竝第三種所得金額別 （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正八年度 576
535 所得稅稅額所得ノ種類並第三種所得金額別 （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正八年度 578
536 營業稅納稅人員營業種類別 （總數、地方別） 自明治三十六年度至大正八年度 580
537 營業稅稅額營業種類別 （總數、地方別） 自明治三十六年度至大正八年度 580
538 稅關收稅額 （全國、稅關別） 自明治二十三年度至大正八年度 582
539 國債未償還高種類別 （全國） 自大正四年度至大正八年度 584
540 特別賚金及官業賚本現在高 （全國） 自明治三十六年度末至大正七年度末 585
541 特別賚金及官業賚本種類別 大正七年度末 585
542 國庫預金、保管金及供託金 自明治三十五年度至大正八年度 586
543 貸付金 （全國） 自明治二十三年度至大正八年度 586
544 貸付金種類別 大正八年度 587
545 國庫支辨ニ依ル道府縣經費 （決算） （全國、地方別） 自明治四十四年度至大正六年度 588
546 道府縣收入 （決算） （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正六年度 590
547 道府縣支出 （決算） （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正六年度 592

表號 頁
548 郡收入 （決算） （全國、地方別） 自明治三十九年度至大正六年度 594
549 郡支出 （決算） （全國、地方別） 自明治三十九年度至大正六年度 596
550 市及區收入 （決算） （全國、市區別） 自明治三十六年度至大正六年度 598
551 市及區支出 （決算） （全國、市區別） 自明治三十六年度至大正六年度 600
552 市及區基本財產 （全國、市區別） 自明治三十一年度末至大正六年度末 602
553 町村收入 （決算） （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正六年度 604
554 町村支出 （決算） （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正六年度 606
555 町村基本財產 （全國、地方別） 自明治三十一年度末至大正六年度末 608
556 普通水利組合費收入 （決算） （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正六年度 608
557 普通水利組合費支出 （決算） （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正六年度 610
558 水害豫防組合費收入 （決算） （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正六年度 611
559 水害豫防組合費支出 （決算） （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正六年度 612
560 地方債種類別 （全國） 自明治三十四年度至大正七年度 613
561 地方債目的別 （全國） 大正七年度 613
562 地方債目的別 （全國、地方別） 自明治四十三年度末至大正七年度末 614
563 罹災救助基金 （決算） （全國、地方別） 自明治三十六年度至大正六年度 615
564 國稅（稅種別）及府縣稅北海道地方稅滯納處分 （全國） 自明治三十六年度至大正七年度 616
565 國稅及府縣稅北海道地方稅滯納處分 （地方別） 大正七年度 616

XXXI. 爵位勳章及褒章

566 有爵人員 （總數、位階） 自明治三十四年末至大正八年末 619
567 有位人員 （總數、族稱別） 自明治三十四年末至大正八年末 619
568 勳章佩用個數及人員 （總數、種類別） 自大正三年末至同八年末 620
569 各種勳章新受領人員 （總數、種類別） 自明治三十四年至大正八年 620
570 旭日勳章年金受領年末現在人員及金額 （總數） 自明治三十四年末至大正八年末 620
571 金鵄勳章年金受領年末現在人員及金額 （總數） 自明治三十四年末至大正八年末 622
572 勳章贈與外國人 （總數、國別） 自明治三十四年至大正八年 623
573 外國勳章佩用允許人員 （總數、國別） 自明治三十四年至大正八年 624
574 褒章、褒狀、賞杯、金員、表彰受領者 （總數、賞勳局ノ部） 自明治三十四年至大正八年 624
575 褒狀、賞杯、金員、表彰受領者 （總數、地方別、地方廳ノ部） 自明治三十四年至大正七年 625

XXXII. 議 員 選 擧

576 貴族院議員多額納稅者議員互選者 （全國、地方別） 自明治二十三年六月至大正七年六月 627
577 衆議院議員及選擧有權者 （全國、地方別） 自明治三十五年八月至大正九年五月 628
578 衆議院議員年齡別 （全國、地方別） 自明治三十五年八月至大正九年五月 629
579 衆議院議員職業別 （全國、地方別） 自明治三十五年八月至大正九年五月 630
580 府縣會議員及選擧有權者並投票數 （地方別） 大正八年 631
581 郡會議員及選擧有權者並投票數 （地方別） 大正四年 632
582 市町村會議員及選擧有權者 （全國、地方別） 自明治三十四年末至大正八年末 632

XXXIII. 官吏公吏及恩給

583 文官勅奏判別人員及年俸 （總數、官廳別） 自明治三十四年末至大正八年末 634
584 文官勅奏判別人員部局別 大正八年末 636
585 在外公館官吏細別 （總數） 自明治三十四年末至大正八年末 638
586 武官人員及年俸 （總數、階級別） 自明治三十四年末至大正八年末 639
587 高等官判任官休職人員 （總數、文武官別） 自明治三十四年末至大正八年末 639
588 恩給及扶助料受領年末現在總人員及金額 （其一） 自明治三十四年末至大正八年末 640
589 恩給及扶助料受領年末現在總人員及金額 （其二） 大正八年末 641

表號		頁
590	新ニ恩給又ハ扶助料ヲ受領シタル人員及其金額 大正八年	642
591	一時賜金受領人員及金額 自明治三十四年至大正八年	643
592	宮內官吏勅奏判別人員及年俸（總數） 自明治三十四年末至大正八年末	643
593	宮內官吏勅奏判別人員部局別 大正八年末	644
594	府縣名譽職參事會員及府縣吏員人員及年俸（全國、地方別） 自大正二年末至大正八年末	644
595	郡名譽職參事會員及郡吏員人員及年俸（全國、地方別） 自大正二年末至大正八年末	645
596	市町村吏員及市參事會員（全國、地方別） 自明治三十四年末大正八年末	644

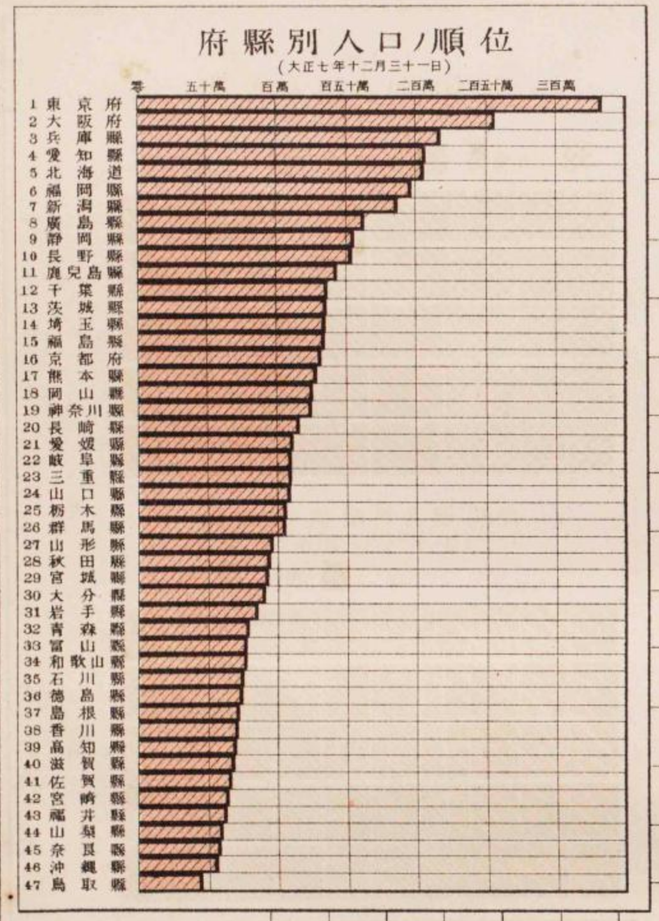
XXXIV. 朝鮮臺灣樺太及關東州附北海道

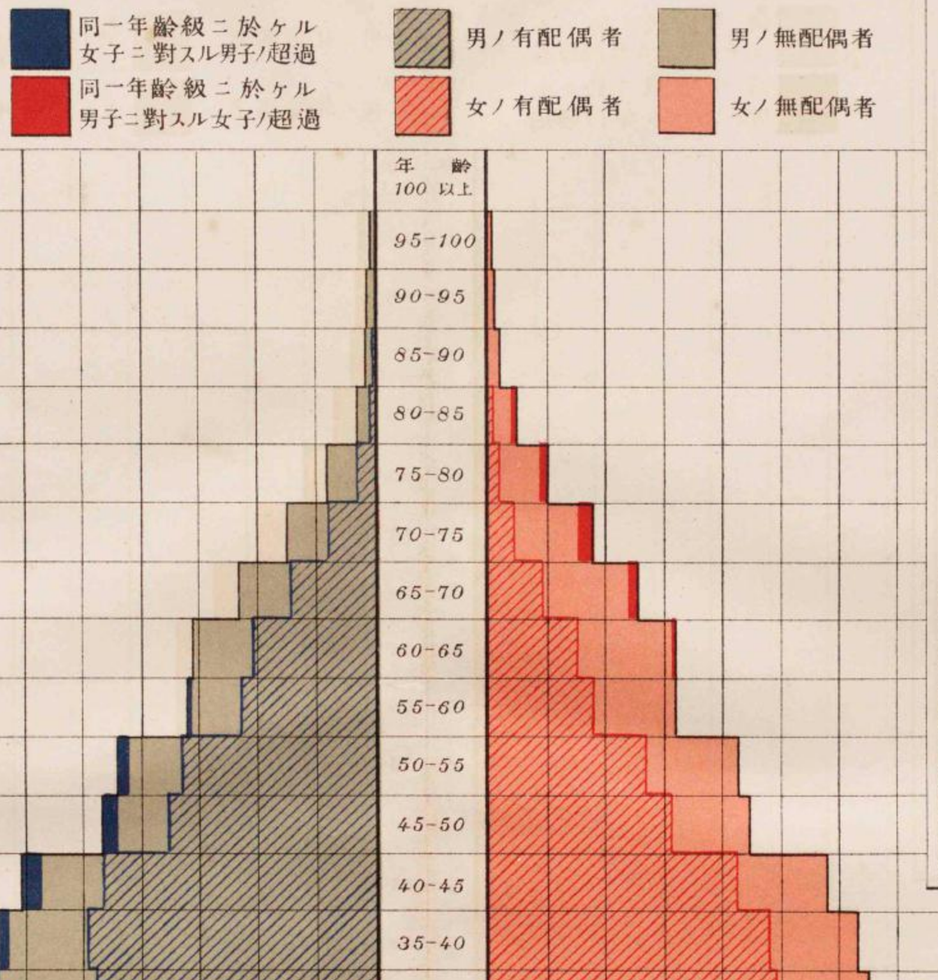
597	面積及府郡面町村數（總數、地方別） 大正七年末及同八年十一月	648
598	北海道地積總覽（全道） 自明治四十四年末至大正七年末	649
599	北海道年期地（全道） 自明治三十七年末至大正六年末	649
600	現住戶口（總數、地方別） 自明治四十年末至大正七年末	648
601	現住人婚姻、離婚及出生、死亡（總數） 自明治四十年至大正七年	652
602	現住人死亡者月別（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	653
603	現住人死亡者年齡別（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	655
604	北海道アイヌ人人口（全道、國別） 自明治二十一年末至大正八年末	656
605	北海道アイヌ人出生死亡（全道、國別） 自明治二十一年至大正八年	656
606	北海道移住者（總數） 自明治五年至大正七年	656
607	渡航者及歸航者（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	657
608	耕地段別（總數） 自大正元年末至同七年末	657
609	主要農作物作付段別（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	658
610	主要農作物收穫高（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	658
611	桑畑段別養蠶製絲戶數及繭生絲產額（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	660
612	朝鮮水蔘收納額及紅蔘製造高（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	660
613	東洋拓殖株式會社社有地面積及移民戶數竝割當段別（總數） 自大正元年度末至大正七年度末	660
614	家畜及家禽（總數） 自大正元年末至同七年末	661
615	乳牛及搾乳高（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	661
616	屠場及屠畜（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	662
617	林野面積（總數） 自大正元年度末至大正七年五月末日又ハ同七年末	662
618	工場（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	663
619	臺灣泥藍及藍錠製造戶數竝數量價額（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	663
620	臺灣甘蔗栽培及收穫高（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	663
621	臺灣製糖所及製糖（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	663
622	漁獲物價額（種類別） 自大正三年至大正七年	664
623	樺太水產製造物價額（種類別） 自大正三年至同七年	665
624	製鹽（總數） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	665
625	鑛種別鑛區及面積（總數、鑛種別） 自大正元年末至大正七年末	665
626	鑛物產額（種類別） 自明治四十五年大正元年至大正七年	666
627	臺灣製糖價額（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	668
628	臺灣茶畑作付面積及製茶戶數、製造高竝價額（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	668
629	臺灣樟腦及樟腦油產出高（總數） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	668
630	臺灣樟腦賣渡數量及價額（總數） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	668
631	臺灣原料阿片（總數、種別） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	669
632	臺灣阿片烟膏製造高（總數、種別） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	669
633	臺灣阿片烟膏吸食特許者、販賣數量及價額（總數） 自大正元年末至同七年末	669
634	輸移出入物品總價額 自明治四十一年至大正七年	670

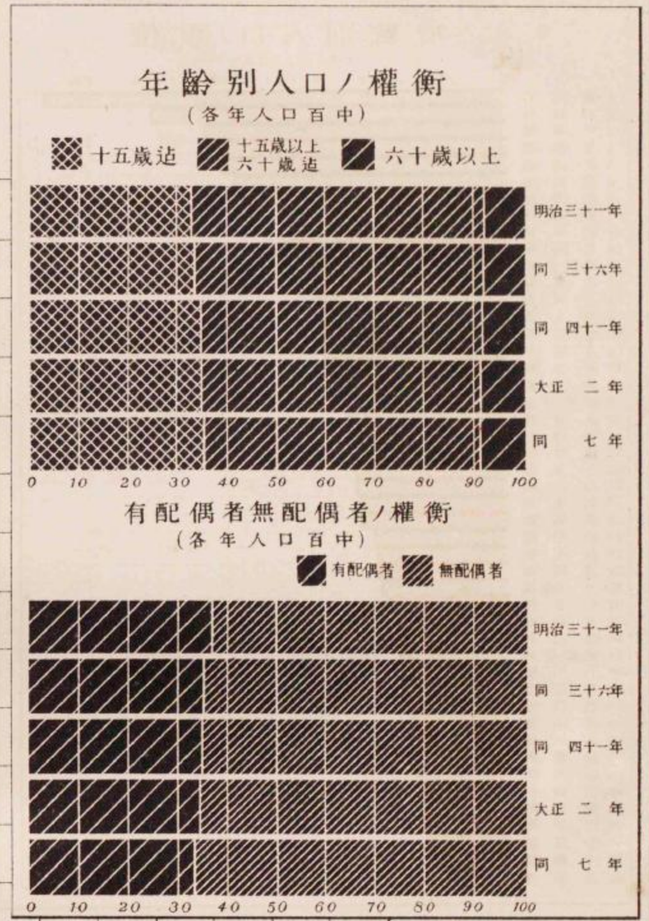
表號		頁
635	輸出入物品價額國別 自大正三年至大正七年	670
636	輸移出品目別數量及價額 大正七年	674
637	輸移入品目別數量及價額 大正七年	678
638	輸移出入金銀總價額 自明治四十一年至大正七年	686
639	北海道移出入物品價額 自大正五年至大正七年	688
640	市場（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	688
641	鐵道停車場、線路、車輛、走行哩數及旅客貨物（總數） 自大正二年度至大正七年度	689
642	航路標識數（總數） 自大正二年末至大正七年末	689
643	登簿及不登簿船舶數其ノ一（噸數船）（總數） 自大正元年末至大正七年末	690
644	登簿及不登簿船舶數其ノ二（石數船）（總數） 自大正元年末至大正七年末	690
645	內外國貿易船入港船數及噸數 大正七年	690
646	郵便局所數郵便線路及郵便物引受（總數） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	691
647	電信線路線條ノ延長及電報通數（總數） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	691
648	電話加入者通話度數（總數） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	692
649	內外國郵便爲替（總數） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	692
650	醫師、齒科醫、藥劑師、產婆、病院、藥種商、製藥者（總數） 自大正元年末至大正七年末	693
651	拾種傳染病患者及死亡者（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	693
652	種痘（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	694
653	小學校（內地人教育）（總數） 自明治四十五年度大正元年至大正七年度	695
654	中學校及高等女學校（內地人教育）（總數） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	694
655	本地人普通教育諸學校（總數） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	696
656	特種學校及專門學校 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	697
657	實業諸學校（總數） 自明治四十五年大正元年度至大正七年度	698
658	各種學校、書堂、書房及幼稚園（總數） 自明治四十五年大正元年度末至大正七年度末	698
659	警察官署及職員（總數） 自大正元年末至大正七年末	699
660	盜難詐欺恐喝及橫領罪被告事件數（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	700
661	犯罪即決人員（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	700
662	裁判所數及司法職員（總數） 自大正元年末至大正七年末	702
663	民事爭訟調停及民事訴訟事件（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	702
664	民事雜事件（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	704
665	刑事事件（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	704
666	第一審刑事罪名別判決人員 自明治四十五年大正元年至大正七年	706
667	登記事件件數（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	707
668	監獄數及職員（總數） 自大正元年末至大正七年末	708
669	在監人員（總數） 自大正元年末至大正七年末	708
670	在監人出入（總數） 自明治四十五年大正元年至大正七年	710
671	罪名別新受刑者 自明治四十五年大正元年至大正七年	712
672	各殖民地特別會計 自大正五年度至大正九年度	714
673	朝鮮總督府特別會計歲入歲出（款項別） 自大正五年度至大正九年度	715
674	臺灣總督府特別會計歲入歲出（款項別） 自大正五年度至大正九年度	717
675	樺太廳特別會計歲入歲出（款項別） 自大正五年度至大正九年度	719
676	關東廳特別會計歲入歲出（款項別） 自大正五年度至大正九年度	720

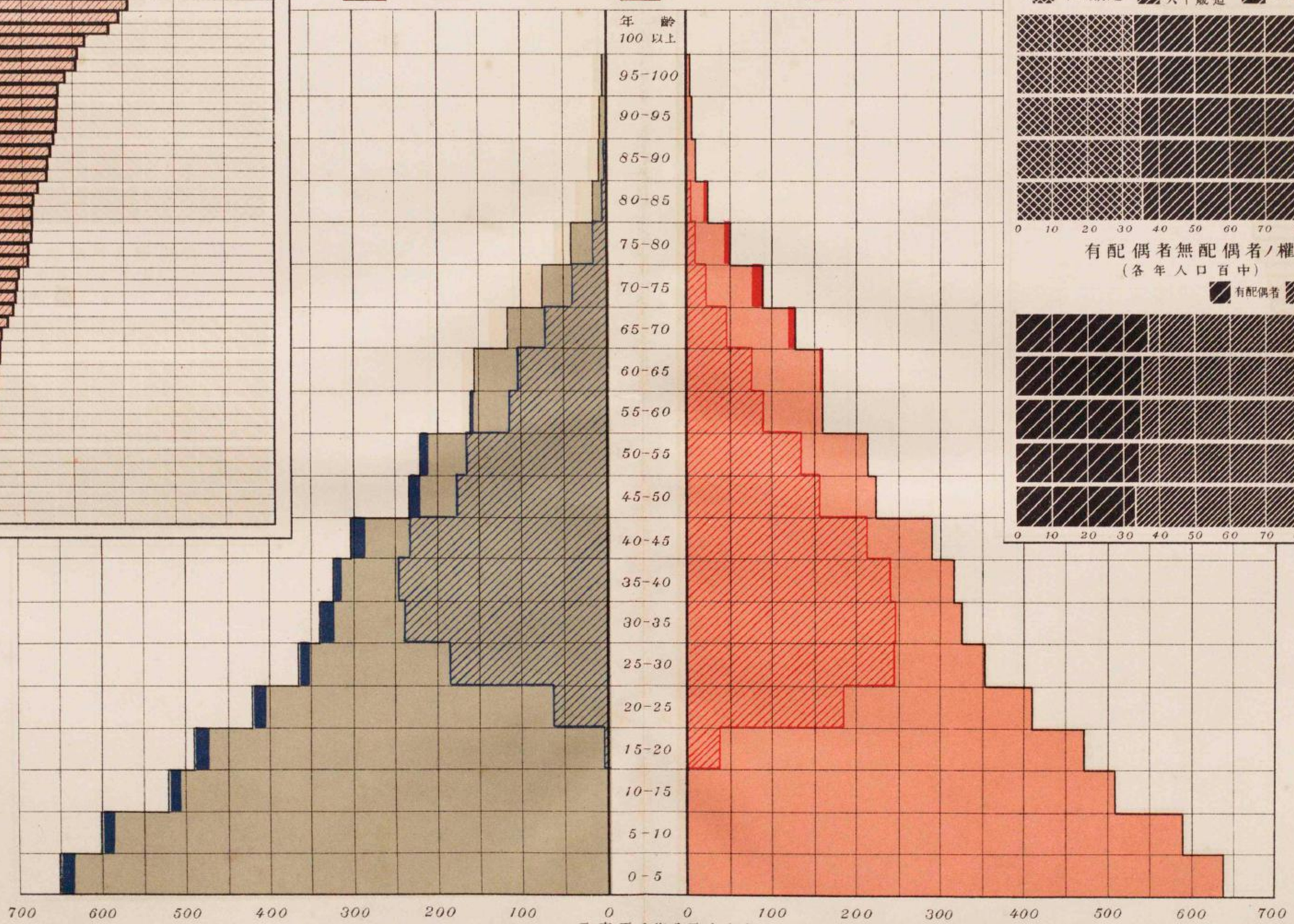
日本本國男女及配偶ノ有無別年齢構成（總人口一萬中）

（大正七年十二月三十一日）

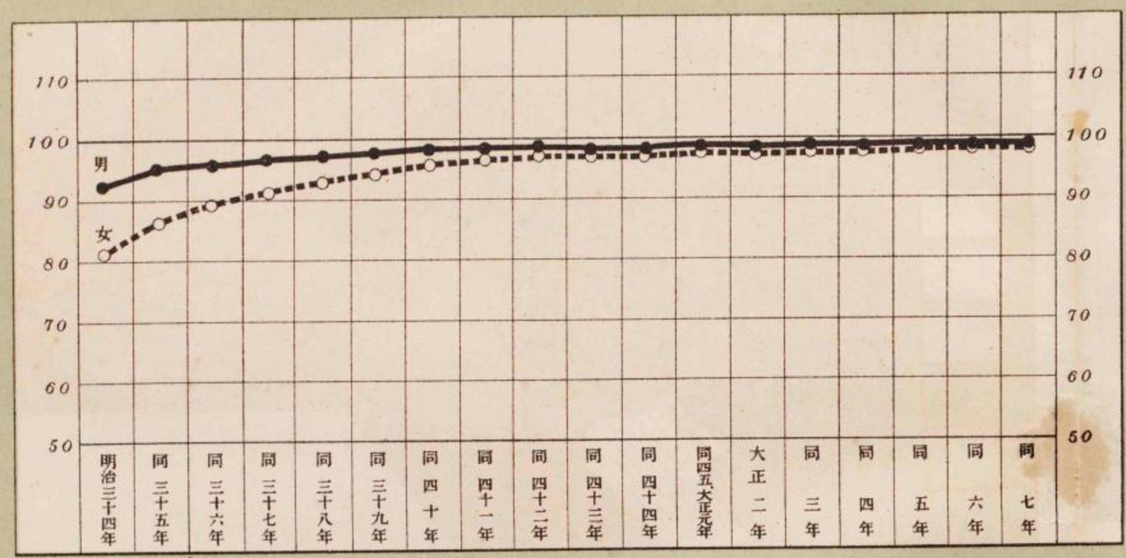








既ニ就學ノ始期ニ達シタルモノ男女各百中就學歩合



道府縣學齡兒童就學歩合

（大正八年三月末日現在）

學齡兒童百人中

- 98.0 以下
- 98.0－98.5
- 98.5－99.0
- 99.0－99.5
- 99.5 以上

在校府縣人口一萬ニ付中學校、高等女學校本科生徒

（大正八年三月末日現在）

高等女學校　中學校

20　10　0　60　50　40　30　20　10　0

沖縄縣　秋田縣　青森縣　岩手縣　北海道　滋賀縣　茨城縣　埼玉縣　岐阜縣　宮崎縣　徳島縣　山梨縣　島根縣　三重縣　福島縣　群馬縣　新潟縣　静岡縣　山形縣　高知縣　熊本縣　神奈川縣　鹿兒島縣　千葉縣　長野縣　石川縣　愛媛縣　福井縣　長崎縣　兵庫縣　廣島縣　栃木縣　宮城縣　大分縣　愛知縣　富山縣　大阪府　奈良縣　香川縣　山口縣　鳥取縣　和歌山縣　京都府　福岡縣　岡山縣　佐賀縣　東京府

日本帝國第三十九統計年鑑

略　說

I. 土　地

本邦ノ極南ハ臺灣阿緱廳至厚里七星岩ノ南端(北緯21度45)ニシテ、極北ハ千島國占守郡アライト島ノ北端(北緯50度56)ナリ。又極東ハ千島國占守郡占守島ノ東端(東經156度32)ニシテ、極西ハ澎湖廳水按灣花嶼ノ西端(東經119度18)ナリ。故ニ本邦ハ南北29緯度11、東西37經度24間ニ在リ。朝鮮ノ亞細亞大陸ノ半島ナルト、樺太ノ露領ト接續セルトヲ特別トシ、本州、四國、九州、北海道、臺灣ノ五大島及之ニ附屬セル430有餘ノ小島ヨリ成ル。

【面積】　大正九年首現在ノ本邦全版圖ノ總面積ハ 43,778.39方里ナリ。中內地ノ面積ハ 24,794.36方里ニシテ、總面積ノ 56.63%ヲ占ム。

本邦領土發展ノ狀勢ヲ略叙センニ、明治二十七年マテハ上記ノ內地アルニ過キサリシカ、二十八年ニ臺灣及澎湖島ヲ領有シテ 2,332.10方里ヲ增シ、三十九年ニ樺太ヲ得テ又 2,339.93方里ヲ增シ、更ニ四十三年ニ韓國ヲ併合シテ 14,312.00方里ヲ加ヘタリ。然レハ二十七年現在ノ面積ヲ百トシテ指數ヲ舉クレハ臺灣澎湖島領有後ハ 109、樺太領有後ハ 119、韓國併合後ハ 176餘ト爲ル。

世界陸地ノ總面積 8,951,462方里(佛國ノ調査ニ基キ換算ス)ニ對スル本邦ノ全面積ハ 4.89%ニ當リ、內地ノ面積ハ 2.77%ニ當ル。又亞細亞洲ノ總面積 2,708,846方里(前同斷)ニ對スル本邦ノ全面積ハ 16.16%、內地ノ面積ハ 9.15%ニ當ル。歐米諸國(植民地ヲ除ク)大戰前ノ事實ノ面積ハ、大貌列顛 20,767方里、佛蘭西 34,783方里、伊太利 18,583方里、獨逸 35,068方里、墺地利匈牙利 40,551方里、歐洲露西亞 333,932方里、北米合衆國 508,292方里ニシテ、之カ本邦內地ノ面積百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、大貌列顛ハ 83.8、佛蘭西ハ 140.3、伊太利ハ 74.9、獨逸ハ 141.4、墺地利匈牙利ハ 163.6、歐洲露西亞ハ 1,346.9、北米合衆國ハ 2,050.1ニ當ル。

【行政區劃】　大正八年末現在ノ內地ノ行政區劃 1道 3府 43縣及 636郡ハ前年ト異ルコトナク、市ハ 81市ニシテ前年ニ比シ2市ヲ增シ、町ハ 1,352町ニシテ前年ニ比シ 19町ヲ增シ、村ハ 10,804村ニシテ前年ニ比シ 35村ヲ減シタリ。

內地ノ面積ヲ行政區劃別ニ見ルニ、北海道ハ最大ニシテ、之ニ亞タハ岩手、福島、長野、新潟、秋田、岐阜、青森、山形等ノ諸縣ナリ。又最小ハ大阪府ニシテ香川、東京、沖繩、神奈川、佐賀等ノ諸府縣之ニ亞ク。

【民有地】　大正九年首現在ノ內地民有地ノ總反別ハ 1,847萬町ニシテ總面積ノ 47.9%ニ當ル。此ノ比例ハ十六年前ノ明治三十七年ヨリハ 9.9%高ク、十一年前ノ明治四十二年ヨリハ 7.9%高ク、六年前ノ大正三年ヨリハ 3.2%高ク、前年ヨリハ 0.4%高シ。民有地ヲ有租免租ニ別チ分節比例ヲ求ムレハ有租地 82.77% 免租地5.61%免租年期地 11.61%ニ當ル。

大正九年首ノ民有有租地ヲ地目別ト爲セハ田 292萬町、畑 250萬町、宅地 39萬町、山林 805萬町、原野及牧場 139萬町、其ノ他 3萬町ナリ。之カ民有有租地ノ總反別ニ對スル分節比例ハ田 19.12%、畑 16.37%、宅地 2.57%、山林 52.565%、原野及牧場 9.08%其ノ他 0.21%ニ當リ、又之ヲ總面積ニ比スルニ田ハ 7.6%、畑ハ 6.5%、宅地ハ 1.0%、山林ハ 20.9%ニ當ル。此ノ總面積比例ヲ既往ニ比スルニ田、畑、山林共ニ漸增ノ步調ヲ取ルヲ見ル、是即年々ニ不毛ノ地ヲ拓キテ有用化スルニ因ル。然ルニ此ノ開拓モ人口增加程度ノ著シキニ若カス、是等有用地ノ人口比例數ハ年每ニ低下セリ。即大正八年末人口一ニ對スル九年首ノ反別ハ田 5畝04步、畑 4畝13步、宅地 23步、山林 1反 4畝 05步ニシテ、明治二十一年ノ同一比例數ハ田 7畝、畑 5畝 22步、宅地 29步、山林 1反8畝14步ナレハ、此ノ三十餘年間ニ於テ人口增加ノ度カ、如何ニ是等有用地ノ增加度ニ超越セルカヲ知ルニ足ル。

獨逸帝國統計年鑑ニ依リ、歐米諸國ノ總面積ニ對スル農用地ノ面積比例ヲ算出スレハ、大貌列顛ハ 77.20%(1913年)、伊太利ハ 76.25%(同上)、佛蘭西ハ 69.53%(1912年)、獨逸ハ 64.84%(1900年)、墺地利匈牙利ハ 52.54%(1912年)、歐洲露西亞ハ 40.80%(1887年)、北米合衆國ハ 25.54%(1910年)ナリ。之ニ基キ農用地ノ面積ヲ算出シ、人口一ニ對スル農用地ノ反別ヲ算出セハ、大貌列顛ハ 3反 2畝23步、伊太利ハ 6反 2畝04步、佛蘭西ハ 9反 4畝26步、獨逸ハ 5反 4畝23步、墺地利匈牙利ハ 6反 6畝08步、歐洲露西亞ハ 2町 2反 3畝26步、北米合衆國ハ 2町 1反 4畝 28步ニ當ル。玆ニ所謂農用地ニハ農耕地ノ外牧場、花園及遊園、菊園園ヲ含ムカ故ニ、本邦ノ田畑合計ニ牧場及原野ヲ加ヘタルモノヲ以テ之ニ比ス

ル＝、本邦ノ人口一＝對スル此ノ反別ハ 1反 2畝 2歩＝當ル。是ヲ以テ上記各國ノ比例數ト嚴密＝同性質ナリト言フ能ハサレトモ、彼此ノ差ノ大ナル寔＝驚クヘキモノアリ、農政上豈＝一顧ノ値ナシトセンヤ。

大正九年首＝於ケル地方別總面積＝對スル 田畑合計ノ民有耕地反別ノ比例ハ、最高ヲ埼玉縣ノ 40.3%ト爲シ、大阪府ノ 38.0%之＝次キ、千葉縣ノ 36.8%、茨城縣ノ 36.1%、福岡縣ノ 33.2%神奈川縣ノ 32.1%ナルハ其ノ高キモノナリ、又最低キハ北海道ノ 1.3%＝シテ岩手和歌山二縣ノ共＝ 10.0%、岐阜縣ノ 11.0%、秋田縣ノ 11.6%、青森縣ノ 12.7%等ヲ其ノ低キモノトス。

大正九年首ノ民有免租地ヲ地種別＝見ル＝、既往＝比シテ增加ノ著シキモノハ學校敷地、保安林、道路及水道用地ナリトス。

大正九年首ノ民有年期地ヲ地種別＝見ル＝、既往＝比シ免租年期地ハ漸ヲ追フテ減少セシガ本年少シク增加ス、輕租年期地ハ漸次減少ス、又北海道特別年期地ハ本年少シク增加シ、東京市區改正條例＝依ル下附地ハ增減ナシ。

II. 氣　象

大正八年ノ氣象ヲ略叙スレハ下ノ如シ。

【氣壓】　一年平均＝據レハ、支那方面＝高ク（764粍ヲ示ス）、樺太千島方面＝低キ(759粍ヲ下ル）コト平年ノ例ノ如シ。而シテ臺灣、琉球ハ稍高ク(759—761粍)、九州以北本州ハ之＝次キ(760—762粍)、北海道、樺太ハ低ク(758—760粍)、朝鮮、滿洲ハ支那方面＝亞テ高シ(761—763粍)。平年＝比スルニ、全國概ネ過低＝シテ、過高ナルハ臺灣、本州東海ノ一部其ノ他一二地＝過キス。

中央氣象臺及外十四測候所ノ觀測＝依リテ月別ノ平均氣壓ヲ見之ヲ平年＝比スルニ、根室、大泊ヲ除ク他ハ概シテ過低ナルモ、五月、七月、九月ハ殆ト總テ＝於テ過高ナリキ。

【氣溫】　一年平均＝依レハ、琉球以南ノ地及小笠原島＝テハ 20度以上＝シテ、恒春ノ 24.5度ヲ最高トス。九州、山陽ノ一部、四國、大阪、和歌山、東海ノ東部、八丈島、支那長江流域等＝テハ 15—20度、本州(上記及青森ヲ除ク)、朝鮮ノ中部以南、遼東半島、天津、芝罘、青島＝テハ 10—15度、水澤、青森、北海道、朝鮮北部、營口、奉天＝テハ 5—10度、紗那、樺太等＝テハ 5度以下＝シテ、落合ノ 2.4度ヲ最低トス。之ヲ平年＝比スルニ、臺中、臺北、九州南半部、新居濱、高知、潮岬、八丈島、勝浦、大邱、江陵、大連等＝テハ過低ナリシモ、其ノ他ノ地方＝テハ概ネ過高ヲ告ケタリ。

中央氣象臺及外十四測候所ノ觀測＝依リテ月別ノ平均氣溫ヲ見之ヲ平年＝比スルニ、札幌、根室、大泊ハ七月及十月以後＝於テ過高ナリシモ、其ノ他ノ各月ハ過低ナリシガ、中央氣象臺及外十一測候所ハ各月悉ク過高ナラサルハナク、七月ノミ過低ナリシハ、廣島、大阪、高知、東京、京都、境、新潟ノ七箇所ナリ。又最高平均氣溫ヲ同樣＝比較シ見ルニ、是亦札幌、根室、大泊ニ一月ヨリ四月マテ及八月九月＝過低ナルモノアリシ外、各所各月殆ト凡テ過高ナリ。又最低平均氣溫ヲ同樣＝比較スル＝臺北、長崎ハ九月以後過低、青森、札幌、根室、大泊ハ十月以前殆ト凡テ過低、其ノ他ノ各所モ七月八月ハ概シテ過低ナリシカ、以上ヲ除ク他ノ凡テハ殆ント皆過高ヲ示シタリ。而シテ氣溫ノ每日較差ノ平均ハ、之ヲ平年＝比シ概ネ過大ナリシモ、一月二月ハ過小ナル地多ク、青森、札幌＝於テハ其ノ他ノ月ニモ過小ナルアリ、東京モ亦七、八、九及十一、十二月ハ過小ナリキ。

【濕度】　一年平均＝據レハ、臺灣、九州南東部、小笠原父島、東海ノ東部、中央山部、山陰、北陸、旭川、紗那、樺太＝テハ 80%以上＝シテ、筑波山ノ 84%ヲ最高トシ、朝鮮東半部、滿洲、北支那＝テハ 70%以下＝シテ、濟南ノ 52%ヲ最小トス。之ヲ平年＝比スレハ、臺灣、九州、四阪島、和歌山、高知、東海ノ東部、中央山部、山陰、根室、落合、釜山、京城等＝於テハ過濕ナリシモ、其ノ他ノ地方ハ平年＝等シキカ若クハ過乾ナリキ。

中央氣象臺及外十四測候所ノ觀測＝據リテ月別ノ平均濕度ヲ見之ヲ平年＝比スルニ、一、二、三月ハ裏日本及北海道＝過乾ノ地アリシモ概シテ過濕ナルモノ多ク、四月ヨリ八月マテハ之＝反シテ過乾ナリシモノ多ク、九月以降ハ區々ナレトモ、北海道、樺太、朝鮮、大連ハ過濕ナルモノ多ク、其ノ他ハ過乾ナルモノ多キヲ占メタリ。

【日照時】　可照時數＝對スル一年平均ノ百分率ハ、臺灣、內海地方、東海、中央山部、朝鮮、滿洲、北支那＝テハ 50%以上、營口ノ 68%ヲ最高トシ、其ノ他ノ地方ハ 50%以下＝シテ名瀨、足尾、紗那ノ 34%ヲ最小トス。平年＝比スレハ臺東、那覇、高知、東京、濱松、京都、松本、足尾、金澤、伏木等ハ減少シ、其ノ他ノ地方ハ增加シタル所多シ。

中央氣象臺及其ノ他ノ十四測候所ノ觀測＝依リテ月別ノ日照時百分率ヲ見、之ヲ平年＝比スルニ、一、二、三月及九月ハ概シテ減少セル所多ク、其ノ他ノ各月ハ增加シタル所多シ。但シ東京ハ四、五、六月及十、十二月ハ增加シ、其ノ他ハ減少セリ。

【降水量】　一年總量＝據レハ、臺北、琉球、九州ノ西南部、高知、潮岬、八丈島、房總地方、足尾、北陸地方ハ 2000粍以上＝シテ、八丈島ノ 4165粍ヲ最大トシ、膠湖島、石卷、北海道東北部、樺太、朝鮮、滿洲、北支那ハ 1000粍以下＝シテ濟南ノ 346粍ヲ最小トシ、其ノ他ノ地方ハ 1000—2000粍ナリ。平年＝比スレハ臺南、鹿兒島、宮崎、內海地方ノ大部、東海、中央山部、山陰、北海道ハ過大＝シテ、其ノ他ノ地方ハ平年ヨリ減少セル所多カリキ。

中央氣象臺及外十四測候所ノ觀測＝依リテ月別ノ降水量ヲ見、之ヲ平年＝比スルニ、一月二月ハ新潟、青森、札幌、大泊ヲ除クノ外總テ過大＝シテ、三、四、五月ハ臺北、新潟、札幌、大泊、京城ノ他ハ過小ナリ。又六月以降ハ區々ナレトモ、臺北、東京、京城ハ過大ナルコト多カリシモ、其ノ他ノ各地ハ平年ヨリ減少セルコト多シ。

【風】　最多方向ハ全國一般＝北寄リノ風多カリシカ、北海道、千島＝テハ西寄リノ風、樺太、朝鮮、滿洲＝テハ南寄リノ風亦尠カラサリキ。平均風速度ハ海岸又ハ山頂＝テハ概ネ 5米/秒ヲ超エシ所多ク、內陸＝テハ概ネ 2—4米/秒ナリ。而シテ膠湖島、八丈島、壽都ノ 9米/秒ヲ最大トス。平年＝比スレハ、琉球、本州、近畿以北ノ地、北海道＝テハ概ネ過大ナリシモ、臺灣、四國、朝鮮、滿洲北部、支那＝テハ概ネ過小ナリキ。

【天氣日數】　降水日數ハ南西諸島、八丈島、近畿以東ノ中央山部、裏日本ノ各地、函館、壽都、旭川、紗那＝テハ 200日以上ヲ示シ、八丈島ノ 239日ヲ最多トス。其ノ他ノ地方ハ 200日以下＝シテ膠湖島、釜山、大邱、滿洲、北支那ハ 100日ヲ下レリ。平年＝比スレハ臺灣、嚴原、內海地方、父島、奥羽東半部、裏日本沿岸地方、壽都、旭川、落合、朝鮮、滿洲、支那等ハ減少シ、其ノ他ノ地方ハ增加セリ。

快晴日數ハ臺灣、宮崎、嚴原、本州中央部ノ南半、朝鮮、滿洲、支那＝テハ 50日以上ヲ算シ、天津ノ 151日ヲ最多トス。其ノ他ノ地方ハ概ネ 50日以下＝シテ八丈島ノ 4日最モ少シ。

III. 人　口

甲　人口ノ靜態

【總數】　大正七年末定期人口靜態調査ノ結果＝依レハ帝國人口總數ハ 76,780,288＝シテ、之ヲ別テハ內地人(即チ本籍人口) 56,667,711人、朝鮮人 16,697,017人、臺灣人 3,413,414人、樺太人 2,146人ナリ。之ヲ總數＝對スル分節比例ト爲セハ內地人 738.05%、朝鮮人 217.47%、臺灣人 44.45%、樺太人 0.03%＝當ル、故＝總數ノ約四分ノ三ハ內地人ノ占ムル所＝シテ他ノ四分ノ一ハ朝鮮人、臺灣人及樺太人ナリトス。1910年及11年ノ人口調査＝基キテ推計シタル世界ノ總人口(佛國ノ調査＝依ル)ハ 16億2,333萬人ナリ。之＝對シ本邦ノ總人口ハ 47.30%＝當リ、內地ノ本籍人口ハ 34.91%＝當ル。又前同樣＝推計シタル亞細亞洲ノ總人口ハ 8億0,264萬人＝シテ之＝對スル本邦總人口ハ 95.66%內地本籍人口ハ 70.60%＝當レリ。世界ノ獨立國ノミ＝就テ人口(推計ヲモ含ム）多キモノヲ擧グレハ支那 3億0,062萬人(推計)、歐洲露西亞 1億3,403萬人(1910年推計）北米合衆國 9,197萬人(1910年)、獨逸 6,493萬人(1910年)、次ハ本邦內地ノ本籍人口＝シテ實＝世界ノ第五位＝居リ、本邦以下ノ大國ハ墺地利匈牙利 5,136萬人(1910年)、大英列顚 4,522萬人(1911年)、佛蘭西 3,919萬人(1911年)、土耳古 3,702萬人(調査年不詳)、伊太利 3,467萬人(1910年)、伯剌西兒 2,112萬人(調査年不詳)、西班牙 1,995萬人(1910年)、墨其西古 1,506萬人(1910年)アリ、是世界＝於ケル千萬人以上ノ人口ヲ有スル獨立國トス。

【人口增加率】　本邦ノ人口增加率ハ(本籍人口）最近大正二年及同七年ノ二回ノ調査＝於テ人口千＝付一年平均 12.09ナリ。之ヲ前回ノ增加率 14.78%＝比スレハ減スルコト實＝ 2.69%＝シテ、又大正七年ノ增加率ヲ前年＝比スレハ、減少スルコト 6.58%ナリ。斯ク異常ナル激減ヲ示ス所以ノモノハ果シテ何＝因スルカ、今其ノ原因ヲ詳＝セスト雖、大正七年末ノ調査前＝戶籍簿ノ整理ヲ爲シタルト大正七年ノ秋末ヨリ本邦ヲ風靡セル流行性感冒ノ爲死亡者著シク多カリシトハ、此ノ現象ヲ解決スヘキ重要ノ事實ナランカ。歐洲諸國＝於ケル大戰前ノ增加率ヲ示セハ、愛耳蘭ハ 1.5(1901—1911年)、佛蘭西ハ 1.6(1901—1911年)、蘇格蘭ハ 6.5(1901—1911年)、諾威ハ 6.8(1900—1910年)、英克蘭威爾斯ハ 10.4(1901—1911年)、獨逸ハ 15.2(1900—1911年)ナリ。

【密度】　內地ノ面積一方里＝付本籍人口ハ 2,268人、之ヲ現住人口(內地ハ乙種ヲ用フ)＝テ算出スレハ、內地ハ 2,245人、朝鮮ハ 1,191人、臺灣(行政區域內ノ面積及人口＝依ル)ハ 2,896人、樺太ハ 34人＝當ル。之ヲ諸外國＝比スレハ一方里＝付白耳義ノ 3,783人第一位ヲ占メ、英克蘭威爾斯ノ 3,680人第二位、和蘭ノ 2,637人第三位＝シテ、我國內地ハ第四位ヲ占ム。其ノ他獨逸ノ 1,851人、墺太利ノ 1,460人、伊太利ノ 1,129人、匈牙利ノ 984人、佛蘭西ノ 944人、亞米利加ノ 184人等何レモ我國ノ下位＝在リ。臺灣ハ殊＝密度著ク朝鮮ト雖モ其ノ密度甚タ低カラスシテ世界稀＝見ル人口稠密ノ邦國ナリトス。

【男女】　大正七年末調査ノ內地本籍人口ヲ男女＝別テハ男 28,625,617人、女 28,042,094人＝シテ、女百＝付男 102.08＝當ル。此ノ比例數ハ朝鮮人＝於テハ 105.95、臺灣人＝於テハ 106.13、樺太人＝於テハ 107.14ナリ。即チ我版圖＝於テハ總テ男ノ數女＝超

過シ、殊ニ內地以外ノ地ハ甚シ。之ヲ諸外國ニ比較スルニ歐洲ニ在リテハ殆ト皆女子ノ數男子ヨリ多ク 男百ニ付女ハ伯剌牙最多ク 110.7、諸威ノ 109.9之ニ次ク。英克蘭威爾斯ハ 106.8、伊太利ハ 103.7、墺太利ハ 103.6、佛蘭西ハ 103.4、獨逸ハ 102.6等ナリ。之ニ反シテ我國ノ 97.9、印度ノ 95.3 北米合衆國ノ 94.3、加奈太ノ 88.6等ハ男ノ數女ヲ超過セリ。惟フニ男女ノ數ニ斯ル差違ヲ生スルハ、出生死亡ト移出轉入トニ男女均シカラサルモノアルニ 因ルモノニシテ、本邦ト歐洲トノ異ナル主原因ハ、彼此男女ノ死亡ノ甚タ異ナルカ爲ニシテ、北米ト歐洲ト異ナルハ、彼ハ人口移出多ク是ハ轉入多キ爲ナルカ如シ。

【年齡】 大正七年末調査ノ本籍人口ヲ年齡別ト爲シ、總數ニ對スル分節比例ヲ算出スレハ、十五歲未滿ノ幼齡者ハ 35.10%、十五歲以上六十歲ノ中年者即チ生產年齡者ハ 56.07%、六十歲以上ノ老齡者ハ 8.83%ナリ。此ノ比例數ヲ既往ニ比スルニ、幼齡者ハ增シ、中年者ハ減シ老齡者ハ又增ス、幼齡者ノ增スハ出生率ノ增高ニ原因スヘク、中年者ノ減スルハ他ニモ原因アルヘキモ幼齡者ノ增加ノ影響ヲ主ナル原因ト爲スヘク、老齡者ノ增スハ未タ其ノ原因ヲ詳ニセス。此ノ年齡分節比例ヲ歐米ノ數國ト比センニ、英克蘭威斯爾(1911年)ハ幼者 30.64%中年者 64.16%老者 5.20%、佛蘭西(1911年)ハ幼者 25.76%中年者 61.67%老者 12.57%、獨逸(1910年)ハ幼者 34.05%中年者 60.92%老者 5.03%、墺太利(1910年)ハ幼者 34.84%中年者 5.988%老者 5.28%、伊太利(1911年)ハ幼者 33.84%中年者 59.34%老者 6.48%、北米合衆國(1910年)ハ幼者 32.07%中年者 63.46%老者 4.29%ナリ。由是觀之、本邦ノ幼齡者ノ比例數ハ獨逸、墺太利ト略ホ同ク、老齡者ハ佛蘭西ノ如ク甚タシク高カラサレトモ而モ他國ニ超越シテ高ク、而シテ中年者ハ他ノ諸國ニ見サル低位ニ在リ、是決シテ等閑ニ觀ルヘカラサル現象ナリ。

【配偶ノ有無】 大正七年末調査ノ本籍人口ヲ配偶ノ有無ニ依リ分チ、總數ニ對スル分節比例ヲ求ムレハ、有配偶ノ男女共ニ各 16.89%即チ其ノ計 33.78%、無配偶ノ男ハ 33.62%女ハ 32.60%其ノ計 66.22%ナリ。此ノ比例數ヲ既往ニ比スルニ有配偶者ハ漸次減少シ、無配偶者ハ增ス。是前項ノ年齡別ト關聯セル現象ニシテ出生數ノ增加ニ依ル幼年無配偶者ト、老齡者モ亦增加スルニ依ル老鰥寡ノ增加ニ基クモノナラン。

此ノ有配偶者ヲ諸外國ニ比スルニ、獨逸ハ 35.78%(1910)年、伊太利ハ 36.33%(1911年)、英克蘭威爾斯ハ 36.39%(1910年)、墺太利匈牙利ハ 36.97%(1910年)、露西亞ハ 39.07%(1897年)、佛蘭西ハ 42.63%(1911年)ナリ。佛蘭西ノ頗ル高キハ幼齡者ノ少キ爲ナルヘシ。何レノ諸國モ我國ヨリ此ノ比例數高シ、是ハ素ヨリ複雜ナル原因ニ由ルモノナルヘシト雖、本邦ノ都會ニ於テ近來內緣ノ夫妻ナル者多キニ至ルコトモ法律上ノ有配偶者比例ヲ低カラシムルノ原因ナルヘシ。

【現住人口】 現行ノ人口調査方法ニ依ル內地現住人口ハ、各市町村ノ本籍人口ニ其市町村ノ出入寄留人員並ニ兵營軍艦及監獄ニ在ル人員ヲ加除シテ得タルモノニシテ、之ヲ專門的ニ甲種現住人口ト稱ス、此ノ現住人口ハ朝鮮、臺灣、樺太及外國ニ在留スル者ヲ除外シタルモノナルカ故ニ、其ノ總數ハ本籍人口ヨリ少ナカルヘキ筈ナリ。然ルニ大正七年末調査ノ現住人口ハ 58,087,277人ニシテ本籍人口ヨリ多キコト 1,419,566人ナリ、若シ夫之ニ公知ノ朝鮮、臺灣、樺太及外國ノ在留者 約66萬人ヲ加フレハ甲種人口ノ本籍人口ヲ超過スルコト約 210萬人ニ當ル。斯ノ如キハ要スルニ入寄留ノ重複ト出寄留ノ脫漏トニ基因スルモノニシテ 人口移動ノ頻繁ナル今日ニ於テハ國勢調査ヲ俟ツニ非サレハ此ノ誤謬ヲ匡正スルノ策ナシ。仍テ國勢院ハ甲種現住人口ニ加工ヲ施シ 一種ノ現住人口ヲ推計シ之ヲ 乙種現住人口ト名ケ、地方別觀察ノ基本ニ供スルコトヽ爲セリ、此ノ乙種現住人口モ亦素ヨリ姑息ノ推計ニ 過キスト雖モ、之ヲ甲種現住人口ニ比スレハ比較的事實ニ近キモノト推測セラル、其ノ加工方法下ノ如シ。

一 出入寄留ノ差引上入寄留ノ超過ハ 出寄留者ノ出寄留屆ヲ怠ルニ依リテ出寄留ニ脫漏アルト、入寄留者ノ退去屆ヲ怠ルニ依リテ入寄留ニ重複アルトニ基クモノトス、但シ出寄留屆ノ脫漏ト入寄留屆ノ重複トカ何程アルヘキヤハ知ルヘカラスト雖、要スルニ雙方ニ誤謬アリト假定ス。

二 各府縣ニ就テ此ノ脫漏重複カ何程アルヤハ 之ヲ知ルヘカラスト雖、各府縣悉ク此ノ脫漏重複アルモノト假定ス。

三 出入寄留ノ多キニ從ヒ 雙方同一ノ程度ヲ以テ脫漏重複モ亦多キヲ加フルモノト假定ス。

四 依テ各府縣ノ出入寄留數ニ脫漏重複ヨリ 生スル全國ノ誤謬ヲ按分シ、先ツ各府縣ノ誤謬ヲ算出セリ。

五 右算出ノ誤謬ヲ某府縣ノ甲種現住人口ヨリ控除シテ 玆ニ其ノ府縣ノ乙種現住人口ヲ算出セリ。其ノ算式下ノ如シ。

$$(\text{某府縣甲種現住人口})-\left\{\frac{\text{全國入寄留}-\text{全國出寄留}}{\text{全國入寄留}+\text{全國出寄留}}\right\}\times\{(\text{其ノ府縣ノ入寄留})+(\text{其ノ府縣ノ出寄留})\}$$

而シテ右人口ハ推計ナルヲ以テ 末位ヲ百ニ留メ以下四捨五入セリ。

然ルニ人口調査ヲ行ヒタル年以外ニハ 此ノ推計法ヲ施ス能ハサルカ故ニ前二回ノ調査年ニ於テ算出セル 乙種現住人口ヲ對比シ其ノ間ニ於ケル一箇年ノ幾何學的人口增加率ヲ算出シ、之ヲ近キ調査年ノ乙種現住人口ニ乘シ遞次各年ノ人口ヲ推計ス。大正八年ノ

例ヲ示セハ下ノ如シ。

某府縣ノ大正八年乙種現住人口ニ

(其ノ府縣ノ大正七年乙種現住人口)

$$\times\left(\frac{\text{其ノ府縣ノ大正七年乙種現住人口}}{\text{其ノ府縣ノ大正二年乙種現住人口}}\right)^{\frac{1}{5}}$$

此ノ乙種現住人口ノ大正七年末調査ニ就テ 人口ノ地方分布ヲ見ルニ、北海道ハ總數ノ 36.8‰、東北區ハ 104.7‰、關東區ハ 95.3‰、近畿區ハ 133.3‰、中國區ハ 91.9‰、四國區ハ 58.0‰、九州區ハ 144.6‰、沖繩縣ハ 10.5‰ニ當レリ。而シテ是等各地方ノ面積一方里ニ對スル人口ノ密度ヲ見ルニ、最高キハ關東區ノ 5,178人ニシテ之ニ次クハ近畿區ノ 5,009人、沖繩縣ノ 3,651人、東海區ノ 3,596人、九州區ノ 3,013人、四國區ノ 2,737人、中國區ノ 2,569人、北陸區ノ 2,475人、東山區ノ 1,845人、東北區ノ 1,373人、最低キハ北海道ノ 336人ナリ。

【現住戶數】 大正七年末調査ノ現住戶數ハ 10,460,440戶ニシテ、此ノ戶數ト乙種現住人口トヲ以テ算出シタル 平均一戶ノ人口ハ 5.32人ナリ。此ノ比例數ヲ地方別ニ見ルニ、最高キハ東北區ノ 6.59人、之ニ次クハ北陸區ノ 5.57人及九州區ノ 5.56人ナリ、最低キハ近畿區ノ 4.87人ニシテ、關東區ノ 4.97人、中國區ノ 5.00人ナリ。之ヲ要スルニ平均一戶ノ人口ハ概シテ北ニ高ク 南ニ低ク(九州ハ破格)、大都會ヲ包有スル地ニ低ク、然ラサル地ニ高キカ如シ。

【占居狀態】 大正七年末調査ノ現住人口(甲種)ニ依リ、階級ヲ設ケテ市町村數ヲ見ルニ 2,001—5,000人ノ人口ヲ有スル町村最多ク總市町村數ノ 59.88%ヲ占ム、而シテ是等各階級市町村ニ占有スル人口ヲ算出シテ總數ニ對スル 分節比例ヲ求ムレハ 2,001—5,000階級最高クシテ 40.52%ニ當リ、5,001—10,000階級之ニ次テ 21.47%ニ當リ、2,000以下ノ總テヲ合セテ 6.09%ニ當レリ。故ニ本邦現時ノ人口ハ村落ニ中心ヲ有スルコト明カナレトモ、文化ノ進步ニ伴フ人口ノ都會集中ノ現象モ亦甚シク、明治二十六年ニ於ケル 50,001以上ノ人口ヲ有スル都會ノ占居人口ハ總人口ノ 7.86%ナリシカ、同三十一年ニハ 9.40%ト爲リテ 1.54%ヲ增シ、同三十六年ニハ 11.43%トナリテ 2.03%ヲ增シ、同四十一年ニハ13.31%ト爲リテ 1.88%ヲ增シ、大正二年ニハ 14.13%ト爲リテ 0.82%ヲ增シ、同七年ニハ 16.48%トナリテ 2.35%ヲ增シタルニ依リテモ知ラルヽナリ。

【都會人口】 大正七年末調査ノ市區人口ヲ五年前ナル 大正二年末ノ調査ニ比スレハ、人口 100,001以上ヲ有スル大都會ニ於テハ神戶市最モ增加著シク、京都市之ニ次キ、長崎市、金澤市ハ第三位ニ在リ、50,001—100,000ノ中都會ニ於テハ新潟市、濱松市最モ著シク、50,000以下ノ市區ハ其增加著シカラス、唯久留米市、奈良市アルノミ。

乙 人口ノ動態

【婚姻】 道府縣ニ本籍ヲ有スル者ノ大正七年中ノ婚姻ハ 503,286件ニシテ、前年ニ比シ 52,808件ヲ增加ス。之ヲ同年末人口 1000ニ比スレハ 8.88ニ當リ、前年ヨリ 0.88多シ。

本邦ノ婚姻步合ヲ見ルニ、明治四十一年ノ 9.32ヲ最高トシ、其ノ以前ハ高低常ナラス、其ノ以後ハ大正三年ノ 8.40ニ上昇シタルヲ除キ逐年低下セシカ、今年ハ稍著シク其ノ數ヲ增加セリ。今大正七年以前每數年平均ノ婚姻步合ヲ見ルニ、自明治二十九年至同三十八年間ノ平均步合ハ 8.61自明治四十一年至大正二年間ノ平均步合ハ 8.58ニシテ低下ノ狀況ヲ示セリ。尙之ヲ歐洲ノ諸國ニ見ルモ、近年一般ニ其低下シタルヲ見ル。即 1896年乃至 1908年及 1905年乃至 1913年ノ平均步合ヲ見ルニ、人口 1000ニ付獨逸ハ 8.2—7.8、英克蘭威爾斯ハ 7.9—7.6、佛蘭西ハ7.7—7.9、墺太利ハ 8.0—7.4、伊太利ハ 7.2—7.7、瑞西ハ 7.6—7.3、匈牙利ハ 8.6—8.9ニシテ匈牙利ヲ除ク外何レモ我國ヨリ低率ニシテ 而モ多クハ減少セルヲ見ル。大戰以來ノ狀態ヲ窺フニ、我國ハ 8.14(1915年)、7.83(1916年)、8.00(1917年)、8.88(1918年)、英克蘭威爾斯ハ 9.7(1915年)、7.5(1916年)、6.9(1917年)、佛蘭西ハ 2.2(1915年)、3.2(1916年)、4.8(1917年)、伊太利ハ 7.1(1914年)、5.1(1915年)、匈牙利ハ 3.1(1915年)、3.2(1916年) 等ニシテ、其ノ多クハ低下甚シ、惟フニ是大戰ノ影響ナランカ。

道府縣ニ現在スル者(內地人)ノ 婚姻ハ大正七年ニ於テハ 500,580件ニシテ、之カ人口步合ハ本籍人ノソレヨリ少シク高ク 8.99ナリ、之ヲ地方別ニ見レハ、沖繩縣ノ 16.30最高ク、東北區ノ 10.08、中國區ノ 9.45、九州區ノ 9.34、東海區ノ 9.17 北陸區ノ 9.04 等ハ高率ノ部ニ屬シ、北海道ノ 8.87、四國區ノ 8.79、東山區ノ 8.71、關東區ノ 8.41ヲ經テ、最低ハ近畿區ノ 7.84ナリ。更ニ之ヲ府縣別ニ細觀スレハ、岩手、宮城、秋田及山形等東北ノ各府縣ハ概シテ婚姻率高ク、宮崎、佐賀、大分、福岡及熊本等九州地方亦婚姻率高シ、大阪、長野、京都、東京、德島等近畿關東四國ニ屬スル各府縣及大都會ヲ包含スル府縣ハ概シテ一般ニ其ノ低キヲ見ル。

婚姻ヲ種類別ト作シ總數 1000ニ對スル割合ヲ見ルニ、大正七年ハ普通婚姻 913.3入夫婚姻 28.1壻養子緣組 58.6ニシテ前年ニ比シ、普通婚姻 3.3ヲ增シ、入夫婚姻 0.4ヲ減シ、壻養子緣組ハ 2.9ヲ減少セリ。既往ノ事實ニ就テ觀ルニ、普通婚姻ハ漸次增加シ、入夫

婚姻及壻養子緣組ハ減少ノ傾向ヲ有ス。又之ヲ地方別ニ見ルニ普通婚姻ノ割合ハ沖繩縣及九州地方ニ高ク東北地方ニ低ク恰モ婚姻歩合ト相反セルカ如シ。入夫婚姻ハ北陸、東山、東海、近畿地方ニ高ク、北海道、東北、九州、沖繩地方ニ低シ。壻養子緣組ハ東北、關東ニ高ク、九州、四國、沖繩ニ低シ。次ニ夫妻ノ婚姻年齢ヲ見ルニ、夫ハ二十五歳乃至三十歳ニ於テ婚姻スル者最多ク總數ノ 348%ヲ占メ、次ハ二十歳乃至二十五歳ノ者ニシテ 305%ナリ、又妻ハ二十歳乃至二十五歳者最高ク總數ノ 435%ニシテ、之ニ次クハ十五歳乃至二十歳ノ 259%ナリ。之ヲ既往ノ事實ニ通觀スレハ夫ノ婚姻年齢ハ二十五歳乃至三十歳ノ階級カ逐年增加シ、妻ハ二十歳乃至二十五歳ノ階級カ增加スルノ現象ヲ示ス。

【離婚】 大正七年ニ於ケル本籍人ノ離婚ハ 56,741件ニシテ前年ヨリ增加スルコト 657件、同年末人口 1000ニ付 1.00ニ當リ前年ヨリ 0.01ノ增加ヲ示ス。婚姻歩合ハ年ニ依リ高低アルニ拘ラス離婚歩合ハ年々一樣ニ低下セシカ今年ハ極メテ僅少ナレトモ增多ヲ見タリ。又婚姻數ニ對スル離婚數ノ割合ヲ見ルニ、婚姻 100ニ付離婚 11.3ニ當レリ。事案ヨリ各國制度ヲ異ニスルカ故ニ、之ヲ以テ直ニ歐洲諸國ニ比スルハ甚タ當ラスト雖モ試ニ最近數年間ノ平均率ヲ擧クレハ、匈牙利ハ 1.5、獨逸ハ 1.3、佛蘭西ハ 1.2、英克蘭威爾斯ハ 0.1、愛耳蘭ハ 0.002等ナリ。

次ニ離婚ヲ地方別ニ見ルニ、北陸、東北、中國地方ニ高ク、近畿、關東、東山地方ニ低ク、其ノ高低ノ狀婚姻歩合ト略一致シ、相互ニ弱キ交聯性ヲ有スト謂フヲ得ヘシ。

離婚ヲ種類別ト爲シ、總數 1000ニ對スル割合ヲ見ルニ、妻カ夫ノ家ヲ去ル離婚ハ 863.0、夫カ妻ノ家ヲ去ル離婚ハ 111.6離婚者雙方婚家ニ留マル離婚ハ 25.4ナリ。此ノ割合ト前ニ擧ケタル婚姻ノ種類別割合トヲ對照スルニ、普通婚姻ノ割合ハ妻カ夫ノ家ヲ去ル離婚ノ割合ヨリ高ク、入夫婚姻ノ割合ハ夫カ妻ノ家ヲ去ルノ割合ヨリ低シ。是入夫婚姻カ普通婚姻ヨリモ離婚ノ惡結果ニ陷ル者多キノ事實ヲ示ス。尙夫カ妻ノ家ヲ去ル離婚ノ割合ハ東北地方ニ高ク、九州地方ニ低シ。

又離婚者ノ夫婦關係繼續期間ヲ見ルニ、滿五年以下ノ者總數ノ 64.11%ヲ占ム、更ニ之ヲ一年別ト爲セハ、滿一年以下ノ者 17.90%滿一年以上二年以下ノ者 17.27%、滿二年以上三年以下ノ者 11.90%、滿三年以上四年以下ノ者 9.89%、滿四年以上五年以下ノ者 7.15%ニ當レリ。此ノ割合ヲ累年ニ就テ觀ルニ、高低常ナラサレトモ概シテ年月短キ者減少ノ傾向アルカ如シ。

【生産】 本籍人ノ生産ハ大正七年ニハ、1,823,481人ニシテ之ヲ同年末人口ニ比スレハ 1000ニ付 32.2ニ當ル。前年ノ同一比例ヨリ 0.5ヲ減少セリ、是ヲ明治四十二年乃至大正二年平均ノ 33.7ニ比スレハ減少ノ狀稍顯著ナリ。

本邦ノ生産歩合ハ上昇シ或ハ下降シ起伏常ナラスト雖、十九世紀ノ末期ヨリ殆ト凡テノ歐洲諸國ニ於テ、其ノ著シク下降シタルモノニ比スレハ、我國ハ尙未タ其ノ跡明カナラス。即 1886—1895年ノ平均生産ノ歩合ハ人口 1000ニ付匈牙利 42.5、墺太利 37.6、伊太利 36.6、獨逸 36.5、英克蘭威爾斯 30.9、佛蘭西 22.8、等ニシテ可ナリ、高率ナリシモ、二十世紀ノ初期 1908—1913年ノ平均生産歩合ハ匈牙利 36.0、伊太利 32.4、墺太利 31.9、獨逸 29.4英克蘭威爾斯 24.9、佛蘭西 19.5等ニシテ何レモ前率ニ比シ若干減少セリ。特ニ大戰勃發以來ハ頓ニ生産歩合下降シ、匈牙利ハ 1915年ニ 22.9、1916年ニ 15.2、英克蘭威爾斯ハ 1915年ニ 21.9、1916年ニ 20.9、1917年ニ 17.8、佛蘭西ハ 1915年ニ 11.3、1916年ニ 9.4、1917年ニ 10.4ノ低率ヲ示スニ至レリ。然ラハ本邦生産歩合ノ最近數年間ニ於テ下向ノ傾向ヲ示セルハ、果シテ此ノ風潮ニ從フモノナルカ今後大ニ注目スヘキ重要ナル現象ナリトス。

次ニ現在人ノ生産歩合ヲ見ルニ、人口 1000ニ付 32.2ニシテ、本籍人ノ歩合ト同一ナリ。此ノ生産歩合ヲ地方別ト爲セハ、北海道最高ク、次ハ東北地方ニ高ク、最低キハ沖繩ニシテ近畿、中國、九州地方之ニ次ク。即從來婚姻歩合ト生産歩合トノ間ニハ密接ナル交聯關係アリテ、婚姻歩合ノ高キ東北地方ハ生産歩合モ高ク、西南地方及大都會ヲ包有スル地方ハ共ニ低カリシカ今年ハ少シク異例ヲ示セリ。即婚姻歩合高キ中國、九州地方カ生産歩合極メテ低ク却テ婚姻歩合低キ關東、東山地方稍生産歩合高キヲ示セリ。生産ヲ男女ニ別テハ男 914,676人、女 877,302人ニシテ、女 100ニ對スル男ノ割合ハ 104.3ナリ。之ヲ歐洲諸國ニ比スルニ、其ノ割合西班牙ハ 109.8(1915年)、匈牙利ハ 105.9(1915年)、獨逸ハ 105.6(1914年)、伊太利ハ 105.1(1914年)、英克蘭威爾斯ハ 104.0(1915年)ニシテ概ネ生産男子ノ數女子ヲ超過シ、最近ニ至リテ其ノ超過ノ割合ヲ高メタリ。

生産ヲ身分別ニ見レハ、總數 100中嫡出子 91.2庶子及私生子 8.8ニシテ之ヲ既往ニ訊ヌルニ、明治四十三年ノ嫡出子 90.6庶子及私生子 9.4以來、漸次嫡出子ノ割合ヲ高メツヽアリ。又身分別男女ノ割合ハ何レモ男ノ數女ヲ超過スレトモ、特ニ嫡出子ニ於テ其ノ超過ノ割合高シ、即女 100ニ對スル男ノ數嫡出子 104.6庶子及私生子 100.6ナリ。又生産ノ身分別比例ヲ地方別ニ見ルニ靜岡、富山、長野、新潟ノ諸縣ハ嫡出子ノ割合高ク、大阪、香川、宮崎、高知等ハ其ノ割合低ク、特ニ北海道ノ低キハ特種ノ事情アルニ依ルモノナラン。

【死産】 大正七年ニ於ケル現在人ノ死産ハ 142,507ニシテ、之ヲ同年末人口ニ比スレハ 1000ニ付 25.1ナリ。之ヲ既往ニ比スレハ頗ル低下シ來レルモ、尙諸外國ニ比スレハ遙ニ高シ。即獨逸ハ 0.81(1914年)佛蘭西ハ 0.86(1913年)伊太利ハ 1.33(1915年)ナリ。是死産ヲ認ムル姙孕月數ノ差ノミニ之ヲ歸スコトヲ得サルヘシ。死産ヲ男女別ニ見レハ女 100ニ付男ハ 115.0ニ當リ、生産ノ場合ヨリモ男ノ割合頗ル高シ。然レトモ之ヲ獨逸ノ 126.9(1914年)、墺太利ノ 131.3(1913年)、佛蘭西ノ 135.1(1911年)ニ比スレハ、其ノ割合尙低シトス。而シテ我國ニ於テハ今年少シク女ニ對スル男ノ割合前年ニ比シ低下セルモ漸次男ノ超過割合ヲ高メツヽアル傾向アルニ反シ、歐洲諸國ニ於テハ漸次其ノ割合ヲ低メツヽアルハ注目スヘキ現象ナリ。又死産ハ公生子ヨリモ私生子ニ多キヲ常トス。即公生 100中生産 93.7死産 6.3ナルニ、私生ニアリテハ其ノ 100中生産 83.2死産 16.8ナリ。從テ死産 100中公生 77.7私生 22.3ヲ示ス。

【死亡】 大正七年ニ於ケル本籍人ノ死亡ハ 1,513,687人ニシテ、同年末人口 1000ニ付 26.7ナリ。此ノ歩合ヲ前年ノ同一比例ト比較スレハ 5.1高ク、即本年ハ死亡歩合極メテ增高セルヲ見ルヘシ。

本邦ノ死亡歩合ハ、最近ノ最高率明治四十二年ノ 21.9ヨリ年々低下シ來レルモ、大正三年ニ至リテ俄然上昇シ、翌年幾分下降シタレトモ、五年ニ至リテ再ヒ上昇シ、本年ハ特ニ異常ノ高率ヲ示セリ、歐洲諸國ニ於テハ、生産歩合ノ低下ト共ニ死亡歩合モ低下シ、自然增加率ノ增高シタル邦國少シトセス。即 1908年乃至 1913年ノ平均ヲ取レハ人口 1000ニ付丁抹ハ 13.2、諾威ハ 13.6、和蘭ハ 13.9、英克蘭威爾斯ハ 14.1、獨逸ハ 16.5、佛蘭西ハ 18.6、伊太利ハ 20.4、墺太利ハ 21.5、匈牙利ハ 24.6ナリ。而シテ最近ニハ獨逸 18.6(1914年)、佛蘭西 19.[illegible](1915年)、18.1(1916年)、15.6(1917年)、英克蘭威爾斯ハ 15.7(1915年)、14.4(1916年)、14.4(1917年)伊太利 20.4(1915年)等ナリ。

又大正七年ニ於ケル現在人ノ死亡ハ 1,493,162人ニシテ、人口 1000ニ付 26.83ニ當リ、本籍人ノ歩合ヨリ少シク高シ之ヲ地方別ニ見ルニ北陸區最高ク 30.58ニシテ、四國區ノ 28.83之ニ次キ、近畿區ノ 28.31、中國區ノ 27.66、東北區ノ 27.59、東山區ノ 27.52等ハ平均ヨリ高キ部ニ屬シ、北海道ノ 26.38、九州區ノ 25.86、關東區ノ 24.94、東海區ノ 24.69、沖繩縣ノ 20.38等ハ低キ地方ナリ。

死亡數ヲ男女ニ別テハ、大正七年ハ男 753,392人女 739,770人ニシテ、女 100ニ付男 101.8ナリ。之ヲ大正二年ノ 102.0同三年ノ 103.1同四年同五年ノ共ニ 103.5及同六年ノ 103.2ニ比スレハ低下シタルヲ見ル。此ノ死亡ヲ各性人口ニ比スレハ 1000ニ付男ハ 26.9女ハ 26.7ナリ。嘗テ明治三十七年以降一時女ノ死亡歩合少シク男ヨリ高カリシカ爾來一上一下シテ近來ニ至リ男少シク高シ。然レトモ大都會ヲ包有スル府縣及東山、東海及北陸地方ニ有リテハ女ノ割合高シ。

月別死亡ヲ一年平均一日ノ死亡 1000ニ付各月平均一日ノ死亡比例ト爲シテ見レハ六月最低ク六月以降急ニ增加シテ九月ニ至リ最高トナリ十月ヨリ再下降ス又六月以前ハ徐々ニ上昇シテ二月ニ至リ最高トナリ一月ヨリ下降ス。而シテ二月ニ於ケル冬ノ頂點ヨリモ九月ニ於ケル夏ノ山當ニ高シ。是例年ニ採ル月別死亡ノ狀態ナリ。大正七年ニ於テハ五月最モ低クソレヨリ以前ハ漸次上昇シ二月ニ至リ頂點ニ達シ一月ニハ稍下降ス又五月以後ニ於テハ五六七月ヲ經テ八月ニ夏ノ頂點ニ達シ九月ヨリ下降シ十一月ニハ俄然トシテ上昇シ其ノ程度異常ニ高シ十二月ニハ再ヒ下降セリト雖二月及八月ノ頂點ニ比スレハ未タ頗高ク例年ニ比シ極メテ異例ヲ示セリ是レ十一二月ノ候ニ於テ流行性感冒ノ猖獗カ此ノ因ヲ爲セシモノト見ルヘキカ如シ。

死亡者ヲ年齡別ニ作シ見ルニ、大正七年ハ五歳以下ノ死亡總數ノ三割六分弱ニ當リ、一歳以下ハ二割三分弱ニ當ル。各性死亡總數ニ對スル年齡ノ分節比例ヲ求メ男女ヲ比較スレハ、一歳未滿ハ男ノ比例高ク、二歳迄ハ男女等シク、二歳以上四十歳迄ハ女ノ比例高ク、四十歳以上七十五歳迄ハ再ヒ男ノ比例高ク、七十五歳以上ハ再ヒ女ノ比例高シ。幼者及老者ノ女ノ死亡高キコトハ、各國概ネ其ノ揆ヲ一ニスレト、少年青年壯年ニ於テ女ノ死亡男ヨリ高キハ、他國ニハ多ク其ノ例ヲ見サル所ナリ。

大正六年中ノ生産 1000ニ付一歳未滿者ノ乳兒死亡ハ 189ナリ。此ノ比例數ハ嘗テ低カリシモ、漸次增加シテ明治四十二年ニハ 166ノ高キニ達シ、再ヒ下降シ大正二年ニ至ル、同三年ヨリハ再ヒ上昇シ今年ニ及ヒテ未曾有ノ高率ヲ示スニ至レリ。是生産歩合ノ高低如何ニ依ルヘケレト、乳兒死亡ノ增加シタルハ疑ヲ容レサル所トス。而シテ男女ヲ比較スルニ、常ニ男ノ比例女ニ優リ、男ハ 198、女ハ 179ナリ、今地方別ニ之ヲ觀察スレハ、大阪、富山、青森、石川、秋田、福井、京都ノ各府縣ニ高ク、中國、四國、九州地方ニ低ク、生産率ト弱キ交聯性ヲ有ス。歐洲ニ於テハ十九世紀末期頃甚高キモノアリシカ漸次低下セリ。即英克蘭威爾斯(1915年)ハ男 123女 96、佛蘭西(1913年)ハ男 123女102、獨逸(1914年)ハ男 177女 149、墺太利(1913年)ハ男 204女 175、伊太利(1914年)ハ男 137女123、和蘭(1916年)ハ男 94女 74等ナリ。而シテ最モ高キハ匈牙利(1915年)ノ男 282女 245、最低ハアイランド(1915年)ノ男 71女 61ナリ。

死亡者ヲ其ノ原因別ニ作セハ、肺炎及氣管支肺炎ニ因リ死亡シタル者最多ク、實ニ二十萬人ヲ超ヘタリ。之ニ次クハ下痢及腸炎ニ因ル死亡者ニシテ年々十二萬人內外ヲ數ヘ今年ハ十四萬人以上

ニ出テタリ更ニ次ヲ肺結核トス。老衰ハ女ニ頗ル多ク、先天性弱質ハ男ニ多シ。急性傳染病中、腸窒扶斯ハ前年ヨリ少シク增加シ、人口一萬ニ付大正六年ハ 1.6ナリシモ、今年ハ 2.1ト爲リ、又虎列刺ハ前年ヨリ大ニ減少シ 0.0ニシテ、流行性感冒ハ前年ヨリ頗ル增加シ 12.5ヲ示ス。其ノ他麻疹、痘瘡ハ共ニ前年ヨリ減少セリ。而シテ今年特ニ肺炎及氣管支肺炎死亡者カ他ニ隔絶セル數ヲ示セルハ今年本邦ヲ襲擊セル流行性感冒ヨリ肺炎ヲ併發シ死亡セル者多カリシニ因ルヘシ。之ヲ歐洲諸國ニ比スルニ、我國死亡ノ主要原因ニシテ且年々增加ノ傾アル肺結核ハ、人口一萬ニ付獨逸ハ 12.3(1914年)佛蘭西ハ 17.6(1913年)英克蘭威爾斯ハ 16.6(1915年)伊太利ハ 9.3(1914年)白耳義ハ 9.3(1912年)ニ當リ、我國ハ 15.7(1917年)ナリ。

〔自然增加率〕 大正七年ニ於ケル本籍人ノ生產死亡ノ差、即自然增殖數ハ、309,794人ニシテ、人口 1000ニ付 5.5ニ當ル。之ヲ既往ニ比スレハ、明治ノ初年以來一高一低アルモ漸次增加シ來リ、大正二年ノ 13.8ニ於テ最高ヲ占ム。以後漸ク低下シ、大正五年ニ至リ明治三十九年以來見サル低率 11.3ヲ示シ、今年ノ 5.5ニ及フ。蓋シ生產率ノ低下、特ニ死亡率ノ增加ハ近年稀ナル率ナリシ爲ナリ。又現在人ニ就テ之ヲ見ルニ 5.76ニ當リ、本籍人ノソレヨリ稍高シ。

歐洲諸國ニ於テハ所謂生死併行遞減論ニ適ヒ、生死兩率共ニ若干ノ減少ヲ來セトモ、死亡率減少ノ程度大ナル爲、却テ自然增殖率ヲ增高セシメタル邦國少カラス。仍テ今 1908—1913年及 1896—1905年ノ平均ヲ見ルニ匈牙利ハ 11.4、11.3 伊太利ハ 12.0、10.8、和蘭ハ 14.1、10.5、西班牙ハ 9.3、7.3、英克蘭威爾斯ハ 10.8、11.8、獨逸ハ 13.0、14.6、埃太利ハ 10.4、11.5、佛蘭西ハ 0.9、1.4ナリ。

此ノ自然增殖率ヲ地方別ニ見レハ、北海道ノ 16.37ヲ最高トシ、中國ノ 1.71ヲ最低トス。

〔生命表〕 國民ノ生命ニ關スル研究ハ人口統計ノ一部ニ屬シ、歐米各國ハ國勢調査ノ結果ニ基キ、必ス之ニ關スル諸表ヲ公表シ居レリ。我國モ亦人口靜態調査ヲ基礎トシ、既ニ調査ヲ重ヌルコト三回ニ及ヘリ。其ノ應用方面ハ極テ廣ク、公衆ノ保健、衞生ヲ管掌スル行政官、技術官、人口統計研究者、醫師、社會學者、保險家、統計家及特ニ國民保健ノ改善ヲ念トスル者ニ對シ要用ナルハ勿論、損害賠償等法律上ノ目的及年金、恩給金、養老金等ノ計算ニハ缺クヘカラサルモノトス、本書ニ掲クルモノハ大正二年及明治四十一年ノ間ノ事實ニ依リ計算シタルモノナリ。

本表ハ各年齡(一歲未滿ハ日齡又ハ月齡別)ニ屬スル人口ニ就キ生存者、死亡者及其ノ死亡率並完全平均命數、折半命數、有限平均命數(六十歲限リ)ノ六項ヲ掲載ス。第一項ノ生存者トハ同一期ニ生レタル男女各十萬人ヲ假定シ各年齡每ニ死亡率ニ依リテ算出シタル死亡者ヲ控除シタル殘數ヲ謂フ。故ニ十萬人中ニ於テハ男子ハ百二歲女子ハ百三歲ニ達スル者ナキヲ示フ。然シ事實我國民ニ百二三歲以上ノ生存者アルハ我國民男女共一歲未滿生存者ノ數假定ノ十萬人ヲ超過スルニヨル。之レ一ツノ指數表トモ看做スヘキモノナリ。第二項ノ死亡者トハ右假定人口十萬人中ノ各年期ニ於ケル一年間ノ死亡數ヲ意味スルモノニシテ事實死亡者ノヨリ以上多數ナルハ亦前ノ理ニ因ル。第三項ノ死亡率トハ男女各年齡ニ於ケル生存者一人ニ對スル當該年齡ノ死亡割合ヲ謂フ。第四項ノ完全平均命數トハ各年齡人口ノ將來生存スヘキ豫定年數ヲ謂フ。例之二歲ノ男子ハ今後五十三年ヲ平均生存シ得ヘキ豫定トナルカ故ニ享年ハ平均五十五歲ナリトノコトナリ。又十歲ノ女子ハ今後四十八年生存シ得ヘキ豫定ナルカ故ニ五十八歲ニテ死亡スルモノナルコトヲ示ス。但シ實際ニハ夭折スル者アリ長壽ヲ保ツ者アリテ各人ニ就テハ命數一定セスト雖此ニ示ス命數ハ所謂確率論ヨリ推算シタル標準命數ニ外ナラス。第五項ノ折半命數ハ各年齡生存者ノ半數トナルヘキ迄ノ年數ニシテ同年齡生存者ノ半數トナリタル年數ハ所謂其ノ同年齡者ノ平均命數ト考ヘタル時代ノ標準命數ニシテ又一ツノ參考トナルヘキモノタルヲ信シテ玆ニ加ヘタルモノナリ。第六項ノ六十歲限リ有限平均命數ハ六十歲ヲ限度トシタル一種ノ平均命數ニシテ就中十五歲乃至六十歲(又ハ六十五歲)ヲ以テ國民ノ活動スヘキ生產年齡ト看做シ、十五歲—六十歲限平均命數ヲ以テ國民ノ生產命數トナスモノアリ。

今死亡率ニ就キ前回調査ノ結果ト比較シ著明ナル部分ノミヲ叙述スルコト次ノ如シ。第一、一歲未滿ノ幼兒死亡率ノ增高、即局第一表(明治十八年乃至二十三年ノ事實ニ依ル調査)ニ在リテハ老年階級ニ比スレハ七十九歲乃至八十歲ノ間ニアリシモノ、局第二表(明治三十二年乃至三十六年)ニ在リテハ八十歲乃至八十一歲ノ間ニ位シ、局第三表ニ至リテ八十一歲乃至八十二歲ノ間ニ位スルニ至ル如ク漸次增高シ來ル。更ニ之ヲ日齡月齡等ニ因リテ死亡率ヲ求ムルトキハ生後三ケ月位マテハ却テ前回ニ比シ死亡率低下シタレトモ以後烈シク上昇ス。從ツテ命數ニ於テモソノ總平均價値零歲ノ命數男子ハ前調査ニ比シ僅ニ延長シタルモ女子ニ於テハ却テ短縮セリ。是其ノ前例ヲ見サル現象ナリ。蓋シ出生率ノ增加ニ依ルコト亦少カラストスルモ乳兒死亡ノ減少セサルコトヲ明ニ認メ得。第二、青年死亡率ノ增大、局第一表ニ比シ局第二表ハ男子二十歲乃至二十二歲ノ間女子十四歲乃至二十三歲ノ間ニ於テ却テ高ク、局第二表ニ比シ局第三表ハ男子十三歲乃至二十三歲ノ間、女子七歲乃至二十七歲ノ間ニ於テ却テ高シ。是主タル原因奈邊ニアルヤハ推斷ヲ許サスト雖、結核性死亡、自然淘汰等與テ力アルモノナラン。第三、老年階級ニ於テノ死亡率上昇、是ハ經驗數不足ニ加フルニ幾多ノ推算ヲ經タルモノナレバ今姑ク不問ニ附ス。第四、女子ノ男子ニ比シ生產年齡者ノ死亡狀況ノ不良、三歲乃至四十二歲間ハ女子ノ死亡率男子ヨリ高キコトハ每回同シケレトモ男女ノ隔差益甚シク十七八歲ニ於テ特ニ然リトス。爲メニ命數ノ總價値トモ稱スヘキ零歲ニ於テハ前調査ヨリモ却テ低キ結果ヲ得タリ又男女ヲ比較スルモ幼少年ノ女子(一歲乃至十四歲)ハ常ニ男子ヨリ命數大ナリシモノ今回ハ短縮シタルヲ見ル。

之ニ由テ觀レハ局第二表時ト局第三表時トニ於テ死亡率ノ高低ハ最幼年ニ於テ增高シ、少年ニ至リテ少シク減少シ、青年再ヒ增大シ、高年ニ至リテ減少セリ。又男女ノ狀況ハ最幼年ニ於テ男高ク少年ヨリ青年、壯年ヲ經テ初老ニ至ル迄女高ク、以後男、女ヲ凌ク。次ニ完全平均命數ハ一般ニハ延長セリト謂フヲ得ヘケンモ、零歲ノ女ハ却テ低ク且女ハ常ニ男ヲ凌キタルモノ一歲乃至十四歲ニ於テハ却テ反對ナリ。

更ニ之ヲ諸外國ノ生命表ト比較スレハ青年時ノ死亡率異常ニ高ク、特ニ女子ニ於テ甚シク他國ニ見サル一波瀾ナリ。又乳兒死亡率ノ高キハ以前ニ於テハ餘リニ明白ナラサリシモノ、外國ニ於テハ減少スルニ反シ、我國ニ於テハ增高スルノ結果益顯著トナレリ。

〔渡航地及目的別外國旅券下附人員〕 大正七年中ニ外國旅券ヲ下附シタル者 6.2萬餘人、內露領亞細亞地方最多ク 2.3萬餘人、其ノ他北米合衆國ノ 1.2萬人、伯剌西爾ノ 5千餘人、比律賓群島ノ 4千人弱、布哇ノ 3千餘人、支那ノ 3千餘人等多キ地方ナリ。之ヲ目的ニ依リ區別スレハ農業、漁業、公用ノ增加著シク移民ハ減少セリ。

丙 在外本邦人及在留外國人

〔在外本邦人〕 大正八年六月末調査ノ在外本邦人總數ハ 58萬餘人ニシテ之ヲ前年ニ比スレバ 9.4萬餘人ヲ增加セリ。總數ニ對スル五大洲別ノ分節比例ハ、亞細亞洲 442.41‰最多ク、北亞米利加洲ノ 244.65‰之ニ次キ太洋洲及「フイリツピン」群島ノ 228.39‰南米ノ 68.07‰、歐洲ノ 16.40‰、亞弗利加洲 0.08‰頓ナリ、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ增多セルハ亞細亞洲ノ 53.65‰歐洲ノ 14.83‰南米ノ 4.97‰ニシテ、太洋洲ハ 43.07‰北米ハ 29.93‰ヲ減少セリ。

五大洲別分節比例ヲ更ニ細別スレハ、滿洲ノ 307.76‰第一位ヲ占メ、前年ヨリ 32.93‰ヲ增加ス。其ノ內關東州ノ 95.16‰、鐵道沿線附屬地ノ 82.62‰等其ノ主ナルモノナリ、第二位ハ北米合衆國ノ 212.63‰ニシテ、內最多ク邦人ノ在留スルハ「カリホルニア」州ノ 152.13‰ナリ。「シアトル」ノ 12.71‰「ニューヨーク」ノ 6.88‰ハ「カリホルニア」州ノ都市以外ニハ本邦人ノ多キ都市ナリトス。太洋洲中布哇ノ 194.10‰ハ第三位ニシテ「オアーフ」島最多ク、布哇島、「マウイ」島等之ニ次グ。亞細亞洲中滿洲ニ次テ多ク本邦人ノ在留スルハ支那本部ニシテ總數ノ 54.33‰ニ當リ、上海、天津、漢口、濟南等ハ主ナル地方ナリ。其ノ他青島ノ 46.06‰海峽殖民地ノ 14.07‰等ヲ多キ地方ト爲ス。

歐洲ニハ他洲ニ比シ本邦人ノ在留スル者少ク、露西亞ノ 8,295人最多ク、英吉利ノ 977人(內倫敦 808人)佛蘭西ノ 237人、瑞西ノ 79人ニシテ其ノ他ノ諸國ニハ伊太利 35人、西班牙 15人、和蘭 8人、葡萄牙 1人ナリ。

「オセアニア」洲中、濠洲ニ於テハ 3,742人ノ在留者ヲ見。前年ヨリ 347人ヲ增加セリ。又南洋群島ハ 1,791人ニシテ、前年ヨリ 643人ヲ增シ「フイリツピン」群島ハ 1,203人ヲ減少シタル 9,567人在留ス。又南米ノ諸國ハ移住モ盛ニシテ伯剌西爾ハ前年ヨリ 9,586人ヲ增シタル 31,349人、秘露ハ 5,910人ニシテ 870人ヲ減少ス。莫里比亞 851人、亞爾然丁 1,580人、智利 1,969人ニシテ、以上ハ前年ヨリ夫々孰レモ增加セリ。

在外本邦人ヲ男女別ニスレハ、男 362,652人女 226,133人ニシテ女 100ニ付男 160.4ナリ。之ヲ前年ノ 163.0ニ比スレハ 2.6ヲ減シ、前々年即大正六年ノ 174.4ニ比スレハ 11.4ヲ減シ、漸次女ノ數ヲ增加スルノ傾向アリ。蓋シ是ハ家族的出稼人ノ增加セルニ因ルモノナランカ。今之ヲ出稼先別ニ觀察スレハ、亞細亞州ハ女 100人ニ付男 130.6ニシテ、男ノ割合他ニ比シテ低キハ家族的移住或ハ單獨歸人ノ出稼多キニ依ルモノナランカ。歐洲ハ 140.0「オセアニア」洲ハ 155.4亞米利加洲ハ 226.6ナリ。

在外本邦人ヲ職業別ニ觀察スルニ、大體ニ於テ東洋各地ニ在ル者ハ商工業及雜業ニ從事スル者多ク、米國、布哇方面ニ在ル者ハ農業、歐洲ニ在ル者ハ公務自由業ニ從事スル者多キハ例年ト異ルコトナシ。今各性ノ總數ニ對スル職業大別ノ分節比例ヲ算出スレハ、露領亞細亞ニ於テハ商業者最多ク、總數ノ 191‰ヲ占メ、滿洲方面即安東、龍井村、營口、遼陽、奉天、鐵嶺、鄭家屯、長春、哈爾賓ノ各地及其ノ附近ニ於テハ商業及交通業、最多ク 302‰ヲ占メ、關東洲ニ在リテハ雜業多ク 382‰、北京天津及其ノ附近ニ於テハ商業多ク 377‰、青島地方ニ在リテモ商業者多ク 391‰、支那本部ニ在リテモ商業最多ニシテ、芝罘、濟南及其ノ附近ハ 435‰上海南京及其ノ附近ハ 339‰、漢口、長沙、重慶及其ノ附近ハ 436‰ニシテ、南支那即廣東、厦門地方ハ 384‰ヲ占ム。英領香港ハ

商業者多ク 622‰ニ當ル、運輸ハ工業ニ從事スル者多ク、馬來半島ハ農業ニ從事スル者多數ナリ。是皆各地ニ於ケル本邦人ノ經濟狀態ヲ語ルモノト云フヘシ。比律賓群島ハ農業ニ從事スル者第一位ヲ占メ 563‰ニ當リ、其ノ他土木建築業及商業ニ從事スル者少カラス。布哇ハ農業最多ク 516‰ヲ占メ、濠洲ハ鑛業及工業ニ從事スル者多ク 487‰ニシテ農業者ハ 377‰ニ當ル。女ノ職業ハ多クハ男ノ職業ニ隨伴スレトモ、別ニ其ノ他ノ有業者トシテ揭クル者少ナカラス。

【在留外國人】 大正八年末調査ノ本邦在留外國人戶數ハ 6,541戶、人口男 13,198人女 7,044人計 20,242人ニシテ內地人約三千人ニ付外國人一人ノ割合ナリ。此ノ外國人ハ大正六年ニ最多數トナリ、前大正七年ニハ 1萬 9千餘ニ減シタリシカ今年ハ又 2萬ヲ越ヘタリ。外國人員數ヲ府縣別ニ見ルニ神奈川縣最多ク 7,091人ニシテ兵庫縣ノ 5,062人之ニ次キ、東京府ノ 2,893人長崎縣ノ 1,311人大阪府ノ 1,290人ハ多ク在留スル地方ナリ。奈良縣 5人、沖繩縣 6人、山形縣、埼玉縣、岐阜縣、三重縣ハ各 7人栃木縣、島根縣ハ各 9人ニシテ在留者少キ地方ナリ。之ヲ國別スレハ支那人最多ク 12,294人（男 8,861人女 3,433人）、英國人ハ之ニ次テ多ク男 1,274人女 1,060人、北米合衆國人ハ男 934人女 975人ニシテ第三位ナリ。露國人ハ 1,102人、獨逸人 619人、佛國人 464人、葡萄牙人 237人、瑞西人 145人等在留セリ。

更ニ之ヲ職業別ニ見ル時ハ商業者最多ク、自由業之ニ次キ、漁業及製鹽、農業ニ從事スル者最少シ。

IV. 農　業

【作付反別】 大正八年ニ於ケル稻ノ作付反別ハ 3,104,611町歩ニシテ此ノ中 2,967,882町歩（95.60%）ハ水稻、136,730町歩（4.04%）ハ陸稻ニ屬ス、之ヲ前年ニ比スレハ水稻 7,939町歩、陸稻 3,463町歩合計 11,401町歩ヲ增加セリ。更ニ之ヲ五年前ニ比シ其ノ百ニ對スル割合ヲ見ルニ水稻ハ 102.0%陸稻ハ 111.0%ニシテ、陸稻ノ增加率甚タ高キヲ見ル。斯ク陸稻作付反別ノ增加水稻ノ夫ニ比シ著シキハ近年米價騰貴ノ爲ニ畑ヲ利用シ稻ヲ作付スル者增加シタルニ因ルナラン歟。水稻ノ中ニハ粳、糯ノ別アリ、粳ハ 2,711,950町歩（91.38%）ヲ占メ、糯ハ僅ニ 255,932町歩（8.62%）ニ過キス。之ヲ既往ニ比スルニ糯ノ作付反別ノ增加カ粳ノ作付反別ニ比シ遲々タルノ狀況ニ在ルハ、糯ハ其ノ需要ノ範圍狹ク必需品ト冒ハンヨリハ寧ロ奢侈品ニ近キモノナルカ故ナルヘシ。

大正八年ニ於ケル麥類ノ作付反別ハ大麥 534,279町歩、稞麥 646,362町歩、小麥 548,507町歩ニシテ、稞麥ノ反別最モ多シ。之ヲ既往ニ比スルニ其ノ最モ多ク作付シタルハ大正二年、三年ノ交ニシテ其ノ後大麥、稞麥ハ共ニ漸次減少シ、本年ハ前年ニ比シ稍增加シタレ共未タ既往ノ作付反別ニ及ハサルコト遠シ。即チ五年前ヲ百トシタル本年ノ指數ヲ求ムレハ、大麥 86.66%、稞麥 88.78%ニシテ共ニ一割以上ノ減少ヲ示セリ。然ルニ獨リ小麥ノミハ逐年其ノ反別增加シ今ヤ大麥ノ作付反別ヲ淩駕スルニ至レリ、惟フニ小麥ノ作付反別ノ逐年增加セルハ近年其ノ用途擴大シタルニ由ルモノナルヘク、大麥、稞麥ノ反別減少シタルハ其ノ原因詳ナラスト雖近年綠肥ノ裏作多キヲ加フルト農家ノ生活狀態徒ニ向上シ麥食ニ代フルニ米食ヲ以テスル者漸ク多キヲ加フルトニ依ルコト亦其ノ一原因ナラストセス。

米麥以外ノ主要農產物ノ作付反別ハ大正八年ノ材料ナキヲ以テ大正七年ノ事實ヲ揭ク。而シテ之ヲ大正七年ニ終ル最近五年平均ノ作付反別ニ比スルニ大豆、小豆、粟、稗、黍、蕎麥、玉蜀黍、甘藷、蘿蔔、菜種、葉煙草ノ十種ハ悉ク平均作付反別ヨリ減少シタルニ反シ獨リ馬鈴薯、桑、茶ノミハ平均作付反別ヨリ增加セリ。如斯主要農產物各種作付反別ノ齊シク減少シタルハ如何ナル理由ニ基クヤ明ナラスト雖要スルニ耕作利潤ノ厚薄ニ原因セルヤ疑フヘカラス。

上記主要農作物ノ作付反別ヲ地方別ニ見ルニ各地方ノ耕地面積ニ廣狹ノ不同アルカ故ニ素ヨリ正シキ比較ヲ爲スヲ得サレ共稻ハ新潟縣最モ多ク茨城、千葉、福岡、兵庫、愛知ノ各縣相次テ多ク、最モ少キハ沖繩、山梨、東京等ナリ。大麥ハ關東地方最モ多ク、就中埼玉、茨城、千葉、栃木、群馬ノ諸縣ハ著シク多シ、反之四國、九州地方ハ概シテ少ナク就中香川ノ 44町歩高知ノ 1,652町歩等ハ最モ少ナキモノニ屬ス、而シテ多キモノト雖 8,000町歩ニ充タサルナリ。稞麥ハ大麥ト反對ニ中國、四國、九州地方最モ多ク東北、北陸、關東地方ハ最モ少シ、即チ熊本、廣島、山口、福岡、鹿兒島等ハ多キ地方ニシテ山形、秋田、新潟、宮城等ハ最モ少ナキ地方ニ屬ス。小麥ハ茨城縣最モ多ク福岡、群馬、熊本ノ諸縣之ニ亞キ福井、鳥取ノ二縣最モ少シ。大豆及小豆ハ北海道、茨城、熊本、岩手等多キモノニ屬シ、和歌山、京都、東京等最モ少シ。其ノ他粟、稗、黍外八種ノ作付反別ニ就キテハ前年記述セシ所ト大差ナキヲ以テ之ヲ略ス。

【收穫高】 大正八年ニ於ケル米ノ收穫高ハ 6,082萬石ニシテ內粳米 5,447萬石、糯米 478萬石、陸米 157萬石ニシテ各種共ニ明治十年以來未タ嘗テ見サル大豐作ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ粳米 534萬石、糯米 43萬石、陸米 35萬石、合計 612萬石ノ增收ニ當ル、又之ヲ最近五ケ年ノ平均收穫高ニ比スレハ 450萬石以上ノ增收ナリ。此ノ收穫高ヲ稻ノ作付反別ト比較スルニ一反歩ニ付粳米ハ 2石 1升、糯米 1石 8斗 7升、陸米 1石 1斗 5升ニシテ米總體ノ收穫ハ 1石 9斗 6升ニ當レリ。既ニ述ヘシカ如ク八年ノ收穫高ハ空前ノ增收ナリシヲ以テ其ノ一反當リ平均ノ收穫高モ增加スルハ當然ノコトニシテ之ヲ五年前ト比較スルニ其ノ 100ニ對スル指數粳米 103.6、糯米 106.3、陸米 118.6ニ當レリ、如斯八年ハ非常ノ增收ナリシニモ不拘米價ノ騰貴甚シキハ如何ナル理由ニ因ルヤ人口ノ增加ニ因ルヤ將又輸出入關係ニ原因スルヤ詳ナラス。

此ノ一反當平均ノ收穫高ヲ地方別ニ見ルニ其ノ最モ多キハ奈良縣ノ 2石 6斗 8升、香川縣 2石 6斗、佐賀縣 2石5斗、大阪府 2石4斗 9升等ニシテ此ノ外全國平均ヨリ以上增收ノ地方ハ十六地方アリ、而シテ最モ少キヲ沖繩縣ノ 9斗 5升、山梨縣ノ 1石 1斗 1升、北海道ノ 1石 2斗 1升等ナリトス、前述ノ如ク全國總額ニ於テハ大正八年ハ空前ノ豐作ナリシト雖之ヲ地方別ニ見ルトキハ必スシモ增收ノ地方ノミニアラサルナリ、即チ之ヲ前年ニ比スルニ其ノ最モ著シキ增收ヲ示シタルハ高知ノ 5斗 1升、愛媛ノ 5斗、香川大分ノ共ニ 4斗9升、岡山ノ 4斗 8升等ニシテ最モ著シキ減收ヲ示シタルハ山梨ノ 1石 1斗 8升、愛知ノ 7斗 2升、兵庫ノ 4斗等ナリトス。

大正八年ニ於ケル麥ノ收穫高ハ大麥 984萬石、稞麥 762萬石、小麥 636萬石ニシテ米ノ如ク稀ニ見ル增收ニアラスト雖亦必スシモ凶作ニアラサルナリ。之ヲ前年ニ比スレハ大麥ハ 147萬石ノ增收ヲ示シタルモ稞麥ハ 16萬石、小麥ハ 7萬石ノ減收ヲ示シタリ、而シテ之ヲ最近五年平均ノ收穫高ニ比スレハ大麥ハ 46萬石、小麥ハ 60萬石ノ增收ニシテ稞麥ハ 26萬石ノ減收ニ當レリ、即チ大正八年ニ於テハ稞麥ノミ平年作ヨリ減收ナリシト云フコトヲ得ヘシ。此等麥ノ一反當リ收穫ヲ地方別ニ見ルニ其ノ最多額ナルハ大麥ハ埼玉ノ 2石 6斗 1升最モ多ク宮城ノ 2石 3斗 9升之ニ亞キ東京ノ 2石 3斗 6升、茨城ノ 2石 2斗 8升、神奈川ノ 2石 2斗 1升等相次テ多ク、沖繩ノ 3斗 9升、秋田ノ 8斗 3升、鹿兒島ノ 8斗 4升等最モ少シ。稞麥ハ岩手ノ 1石 9斗 4升最モ多ク、群馬ノ 1石 8斗 7升、埼玉ノ 1石 8斗 3升、宮城ノ 1石 7斗 8升、栃木ノ 1石 7斗 4升等相次テ多ク而シテ少ナキハ秋田ノ 5斗、沖繩ノ 5斗 3升、鹿兒島ノ 6斗 5升、新潟ノ 7斗等ナリトス。又小麥ハ宮城ノ 1石 6斗 香川ノ 1石 4斗 8升、廣島ノ 1石 4斗 6升、埼玉 1石 4斗 2升、奈良ノ 1石 3斗 8升等多キモノニシテ最モ少ナキハ沖繩ノ 2斗 7升、秋田ノ 5斗 3升、鹿兒島ノ 6斗 4升等ナリ、以上地方別ノ收穫歩合ヲ前年ニ比スルニ大麥ノ增收ナル地方ハ三十七府縣ニシテ就中茨城ノ 6斗 2升、埼玉ノ 6斗 1升、石川ノ 5斗 4升、福井ノ 4斗 7升、長野ノ 3斗 9升等ハ其ノ最ナルモノナリ、反之減少ノ地方ハ僅ニ十地方ニ過キスシテ其ノ減少歩合著シカラス。稞麥ハ增收二十四府縣、減少二十三府縣ニシテ前年ニ比シ增減相半ハス。小麥ハ增收二十一府縣、減收二十六府縣ニシテ減收地方ノ五縣モ多キニ不拘其ノ總收穫高ニ於テ前年ト大差ナキハ必竟增收歩合ノ高カリシニ因ルナランカ。

次ニ大正七年ノ事實ニ依リテ米麥以外ノ農產物ノ收穫高ヲ見ルニ大豆ハ 345萬石ニシテ其ノ作付一反當リハ 8斗ナリ、之ヲ前年ニ比スレハ收穫高ノ 15萬石ヲ減シ從テ一反當リモ 3升ヲ減シタリ此ノ收穫高ヲ地方別ニ見ルニ大阪最モ豐收ニシテ一反當リ 1石 3斗7升ニシテ、次ハ奈良ノ 1石 2斗 1升、和歌山ノ 1石 1斗 1升亦高ク高知ノ 3斗 [illegible]升、沖繩ノ 4斗 6升最低シ。小豆ノ收穫高ハ 81萬石ニシテ其ノ作付一反當リハ 6斗 8升ナリ前年ニ比シ、6萬石ノ減收ヲ示シ、從テ一反當リモ亦前年ヨリ 3升ノ減收ヲ爲セリ。粟ハ總收穫高 184萬石ニシテ前年ヨリ 4萬石ノ減收ナリ總額ニ於テハ如斯減收シタレ共其ノ一反當リ收穫高ハ却テ 1升增收ノ 1石 2斗 1升ヲ獲タリ之レ前年ヨリ豐收ナリシ所以ナリ、然ルニ總收穫高ノ減シタルハ作付反別ノ減シタルニ外ナラサルナリ。稗ハ總收穫高 76萬石ニシテ一反當リ 1石 5斗 1升ヲ穫前年ノ一反當リ收穫高ト同一ナリ、唯作付反別ノ減シタル結果總收穫高ニ於テ 2萬石ノ減少ヲ示シタルノミ。黍ハ 31萬石ニシテ一反當リ 1石 1斗 4升ナリ前年ニ比シ 9萬石ノ減收ニシテ其ノ一反當リモ亦 7升ヲ減シタリ。蕎麥ハ總收穫高 85萬石ニシテ一反當 6斗 3升ナリ前年ヨリ不作ニシテ一反當リ 3升ヲ減シタリ。玉蜀黍ハ總收穫 65萬石ニシテ其ノ一反當リハ 1石 1斗 3升ナリ之モ亦前年ニ比シ減收ナリ。甘藷ノ總收穫高ハ 10億 9千餘萬貫ニシテ其ノ一反當リ 350貫ナリ前年ニ比シ一反當リ 28貫ノ增收ナリ。甘藷ノ一反當リ最モ多キ地方ハ沖繩縣 554貫 山梨縣ノ 462貫 靜岡縣ノ 401貫 長崎縣ノ 407貫 愛知縣ノ 395貫 鹿兒島縣ノ 362貫 宮城縣ノ 357貫等ニシテ山形ノ 138貫最少キ地方トス。馬鈴薯ハ總收穫 324百萬貫ニシテ其ノ一反當リ收穫高ハ 245貫前年ニ比シテ 38貫ヲ減シ從テ總收穫高ニ於テ 2,164萬貫ノ減收ヲ示セリ。菜種ノ收穫高ハ 86萬石ニシテ一反當リ 7斗 4升ニシテ前年ヨリ減少セシコト 4升從テ總收穫高ニ於テ 7萬石ノ減收ヲ爲セリ。葉煙草ハ總收穫高 965萬貫ニシテ其ノ一反當リハ 39貫ナリ之ヲ前年ニ比スルニ總額ニ於テ 131萬貫ノ減少ヲ示シタリ、然レトモ是作柄ノ甚シク凶作ナリシカ爲ニアラスシテ其ノ作付反別ニ於テ著シク減少シタルカ爲ナラスンハアラサルナリ。

以上ノ農產物ニ就テ各多產地ヲ擧クレハ粳米ハ新潟縣最多ク全國總產額ノ約 51%ヲ占メ兵庫縣之ニ次キ約 44%其他福岡縣ノ約 43%千葉縣及愛知縣ノ約 35%岡山縣ノ 33%等ヲ多シト爲ス。糯米

モ亦新潟縣最モ多ク、全國總產額ノ約 57%ヲ占メ之ニ次ハ福岡縣ノ約 44%福島縣ノ約 37%佐賀縣 34%兵庫縣及石川縣ノ約34%等ヲ多產地ト爲ス、陸米ハ關東ト九州トニ多ク茨城縣ノ 237%栃木縣ノ 152%鹿兒島縣ノ 93%千葉縣ノ 82%等多產地タリ。大麥ハ關東ト東北トニ多產シ即チ埼玉縣ノ約 121%茨城縣ノ約 105%千葉縣ノ約 72%栃木縣ノ 64%群馬縣ノ約 61%宮城縣ノ約 52%岩手縣ノ 50%等是ナリ。稞麥ハ主トシテ西南地方ニ多ク產シ鹿兒島縣ノ約 74%熊本縣ノ約 70%愛媛縣ノ約 69%香川縣ノ 61%兵庫縣ノ約 59%等ヲ最多ト爲ス。小麥ハ茨城縣ノ約 104%ヲ最多トシ埼玉縣ノ 62%之ニ次キ其他福岡縣ノ 57%群馬縣ノ 56%等多產地ニ屬ス。大豆ハ北海道最多ク全國總額ノ約 124%ニ當リ其ノ他岩手縣ノ約 90%茨城縣ノ約 70%埼玉縣ノ約 51%熊本縣ノ約 46%等ヲ多產地ト爲ス、小豆ハ北海道殆ト全國產額ノ 359%ヲ占メ其ノ他ハ著明ナル多產地ナク遙ニ下リテ熊本縣ノ約 61%新潟縣ノ 40%ヲ多シト爲ス。栗ハ熊本縣ノ約 259%最モ多ク全國產額ノ四分一以上ヲ占メ鹿兒島縣ノ約 187%之ニ次キ岩手縣ノ約 49%長崎縣ノ約 45%等ヲ最多ト爲シ主トシテ九州ニ多產ス。稗ハ岩手縣ノ約 422%最モ多ク青森縣ノ 161%之ニ次キ其他北海道ノ約 74%栃木縣ノ 68%岐阜縣ノ約 51%等ヲ多シト爲シ東北地方ヲ多產地ト爲ス。黍ハ過半北海道ニ產シ全國總產額ニ對スル 511%ニ當リ之ニ次クハ愛知縣ノ約 65%岐阜縣ノ 39%ナリトス。蕎麥ハ北海道ノ約 154%鹿兒島縣ノ約 105%ヲ最多トシ此ノ外ニ著シキ多產地ヲ見ス。玉蜀黍モ亦北海道ノ 456%ヲ最多トシ殆ト全國ノ 二分ノ一ニ近ク之ニ次クハ愛媛縣ノ約 71%熊本縣ノ 58%等ナリ。甘藷ハ沖繩縣ノ約 165%鹿兒島縣ノ約 153%ヲ最多トシ、長崎縣ノ 91%熊本縣ノ約 59%等九州ニ多產ス、之ニ次クハ關東ニシテ最多キハ千葉縣ノ約 51%ナリ。馬鈴薯ハ北海道ニ多產シ 652%ヲ占メ之ニ次クハ青森縣ノ約 37%ナルノミ。菜種ハ福岡縣ノ 151%ヲ最多トシ北海道ノ約 141%之ニ次キ其ノ他鹿兒島縣ノ約 110%三重縣ノ約 85%滋賀縣ノ 69%等ヲ多產地トス葉煙草ハ栃木縣ノ約 278%ヲ最多トシ、次ニ茨城縣ノ約 227%鹿兒島縣ノ 153%德島縣ノ約 139%福島縣ノ約 91%神奈川縣ノ 76%等ヲ多產地ト爲ス。

【養蠶】 大正八年中ニ於ケル養蠶戶數ハ 1,942,252戶ニシテ之ヲ既往ニ比スレハ年々著シク增加シ大正四年ヲ 100トシタル本年ノ指數ハ 116.1ニ當リ前年ニ比シ 31,458戶ヲ增加セリ。此等養蠶戶數ヲ春夏秋ノ三期ニ分テハ 1,597,740戶(82.3%)ハ春蠶、596,092戶(30.7%)ハ夏蠶、1,595,617戶(82.2%)ハ秋蠶ナリ。玆ニ所謂養蠶戶數トハ春、夏、秋蠶ヲ通シテ若シクハ春蠶、秋蠶ヲ又ハ春蠶ノミヲ兎モ角一期ニテモ養蠶ヲ爲シタル戶數ノ謂ニシテ從テ春夏秋三期ノ飼養戶數合計ハ上記ノ養蠶戶數ト一致セス 即チ養蠶戶數中 17.7%ハ春蠶ヲ飼養セサリシモノ、69.3%ハ夏蠶ヲ飼養セサリシモノ 17.85%ハ秋蠶ヲ飼養セサリシモノニ屬ス。

此ノ各期飼養戶數ノ比例ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ春蠶ハ 1.6%ヲ減シ、夏蠶ハ 1.4%ヲ增シ、秋蠶ハ 2.1%ヲ增加セリ。由之觀是夏蠶ノミ稍減シタリト雖他ハ悉ク增加シ、殊ニ秋蠶ノ增加率最モ著シク此ノ現象ハ當ニ前年ニ於テノミ然ルニアラス 逐年如斯狀況ニアリテ今ヤ殆春蠶ノ蠶ヲ壓セントスルノ狀勢ニシテ秋蠶ノ 前途亦多望ト言フヘケン歟。

此等養蠶戶數ヲ地方別ニ見ルニ總養蠶戶數ニ於テハ 長野縣最モ多ク全國總養蠶戶數ノ 84%ヲ占メ愛知、埼玉、岐阜、福島、群馬ノ諸縣相次テ多キモノニ屬ス。

春蠶戶數ハ亦長野縣ヲ第一位トシ其ノ戶數 12萬餘ニ及ヒ次テ愛知、埼玉、群馬、岐阜ノ諸縣ヲ多シト爲ス、夏蠶モ長野縣最モ多ク全國總養蠶戶數ノ 151%ヲ占メ愛知、福島、滋賀、三重ノ諸縣次テ多シ。秋蠶ハ長野縣ヲ第一位トシ其ノ飼養戶數ハ全國ノ 86%ヲ占メ最モ盛ナリ之ニ次ヲ愛知、埼玉、群馬、岐阜、福島ノ諸縣トス、要之ニ春夏秋ノ三期ヲ通シ全國最モ養蠶ノ盛ナルハ 中部地方、關東地方ナリト云フコトヲ得ヘシ。

大正八年中ニ於ケル蠶種掃立枚數ハ總數6,294,736枚ニシテ之ヲ既往ニ比スルニ逐年增加ノ趨勢ヲ有シ五年前ナル大正三年ヲ 100トシタル八年ノ指數ハ 123.6ニ當リ前年ヨリ增加スルコト 110,263枚ナリ歐洲大戰開始以來其ノ 增加率特ニ著シキヲ示セルハ蓋シ生糸價格ノ昂騰セシニ因ルナラン。此ノ掃立蠶種ヲ 類別スレハ春蠶 42.45%夏蠶 11.04%秋蠶 46.51%ニ當リ秋蠶ノ掃立枚數最モ多シ之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ春蠶ノミハ 2.81%ノ減少ヲ示シタルノ外夏蠶ハ 0.75%秋蠶ハ 2.06%ノ增加ヲ示セリ蠶種掃立總枚數ヲ地方別ニ見ルニ其ノ 最モ多キハ長野縣ノ 919,542枚ニシテ全國總數ノ 150%ヲ占メ次テ多キハ群馬縣ノ 597,920枚(98%)埼玉縣ノ 475,400枚(76%)愛知縣ノ 424,349枚(67%)山梨縣ノ 344,016(55%)等亦多キモノニ屬ス。

又春蠶ノ掃立枚數ハ長野縣ノ 326,699枚群馬縣ノ 271,362枚山梨縣ノ 170,800枚等最モ多ク此等三縣ノ掃立枚數ハ全國ノ 288%ヲ占メ居レリ。夏蠶ノ掃立ハ長野縣最モ優勢ニシテ殆ント全國ノ三割五分ヲ占メ其ノ枚數ハ 244,968枚ノ多キニ上レリ、之ヨリ遙ニ下リテ愛知縣ノ 87,805枚高知縣ノ 51,517枚岐阜縣ノ40,649枚等亦多キモノニ屬スト雖長野縣ニ及ハサルヤ遠シ。秋蠶モ亦長野縣ヲ第一位トシ總枚數 347,875枚ヲ算シ次テ多キハ群馬縣ノ 311,445 枚ニシテ他ノ春蠶及夏蠶ノ掃立枚數ニ 於テハ長野縣ノ比ニアラスト雖秋蠶ノミハ二縣相伯仲ノ間ニアルハ蓋シ注目ニ値ス 之ニ次テ多キ地方ハ埼玉縣ノ 234,636枚、愛知縣ノ 200,826枚、山梨縣

161,648ノ枚等ニシテ其他十萬以上掃立ノ地方五縣アリ。

次ニ繭ノ收獲高ヲ見ルニ大正八年中ノ總產額ハ 7,221,990石此ノ價格 771,408,595圓ニシテ共ニ既往ニ於テ嘗テ見サル所ノ巨額ヲ產セリ是レ掃立枚數ノ增加ニ因ルハ勿論ナリト雖然モ亦八年ハ近年稀ニ見ル豐收ナリシコトヲ記セサルヘカラス 即チ掃立枚數一枚平均ノ收獲高ハ春蠶 1.34石夏蠶 1.05石秋蠶 1.00石ニシテ何レモ既往ニ比シ增收ナラサルハナク殊ニ 春蠶ノ如キハ前年ニ比シ、0.07石以上ノ豐收ナリ加フルニ大正八年生糸ノ 價格非常ニ騰貴シ從テ繭ノ價格モ高價ナリシヲ以テ 產額ノ增加ト 價格ノ騰貴ト 相俟テ遂ニ總額七億圓以上ト云フ未曾有ノ收入ヲ得ルニ至リタルモノトス。

全國中掃立枚數一枚ニ付キ收獲高ノ 最モ多キ地方ハ春蠶ハ京都府ノ 2.18石兵庫縣ノ 2.03石鳥取縣ノ 1.97石、奈良縣ノ 1.93石、高知縣ノ 1.90石等ニシテ其ノ最モ少ナカリシハ沖繩縣ノ 0.64石、富山縣ノ 0.84石等ナリ。夏蠶ノ收穫最モ多キハ三重縣ノ 1.66石ニシテ其他島根縣ノ 1.50石、奈良縣ノ 1.46石、鳥取縣ノ 1.42石等亦多キ地方ニ屬ス。秋蠶ノ收穫高ハ京都府ノ 1.64石最モ多ク次テ島根縣ノ 1.59石、三重縣ノ 1.44石、青森縣ノ 1.43石、宮崎縣ノ 1.41石、滋賀縣ノ 1.38石、大阪府ノ 1.35石ト相次第シ、其他一石以上收穫ノ地方ハ 25地方ニシテ一石以下ノ地方ハ 12地方ニ過キス此ノ中最モ少ナキヲ沖繩ノ 0.14石ト爲ス。

【果實】 梅ハ大正七年ニ於テ 38萬石ヲ產シ、前年ヨリ增收セリ、神奈川縣ニ最多ク產シ全國總產額ノ 102%ヲ占メ之ニ次クハ鹿兒島縣ノ約 54%ニシテ其ノ他ノ多產地ハ埼玉、和歌山、靜岡ノ諸縣トス。桃ノ產額ハ 1,240萬貫ノ產ニシテ前年ニ比シ 100萬貫減收セリ。岡山縣ノ全國產額ノ約 114%ヲ最多トシ、大阪府ノ約 100%之ニ次キ、其他神奈川、福島、群馬、香川ノ諸縣ニ多產ス。梨ノ產額ハ 2,782萬貫ニシテ是亦前年ヨリ 161萬貫減收セリ全國中靜岡縣ノ產額最モ多ク總數ノ約 109%ヲ占メ次テ愛媛、茨城、新潟、奈良ノ諸縣ニ多產ス。生柿ノ產額ハ約 3,023萬貫ニシテ前年ヨリ 1,506萬貫減收ス、其ノ產額最モ多キハ新潟縣ニシテ全國ノ約 87%ヲ占メ其他長野、福島、福岡、宮城ノ諸縣ニ多產ス、干柿ノ產額ヲ見ルニ 159萬貫ニシテ前年ヨリモ 94萬貫減收ス、苹果ノ產額ハ 669萬貫ニシテ前年ニ比シ約三分ノ一ヲ減セリ、其ノ收穫高最モ多キハ青森縣ニシテ 全國總產額ノ約 572%ヲ占メ北海道ハ之ニ次ケトモ約 187%ニシテ遙ニ少ク秋田、長野、山形、次テ多產ス、葡萄ノ產額ハ 567萬貫ニシテ逐年增收ノ傾向アリ 全國中產額ノ最モ多キハ山梨縣ニシテ全國產額ノ約 185%ニ當リ大阪府ノ約 82%之ニ次キ其他長野、廣島、岡山ノ諸縣相次テ多產ス。柑橘類中密柑ノ產額ハ 4,092萬貫ニシテ前年ノ減收ニ反シ著シキ增收ヲ示シタリ而シテ和歌山縣ハ全國產額ノ約 293%ヲ產シ靜岡縣ノ約 172%之ニ次キ大阪府ノ 80%其他神奈川、愛媛、廣島ノ諸縣ニ多產ス。〔チーブルオレンヂ〕ノ產額ヲ見ルニ總額 265萬貫ニシテ前年ニ比シ稍增收セリ而シテ 廣島縣ハ全國產額ノ約 167%ヲ占メ和歌山ノ約 141%愛知縣ノ約 119%等多額ナルモノニ屬ス其他靜岡、德島、福岡、鹿兒島、香川諸縣亦多ク產セリ、夏橙ノ產額ハ 1,121萬貫ニシテ是亦前年ヨリ減收セリ全國中產額ノ最モ多キハ愛媛縣ノ約 223%ニシテ其他山口、和歌山、大阪ノ三府縣之ニ次テ多產ス。

V. 家畜及家禽

【家畜】 大正七年末現在ノ家畜ハ牛、1,307,120頭、馬 1,510.626頭、山羊 91,777頭、綿羊 4,546頭、豚 398,155頭ニシテ之ヲ大正七年末ニ於ケル現住人口ニ比スルニ、其ノ 1000ニ對シ牛 22.50、馬 26.00、山羊 1.58、綿羊 0.08豚 6.85ニ當レリ。是等家畜ノ人口比例數ヲ大戰前ノ歐洲三國ニ就テ 見ルニ英吉利 (1,913年) ハ牛 156.17、馬 38.30、山羊不詳、綿羊 467.95、豚57.42ニ當リ、佛蘭西(1,912年)ハ牛 370.89、馬 81.26、山羊 35.52、綿羊 415.33、豚 174.12ニ當リ、獨逸(1.912年)ハ牛 305.11、馬 68.38、山羊 51.56、綿羊 87.71、豚 331.44ニ當レリ。之ヲ本邦ニ比スルニ、英吉利ノ馬頭數ノミ稍近キモ、其ノ他ハ總テ彼此格段ノ差 アルヲ見ル、殊ニ佛蘭西及獨逸ノ牛、獨逸ノ豚、英吉利及佛蘭西ノ綿羊ノ如キハ 到底同日ヲ以テ論スヘキモノニアラス。況ンヤ右三國ノ事實ハ我國ニ比シ 六年又ハ七年前ノ古キ調査ナルニ於テオヤ。如斯ハ本邦畜產ノ前途甚タ遠シト謂ハサルヘカラス。是等家畜ノ大正二年末現在ノ 各畜頭數ヲ 100ト爲シタル本年ノ指數ヲ求ムルニ、牛ハ 94.12馬ハ 95.48山羊ハ 102.56、綿羊ハ 154.31、豚ハ 128.44ニ當レリ。之ニ由リテ各家畜一年ノ平均ノ增減歩合ヲ算出スルニ馬ハ 0.90%牛ハ 1.18%ヲ減シ、山羊ハ 0.51%綿羊ハ 10.86%豚ハ 5.69%ヲ增加セリ。又上記本年ノ各家畜比例數ヲ前年ノ同一比例數ニ比スルニ馬ハ 3.14山羊ハ 20.02低ク、牛ハ 0.20綿羊ハ 45.96豚ハ 12.31高シ、而シテ馬ハ當ニ比例數ニ於テノミナラス、絕對數ニ於テモ亦 71,499ノ減少ヲ示セリ。斯ノ如ク主要家畜ノ減少セル所以ハ、實際ニ畜產飼養ノ不振ナルニモ拘ラス、之カ消費ノ增加スルモノアルカ爲カ、將又統計調査ノ方法適當ナラスシテ 眞實ヲ現ハサヽルカ爲カ何レニモセヨ等閑ニ附スヘカラサル現象ナリトス。

【家禽】 大正七年末現在ノ家禽ハ鷄 25,026,692羽、鶩 405,682羽ナリ。之ヲ同年末ニ於ケル現住人口ニ比スルニ人口 1000ニ付鷄 430.85鶩 6.98ニ當ル。此ノ比例數ヲ前年ノ同一比例數ニ對照

スルニ鶏ハ 16.93低ク鶩ハ 0.31高シ。又是等家禽ノ大正二年末ノ現在數ヲ 100ト爲シタル指數ヲ求ムレハ鶏ハ 130.67鶩ハ 121.77ニ當レリ之ニ由リテ各家禽一年平均ノ增減歩合ヲ算出スルニ鶏ハ 6.13%鶩ハ 4.35%ヲ增加シタル割合ナリ。故ニ家禽ハ前年ニ比シ鶏ノミ稍減少シタレトモ、大體ニ於テハ增加ノ傾向ニ有リト云フコトヲ得ヘシ。

【地方別家畜及家禽】 大正七年末現在ノ家畜及家禽ヲ地方別ニ見ルニ、牛ハ中國地方最多ク即チ廣島縣ノ約 95千頭、岡山縣ノ 86千頭島根縣ノ約 68千頭山口縣ノ約 65千頭等之ナリ、之ニ次クハ九州地方ニシテ鹿兒島縣ハ約 74千頭長崎縣ハ 71千頭 大分縣ハ約 62千頭熊本縣モ亦 62千頭福岡縣ハ約 47千頭ヲ有シ、沖繩縣ハ約 36千頭ノ多數ヲ有セリ、其他近畿地方ニ於テ兵庫縣ノ 87千頭京都府及大阪府ノ約 30千頭等ヲ最モ多シト爲シ、四國地方ニ於愛媛縣ノ約 49千頭香川縣ノ 34千頭亦多キ地方ニ屬シ東海道地方ニ於テハ三重縣約 35千頭等多キモノニ屬セリ。馬ハ北海道ノ約 191千頭ヲ最多トシ、東北地方之ニ次キ就中岩手縣ノ約 82千頭、福島縣ノ約 74千頭、秋田縣ノ 56千頭、宮城縣ノ 54千頭 青森縣ノ 53千頭等ハ其ノ最ナルモノナリ次テ多キハ九州地方ニシテ、鹿兒島縣ハ約 105千頭、熊本縣ハ約 90千頭、宮崎縣ハ 65千頭、福岡縣ハ 42千頭、大分縣ハ 38千頭ヲ有シ、沖繩縣モ約 33千頭アリ、其ノ他關東地方中茨城縣ノ約 55千頭、栃木縣ノ 52千頭、千葉縣ノ 40千頭亦多キ地方ニ屬セリ。山羊ハ沖繩縣ノ約 58千頭殆ト大部分ヲ占メ、之ニ次クハ鹿兒島縣ノ 14千頭、長崎縣ノ約 8千頭、長野縣ノ約 2千頭等ニシテ他ハ總テ 1千頭以下ナリ。緬羊ハ栃木縣ノ 7百頭、鹿兒島縣ノ 6百頭等ヲ最多トス。豚ハ沖繩縣ノ約 99千頭鹿兒島縣ノ 53千頭ヲ最多トシ、進ニ下リテ神奈川縣ノ 25千頭、茨城縣ノ 23千頭、千葉縣ノ約 21千頭等次テ多ク、北陸及東山地方ハ最モ少シ。鶏ハ九州地方ニ最モ多ク、即チ鹿兒島縣ノ約 166萬羽、福岡縣ノ約 84萬羽、長崎縣ノ約 68萬羽、熊本縣ノ約 58萬羽、宮崎縣ノ約 57萬羽等最多トシ、次テ多キハ關東地方ニシテ、千葉縣ハ 189萬羽、茨城縣ハ約 130萬羽、埼玉縣ハ約 78萬羽ヲ有ス、東北地方モ亦多ク北海道ハ約 108萬羽、秋田縣ハ 79萬羽、福島縣ハ約 62萬羽、宮城縣ハ53萬羽アリ。其ノ他愛知縣ノ 153萬羽、兵庫縣ノ約 65萬羽、靜岡縣ノ約 60萬羽、長野縣ノ 57萬羽、新潟縣ノ約 59萬羽、岡山縣ノ約 49萬羽等ヲ多シト爲ス。鶩ハ關東ニ最多ク、千葉縣ハ約 50千羽、埼玉縣ハ約 24千羽、茨城縣ハ 13千羽アリ、近畿之ニ次テ多ク、大阪府ハ 54千羽、京都府ハ 16千羽アリ、其ノ他新潟縣ノ約 24千羽、鹿兒島滋賀ノ二縣共ニ 15千羽、茨城、宮城ノ二縣共ニ 13千羽山形及福岡二縣ノ約 12千羽、秋田ノ 11千羽等ヲ多キモノト爲ス。

【牛】 大正七年末現在ニ於ケル牛ニ就キ觀察スルニ、牝 900,863頭、牡 406,257頭ニシテ、牝 100ニ付牡 45.10ニ當ル。上記歐洲三國ノ事實ニ依レハ、獨逸ハ牝百ニ付牡 84.41ニ當リ牡少ナケレトモ、佛蘭西ハ此ノ比例 102.77英吉利ハ 152.47ニシテ共ニ牡多シ。本邦牛畜ノ牡甚タ少キ所以ノモノハ一ハ食用牛ノ飼養甚タ振ハサルト他ハ牡ハ主トシテ繁殖用ノミニ使用シ農業用等ニ使用スルモノ少ナキカ故ナルヘク之ヲ我國ニ於ケル畜牛飼養ノ一特徴ト見ルヲ得ン歟。而シテ此ノ牝牡ノ比例ヲ既往ニ對照スルニ、近クハ年々低下スルモノヽ如ク既ニ前年ニ比シテ 1.61低ク大正二年ニ比シテハ 6.17ノ低下ヲ示セリ。是一面ニハ食用ノ爲屠殺スルモノ多キヲ加フルニモ拘ラス、蕃殖之ニ伴ハサルト、他ノ一面ニハ酪農漸ク發達シ、乳牛ノ飼養增多スルトニ由ルモノナラン。大正七年末現在ノ牛ヲ種類別スレハ、内國種 876,324頭、雜種 412,208頭、外國種 18,588頭ニシテ、之ヲ分節比例ト爲セハ、内國種 67.04%雜種31.54%外國種 1.42%ニ當ル。之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ、内國種ハ 0.03%外國種ハ 0.17%高ク雜種ハ 0.20%低シ。又之ヲ大正二年ノ同一比例ニ比スルニ、内國種 2.78%外國種ハ 0.46%高ク、雜種ハ 2.32%低シ。即チ前年迄ハ各種類共增減區々ナリシカ大正七年ニ至リテハ雜種ヲ除クノ外齊シク增加シ就中外國種ノ增加著シ。大正七年末現在ノ種牡牛ハ 5,936頭ナリ。嘗テ大正四年迄ハ年々增加ノ傾向ナリシカ以後漸次減少シ本年ハ前年ニ比シ減シタルコト 34頭ナリ。此ノ種牡牛ヲ種類別分節比例ト爲セハ内國種 50.91%雜種 14.67%外國種 34.42%ニ當リ、之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ内國種ハ 2.20%ヲ增シ、雜種ハ 1.49%外國種ハ 0.91%ヲ減シタリ。又大正七年末現在ノ乳牛ハ 52,503頭ニシテ前年ニ比シ 2,570頭ヲ減シタリ。本年ニ入リテ著シク減少シタルハ是偶然ノ事實ナルカ、將タ何等カ基ク所アル現象カ尙攷フヘシ。

次ニ牛ノ動態ヲ見ルニ、大正七年中ノ產牛數ハ牝 109,298頭牡 98,593頭計 207,891頭ニシテ、之ヲ同年末現在牛ノ總數ニ比スルニ、100ニ付 15.90ニ當リ、前年ニ比シ 1.14高ク、又之ヲ同年末ノ牝牛數ニ比スレハ 100ニ付 23.08ニ當リ、前年ニ比シ 1.43高シ。然レハ產牛比例ハ稍上昇ノ傾向アリト見ルヘキカ。而シテ大正七年中ノ斃牛數ハ 12,761頭屠牛數 226,108頭ニシテ、之ヲ同年末現在牛ノ總數ニ比スルニ、100ニ付斃牛 0.98屠牛 17.30計 18.28ニ當リ、產牛比例ヲ超ユルコト 2.38ナリ。斯ノ如キハ既往ノ各年概ネ皆相似タル現象ナリトス。

【馬】 大正七年末現在ノ馬ニ就キ觀察スルニ牝 856,756頭牡 653,870頭ニシテ牝 100ニ付牡 76.32ニ當ル。之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ牡ノ數 1.87ヲ減シタリ。此等ノ馬ヲ種類別スレハ内國產 626,674頭、雜種 18,987頭、外國種 17,200頭其他 47,761頭ニシテ之ヲ分節比例ト爲セハ(其ノ他ヲ除ク)内國種 42.84%雜種55.98%外國種 1.18%ニ當リ、前年ノ同一比例ニ比シ内國種 4.56%ヲ減シ雜種 4.47%外國種ハ前年ト同シク 0.09%ヲ增セリ、僅ニ一年間ニシテ内國種ト雜種トニ斯ノ如キ相反スル現象ヲ生スルハ果シテ何ニ原因スルカ今之ヲ詳ニセス、殊ニ牛ニ於ケルヨリモ其ノ差大ナルハ一層注目ニ値ス。大正七年末現在ノ種牡馬ハ 4,998頭ニシテ、本年モ亦前年ヨリ 204頭ヲ減セリ。本年ノ種牡馬ヲ種類別分節比例ト爲セハ内國種 1.28%雜種 70%外國種 54.02%ニシテ之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ内國種 0.20%外國種 1.66%ヲ增シ、雜種 1.86%ヲ減シタリ。次ニ馬ノ動態ヲ見ルニ、大正七年中ノ產馬數ハ牝 59,591頭、牡 54,230頭、計 113,821頭ニシテ之ヲ同年末現在馬ノ總數ニ比スルニ、100ニ付 7.53ニ當リ、前年ニ比シ 0.25高ク、又之ヲ同年末牝馬數ニ比スルニ、100ニ付 13.29ニ當リ前年ニ比シ 0.13高シ。之ヲ既往ニ徵スルニ產馬比例ハ一高一低アリ其ノ歸趨明ラカナラサリシカ最近ニ至リ稍增加ノ趨勢ニ轉ヘルカ如シ。而シテ大正七年中ノ斃馬數ハ 33,191頭屠馬數ハ 86,800頭ニシテ、之ヲ年末現在馬ノ總數ニ比スルニ 100ニ付斃馬 2.20屠馬 5.75計 7.95ニ當リ前年ノ同一比例ニ比シ斃馬 0.04屠馬 0.66低ク斃馬屠馬ノ計ハ產馬比例ヨリ高キコト 0.42ナリ。即知ル馬モ亦本年ノ動態ハ減少ヲ示セシコトヲ。

【牛乳】 大正七年末現在ノ搾乳場ハ 5,269箇所ニシテ、之ニ飼養スル成牛乳牛ハ 42,035頭ナリ。此ノ搾乳場ニ於テ大正七年中ニ搾取セル乳量ハ 336,195石ニシテ、其ノ價格ハ 13,896,117圓トス。此ノ事實ニ依リ成牛乳牛ノ平均三分一カ泌乳期ニ在ルモノトスレハ一頭ノ平均一日泌乳量ハ 6升 6合ニ當リ、一搾乳場ノ一日平均搾取乳量ハ 1斗 7升 5合ニ當レリ此ノ數字ニシテ果シテ信シ得ルモノトスレハ本邦酪農業ノ規模ノ小ナルコト知ルヘキナリ。

【屠畜】 大正七年末現在ノ屠場ハ 526箇所ニシテ、前年ヨリ增加スルコト 3箇所ナリ。此ノ屠場ニ於テ食用ノ目的ヲ以テ屠殺ヤ　　牛 215,869頭、犢 10,239頭、馬 86,800頭、豚327,074頭ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ豚ノミ 81,303頭增加シ、他ハ總テ減少セリ。即牛ハ 50,915頭、犢ハ 327頭、馬ハ13,258頭ヲ減セリ。大正七年中ニ發生セル家畜傳染病ハ、炭疽牛 136頭、馬 66頭氣腫牛 172頭(内三頭疑似症)假性皮疽馬 2頭、豚コレラ 373頭、豚羅斯疫 3頭、狂犬病犬 1,046頭(内 17頭疑似症)牛 9頭、馬 11頭、豚 5頭、猫 1頭ナリ。

VI. 山林及狩獵

【森及原野】 大正七年末森林ノ總反別ハ 1,878萬町ニシテ、之ヲ全國ノ總面積ニ比スレハ 48.71%ニ當ル。又原野ノ總反別ハ 351萬町ニシテ、總面積ノ 9.10%ニ當レリ。斯ノ如ク森林ニ富メル邦國果シテ何處ニカアル。試ミニ總面積ニ對スル森林面積ノ割合ヲ外國ニ見ルニ、瑞典(1911年)52.69%、芬蘭(1911年)50.72%ハ歐洲ニ比ナキ所ニシテ我邦ヨリ稍ヤ多ク其ノ他墺太利(1912年)32.61%歐洲、西亞(1887年)32.59%、獨逸(1900年)25.89%、匈牙利(1912年)27.54%、南米ノ智利(1913年) 23.81%、白耳義(1895年) 20.00%、佛蘭西 (1912年)18.67%、伊太利(1913年) 15.92%、英領印度(1911—12年)13.12%、和蘭(1912年)7.97%、西班牙(1912年)9.63%、丁抹(1912年)8.55%、英虞蘭威耳斯(1913年)5.05%等何レモ我邦ヨリ遙ニ下位ニアリ。北米合衆國(1910年) ノ廣漠タル地モ森林ハ僅ニ 28.56%ニ過キス、斯ク詮シ來レハ本邦ノ如ク森林ニ富メルハ蓋シ稀ナリ。惟フニ本邦ノ森林ハ大正七年ノ調査ニ於テ立木地ニ限リタレトモ、而モ因襲ノ久シキ地目トシテ森林ト稱スルモノヽ中ニハ今尙無立木地ヲモ包含セスト謂フ能ハス、其ノ雜木林ヲ包含スルコト勿論ニシテ、時ニハ磊々タル急峻ノ崔嵬地モ亦森林面積中ニ算セラルヽノ奇觀ナキニアラス。

大正七年末ノ森林反別ヲ其ノ所有者ニ依リテ分テハ、御料林 6.94%、國有林 38.80%、公有林 15.41%、社寺有林 0.59%、私有林 38.26%ニ當ル、此ノ分節比例ヲ明治四十一年度末ニ就テ見ルニ、御料林ハ 9.49%、國有林ハ 53.00%、公有林ハ、10.08%、社寺有林ハ 0.41%、私有林ハ 27.02%ナリキ。此ノ兩比例ヲ比較スルニ最減少シタルハ國有林ニシテ、御料林ノ減少ハ國有林ノ如ク甚シカラス、最增加シタルハ私有林ニシテ、公有林モ社寺有林モ亦多少增加シタリ。斯ノ如キハ國有林、御料林ニ整理行ハレタルコトモ重キ原因ナリ。

森林ノ反別ヲ地方別ニ見ルニ、御料林ハ其ノ約 676‰ハ北海道ニ存シ、120‰ハ長野縣ニ在リ、其ノ他靜岡縣ニ 63‰、岐阜縣ニ 39‰、愛知縣ニ 22‰、群馬縣ニ 19‰、山梨縣ニ 16‰アルヲ多シト爲ス。國有林モ亦北海道ニ多ク存シ總反別ノ 436‰ヲ占ム、而シテ福島縣ノ 61‰、岩手縣ノ 58‰、青森縣ノ 57‰、秋田縣ノ54‰、山形縣ノ 51‰等其ノ多キモノニ屬セリ。公有林モ亦北海道最多ク約 174‰ニ當リ、岐阜縣及長野縣ハ共ニ 67‰之ニ次キ、山梨縣ハ 57‰、兵庫縣ハ 47‰、京都府ハ 40‰、福島縣ハ 39‰ニ當リ、其ノ多キモノニ屬セリ。社寺有林ノ最多キハ兵庫縣ノ 68‰ニシテ、滋賀縣ノ 59‰之ニ次キ、靜岡縣ノ 53‰、島根縣ノ 47‰、岐阜縣及岡山縣ノ共ニ 45‰、京都府及長野縣ノ共ニ 42‰、福井縣ノ 40‰等其ノ多キモノニ屬ス。私有林ハ全國ニ布置スレトモ、而モ尙多クノ不同アリ、福島縣ノ 48‰最多ク、北海道ノ 47

%之ニ次キ、岩手縣及廣島縣ノ共ニ 43%、岐阜縣ノ 42%、島根縣ノ 40%、高知縣ノ 36%、靜岡縣ノ 35%、兵庫縣ノ 32%、和歌山縣ノ 31%等其ノ多キモノタリ。又原野ハ北海道最多ク全國總反別ノ 154%ニ當リ、秋田縣ハ 74%、岩手縣ハ 68%、福島縣ハ 61%、長野縣ハ 56%、青森縣ハ 33%、廣島縣ハ 32%、福井縣ハ 30%、岐阜縣ハ 29%ニ當レリ。即森林モ原野モ北海道最之ニ富ミ之ニ次クモノハ東北地方及信飛地方ニシテ、近畿以西亦少カラサルモ其ノ存スルモノヽ多クハ私有若クハ公有ナリトス。

【保安林】 大正七年末ノ保安林ハ總體 310,295箇所ニシテ、其ノ面積 1,474,524町ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ 18,687箇所 43,618町ヲ增セリ。又之ヲ大正二年度末ニ比シ其ノ 100ニ對スル指數ヲ求ムルニ、箇所ハ 130.2面積ハ 124.3ニ當レリ。管テハ面積ノ增加著シク、近年ニ至リ寧ロ箇所ノ增加旺ンナル趨勢ヲ示セシカ前年ハ反テ箇所多ク增加セスシテ面積ノ增加大ナルヲ見シモ、本年ハ箇所又大ニ增加セリ。保安林ヲ其ノ所有者ニ依リテ分テハ、箇所ハ總箇所ニ對シ御料林 0.19%、國有林 1.67%、公有林 13.72%、社寺有林 2.29%、私有林 82.13%ニ當リ、面積ハ總面積ニ對シ御料林 0.77%、國有林 48.70%、公有林 32.27%、社寺有林 0.63%、私有林 17.63%ニ當レリ。之ニ由テ觀レハ箇所トシテハ私有林最多ク、公有林之ニ次キ、面積ニ於テハ國有林最多ク、公有林之ニ次キ、私有林更ニ之ニ次ク。惟フニ私有林ハ其ノ性質上人寳ニ近キモノ多ク、從テ土砂扞止等ノ必要アル部分多カルヘク、爲ニ保安林ニ編入セラレタル箇所多キモ、何レモ小區域ニ止リテ反別少ナク、國有林ハ人寳ニ遠キモノ多キタケニ箇所ハ多カラサレトモ其ノ反別廣シ、公有林ハ國有林ト私有林トノ中間ノ性質ヲ帶フルカ故ニ、箇所トシテハ私有林ニ次キ、面積トシテハ國有林ニ次キ共ニ第二位タリ。

保安林ノ箇所ヲ其ノ種類ニ依リテ分チ分節比例ヲ算出スレハ、土砂扞止林最多ク 53.58%ヲ占メ、水源涵養林之ニ次キ 21.41%ニ當レリ、而シテ其ノ他ハ四分ノ一ヲ多キモノヨリ列記スレハ魚附林 6.60%、水害防備林 4.33%、防風林 3.58%、潮害防備林 3.45%、飛砂防止林 3.12%、風致林 2.48%、頽雪防止林 1.20%、墜石防止林 0.13%、航行目標林 0.07%、公衆衞生林 0.05%トス。上記最多ノ保安林タル土砂扞止林ノ總數中 82.86%ハ私有林ニ屬シ、水源涵養林ノ 83.70%モ亦私有林ニ屬セリ、併シナカラ之ヲ面積ニ就テ見レハ、土砂扞止林ノ總面積中 45.48%ハ公有林ニシテ 28.33%ハ國有林、25.47%ハ私有林ニ屬シ、又水源涵養林中 64.55%ハ國有林、23.43%ハ公有林ニシテ、10.47%ノミ私有林ナリ。

保安林ノ箇所ヲ地方別ニ見レハ、岡山縣最多ク全國總數ノ約 178%ヲ占メ岐阜縣ノ 94%福井縣ノ 90%長野縣ノ 60%之ニ次キ其ノ他群馬縣ノ 48%廣島縣ノ 43%石川縣ノ 36%富山縣ノ 33%等ヲ多シト爲ス。若シ夫之ヲ面積ニ就テ見レハ、北海道ノ全國總數ニ對スル 276%ヲ最多トシ、岐阜縣ノ 111%之ニ次キ山形縣ノ 64%、長野縣ノ 56%、富山縣ノ 53%、山梨縣ノ 46%、岡山縣ノ 42%新潟縣ノ 39%ナルヲ多シト爲ス。保安林ノ箇所ハ其ノ地形上必要ナル地ヲ擇フコト勿論ナレトモ、之ヲ面積ヨリ見レハ、自然ニ森林多キ地方ニ保安林ニ編入セラレタル反別廣キヲ見ルナリ。

【森林植栽】 大正七年中ニ植栽ヲ行ヒタル森林ハ 108,584町ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 4,749町ヲ減シタリ。是近年植栽反別ノ著シク多カリシニ依ル反動トシテ前々年ニ大ニ減シ、前年又減少シ本年モ尙其ノ餘波ヲ受ケ多少ノ減少ヲ見タリ。此ノ植栽反別ヲ大正七年末森林ノ總面積ニ比スルニ 5.78%ニ當リ、大正四年末森林ノ總面積ニ對スル前年ノ植栽反別比例ヨリ低キコト 0.30%ナリ此ノ植栽比例ヲ各種森林ニ就テ見ルニ最高キハ公有林ノ 7.87%私有林ノ 7.19%ニシテ社寺有林ノ 5.16%第二位ニ居リ、國有林ノ 3.97%御料林ノ 3.53%ヲ第三位トス。國有林御料林ノ斯ク植栽ノ比例低キ所以ノモノハ、其ノ研伐多カラサルカ爲ナルヘク、而シテ私有林ノ植栽比例カ公有林ヨリ低キコトハ其ノ何ノ故タルヲ詳ニセス。以上ノ植栽比例ニ依リテ推算スレハ御料林ハ約三百年ニシテ更新一周シ、國有林ハ約二百五十年社寺有林ハ約二百年私有林ハ約百四十年、公有林ハ約百二十五年ニシテ更新一周スル割合ナリ。惟フニ御料林國有林ノ總反別中ニハ今モ尙地目ノミ森林地ニシテ實ハ植林ニ適セサル急峻ノ地チモ包含スルモノアルヘク、爲ニ植栽比例ヲ彌カ上ニモ低カラシムル關係アランモ、而モ此ノ比例ノミヲ以テ見テハ、更新植栽ノ甚タ緩慢ナルヲ思ハサルヘカラス。

【森林伐採】 大正七年度中ノ森林伐採ヲ價額ニ依リテ示セハ 209,111,257圓ニシテ、之ヲ前年度ニ比スレハ約 44%餘ノ增額ナリ。此ノ增額ヲ見タルハ用材薪炭材共ニ單價ノ非常ニ昂騰シタルニモ因レト、伐採數量モ亦增多シタルカ爲ナリ。即農商務省ノ調査ニ依レハ用材ノ單價ハ大正六年度ニ於テ總平均 1石ニ付 2圓 08錢ヲリシモノ、本年度ハ 2圓 77錢ニ昂騰シ、薪炭材ハ大正六年度ニ於テ一棚ニ付 2圓 71錢ナリシモノ、本年度ハ 3圓 43錢ニ昂騰シ、伐採數量ニ於テ用材ハ大正六年度ニ比シ約 10%ヲ增シ薪炭材モ亦約 10%ヲ增シタルニ見テ明ナリ。森林ノ面積ニ對スル伐採價額ハ之ヲ大正七年末ノ總反別ニ比スルニ、其ノ百町ニ付 1,113圓ニ當ル、此ノ百町當伐採價額ヲ森林ノ各種ニ就テ見ルニ、御料林ハ 440圓、國有林ハ 262圓、公有林ハ 313圓ニシテ共ニ甚タ低ク、社寺有林ハ 1,110圓ニシテ中位ニアリ私有林ハ 2,421圓ニシテ甚タ高シ。

【森林被害】 大正七年度中ニ受ケタル森林ノ被害ハ反別、89,740町ニシテ、前年度ニ比シ 52,776町減少セリ。此ノ被害ヲ價額ニ見積レハ 3,558,140圓ニ當リ。又之ヲ前年ニ比スルニ 1,805,552圓多ク、二倍餘ニ達セリ。即知ル、本年度ノ被害ハ其ノ反別ニ於テハ前年度ヨリ狹少ナルモ其ノ被害ノ程度ハ頗ル重大ナリシモノヽ如シ。又此ノ森林ノ被害反別ヲ森林ノ總反別ニ比スルニ、4.78%ニ當リ、被害反別一反當ノ平均被害價額ハ 39圓 65錢ニ當レリ。

【狩獵】 大正七年度中ニ狩獵免狀ヲ下付シタルハ 154,172人ニシテ、前年度ニ比シ 32,592人多ク、其ノ中銃器ヲ用ヰサル甲種免狀下付ハ 8,578人ニシテ、前年度ニ比シ 497人多ク、銃器ヲ用ユル乙種免狀下付ハ 145,594人ニシテ、前年度ニ比シ 32,095人多シ。即總數ニ於テハ前年度ヨリ 26.81%ノ增加ニシテ、甲種ハ 6.15%、乙種ハ 28.28%ノ增加ニ當レリ。然レハ狩獵免狀下付ノ增加ハ主トシテ乙種免狀ノ下付增加シタルニ由ル。

狩獵免狀下付數ヲ地方別ニ見ルニ、甲種ニ於テハ岐阜縣最多ク全國總數ノ 190%ヲ占メ、長野縣ノ 85%、千葉縣ノ 80%之ニ次ク、其ノ他石川縣ノ 73%、愛知縣ノ 69%、山形縣ノ 42%ヲ多シト爲ス。乙種ハ福島縣ノ 41%、長野縣及高知縣ノ共ニ 40%最多ク其ノ他鹿兒島縣ノ 38%、靜岡縣ノ 36%、北海道ノ 35%、熊本縣及宮崎縣ノ共ニ 32%、兵庫縣及山口縣ノ共ニ 31%、岡山縣ノ 30%等ヲ多シト爲ス。乙種免狀ノ下付ハ概シテ各地方ニ平等的ナレトモ、甲種免狀ハ地方ニ依リテ、其ノ下付數ノ多少ニ大ナル懸隔アリ、是甲種狩獵ハ乙種狩獵ノ如クニ遠距離遊獵ノ便少ナキカ故ニ、從テ其ノ住地ノ狀況ニ依リテ限局セラルヽモノアルニ由ルナランカ。

VII. 漁業及製鹽

【漁船】 大正七年末現在ノ漁船總數ハ 385,119艘ニシテ內 3,265艘ハ動力ヲ有スルモノ、381,854艘ハ動力ヲ有セサルモノナリ。故ニ動力ヲ有スルモノハ總數ノ僅ニ 0.85%ニシテ、他ノ 99.15%ハ動力ヲ有セサルモノトス。而シテ此ノ動力ヲ有スルモノヽ內 電ニ 12.05%カ、蒸汽機關ヲ有スルモノニシテ他ノ 97.95%ハ發動機ヲ有スルモノナリ。又動力ヲ有セサルモノヽ內 97.46%ハ 5噸未滿若ハ 50石未滿ノ小船ニ屬シ、20噸以上又ハ 200石以上ノ稍大ナル船ハ 0.09%ノミナリ。以テ本邦漁業ノ規模ヲ推知シ得ヘク、其ノ性質ノ主トシテ沿岸漁業ナルコトヲ知ルニ足ル。此ノ漁船總數ヲ前年ト比スルニ 2,100艘ヲ減シ、動力ヲ有スルモノハ 288艘增加シ、動力ヲ有セサルモノハ 2,388艘減少セリ。

漁船數ヲ地方別ニ見ルニ、動力ヲ有スルモノハ靜岡縣最多ク、全國總數ノ 142%ヲ占メ、千葉縣ノ 99%之ニ次キ、宮城縣 83%、岩手縣ノ 80%、三重縣ノ 79%、茨城縣ノ 74%、北海道ノ 45%、和歌山縣ノ 41%等ヲ多シトス。又動力ヲ有セサルモノハ北海道ノ全國總數ニ對スル 161%ナルヲ最多トシ、長崎縣ノ 68%之ニ次キ、其ノ他千葉縣及山口縣ノ 44%、愛媛縣ノ 42%、三重縣ノ 32%、新潟縣及島根縣ノ 29%、兵庫縣及靜岡縣ノ 28%、大分縣ノ 27%等ヲ多シト爲ス。

【水產物】 大正七年中ノ主ナル水產物ノ數量及價額ヲ擧クレハ眞鰯ハ漁獲年々增加シ來リシカ本年ハ減獲シ 6,705萬貫、其ノ價額 1,713萬圓ナリ。此ノ數量及價額ヲ前年ニ比スルニ數量ニ於テハ 2,973萬貫ヲ激減シタルモ價額ニ於テハ 342萬圓ノ增加ナリ。又此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ長崎縣 294萬圓最多ク千葉縣 138萬圓之ニ次キ、北海道 132萬圓、山口縣 100萬圓、石川縣 101萬圓、青森縣 93萬圓、新潟縣 92萬圓、愛媛縣 84萬圓、富山縣 83萬圓、三重縣 64萬圓、鹿兒島縣 59萬圓、熊本縣 58萬圓等ヲ多シト爲ス。背黑鰹ノ漁獲ハ 2,109萬貫ニシテ前年ニ比シ 211萬貫ノ減少ナリ。而シテ其ノ價額ハ 730萬圓ニシテ 345萬圓ヲ激增セリ。又此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ大分縣 107萬圓最多ク、廣島縣 71萬圓之ニ次キ、千葉縣 68萬圓、兵庫縣 65萬圓、山口縣 63萬圓、愛媛縣 60萬圓、愛知縣 49萬圓、三重縣 47萬圓、香川縣 31萬圓等ヲ多シト爲ス。鰹ハ年々漁獲ノ增加ヲ見タリ、本年モ亦增多セリ。本年ハ數量 1,532萬貫、價額 620萬圓ニシテ前年ニ比シテ 339萬貫 231萬圓ヲ激增セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ長崎縣 100萬圓最多ク、靜岡縣 46萬圓之ニ次キ鹿兒島縣 45萬圓、福井縣 43萬圓、神奈川縣 41萬圓、愛媛縣及高知縣共ニ 37萬圓、島根縣 32萬圓等多キ地方ニ屬セリ。鮪ハ年々漁獲ニ多少アリ、本年ハ鹽漁ノ年ニシテ數量 334萬貫價額 434萬圓ヲ獲、之ヲ前年ニ比スレハ 151萬貫 239萬圓ヲ增加シタリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ靜岡縣 85萬圓最多ク、千葉縣 72萬圓之ニ次キ北海道ノ 61萬圓、宮城縣 28萬圓、和歌山縣 20萬圓、愛媛縣 19萬圓、神奈川縣及宮崎縣共ニ 18萬圓、高知縣 16萬圓等ヲ多シト爲ス。鰤ハ年々漁獲ヲ增加シツヽアリシカ前年不漁ノ後ヲ受ケ本年亦不漁ニシテ數量 575萬貫ニシテ價額ハ 713萬圓ナリ、之ヲ前年ニ比スルニ數量ニ於テ 26萬貫減セシモ

價額ニ於テハ反テ 231萬圓ヲ增セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、靜岡縣 68萬圓最多ク、神奈川縣 67萬圓之ニ次キ富山縣 66萬圓、長崎縣 58萬圓、三重縣 55萬圓、北海道及石川縣ノ共ニ 51萬圓、京都府 50萬圓、鹿兒島縣 39萬圓、高知縣 30萬圓等ヲ多シト爲ス。鰹ハ本年ハ不漁ニシテ 195萬貫、此ノ價額 129萬圓ヲ獲、前年ニ比シ 47萬貫ヲ減シ價額 40萬圓ヲ增加セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、山口縣 30萬圓最多ク、島根縣 18萬圓之ニ次キ千葉縣 13萬圓、鹿兒島縣 8萬圓、長崎縣宮崎縣及和歌山縣ノ共ニ 7萬圓、青森縣 6萬圓、岩手縣及大分縣ノ共ニ 5萬圓等ヲ多シト爲ス。鯛ハ本年ハ數量ニ於テ前年ヨリ 82萬貫ヲ減シ、420萬貫ナレトモ、價額ニ於テハ 276萬圓ヲ增加シ 1,020萬圓ナリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、關西九州地方ニ多ク、山口縣 130萬圓最多ク、長崎縣 125萬圓之ニ次キ兵庫縣 104萬圓、愛媛縣 65萬圓、福岡縣 62萬圓廣島縣 56萬圓、島根縣 50萬圓、大分縣 36萬圓、新潟縣 34萬圓、福井縣及香川縣ノ各 30萬圓等ヲ多シト爲ス。黑鯛ハ本年モ不漁ニシテ前年ト大差ナク、68萬貫ニシテ、價額ハ却テ 37萬圓增加ノ 125萬圓ナリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、廣島縣 23萬圓最多ク、愛知縣 12萬圓之ニ次キ兵庫縣 10萬圓、山口縣及岡山縣ノ各 8萬圓香川縣 7萬圓等ヲ多シト爲ス。鮮ハ本年ハ不漁ニシテ 97萬貫價額 113萬圓ヲ獲、之ヲ前年ニ比スルニ、數量 81萬貫ヲ減シタルモ價額ニ於テハ殆ムト增減ナシ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ千葉縣 23萬圓最多ク、福島縣及宮城縣ノ各 15萬圓之ニ次キ、新潟縣 9萬圓、北海道及愛知縣ノ共ニ 8萬圓等ヲ多シト爲ス。鰈ハ數量 890萬貫、價額 360萬圓ヲ得、前年ニ比シ數量 272萬貫ヲ減シ價額ニ於テ却テ 83萬圓ヲ增加セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ北海道 145萬圓最多ク、遙ニ下リテ宮城縣 27萬圓之ニ次キ、福井縣 20萬圓兵庫縣 19萬圓、福島縣 16萬圓、廣島縣 13萬圓、石川縣 12萬圓、愛知縣 11萬圓、山口縣 10萬圓等ヲ多シト爲ス。鰆ハ本年ハ前年ニ比シ漁獲ヲ增加セリ卽チ數量ニ於テ 13萬貫ヲ增シ 111萬貫ヲ獲、價額亦 58萬圓增加シ 190萬圓ナリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ香川縣 27萬圓最多ク、廣島縣 21萬圓之ニ次キ、靜岡縣 19萬圓、兵庫縣 18萬圓、神奈川縣 13萬圓、岡山縣 11萬圓、愛媛縣千葉縣及佐賀縣共ニ 9萬圓等ヲ多シト爲ス。鱈ハ本年不漁ニシテ前年ヨリ 84萬貫ヲ減シ、數量ハ 802萬貫ナレトモ、價額ニ於テハ却テ 44萬圓ヲ增加シ 208萬圓ナリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、大部分ハ北海道ニ屬シ其ノ價額 116萬圓ニ當リ、他ニハ山形縣 35萬圓、青森縣 19萬圓、石川縣 17萬圓等ヲ多シト爲ス。鰹ハ本年豐漁ニシテ數量 740萬貫價額 117萬圓ナリ。卽前年ヨリ數量 166萬貫價額 55萬圓ヲ增加セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、北海道 49萬圓、新潟縣 32萬圓、富山縣 31萬圓等ヲ多シト爲ス。文鰭魚ハ前年ヨリ漁獲ヲ減スルコト 22萬貫ニシテ 136萬貫ヲ獲、價額 80萬圓ニシテ前年ヨリ 20萬圓ノ增加ナリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ東京府最多ク 17萬圓ニシテ其ノ他沖繩縣 15萬圓、鹿兒島縣 11萬圓、島根縣 7萬圓、山口縣 5萬圓等ヲ多キ地方ト爲ス。秋刀魚ハ本年甚タ不漁ニシテ數量 82萬貫價額 68萬圓ニシテ、前年ニ比シ數量ニ於テ 132萬貫價額ニ於テ 35萬圓ヲ減シタリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、千葉縣 36萬圓最多ク、福島縣 14萬圓之ニ次キ、靜岡縣 7萬圓、長崎縣 3萬圓等多シト爲ス。鰯ハ 156萬貫 203萬圓ヲ得、前年ニ比スルニ 4萬貫ヲ減シ 53萬圓ヲ增セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、愛知縣 29萬圓最多ク、廣島縣 20萬圓之ニ次キ、岡山縣 14萬圓、山口縣 13萬圓、佐賀縣 10萬圓、大阪府及神奈川縣 9萬圓等多シト爲ス。鰺ハ前年ヨリ 64萬貫少キ 305萬貫ヲ獲、價額ハ 62萬圓增加シ 246萬圓ナリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、千葉縣及靜岡縣ノ共ニ 23萬圓最多ク、神奈川縣 21萬圓之ニ次キ大分縣 18萬圓、愛媛縣 17萬圓、長崎縣 14萬圓、山口縣 13萬圓、鹿兒島縣 12萬圓、高知縣 11萬圓等多キ地方ナリ。鰊ハ本年ハ不漁ニシテ數量 7,911萬貫價額 1,101萬圓ヲ獲タルノミ。卽前年ニ比シ數量ニ於テハ 932萬貫ヲ減シ價額ニ於テ 343萬圓ヲ增セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、其ノ大部分ハ北海道ニシテ 999萬圓ナリ。其ノ他青森縣 52萬圓、石川縣 35萬圓ヲ稍多シト爲ス。鮭ハ數量 309萬貫價額 387萬圓ヲ獲、前年ニ比シ 55萬貫 175萬圓ヲ增セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、是亦大部分ハ北海道ニシテ 275萬圓ニ達シ、其ノ他新潟縣 24萬圓、岩手縣 18萬圓、石川縣 14萬圓、宮城縣 11萬圓、秋田縣 10萬圓等ヲ多シト爲ス。鱒（鮏ヲ含ム）ハ 313萬貫 242萬圓ヲ獲、前年ヨリ數量 283萬貫ヲ減シ價額 29萬圓ヲ增加セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ最多キハ北海道ニシテ 110萬圓、其ノ他石川縣 50萬圓、富山縣 18萬圓、新潟縣 14萬圓、福井縣 7萬圓等多シト爲ス。鮎ハ本年ハ稍不漁ニシテ、數量 83萬貫價額 222萬圓ヲ獲タリ。卽前年ニ比シ數量ニ於テハ大差ナク價額 69萬圓ノ增加ナリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、岐阜縣 31萬圓最多ク、滋賀縣 21萬圓之ニ次キ熊本縣及神奈川縣ノ共ニ 13萬圓、兵庫縣德島縣及福井縣ノ共ニ 8萬圓等ヲ最多キ地方ト爲ス。鯉ハ本年稍漁獲ヲ增シタルモ前年ト殆ムト大差ナク 111萬貫ヲ獲價額ハ 203萬圓ニシテ前年ヨリ 51萬圓ヲ增加セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ長野縣 39萬圓最多ク、滋賀縣 18萬圓之ニ次キ、岐阜縣 12萬圓、茨城縣 10萬圓、愛知縣三重縣及京都府ノ共ニ 9萬圓等多シ。鰻ハ數量 96萬貫價額 298萬圓ヲ獲、前年ヨリ 2萬貫ヲ減シ、78萬圓ヲ增セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、愛知縣 57萬圓最多ク、靜岡縣 44萬圓之ニ次キ、千葉縣 16萬圓、熊本縣 15萬圓、茨城縣及三重縣ノ共ニ 13萬圓、岡山縣 11萬圓、宮城縣 10萬圓等多シト爲ス。鮑ハ數量 119萬貫價額 207萬圓ヲ獲、前年ヨリ 8萬貫 66萬圓ノ增加ナリ。地方別ニハ岩手縣 55萬圓最多ク、青森縣 34萬圓之ニ次キ、其ノ他千葉縣 21萬圓、北海道 19萬圓、長崎縣 17萬圓、宮城縣 16萬圓等多シト爲ス。牡蠣ハ前年ヨリ減スルコト 26萬貫ニシテ 928萬貫ヲ獲、價額ハ却テ 45萬圓ヲ增シタル 126萬圓ナリ。價額ヲ地方別ニ見ルニ、廣島縣、佐賀縣、福岡縣最多ク、熊本縣、宮城縣、神奈川縣等次テ多シ。蛤ハ前年ヨリ 20萬貫多キ 120萬貫ヲ獲、價額ニ於テハ 15萬圓ヲ增シ 35萬圓ナリ。地方別ニ見ルニ、愛知縣、千葉縣、神奈川縣、三重縣、茨城縣等ニ多シ。烏賊ハ 162萬貫 123萬圓ヲ獲、前年ヨリ 5萬貫 29萬圓ヲ增セリ。之ヲ地方別ニ見ルニ、香川縣、熊本縣、福岡縣、長崎縣、宮崎縣、千葉縣、愛媛縣、山口縣等ニ多シ。柔魚ハ 953萬貫 619萬圓ヲ獲、前年ニ比シ數量 977萬貫ヲ減シ價額 37萬圓ヲ增セリ。之ヲ地方別ニ見ルニ北海道最多ク、長崎縣、岩手縣、島根縣、沖繩縣、神奈川縣、青森縣等次テ多シ。鮪ハ 283萬貫 183萬圓ニシテ、前年ニ比シ 55萬貫ヲ減シタレトモ、價額ニ於テ 45萬圓ヲ增シタリ。之ヲ地方別ニ見ルニ、兵庫縣最多ク、北海道、廣島縣、岡山縣、山口縣、愛知縣等ニ多シ。鰹（龍鰹ヲ含ム）ノ本年ノ漁獲ハ 548萬貫 517萬圓ニシテ、前年ニ比シ數量 11萬貫ヲ減シ、價額ニ於テ 202萬圓ヲ增セリ。之ヲ地方別ニ見ルニ、靜岡縣最多ク、愛知縣廣島縣、三重縣、千葉縣、山口縣、熊本縣ニ多シ。鯨ハ前年ヨリ 1,226頭ヲ增シ、2,641頭ヲ獲、價額ハ 182萬圓ヲ增シタル 292萬圓ナリ。之ヲ地方別ニ見ルニ、宮城縣最多ク、北海道、高知縣、岩手縣、青森縣等ニ多シ。珊瑚ハ 3,210貫 51萬圓ヲ獲、前年ヨリ 172貫 10萬圓ヲ增セリ。之ヲ地方別ニ見ルニ、高知縣最多ク、他ハ鹿兒島、長崎、愛媛ノ三縣ニ存スルノミ。昆布ハ數量 1,866萬貫價額 442萬圓ヲ獲、前年ニ比シ 230萬貫 117萬圓ヲ增加ス。地方別ニ見ルニ殆ト全部北海道ニ屬シ、青森縣、岩手縣及其他ノ四縣ニ多少ノ收獲アリ。紫菜ハ本年 334萬貫 359萬圓ヲ採收シ、前年ニ比シ 8萬貫 51萬圓多シ。之ヲ地方別ニ見ルニ、東京府最多ク、廣島縣、愛知縣、千葉縣、神奈川縣次テ多シ。石花菜ハ 146萬貫 143萬圓ヲ採收シ前年ヨリ數量 4萬貫ヲ減シ價額ハ 31萬圓ヲ增セリ。之ヲ地方別ニ見ルニ、靜岡縣最多ク、和歌山縣、神奈川縣、北海道、千葉縣ニ多シ。海藻ハ本年ノ收獲 61萬貫ニシテ、前年ニ比シ 3萬貫ヲ減シタレトモ、價額ニ於テハ 25萬圓ヲ增シ 58萬圓ナリ。之ヲ地方別ニ見ルニ、長崎縣最多ク、北海道次テ多シ。以上ノ漁獲物竝ニ其ノ他ヲ併セ本年中全國ニ於ケル總漁獲物ノ價額ハ 1億 7,118萬圓ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 4,795萬圓ノ激增ナリ。但シ漁獲物數量ハ前年ヨリ遙カニ不漁ナリシモ價額ニ於テ上記ノ激增ヲ見タルハ、恐ラク物價昂騰ノ爲、是等漁獲物モ亦單價ノ上リ

タルニ由ルモノナルヘシ。而シテ此ノ總額ヲ地方別ニ見ルニ、北海道 3,006萬圓最多ク前年ニ比シ 800萬圓ヲ增加シ、之ニ次クモノハ長崎縣 1,059萬圓、千葉縣 854萬圓、靜岡縣 766萬圓、山口縣 759萬圓、愛知縣 552萬圓ニシテ、前年ニ比シ長崎縣ハ 394萬圓、千葉縣ハ 241萬圓、靜岡縣ハ 310萬圓、山口縣ハ 205萬圓、愛知縣 159萬圓ヲ增セリ。又之ニ次クハ兵庫縣 540萬圓、廣島縣 481萬圓、高知縣 478萬圓、愛媛縣 469萬圓、三重縣 463萬圓、石川縣 462萬圓、鹿兒島縣 439萬圓、神奈川縣 424萬圓、宮城縣 417萬圓、福岡縣青森縣ノ共ニ 376萬圓、大分縣 354萬圓、新潟縣 337萬圓、島根縣 328萬圓、富山縣 327萬圓等ニシテ、是亦前年ニ比スルニ兵庫縣ハ 152萬圓、廣島縣ハ 181萬圓、高知縣ハ 132萬圓、愛媛縣ハ 155萬圓、三重縣ハ 104萬圓、石川縣ハ 183萬圓、鹿兒島縣ハ 31萬圓、神奈川縣ハ 108萬圓、宮城縣ハ 27萬圓、福岡縣ハ 90萬圓、青森縣ハ 26萬圓、大分縣ハ 94萬圓、新潟縣及島根縣ハ共ニ 106萬圓、富山縣ハ 151萬圓等殆ト總テ增加セリ。

【水産製造物】　節類ニ於テハ、本年鰹及鮪ノ漁獲少ナカリシモ其ノ製造量多ク、鮪ハ漁獲多カリシモ其ノ製造量少ナシ、卽チ鰹節ハ 245萬貫、1,571萬圓、鮪節ハ 7萬貫 38萬圓ニシテ、之ヲ前年ニ比スルニ、鰹節ハ 1萬貫 285萬圓ヲ增加シ鮪節ハ 3萬貫ヲ減シ 5萬圓ヲ增セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、鰹節ハ靜岡縣 334萬圓最多ク、鹿兒島縣 315萬圓之ニ次キ沖繩縣 121萬圓、宮城縣 112萬圓、高知縣 110萬圓、三重縣 78萬圓、長崎縣 75萬圓、岩手縣 67萬圓、福島縣 54萬圓等ヲ多シト爲シ、鮪節ハ宮城縣 8萬圓、三重縣 6萬圓、靜岡縣 5萬圓等ヲ多シト爲ス。素乾類ニハ本年柔魚不漁ナリシ爲、鰯モ減少シ 177萬貫 546萬圓ニシテ、前年ニ比シ 284萬貫 97萬圓ヲ減ス。鰹節ハ製出高 9萬貫 38萬圓ニシテ前年ニ比シテ 3萬貫 18萬圓ヲ增セリ。鰊ノ中身缺鰊ノ製出ハ前年ヨリ數量 11萬貫ヲ增シタル 235萬貫、價額ハ 229萬圓ニシテ、前年ヨリ 97萬圓ヲ增シタリ。鰊鰯ハ 87萬貫ニシテ前年ヨリ 18萬貫ヲ增シ、價額ニ於テ 35萬圓ヲ增シ、116萬圓ナリ。田作ノ製出ハ前年ヨリ 1萬貫多キ 33萬貫ニシテ、價額ハ 21萬圓ヲ增シテ 54萬圓ニ達セリ。鱈ハ 64萬貫 62萬圓ノ製出アリ、之ヲ前年ニ比シ 13萬貫 27萬圓ヲ增セリ。以上素乾類ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ北海道最多ク、鰊鰯ハ 6萬圓身缺鰊ハ 228萬圓、鰊鰯ハ 116萬圓、鱈ハ 52萬圓ヲ占ム。鰊鰯ハ北海道ノ外宮崎縣三重縣沖繩縣長崎縣等ニ多ク、鰊ハ北海道以外他ニ多キモノナク、鱈ハ山形縣 11萬圓稍多シ、鮪ハ長崎縣 170萬圓ヲ最多トシ北海道 131萬圓之ニ次ク其他岩手縣 71萬圓、島根縣 30萬圓、青森縣 28萬圓、沖繩縣 25萬圓等多シトス。田作ハ千葉縣、茨城縣、三重縣、島根縣、青森縣等ニ多シ。鹽乾類ニ於テ鰺及鯖ハ前年ヨリ多産シタレトモ、眞鱈（背黑

鰛ヲ含ム)及鰤ハ製出高ヲ減シタリ。即鰺ハ 19萬貫 22萬圓ニシテ前年ヨリ 5萬貫 10萬圓ヲ增シ鯖ハ 26萬貫 25萬圓ニシテ前年ヨリ 7萬貫 13萬圓ヲ增加セリ眞鰯ハ前年ニ比シ 48萬貫ヲ減シタル 344萬貫ニシテ、價額ハ 352萬圓ニシテ 128萬圓ヲ增シ、鰤ハ前年ヨリ 2萬 94貫ヲ減シテ 2千貫ヲ產出シ、價額ハ 4千圓ニシテ前年ヨリ 1萬 2千圓ヲ減セリ。此ノ鹽乾類ノ價額ヲ地方別ニ見レニ眞鰯ハ熊本縣 94萬圓最多ク、長崎縣 53萬圓之ニ次キ、三重縣 36萬圓、鹿兒島縣 33萬圓、千葉縣 18萬圓、石川縣 16萬圓、兵庫縣 15萬圓、富山縣 13萬圓ヲ多シト爲シ、鰺ハ千葉縣、三重縣、大分縣、靜岡縣、山口縣、神奈川縣等ニ多ク、鯖ハ福井縣、靜岡縣、鹿兒島縣、島根縣ニ多ク、鰤ハ富山縣、長崎縣ニ多シ。煮乾類ニ於テハ眞鰯(背黑鰯ヲ含ム)海參、鮑ハ前年ヨリ多產シ、貝柱、淡菜、鰕ハ前年ヨリ少シ。即眞鰯ハ 639萬貫 979萬圓ニシテ、前年ヨリ 83萬貫 468萬圓ヲ增シ海參ハ前年ヨリ 1萬貫ヲ增シタル 13萬貫ニシテ、價額ハ88萬圓ニシテ 13萬圓ヲ增ス。鮑ハ數量ニ於テ稍ヤ增シタルモ前年ト殆ムト大差ナク 9萬貫ニシテ、價額ハ 123萬圓ニシテ前年ヨリ 35萬圓ヲ增シ貝柱ハ 11萬貫ヲ減シ 3萬貫ニシテ、價額 65萬圓ヲ減シ 37萬圓ナリ。淡菜ハ前年ヨリ 2千貫ヲ減シテ 4千貫、價額ハ 1萬圓ニシテ 1千圓ヲ減シタリ。而シテ此ノ價額ヲ地方別ニ見レニ、眞鰯ハ廣島縣 118萬圓最多ク、長崎縣 108萬圓之ニ次キ、山口縣 95萬圓、愛媛縣 76萬圓、大分縣 73萬圓、三重縣 72萬圓、兵庫縣 65萬圓、愛知縣 59萬圓、千葉縣 53萬圓等ヲ多シト爲シ、海參ハ北海道 56萬圓其ノ大部分ヲ占メ、其ノ他宮城縣、石川縣、三重縣等ニ多ク、貝柱ハ青森縣 21萬圓最多ク、北海道 17萬圓之ニ次ク、鮑ハ岩手縣、青森縣、北海道、長崎縣ニ多ク、淡菜ハ青森山口ノ二縣ノ共ニ僅ニ產出スルノミ。鰕ハ靜岡縣 57萬圓最多ク山口縣、香川縣、大分縣ノ各約 21萬圓之ニ次キ、德島縣、岡山縣、福岡縣、廣島縣、愛媛縣、愛知縣等ニ多產ス。鹽物類ニ於テハ鮪鰯鮭ハ前年ヨリ多產シ、其ノ他眞鰯(背黑鰯ヲ含ム)鯖鰤鱈ハ減少ス。鮪ハ 9千貫 1萬 2千圓ニシテ、前年ニ比シ 6千貫 9千圓ヲ增シ、鰯ハ前年ヨリ 13萬貫 39萬圓ヲ增シタル 35萬貫 67萬圓ヲ產出シ、鮭ハ 389萬貫 435萬圓ニシテ、前年ニ比シ 96萬貫 155萬圓ヲ增セリ。眞鰯ハ前年ニ比シ 83萬貫ノ減少ニシテ 223萬貫ヲ產出シ、價額ニ於テハ 27萬圓ヲ增シタル 121萬圓ナリ。鯖ハ 169萬貫 113萬圓ヲ產出シ前年ニ比シ 23萬貫ヲ減シ 31萬圓ヲ增セリ鱈ハ 455萬貫 375萬圓ニシテ、前年ニ比シ 346萬貫 88萬圓ヲ減少セリ。鰐ハ 40萬貫 15萬圓ヲ產出シ、前年ヨリ 7萬貫ヲ減シ 5萬圓ヲ增加セリ。而シテ此ノ鹽物類ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、眞鰯ハ熊本縣 23萬圓最多ク、長崎縣 19萬圓之ニ次キ、山口縣 13萬圓、三重縣 11萬圓福井縣、 10萬圓等ヲ多シト爲シ、鯖ハ福井縣 42萬圓最多ク、山口縣 21萬圓之ニ次キ、石川縣 11萬圓、鳥取縣 8萬圓、島根縣 6萬圓、長崎縣 5萬圓等ヲ多シト爲ス。鮪ハ青森縣北海道富山縣、福井縣、東京府ニ僅ニ產出セルノミニシテ、鰯ハ富山縣 21萬圓、北海道 19萬圓、石川縣 9萬圓最多ク、鮭ハ新潟縣 254萬圓、北海道 161萬圓ヲ最多ト爲シ、鱈ハ新潟縣 233萬圓最多ク、北海道 85萬圓、石川縣 56萬圓之ニ次キ、鰐ハ北海道 10萬圓最多ニシテ其ノ他ノ地方ニハ僅ニ存スルノミ。漉海苔ハ 30萬貫ノ產出アリシノミニシテ前年ヨリ少キコト 6萬貫ナリシカ、價額ニ於テハ 327萬圓ニシテ 1萬圓ヲ減シタルニ過キス。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、東京府 132萬圓最多ク、千葉縣 40萬圓、神奈川縣 32萬圓、廣島縣 2[illegible]萬圓、愛知縣 21萬圓次テ多シ。肥料ハ鰮及ヒ鰯搾粕 2,224萬貫 1,303萬圓、乾鰯 280萬貫 127萬圓、其ノ他ノ肥料ハ 520萬貫 261萬圓ヲ製出セリ。之ヲ前年ニ比スルニ搾粕及乾鰯ハ減少シ其ノ他ノ肥料ハ少シク增加セリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、搾粕ハ大部分北海道ニ屬シ、其ノ額 835萬圓、石川縣 131萬圓之ニ次キ、其ノ他青森縣 87萬圓、長崎縣 59萬圓、千葉縣 48萬圓、新潟縣及山形縣ノ共ニ 36萬圓、秋田縣 33萬圓等ヲ多シト爲シ、乾鰯ハ長崎縣 62萬圓、千葉縣 29萬圓等最多ク、其ノ他ノ肥料ハ北海道 258萬圓ヲ最多ト爲ス。魚油ハ 244萬貫ニシテ前年ヨリ 11萬貫ヲ減シタレトモ、價額ハ 116萬圓ヲ增シタル 247萬圓ナリ。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ、北海道ノ 115萬圓最多ク宮城縣 71萬圓、青森縣 14萬圓次テ多シ。漉海藻ハ產出 36萬貫 104萬圓ニシテ、前年ニ比シ 1萬貫 21萬圓ヲ增ス。此ノ價額ヲ地方別ニ見ルニ大阪府 28萬圓最多ク東京府 26萬圓、三重縣 19萬圓、北海道 12萬貫次テ多シ。以上ノ諸品及其ノ他ノ水產製造物ノ總價額ハ 11,226萬圓ニシテ、前年ニ比シ 2,772萬圓ノ激增ナリ。此ノ總價額ヲ地方別ニ見ルニ、北海道 3,263萬圓最多ク、長崎縣 659萬圓、靜岡縣 587萬圓、新潟縣 565萬圓、宮城縣 532萬圓、鹿兒島縣 468萬圓、千葉縣 323萬圓、石川縣 310萬圓、三重縣 301萬圓等ヲ多シトス。

【水產養殖】　大正七年末現在ノ水產養殖場ハ 104,299箇所ニシテ、面積ハ 178百萬坪ナリ。即 1養殖場平均面積 1,711坪ニ當ル、之ヲ前年ニ比スレハ、場數 2,556面積 7,415,893坪一養殖場平均面積 [illegible]8坪ヲ減シタリ。

【製鹽】　大正七年度ノ鹽製造人員ハ 9,849人ニシテ、前年ニ比シ 297人ヲ減シ、從業人員ハ 45,552人ニシテ、前年ニ比シ 3,563人ヲ減シタリ。又鹽田ノ反別ハ 5,754町ニシテ前年ニ比シ 68町ヲ減シ、鹽製造高ハ 67,200萬斤ニシテ、前年ニ比シ 33,201萬斤ヲ減セリ。即前年ニ比シ一人平均製造高ハ 5,689斤ヲ減シ、14,753斤トナリ、製鹽反別一町平均製造高ハ 55,658斤ヲ減シ 116,792斤トナレリ。製鹽高ヲ專賣支局別ニ見ルニ、阪出 20,010萬斤最多ク、三田尻 12,579萬斤之ニ次キ、神戸 9,039萬斤、廣島 8,159萬斤等其ノ多キニ屬ス。

VIII. 鑛　業

【鑛區】　大正七年現在ノ稼業鑛區ハ 2,237箇所ニシテ、其ノ總坪數ハ 823,458,000坪、又休業鑛區ハ 3,392箇所ニシテ、其ノ總坪數ハ 642,931,000坪ナリ。此ノ稼業休業鑛區ノ分節比例ヲ求ムレハ、箇所ニ於テ稼業 40.46%、休業 59.54%、ニ當リ、總坪數ニ於テ稼業 56.16%休業 43.84%ナリ。之ヲ前年ノ同一比例ト比較スルニ、箇所ハ稼業ニ於テ 1.02%減少セリ。此ノ鑛區所ヲ十年前明治四十一年末現在ニ比シ、其ノ 100ニ對スル本年ノ指數ヲ求ムルニ、稼業ハ 111.74休業ハ 92.16ニ當ル。又鑛區坪數ノ同一指數ヲ求ムルニ、稼業ハ 179.57、休業ハ 116.38ニ當レリ。是ニ由リテ觀レハ稼業鑛區ノ指數ハ箇所ニ比シ坪數ノ增高著シキヲ知ルヘク即我鑛業漸次大規模トナリシヲ窺フニ足ル。而シテ休業鑛區ハ箇所及坪數共ニ漸減シタレトモ。何且其ノ數ノ甚タ尠ナカラサルハ鑛政上忽緒ニ付スヘカラサル事實ナルヘシ。

稼業鑛區ヲ鑛種別ニスレハ、金屬山ニ於テハ二種以上ノ鑛物ヲ產出スルモノ多キヲ以テ今各鑛種每ニ延數ト爲シ、其ノ各鑛物產出稼業箇所ヲ最多キモノヨリ順次列記スレハ、銅最多ク 770箇所ニシテ、銀ハ之ニ次キ 505箇所、金ハ 401箇所、鉛ハ 236箇所、亞鉛ハ 203箇所、硫化鐵ハ 85箇所、滿俺ハ 68箇所、鐵ハ僅ニ 20箇所ニ過キス、其ノ他ノ金屬山ハ 106箇所ナリ。又非金屬山ノ最モ多キハ石炭ノ 740箇所ニシテ、石油ノ 193箇所之ニ次キ、亞炭ノ 97箇所、硫黃ノ 64箇所、其ノ他ノ非金屬山 9箇所ナリ。之ヲ前年ト比較スルニ、大體減少シタレトモ石炭ノミハ特ニ 77箇所ヲ增加セリ。

大正七年末ノ砂鑛區ハ稼業河川 120箇所、此ノ延長 110里30町、其ノ他鑛區 338箇所其ノ面積 19.885,000坪ナリ。休業鑛區ハ河川 483箇所、此ノ延長 482里10町、其ノ他鑛區 720箇所此ノ坪數 50,612,000坪ナリ。又鑛種ヲ延數トシ稼業鑛區ノ箇所ヲ算スルニ砂鐵河川、83箇所、其ノ他 289箇所、砂金河川 35箇所、其ノ他 42箇所、砂錫河川 2箇所、其ノ他 1箇所ナリ。之ヲ前年ト比較スルニ稼業河川ハ 7箇所ニシテ延長 8里22町ヲ增シ其ノ他鑛區ハ 33箇所、1,549,000坪ヲ增加セリ。

【鑛夫】　大正七年六月末現在ノ鑛夫ハ 464,727人ニシテ、內金屬山ニ從事スル者 160,960人、石炭山ニ從事スル者 287,159人、石油山及其ノ他ノ非金屬山ニ從事スル者 16,608人ナリ。總數ニ對スル分節比例ヲ求ムルニ、其ノ最モ多キハ石炭山ノ 61.79%ニシテ金屬山ノ 34.64%之ニ次キ、石油山及其ノ他ノ金屬山ニ從事スル者 3.57%ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ總員ニ於テ 30,884人ノ激增ヲ示ス。是時局ノ影響トシテ稼業鑛區ノ隆盛ヲ致セルニ因ルモノナラン。各種鑛山ニ從事セル鑛夫ノ平均一人一箇年ノ勞役日數ヲ算スルニ最多キハ石油山及其他金屬山ノ 263日ニシテ金屬山ハ 245日、石炭山 241日ナリ。而シテ全體ノ平均日數ハ 243日ニ當ル。

【鑛產物】　大正七年中ノ鑛產物ハ概シテ豐產ニアラズシテ前年ニ比シ少額ナリ、金ハ 2,052貫ヲ產シ前年ヨリ增スコト 164貫ヲ產出セリ、鐵ハ 20萬佛噸ヲ產出シ、前年ニ比シ 6萬佛噸ヲ增收セリ、燐鑛ハ 19萬佛噸ヲ產シ前年ヨリ 7萬佛噸ヲ增シ、滿俺鑛ハ 1,520萬貫ヲ產シ前年ヨリ 150萬貫ヲ增シ、黑鉛ハ 314萬斤ニシテ前年ヨリ 92萬斤ヲ增收シ重石鑛ハ 16萬貫ヲ得、前年ヨリ 3萬貫ヲ增收シ以上記載ノ外本年ニ至リテ產額減少セシ鑛產物銅ハ本邦重要ノ鑛產物ニシテ 1億5,057萬斤ヲ產シ、前年ヨリ 2,950萬斤ノ減收ナリ。亞鉛ハ 6,653萬斤ニシテ前年ヨリ 2,467萬斤ノ減收ナリ。銀ハ 54,743貫ヲ產シ前年ニ比シ 4,249貫ヲ減收シ、硫化鑛鑛ハ2,820萬貫ヲ產シ前年ヨリ 416萬貫ヲ減シ、鉛ハ前年ヨリ 854萬斤ヲ減シ 1,781萬斤ヲ產シ、格魯謨鐵ハ 193萬貫ヲ產シ前年ヨリ 45萬貫ヲ減シ硫黃ハ 6萬佛噸ヲ產シ前年ヨリ 5萬佛噸ノ減收ナリ。錫ノ產額ハ 28萬斤前年ヨリハ 8萬斤ヲ減シ、亞鉛鑛ハ前年 163佛噸ヲ產出セシモ本年ノ產額絕無ノ狀態ナリ。　本邦重要鑛產物ナル石炭ハ漸次好況ヲ示シ本年ノ產額ハ 2,803萬佛噸ニシテ前年ニ比シ 167萬佛噸ノ激增ナリ。石油(原油) 214萬石ヲ產シ前年ヨリ 37萬石ヲ減セリ本年新ニ觀ル鑛石砒ハ 22萬貫ヲ產セリ。石油瓦斯ハ 92萬千立方尺ヲ產シ前年ヨリ 1萬千立方尺ヲ減收セリ。本邦ノ鑛產物ヲ正シク外國鑛產物ト比較對照スルハ至難ナレトモ其ノ大概ヲ比較スルニ 1916年ノ世界ニ於ケル金ノ總產出額ハ約 93萬瓩ニシテ之ヲ國別ト爲セハ、亞弗利加洲ノ約 31萬瓩最多ク、之ニ次クハ北米合衆國ノ約 12萬瓩、加奈太ノ約 3萬瓩、墨其西ノ約 94瓩、本邦ノ約 84瓩、濠洲ノ 6萬瓩(內 4萬瓩ハ聯邦ノ產)露西亞ノ約 4萬瓩等ヲ多シト爲ス。1917年ノ世界ニ於ケル銀ノ總產出額ハ約 465萬瓩ニシテ、之ヲ國別ト爲セハ北米合衆國ノ約 203萬瓩最多ク之ニ次クハ墨其西ノ約 88萬瓩、加奈太ノ約 63萬瓩、中米及南米ノ約 53萬瓩、歐羅巴ノ約 22萬瓩、本邦ノ約 22萬瓩、亞細亞ノ約 21萬瓩、濠洲ノ約 11萬瓩、亞弗利加ノ約 3萬瓩ナリ。1917年ニ知ラレタル銅ノ產額ハ約 141萬佛噸ニシテ之ヲ國別ト爲セハ北米合衆國ノ約 86萬佛噸最多ク、之ニ次クハ獨逸及加奈太ノ共ニ約 5萬

佛噸、墨其西ノ約 4萬佛噸等ニシテ、本邦ノ約 11萬佛噸ヲ產シ北米合衆國ニ亞ク銅產國ナリ。1918年ノ世界ニ於ケル石炭ノ總產額ハ約 14億3,100萬佛噸ニシテ之ヲ國別ニ見ルニ、北米合衆國最多ク約 3億8,580萬佛噸、之ニ次クハ英國ノ約 2億5,500萬佛噸、獨逸ノ約 7億4,100萬佛噸、本邦ハ約 8,803萬佛噸ナリ。1917年ニ石油ノ世界ニ於ケル總產額ハ約 4億4,157萬石ニシテ之ヲ國別ニ見ルニ北米合衆國ノ約 29,561萬石最多ク、之モ次クハ露西亞ノ約 6,083萬石、墨其西ノ約 4,874萬石、蘭領東印度ノ約 1,139萬石、印度ノ約 749萬石、「カリシア」ノ約 526萬石、本邦ハ約 251萬石、羅馬尼約 236萬石、秘露ノ約 3萬石等ヲ多シト爲ス。

大正七年中ノ鑛產物ヲ地方別ニ見ルニ、金ヲ 50貫以上產出セルハ大分、茨城、鹿兒島、秋田、新潟、栃木ノ諸縣ナリ。銀ハ茨城縣最モ多ク產シ其ノ他 1,000貫以上產セルハ栃木、大分、秋田、岡山、岐阜、青森、鹿兒島、兵庫、新潟ノ諸縣ナリ。銅ノ產額ハ秋田、栃木、茨城、愛媛ノ諸縣最多ク其他 300萬斤以上產セルハ大分、岡山、青森、兵庫、石川ノ諸縣ナリ。鉛ヲ 50萬斤以上產セルハ岡山縣ヲ最多トシ其他岐阜、福岡、宮城、秋田ノ諸縣ナリ。亞鉛ヲ 50萬斤以上產出セルハ山口縣ヲ最多トシ其他大分、岡山、宮城、兵庫、大阪、靜岡、岩手ノ諸府縣ナリ。鐵ヲ 5,000佛噸以上產出セルハ北海道、岩手、島根、鳥取、福岡ノ諸縣ナリ。硫化鐵鑛ヲ 100萬貫以上產出セルハ和歌山、岡山、山梨、靜岡、愛媛ノ諸縣ナリ。格魯謨鐵鑛ハ鳥取縣最多ク產シ其他 5萬貫以上ヲ產セルハ北海道、岡山、靜岡ノ諸縣ナリ。滿俺鑛ヲ 50萬貫以上產セルハ北海道、京都、岐阜、青森、大分、栃木、長野、靜岡ノ諸府縣ナリ。重石鑛ヲ 1萬貫以上產セルハ山口、茨城、岐阜ノ諸縣ナリ。水鉛鑛ヲ 500貫以上產セルハ島根、富山ノミ。石炭ノ產額ハ福岡縣ノ 1,541萬佛噸最多ニシテ北海道ノ 414萬佛噸之ニ次キ福島縣 242萬佛噸、佐賀縣 212萬佛噸其他長崎、山口ノ諸縣ヲ多シト爲ス。亞炭ヲ 1萬佛噸以上ヲ產セルハ愛知、山形、岐阜、群馬ノ諸縣ナリ。石油ノ原油產額ハ新潟縣最モ多ク 130萬石ニシテ秋田縣ノ 84萬石之ニ次キ、其他北海道及靜岡、山形、長野ノ諸縣ニ產ス。石油瓦斯產額ハ新潟縣ニ 63萬千立方尺、秋田縣ニ 30萬千立方尺、鹿兒島縣ニ僅ニ 344千立方尺アルノミナリ。硫黃ヲ 5千佛噸以上ヲ產セルハ岩手、福島、栃木、ノ諸縣ナリ。其ノ他ノ鑛物ニシテ前年ヨリ多產ナルハ蒼鉛、黑鉛燐鑛、水銀、硫化安母質尼ニシテ、土瀝青、安質母尼錫、蒼鉛鑛ハ前年ヨリ減收セリ。

大正七年中鑛山ノ變災ハ 172,269回ニシテ前年ヨリ 7,545回ヲ增加セリ。總數中 79.53%ハ石炭山ノ變災ニシテ四分ノ三以上ヲ占メ、金屬山ハ 19.21%、石油山ハ 0.41%、其ノ他ノ非金屬山ハ 0.85%ニ當ル。之ヲ前年ノ同一比例ニ比スルニ石炭山ハ 2.41%ヲ增シ金屬山ハ 1.53%石油山ハ 0.10%其ノ他ノ非金屬山ハ 0.78%ヲ減シタリ。變災ハ坑內ニ起レルモノ多ク 80.21%ヲ占メ、坑外ニ生セルハ 19.79%ノミナリ。而シテ死者ノ最多キハ坑內ニ於ケル落盤ニシテ 48.05%ヲ占メ、之ニ次クハ瓦斯又ハ炭塵ノ爆發ノ 8.59%ナリ。重傷者最多キハ落盤ノ 50.68%ニシテ、輕傷者最多キモ亦落盤ノ 43.09%ニ當リ、坑車ノ爲負傷セシ者ハ 11.11%ナリ。坑外ニ於ケル死亡者中最多キハ鑛車又ハ架空索道ノ爲ノ死亡ニシテ 20.15%ヲ占メ、重輕傷者ニ於テモ鑛車或ハ架空索道ノ爲ノモノ多ク、內重傷者ハ 22.88%、輕傷者ハ 17.51%ナリ。

IX. 工業及賃金

〔官營工場〕 大正八年度末現在ノ諸官廳直轄工場ハ總數 157箇所ニシテ前年度末ニ比シ 4箇所ヲ減少セリ。是等ノ工場ニ於ケル原動機ノ臺數ハ 7,563臺ニシテ其ノ馬力ハ合計 383,505馬力ナリ。此ノ臺數ヲ種類別百分比ト爲セハ蒸氣 7.85%電氣(發電機共) 90.72%、其ノ他 1.43%ニ當リ、又其ノ馬力ハ蒸氣 40.33%、電氣(發電機共) 57.45%、其ノ他 2.22%ニ當ル、此ノ分節比例ヲ五年前ナル大正三年度末ニ比スレハ同年ノ臺數ハ蒸氣 11.10%、電氣 86.36%、其ノ他 2.54%ニシテ其ノ馬力ハ蒸氣 42.32%、電氣 54.84%、其ノ他 2.84%ナリ。即チ近々五年間ニ於テ電氣原動氣ノ數著シク增加セリ。

大正八年度末官營工場ノ職工總數ハ 163,571人ニシテ內男 122,484人、女 41,087人ナリ。之ヲ五年前ナル大正三年度末ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ男ハ 115.4、女ハ 124.5ニ當リ、官營工場ノ漸次增大セルヲ知ルヘシ。是等職工ノ一日平均給料ハ男 1圓10錢、女 54錢ニシテ前年ニ比シ男ハ 21錢、女ハ 15錢ヲ增加シ、五年前ニ比シ男ハ 46錢、女ハ 26錢ノ增加ヲ爲セリ。蓋シ一般勞銀昂騰ノ趨勢ニ伴ヒ、官營工場職工ノ給料モ亦上昇セルモノナラン、又職工一日平均ノ給料ヲ各省別ニ見レハ男ニ於テハ海軍省各工場ノ一日平均 1圓63錢最高ク、製鐵所 1圓45錢、陸軍省各工場 1圓32錢、內閣 94錢、遞信省 83錢、之ニ亞キ、大藏省各工場 72錢最モ低シ又女ニ在リテハ製鐵所 87錢、海軍省各工場 79錢ヲ最高トシ、陸軍省各工場 71錢、內閣 49錢、大藏省各工場 39錢相次テ高ク、遞信省 27錢最低シ。大正八年度一ケ年間ニ於ケル職工ノ平均就業日數ヲ見ルニ男 314日、女 302日ニシテ、之ヲ五年前ニ比スレハ男 1日ヲ減シ女ハ 1日ヲ增シタリ。又一日平均就業時間ハ男 10.3時女 9.5時ニシテ五年前ニ比シ男ハ 0.2時間ヲ增シ女ハ前年ト等シク 0.4時間ヲ減シタリ。

〔一般工場〕 官營工場ヲ除キタル一般工場中職工徒弟十人以上ヲ使用スル工場ハ大正七年末ニ於テ 22,391箇所アリ、之ヲ前年ニ比スレハ 1,425箇所ヲ增加シ五年前ナル大正二年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 141.6ニ當リ其ノ增加率頗ル顯著ナルヲ見ル。更ニ此ノ工場ヲ原動力ヲ用ユルト否トニ分テハ原動力ヲ用ユルモノ 15,632箇所、用ヰサルモノ 6,759箇所ニシテ五年前ニ比シ各百ニ對スル指數ヲ求ムレハ前者ハ 166.2、後者ハ 105,5ニ當リ、特ニ原動力ヲ使用スル工場ノ增加著シキヲ示セリ。是等工場ニ於ケル一日平均ノ使用職工ハ男 646,115人、女 763,081人、計 1,409,196人ニシテ總員ノ前年ヨリ增加セルコト 128,232人ナリ。此等男女職工ヲ五年前ニ比較シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ男 172.0、女 141.1ニ當リ、之ヲ官營工場ノ同一指數ト比較スレハ男女共ニ一般工場ノ方遙ニ增加率ノ高キヲ示セリ。如斯ハ最近歐洲大戰ノ影響トシテ民間工業ノ勃興特ニ著シカリシ故ナラスンハアラス。一般工場ニハ職工ノ外ニ勞働人夫アリ其ノ數男 74,190人女 21,375人、計 95,565人ニシテ最近二ケ年ニ比スレハ增加セルモ之ヲ既往ニ比スレハ大体減少ノ傾向アルモノノ如ク即チ五年前ノ百ニ對スル指數ハ男 54.2女 44.5ニ當レリ。

一般工場ノ職工一日一人ノ平均賃金ハ十五歲以上ノ男ハ 92錢、女ハ 48錢、十五歲未滿ノ男ハ 46錢女ハ 30錢ニシテ十五歲以上ノ女ハ男ノ賃金ニ比シ殆ント半額ニ等シキ賃金ナルニ、十五歲未滿ニ於テハ男ノ 100ニ對スル女ハ 65ノ割合ナルハ注目スヘキ現象ニシテ畢竟十五歲未滿ノ若年者ニ在リテハ男女ノ作業能率大差ナキカ故ナルヘシ。此等男女ノ平均賃金ヲ前年ニ比スレハ十五歲以上ハ男 25錢、女 15錢、十五歲未滿ハ男 17錢女 9錢ノ增加ニシテ何レモ著シク昂騰セリ。是戰時中各種工業會社ノ利潤多カリシ反映ナラスンハアラス、然シナカラ之ヲ官營工場ノ職工賃金ニ比シ甚タ低キハ果シテ眞實ナリヤ否ヤ、思フニ一般工場ハ私人ノ經營ニ係ルヲ以テ課稅等ノ關係上賃金ノ如キモ或ハ事實ヲ過少ニ報告スルノ弊ナシトセス、其ノ結果何等課稅等ニ顧慮スルコトナク眞正事實ヲ報告スル官營工場トノ間ニ格段ノ差違ヲ生シタルニ非ラサルナキ歟。

一般工場一年間ノ就業日數ハ男女ヲ通シ 301日ニシテ之ヲ五年前ニ比スレハ 4日ヲ減少セリ而シテ一日平均ノ就業時間ハ 11時間ニシテ前年ヨリ 1時間ヲ減少セリ。之ヲ官營工場ト比較スルニ就業日數ニ於テ 7日少ナク。就業時間ニ於テハ 1時間多シ。

大正七年末ノ一般工場ヲ其ノ種類ニ依リテ分テハ總數百ニ付染物工場ハ 47.15%、機械及器具工場ハ 13.92%、化學工場ハ 12.10%飲食物工場ハ 12.26%、雜工場ハ 13.95%、特別工場ハ 0.62ナリ。之ト比較センカ爲五年前ナル大正二年ノ同一分節比例ヲ算出スレハ染物工場ハ 52.44%、機械及器具工場ハ 8.80%、化學工場ハ 10.33%、飲食物工場ハ 11.78%、雜工場ハ 14.01、特別工場ハ 2.64ニ當ル、而シテ各種工場ヲ大正二年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ染物工場ハ 127.3、機械及器具工場ハ 223.9、化學工場ハ 165.9、飲食物工場ハ 147.3、雜工場ハ 141.0、特別工場ハ 33.3ニ當レリ。即チ特別工場ヲ除ク外總テ增加シ就中機械及器具工場ハ增加著シ。以上ノ工場中染物工場ハ原動力ヲ用ユルモノ 72.18%ニシテ一工場ノ平均一日ノ使用職工(以下單ニ平均職工ト稱ス)ハ 74人ニ當レリ。此ノ種工場中最モ多キハ織物業 5,203、製糸業 3,268ニシテ一日平均使用職工最多キハ紡績業 597人ナリ。機械及器具工場ノ原動力ヲ用ユルハ 85.98%、用ヰサルハ 14.02%ニシテ平均職工 93人ニ當リ。此種工場中最モ多キハ金屬製造業 1,405ニシテ、平均使用職工最多キハ船舶車輛製造業 337人ナリ。化學工場ハ原動力ヲ用ユルモノハ 61.09%用ヰサルモノハ 38.91ニシテ、平均職工ハ 59人ナリ。此種工場中最多キハ窯業 1,211製紙業 374等ニシテ、一日平均使用職工最多キハ發火物製造業 115人ナリ。其ノ他飲食物工場、雜工場、特別工場ニ於テモ原動力ヲ用ユルモノ何レモ過半數ヲ占メ、用ヰサルモノハ漸次減少シツヽアリ。而シテ一日平均使用職工ノ如キモ事業ノ膨脹ト共ニ逐年增加ヲ示セリ。

一般工場ヲ地方別ニ見レハ最多キハ大阪府ニシテ其ノ數 2,675之ニ亞クノ東京府 2,595、愛知縣 2,111、兵庫縣 1,826等ト爲ス。又工場數ノ最少ナキハ沖繩縣 33ヲ始メ青森縣 66、宮崎縣 70、大分縣 81等ナリトス。

〔各種工業〕 大正七年ノ事實ニ依リ本邦各種ノ工業ヲ見ルニ、製糸業ハ年末現在戶數(上記ノ工場數ヲ包含セス以下同シ) 255,750ニシテ、前年ニ比シ 13,986戶ヲ減シタリ。此ノ戶數ハ啻ニ前年ヨリ減少シタルノミナラス既往各年ニ比シテ亦減少ヲ示セリ。即チ五年前ナル大正二年ノ百ニ對スル同七年ノ指數ハ 76.7ニ當レリ。然ルニ蠶糸類ノ生產高ハ大正七年中ニ於テ 789萬貫ヲ得、之ヲ前年ニ比スレハ約 17萬貫ヲ增加シ、五年前ニ比スレハ約 305萬貫ノ增加ニ當リ、全然製糸戶數ト反對ノ現象ヲ示ス。如斯ハ大規模ナル機械設備ノ工場漸次增加スルト共ニ、舊來ノ手工的製糸戶數ハ自然之ニ壓倒セラルヽカ故ナラン。此ノ製糸戶數ヲ地方別ニ見レハ長野縣ノ 32,964戶最モ多ク、群馬縣 25,029戶、福島縣 20,393戶、之ニ亞ケリ。又蠶糸生產高ヲ價格ニ見積レハ總類 54,654餘萬圓ニシテ前年ヨリ約 12,674萬圓ヲ增加セリ、之ヲ地方別ニ見レハ長野縣約 15,793萬圓ヲ最高トシ、愛知縣約 5,614萬圓、群馬縣約 4,142萬圓、埼玉縣約 2,869萬圓等亦多キ地方ニ屬ス。

大正七年中就業シタル眞綿製造業ハ 243,450戶ニシテ、前年ニ比

シ 8,597戸ヲ増加シタリ。其ノ製産高ハ 123,875貫ニシテ既往ニ於テハ年々増加ノ傾向ナリシカ本年ノミハ前年ニ比シ 2,512貫ヲ減少セリ。

眞綿ノ製造戸數ヲ地方別ニ見ルニ、長野縣 44,517戸最モ多ク、次テ群馬縣 23,566戸、岐阜縣 22,095戸等之ニ亞キ其ノ生産高ハ普通蠶種ハ長野縣 20,207萬蛾ヲ始メトシ愛知縣 7,280萬蛾、岐阜縣 6,905萬蛾等相次テ多ク、原蠶種モ亦長野、愛知、岐阜ノ諸縣ニ於テ最モ多ク産ス。

紡績業ハ年末現在戸數綿糸紡績 285戸、絹糸紡績 21戸、麻糸紡績 14戸ニシテ、何レモ前年ニ比シ若干ノ増加ヲ爲セリ。是等紡績事業ニ從事スル職工ハ 171,791人ニシテ、内女工約七割餘ヲ占ム。而シテ其ノ生産高ヲ見ルニ、綿糸紡績約 10,046萬貫、絹絲紡績約 81萬貫、麻糸紡績約 438萬貫ニシテ、共ニ既往ニ比シ増加セリ。紡績戸數ヲ地方別ニ見ルニ、綿糸ハ愛知縣 174戸最モ多ク大阪府 32戸之ニ亞キ、絹絲ハ東京府 7戸、愛知縣 5戸最多シ。麻糸ハ東京府 4戸、栃木縣 3戸ナ多シトス。又其ノ産額ニ就キ見ルニ、綿糸ハ大阪府最モ多ク其ノ額 3,230萬貫ニ及ヒ、絹絲ハ神奈川縣約 38萬貫ナ多シトシ、麻糸ハ大阪府約 163萬貫ヲ最高トス。機業ハ年末現在戸數 540,903戸ニシテ、前年ニ比シ 1,562戸ヲ減少セリ。之ニ從事スル職工數ハ 951,472人ニシテ、前年ニ比シ 49,815人ヲ増加シ、五年前ニ比シ 283,529人ヲ増加セリ。是等職工中ノ過半ハ女工ニシテ、男工ハ女工ノ一割ニモ充タス。織物ノ生産額ヲ價格ニ見積レハ 118,927萬圓ニシテ、前年ニ比シ約 46,085萬圓ノ激増ヲ爲シ、五年前ヲ百トシタル指數ハ 333.6ニ當リ、最近五年間ニ於テ三倍以上ノ増加ヲ爲セリ。如斯ハ勿論生産額ノ激増ニ主因スト雖、一面單價ノ如何ニ騰貴セシカヲ想起セスンハアラサルナリ。今織物價額ノ最モ多キ地方ヲ列記スレハ、大阪府約 19,009萬圓、愛知縣約 13,623萬圓、福井縣約 10,681萬圓等ノ順序ナリ。

莫大小ノ製造戸數ハ 2,232戸ニシテ、前年ヨリ 32戸ヲ増シタリ。之ニ從事スル職工ハ 24,638人ニシテ、五年前ニ比シ 14,400人ヲ増加セリ。又其ノ産額ハ約 6,859萬圓ニシテ、前年ニ比シ約 1,738萬圓ノ激増ヲ爲セリ。本業ハ歐洲大戰開始以來特ニ著シキ發達ヲ爲シタルモノニシテ、之ヲ大正二年ニ比スレハ其ノ産額實ニ四倍以上ノ増加ナリ。莫大小製造業ノ最モ多キハ大阪府 1,021戸ニシテ、東京府 244戸、兵庫縣 192戸、愛知縣 184戸等之ニ次テ多シ。

時計製造業ハ年末現在ニ於テ 22戸在リ。既往ニ比シ寧ロ減少ノ傾向ナリシモ、本年ニ至リテ 3戸ノ増加アリ。而シテ之ニ從事スル職工ハ一日平均 3,631人ニシテ、前年ニ比シ 782人ノ増ヲ爲シ、五年前ニ比スレハ二倍以上ノ増加ニ當レリ。職工數ノ増ハ多クノ場合ニ生産額ノ増加ヲ促スモノニシテ本年ノ産高ハ數量約 122萬箇、價額約 395萬圓ニシテ、之ヲ五年前ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、箇數 131.6、價額 211.6ノ増加ニシテ、價額ノ増加特ニ著シキハ、其ノ市價甚シク騰貴シタルカ爲ナラン。時計製造高ヲ地方別ニ見レハ東京府約 237萬圓、愛知縣約 155萬圓ハ最モ多キモノニシテ、我國ニ於ケル時計ノ製造ハ殆ト此ノ兩府縣ニ産スト言ヒ得ヘク他ノ府縣ニ於テモ多少製造スルト雖微々トシテ振ハサルカ如シ。

陶磁器製造業ハ年末現在 6,988戸ニシテ、是ニ從事スル職工ハ 49,181人ナリ、又其ノ生産額ハ約 4,421萬圓ニシテ前年ニ比シ約 1,48[illegible]萬圓ヲ増加シ、五年前ノ百ニ對スル指數 250.2ニ當レリ。生産額ノ最モ多キハ愛知縣ニシテ其ノ額 1,988萬圓ニ及ヒ總數ノ約四割五分ヲ占ム。

玻璃製造業ハ年末現在戸數 1,062戸、職工 20,930人ニシテ五年前ニ比シ、何レモ二倍半ニ近キ増加ヲ爲セリ。其ノ産額ハ約 4,192萬圓ニシテ前年ニ比シ 1,456萬圓ノ増加ヲ爲シ、五年前ニ比スレハ約七倍ノ増加ニシテ、近時斯業ノ發達著シキヲ想ハシム。

煉瓦製造業ハ年末現在戸數 869戸、職工 17,297人ニシテ、是カ産額ハ數量約 79,701萬箇、價額約 2,503萬圓ニシテ、五年前ノ百ニ對スル指數箇數ハ 161.7價額 401.4ニ當リ價額ノ増加特ニ著シ。

瓦業ハ年末現在戸數 11,730戸、職工 38,852人、生産額數量約 56,034萬箇、價額 2,301萬圓ニシテ、煉瓦製造業ノ發達ニ比シ、稍々遜色アリト雖逐年増加ノ傾向アリ。

革類製造業ハ年末現在戸數 1,049戸ニシテ前年ヨリ 66戸ヲ増加シ、之ニ從事スル職工ハ 4,137人ニシテ戸數ノ増加ニ伴ヒ職工モ亦増加セリ。其ノ生産價額ハ約 3,471萬圓ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 762萬圓餘ノ増加ヲ爲シタリト雖、最モ盛ナリシ大正五年ニ比スレハ猶多シト言フヘカラス。

和紙製造業ハ年末現在戸數 45,474戸、從事職工 149,318人ニシテ前年ニ比シ、戸數 387戸ヲ減シタルモ從事職工ハ却テ 1,933人ノ増加ヲ示セリ。其ノ生産價額ハ約 5,393萬圓ニシテ、前年ニ比シ約 1,765萬圓ヲ増加シ、五年前ニ比スレハ、約 3,300萬圓ヲ増加セリ。此等生産額ヲ地方別ニ見レハ、高知縣ノ約 1,027萬圓最モ多ク愛媛縣ノ約 609萬圓、兵庫縣ノ約 382萬圓等之ニ次ク。

西洋紙ノ製造戸數ハ 65戸ニシテ、前年ニ比シ 10戸ヲ増加セリ。從テ職工モ亦増加シテ 13,212人トナリ、其ノ生産額ハ數量約 87,575萬封度、價額約 10,309萬圓ニシテ啻ニ前年ニ比シ激増ヲ示シタルノミナラス、既往ニ比シテモ亦著シク増加セリ。即チ之ヲ五年前ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、數量 233.7價額 448.1ノ増加ヲ示セリ。此等生産額ヲ地方別ニ見レハ靜岡縣最モ多ク年額約 2,267萬圓ヲ産シ、東京府約 1,567萬圓、大阪府約 1,221萬圓、兵庫縣約 1,036萬圓等相次テ多シ。

油類製造業ハ既往ニ於テハ遲々トシテ振ハサリシカ、最近ニ至リ遽ニ増加シテ、戸數 21,508戸職工 28,948人トナリ、其ノ生産年額 5,440萬圓ノ多キニ及ヘリ。

木蠟ハ漸次製造戸數ヲ減シテ 1,259戸トナリ、從事職工數亦逐年減少ノ傾向アリテ本業ハ既往ニ比シテ甚タ振ハサルモノヽ如シ。其ノ生産高ハ生蠟數量約 209萬貫、價額約 403萬圓、晒蠟數量約 9[illegible]萬貫、價額約 397萬圓ニシテ、何レモ前年ヨリハ多少ノ増加ヲ示シタルモ既往ニ比スレハ減少セルヲ見ル。

酒類ノ製造家ハ明治四十二年以來漸次減少シテ、現在ニ於テハ 12,071戸トナリ、前年ニ比シ 6戸ヲ減少セリ。然レ共其ノ生産額ハ反對ニ逐年増加シ大正六年ニハ 556萬石餘ニ上リタルモ本年ニ至リ約 10萬石ヲ減シテ 546萬石トナレリ。但シ此ノ現象ハ米價騰貴等ノ關係上一時的ニ減少シタルモノナルヘク、其ノ大勢ハ増加ニアルモノノ如シ。酒類産額ノ多キハ兵庫縣、福岡縣、廣島縣等ナリ。

麥酒ノ製造戸數ハ 10戸ニシテ、前年ニ比シ一戸ヲ増加シタルモ既往ニ比スレハ寧ロ減少ノ傾向ナリ。然レ共其ノ産額ハ益々増加シテ約 68萬石ニ上リ、五年前ノ百ニ對スル指數ハ 305.4ニ當レリ。

酒精及酒精含有飲料ノ製造戸數ハ 337戸ニシテ、其ノ産額ハ 38,609石ナリ。本業ハ年々盛況ニ向ヒ産額ハ五年前ノ百ニ比シ 176.0ニ當レリ。

醬油製造業ハ戸數 12,224戸ニシテ、年々減少スレ共産額ハ反對ニ増加シテ今ヤ 291萬石ニ達シ、之ヲ五年前ニ比スレハ約 55萬石ノ増加ニ當レリ。醬油製造家ノ最モ多キ地方ハ岡山縣 642戸、廣島縣 613戸、兵庫縣 557戸等ニシテ産額ノ多キハ千葉縣約 49萬石、愛知縣約 20萬石、香川縣約 18萬石等ニシテ製造戸數ノ多少ト産額ノ大レト相伴ハサルヲ見ル。

砂糖製造業ハ戸數及從事職工ノ數詳ナラス、其ノ生産額ハ約 15,859萬斤ニシテ逐年増加シツヽアリシカ、本年ハ前年ニ比シ 6,765萬斤ノ激減ヲ爲セリ。如斯ノ其ノ如何ナル理由ニ依ルヤ、此ノ事實ノミニテハ、原因ヲ尋ヌルコトヲ得サルヲ遺憾トス。

工業藥品製造業ハ年々盛況ニ赴キ戸數 841戸トナリ、職工亦増加シテ 13,807人トナレリ。又其ノ生産額ハ約 4,740萬圓ニシテ、前年ニ比シ 147萬圓ノ増加ヲ爲シ、歐洲大戰開始以前即チ大正二年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 實ニ六倍以上ノ巨額ニ上レリ。

粗製樟腦及樟腦油製造業ハ戸數 2,777戸、職工 6,272人ニシテ、前年ニ比シ戸數ハ 497戸、職工ハ 1,330人ヲ減シタリ。生産額モ亦減少シテ數量約 140萬斤、補償金約 87萬圓トナリ、過去五年間ニ於テ未タ嘗テ見サル所ノ少額ナリ。

薄荷ノ製造戸數ハ 3,348戸從事職工ハ 7,338人ニシテ前年ニ比シ、何レモ其ノ半數ニ近キ減少ヲ示シ、從テ生産額モ亦減少シテ數量約 86萬斤價額約 486萬圓トナレリ。

製藍業ハ大正三年以來時局ノ影響ヲ蒙リ著シク盛大ニ赴キシカ最近ニ至リ稍衰微ノ徴アリ。即チ製造戸數ハ 8,283戸、職工 11,225人ニ減少シ從テ生産額モ亦數量約 61萬貫、價額約 111萬圓ニ減シ、前年ニ比シ、前者ハ約 10萬貫後者ハ約 4萬圓ノ減少ヲ見タリ。

藥業モ亦藍同樣一時盛況ナリシモ、漸次減退シテ大正七年ニ至リテハ、産額數量 136萬貫、價額約 285萬圓トナレリ。漆液ノ製造戸數ハ 438戸ニシテ、五年前ニ比シ半數以上ヲ減少セリ。然レ共其ノ産額ニ至リテハ、益々増加シテ 171萬圓ヲ算スルニ至リ、五年前ニ比スレハ約三倍ノ増加ニ當レリ。

漆器ハ年末現在戸數 7,416戸ニシテ、前年ヨリ 142戸ヲ増加シ、從事職工ハ 22,668人ニシテ、各年増加セリ。而シテ其ノ産額ハ 1,619萬圓ニ上リ、五年前ノ百ニ對スル指數ハ 168.3ニ當レリ。漆器製造家ノ最モ多キハ靜岡縣 954戸、石川縣 901戸等ニシテ、最モ少ナキハ宮崎縣 4戸大分縣 19戸等ナリトス。

燐寸ハ製造戸數 196戸、職工 21,156人ニシテ、前年ニ比シ戸數 6戸ヲ増シタルモ、職工ハ 1,499人ヲ減セリ。又其ノ産額ハ數量約 58,037萬打、價額約 3,969萬圓ニシテ、既往各年皆増加シツヽアリシカ、本年ハ數量ノミ稍減少セリ。燐寸製造ノ最モ多キハ兵庫縣ノ約 3,097萬圓ニシテ、總額ノ殆ント八割ヲ占ム。之ヨリ遙ニ下リテ大阪府ノ 566萬圓アリ。

機械製麥粉ハ製造家 19,074戸、其ノ産額數量約 74,103萬斤、價額 9,845萬圓ニシテ、之ヲ五年前ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、數量 148.5、價額 278.8ニ當レリ。而シテ數量ノ増加ニ比シ、價額ノ増加率著シク高キハ單價ノ昂騰ニ依ルモノナラスンハアラス。

澱粉製造ハ戸數 83,425戸ニシテ前年ニ比シ 12,892戸ヲ増加シタ

リ。又其ノ產額ハ數量約 20,953萬貫、價額約 2,761萬圓ニ上リ、前年ニ比シ增加セルコト著シ。

寒天製造ハ戶數 381戶之ニ從事スル職工ハ 4,258人ニシテ、五年前ノ百ニ對スル指數ハ戶數 111.7、職工 101.8ニ當ル。又其ノ產額ハ約 347萬圓ニシテ、五年前ノ百ニ對スル指數ハ 192.6ニシテ戶數及職工ノ增加ニ比シ、產額ノ增加特ニ著シ 是亦單價ノ昂騰ニ因ラスンハアラス。

罐詰ノ製造戶數ハ漸次減少ノ傾向ナリシカ、本年ノミハ稍增加シテ 612戶トナリ職工亦六百餘人ヲ增加シテ 6,617人トナレリ。然シ乍ラ、其ノ生產額ハ戶數及職工ノ增減ニ不拘年々增加シテ、本年ハ約 1,262萬圓ノ多キニ上リ、既往ニ於テ未タ嘗テ見サル所ノ巨額ナリトス。

製茶業ハ近年著シク發達シテ製造戶數 1,148,242戶トナリ、之カ產額數量約 1,076萬貫、價額約 2,612萬圓ニ增加シ、五年前ニ比シ數量約二百萬貫、價額六百萬圓以上ノ增加ヲ見タリ。製茶戶數ヲ地方別ニ見レハ鹿兒島縣 112,478戶最モ多ク、廣島縣 87,674 戶熊本縣 62,621戶、宮崎縣 58,481戶等相次テ多ク、又產額ハ靜岡縣 1,151萬圓ヲ最高トシ、之ヨリ遙ニ下リテ三重縣 181萬圓、京都府約 163萬圓等之ニ次テ多シ。

疊表製造家ハ 89,856戶ニシテ、前年ニ比シ 2,661戶ヲ減少シ其ノ產額ハ約 1,128萬圓ニシテ前年ヨリ 243萬圓ヲ增加セリ。又莫蓙及花蓙製造ハ 27,430戶ニシテ總額約 800萬圓ナリ。

麥稈細木及麻眞田業ハ歐洲大戰後一時非常ノ盛況ナリシカ、本年ニ至リ稍々不況ニ陷リシカ如ク、其ノ製造戶數ハ 84,180戶、職工 234,996人ニシテ、何レモ前年ニ比シ減少シ、產額亦減シテ數量約 6,337萬反價額約 1,639萬圓トナレリ。斯業ノ盛大ナル地方ハ岡山、香川、廣島、山口ノ諸縣ナリ。

マニラ眞田ハ製造戶數並ニ從事職工數ヲ詳ニセス。其ノ產額ハ約 999萬圓ニシテ、最モ多ク產出スル地方ハ神奈川縣 233萬圓、東京府 180萬圓、新潟縣 125萬圓等ナリトス。

刷子及刷毛ノ製造家ハ 777戶從事職工 6,811人ニシテ、之カ產額ハ約 1,100萬打價額約 939萬圓ナリ。本業ハ逐年增加シツヽアリテ、之ヲ既往ニ比スレハ其ノ發達著シキヲ見ル。

鉛製造業ハ大正五年以來著シク增加セシカ、本年ニ至リ稍々減少シテ戶數 1,503戶職工 11,345人トナレリ。然レ共、其ノ產額ハ減少セス即チ總額約 1,307萬圓ニ上リ、前年ニ比シ 300萬圓以上ノ增加ヲ爲シ戰前即チ大正二年ニ比スレハ五倍以上ノ增加ニ當レリ。要之我國現下ノ工業界ハ歐洲大戰ノ影響ヲ蒙リ、諸工業一齊ニ隆盛ヲ極メ、生產額ノ如キ戰前ニ比シ一倍以上六倍ノ激增ヲ示シ、今猶侵々トシテ盛大ニ赴キツヽアリト雖、如斯狀勢カ果シテ永續スルヤ否ヤ、其ノ局ニ在ル者ノ特ニ注目セサルヘカラサルナリ。

【發明特許、實用新案、意匠商標登錄】 大正七年中ニ於ケル發明特許ノ出願數ハ 7,383件ニシテ前年ヨリ增加セルコト 901件其ノ特許ヲ得タル件數 1,653件中內國人ノ出願ニ係ルモノ 1,176件、外國人ノ出願ニ係ルモノ 477件ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ內國人ハ 87件、外國人ハ 118件ヲ增加セリ。

實用新案登錄ノ出願數ハ 14,045件ニシテ、前年ヨリ增加セルコト 427件、其ノ登錄數 2,737件中內國人 2,731件、外國人 6件ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ內國人 8件、外國人 4件ヲ增シタリ。意匠登錄出願數ハ 2,673件ニシテ、前年ニ比シ 1,090件ヲ減ス。而シテ其ノ登錄數ハ 1,169件ニシテ、中內國人 1,167件、外國人 2件ナリ。商標登標ノ出願數ハ 19,561件ニシテ、前年ニ比シ 3,079件ヲ增加シ、其ノ登錄數 8,991件中內國人 8,317件、外國人 674件ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ內國人 1,940件、外國人 147件ヲ增加セリ。

發明特許及實用新案登錄ノ趨勢ヲ知ランカ爲メ近キ十年間ヲ二分シ明治四十二年ヨリ大正二年ニ至ル前五年ト、大正三年ヨリ同七年ニ至ル後五年トヲ比較スルニ、發明特許ノ出願數ハ前五年 32,535件、後五年 33,097件ニシテ、前五年ノ百ニ對スル後五年ハ 101.7ニ當リ、後五年ノ出願數稍增加セルヲ見ル。而シテ內國人ニ係ル特許數ハ前五年ハ 6,443件、後五年ハ 6,476件ニシテ、前五年ノ百ニ對シ後五年ハ 100.5ニ當リ、此ノ前後兩期ニ於ケル趨勢ハ殆ト同一ノ狀態ニ在リ。出願ニ對スル特許ノ比例ハ（假ニ內國人ノミヲ算ス）前五年ハ 19.80%、後五年ハ19.57%ニ當リ出願數ノ增加ト特許數ノ增加ト相伴ハサルハ出願件數中特許ニ値セサルモノ多キニ因ルナラン。更ニ實用新案數ニ就キ見ルニ、前五年ノ出願數ハ 70,320件、後五年ハ 74,743件ナリ。之ヲ前五年ヲ百トシ後五年ノ指數ヲ求ムレハ 106.3ニ當リ漸次出願數ノ增加セルコトヲ示ス。而シテ內國人ニ係ル登錄數ハ前五年 18,685件、後五年 17,304件ニシテ、前五年ノ百ニ對スル後五年ハ 92,6ニ當レリ。此ノ出願ニ對スル登錄ノ比例ヲ見ルニ前五年ハ 26.57%後五年ハ 23.15%ニシテ、是亦登錄ニ値セサルモノ多ク出願セルニ依ルナラン。然レ共此ノ事實ヲ以テ直ニ本邦人ノ發明力ヲ漸次枯渴セリト斷スヘカラサルカ如シ。惟フニ近時科學ノ進步ニ伴ヒ發明ニ對スル審査ノ標準モ亦高マリタルナルベク、而シテ又一面ニハ出願者中萬一ヲ僥倖シテ未タ完全ナラサルモノヲ出願スル者多キヲ加フルニモ由ルナルベシ。

大正七年中ニ於ケル內國人ノ出願ニ係ル發明特許ノ數ヲ種類別ト爲セハ機械工業ニ關シ 448件、化學工業ニ關シ 464件、電氣工業ニ關シ 129件、家具及被服類ニ關シ 135件ナリ。又內國人ノ出願ニ係ル實用新案登錄ヲ種類別ト爲セハ機械工業ニ關シ 1,057件、化學工業ニ關シ 151件、電氣工業ニ關シ 111件、家具及被服類ニ關シ 1,412件ナリ。更ニ之ヲ百分比例ト爲セハ、發明特許ハ機械工業ニ關シ 38.09%、化學工業ニ關シ 39.46%、電氣工業ニ關シ 10.97%、家具及被服類ニ關シ 11.48%ニ當リ、實用新案ハ機械工業ニ關シ 58.70%、化學工業ニ關シ 5.53%、電氣工業ニ關シ 4.07%、家具及被服類ニ關シ 51.70%ニ當レリ。由是觀之發明特許ハ化學工業ニ關スルモノ最モ多ク、機械工業ニ關スルモノ之ニ亞キ、電氣工業ニ關スルモノ最モ少シ。實用新案ハ之ト異リ、家具及被服類ニ關スルモノ最モ多ク、機械工業ニ關スルモノ之ニ亞キ、電氣工業ニ關スルモノ最モ少シ。是レ發明ト新案トノ性質上正ニ然ルベキコトナラン。

【諸傭賃金】 諸傭賃金ハ各職業共ニ時局ノ影響ヲ蒙リ年々昂騰シ大正七年ニ至リテハ、大工職以下日傭人夫ニ至ル四十二職業ノ一日平均賃金ハ 1圓2錢1厘トナリ、前年ニ比シ三割二分ノ騰貴ヲ爲セリ。今各職業ニ就キ見ルニ齊シク騰貴セルモノヽ中ニ於テモ、其間自ラ高低ノ差違ナキ能ハス。即チ諸職業中最モ著シキ騰貴ヲ爲セルハ建築ニ關スル職業ノ平均賃金 136.0錢ニシテ、就中鳶大工 167.5錢、煉瓦積職 160.5錢、瓦葺職 157.5錢、石工 148.8錢等最モ高ク、何レモ前年ニ比シ 30.0錢乃至 48.2錢ノ騰貴ヲ爲セリ。次ニ騰貴シタルハ器具製造ニ關スル職業ニシテ、此ノ平均一日ノ賃金ハ 111.1錢ニ當リ、就中指物職 122.3錢、鍛冶職 116.5錢、塗師職 113.8錢等最モ高ク、前年ニ比シ 25.0錢以上 35.0錢ノ騰貴ヲ爲セリ。第三位ニ騰貴セシハ衣服身裝品ニ關スル職業、油搾職、活版植字職等ニ包含スル雜業、飲食物ニ關スル職業ノ順序ニシテ、農事ニ關スル職業最モ低シ。即チ此等職業ノ一日平均賃金ハ 69.3錢ニシテ、其中最モ高キモノハ植木職ノ 127.5錢、漁夫ノ77.0錢、農作日傭ノ 74.5錢等ナリト雖、他ノ職業ノ賃金ニ及ハサル遠ク、而シテ其ノ騰貴率モ亦多カラス。如斯工業ニ從事スル者ト農事ニ從事スル者トノ間ニ於テ、賃金及其ノ騰貴率ニ如斯差違アル所以ノモノハ、要スルニ生產利潤ノ厚薄、都鄙居住ノ別等ニ起因スルモノナラン。

X. 外國貿易

大正八年中本邦內地ニ於ケル輸出入物品ノ總價額ハ 4,405,912,219圓ニシテ、內輸出 2,180,447,035圓、輸入2,225,465,184圓、差引輸入超過 45,018,149圓ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ、總額 6.83億圓(一割八分)、輸出 1.59億圓(八分)、輸入 5.24億圓(三割一分)、ヲ增加セリ。右輸出入額ヲ帝國內地現住人口ニ割當レハ、人口一ニ付輸出ハ 38圓76錢、輸入ハ 39圓56錢、總額 78圓32錢ニ當リ前年ヨリ輸出 2圓44錢、輸入8圓99錢、總額 11圓43錢ノ增加ヲ示セリ。

今 1919年(大正八年)中ニ於ケル世界諸列强國ノ外國貿易額ヲ略觀スルニ、北米合衆國ハ輸出 155億圓、輸入 78億圓、總額 233億圓、英吉利ハ輸出 96億圓、輸入 163億圓、總額 259億圓、佛蘭西ハ輸出 35億圓、輸入 119億圓、總額 154億圓、伊太利ハ輸出 21億圓、輸入66億圓總額 87億圓ニシテ、英、佛、伊ノ三國ハ各年輸入超過額ル多シ、即チ伊太利ハ輸入ハ輸出ニ三倍シ、佛蘭西ハ三倍半ニシテ、英吉利ハ二倍弱ニ該當セリ。反之北米合衆國ハ輸出額巨大ニシテ、輸入ハ其ノ半額ニ過キサルノ狀態ナリ。

明治維新以來我國貿易發展ノ趨勢ニ就キ其ノ大要ヲ揭クレハ、明治元年ニ於ケル輸出入總額ハ僅ニ 2,600萬圓ニ過キサリシ我外國貿易ハ極メテ少數ノ例外アル外逐年增加シ、明治二十八年ニ至ルヤ、明治元年ニ比シ十倍餘ノ增加ヲ爲シ、五十年後ノ大正六年ニ至リ正ニ明治元年ノ百倍ニ增加シ、而シテ大正八年ニハ更ニ激增シテ百六十八倍トナレリ。今此間ニ於ケル輸出、輸入ノ狀勢ヲ觀ルニ、明治元年ヨリ同十四年ニ至ル迄ハ殆ト常ニ輸入超過ニシテ、輸出超過ヲ示シタルハ僅ニ明治元年及九年ノ二ケ年ニ過キサリキ、反之十五年以降日淸戰役前ナル明治二十六年ニ至ル間ハ二十一年並二十三年ヲ除クノ外ハ悉ク輸出超過ニシテ其ノ超過額ハ百萬圓乃至千五百萬圓ノ間ヲ上下シ居タリ。然ルニ二十七年ニ至ルヤ一轉シテ輸入超過トナリ、爾來大正二年ニ至ル間恒ニ此ノ狀態ヲ脫セサリキ。大正三年會々歐洲大戰ニ遭遇シテ以來一變シテ輸出超過國トナリ。年々多額ノ出超ヲ示シ殊ニ大正六年ノ如キハ殆ト六億ニ近キ輸出超過ヲ見、我貿易史上ニ一大記錄ヲ貽セシカ大正八年ニ至リ一轉シ 45百萬圓餘ノ輸入超過ヲ見ルニ至レリ。

帝國ノ外國貿易ハ以上ノ外朝鮮及臺灣ノ數アリ。其ノ大正八年ノ總額ハ朝鮮 1億1,569萬圓、臺灣 9,976萬圓ニシテ共ニ最近著シク增加セリ。而シテ臺灣ニ於テハ內地貿易ト同樣歐洲大戰ノ影響ヲ蒙リ、一時從來ノ輸入超過カ輸出超過トナリタルモ朝鮮ノ貿易ハ常ニ輸入多クシテ未タ嘗テ輸出超過ヲ見タルコトナシ。

大正八年中ニ於ケル內地輸出總額 21.80億圓中特別貿易額 8,157萬圓ヲ控除シタルモノニ就キ之ヲ相對國ノ大洲別又ハ國別ニ見ルニ、亞細亞 9.55億圓、歐羅巴 1.95億圓、北亞米利加 8.57億圓、南亞米利加 2,088萬圓、亞弗利加 2,478萬圓、其他 4,614萬圓ニシテ、之ヲ分節比例ト爲セハ亞細亞 45.5%、歐羅巴 9.3%、北亞米利加 40.8%、南亞米利加 1.0%、亞弗利加 1.2%、其他 2.2%ニ當ル。又之ヲ國別ニ見ルニ北米合衆國 8.28億圓最モ多ク、支那 44.7億圓、

關東州 1.50億圓、英領印度 1.16億圓、英吉利 1.11億圓等相次テ多額ヲ算セリ。而シテ前年ニ比シ輸出額增加セル國ノ重ナルモノハ、支那、關東州、露領亞細亞、和蘭、諸威、丁抹、北米合衆國等ニシテ其ノ減少セル重ナルモノハ、英領印度、英領海峽殖民地、蘭領印度、佛領印度、英吉利、佛蘭西等ナリ。尙南米、亞弗利加ノ諸國及濠洲方面ハ一般ニ減少ノ傾キアルハ少シク注目ニ値ス。

大正八年中ニ於ケル輸入總額 22.25億圓中特別輸入額 5,200萬圓ヲ控除シタルモノニ就キ之ヲ輸入ノ大洲別又ハ國別ニ見ルニ、亞細亞 10.74億圓、歐羅巴 1.630萬圓、北亞米利加 7.73億圓、南亞米利加 1,818萬圓、亞弗利加 5,458萬圓、其他 8,989萬圓ニシテ、之ヲ分節比例ト爲セハ、亞細亞 49.4%、歐羅巴 7.5%、北亞米利加 35.6%、南亞米利加 0.8%、亞弗利加 2.5%、其他 4.2%ニ當リ、輸入額ノ殆ト過半數ハ亞細亞ヨリ仰クノ狀況ナリ。更ニ之ヲ國別ニ見レハ、我國輸入ノ最モ多キハ、北米合衆國ヨリ 7.66億圓ニシテ、支那ヨリ 3.22億圓之ニ次ケリ。其他英領印度 3.19億圓、關東州 1.62億圓、英吉利 1.28億圓等亦多キニ屬セリ。何レモ前年ニ比シ異狀ナル增加ヲ爲シ居レリ。

大正八年中ノ輸出總額ヲ六大種別ト爲シ、其ノ分節比例ヲ求ムレハ粗生食料品 3.1%、製造食料品 4.0%、原料品 5.2%、原料用製品 43.2%、全製品 43.0%、其他ノ雜品 1.5%ニシテ、原料用製品最モ多ク、全製品之ニ亞キ、此ノ二者ヲ合スレハ 86.2%トナリ、我輸出貿易品ハ此ノ原料用製品並全製品其ノ大部分ヲ占ムルヲ知ル。今此ノ六種別ヲ十一年前ナル明治四十一年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、粗生食料品 453,製造食料品 317,原料品264,原料用製品 531,全製品 743,其他ノ雜品761,平均 554ニ當レリ。由是觀之、輸出品中最モ增加ノ著シキモノハ、全製品、原料用製品、粗生食料品等ニシテ、最モ增加セサルモノハ原料品、製造食料品ナリトス。

又此ノ六大種別ヲ輸入額ニ就キ觀ルニ、粗生食料品 12.0%、製造食料品 4.2%原料品 50.3%、原料用製品 20.8%、全製品 12.0%其他ノ雜品 0.7%ナリ。即チ、輸入ニ在リテハ原料品及原料用製品最モ多ク、全製品少ナクシテ、全然輸出ノ夫レト正反對ノ現象ヲ呈スルヲ見ル。仍テ知ル我國貿易ハ原料品ヲ輸入シ之レヲ加工シテ製品ヲ輸出スルモノナルコトヲ。故ニ此ノ點ヨリ觀察センカ輸入超過必スシモ悲觀スヘキニ非ラサルナリ。又之ヲ輸出同樣十一年前即チ明治四十一年ヲ百トシタル指數ニ依リ大正八年ノ指數ヲ見レハ、粗生食料品 632,製造食料品 836,原料品 712,原料用製品537,全製品 205,其他ノ雜品 464平均 498ニ當リ、原料品粗生食料品及原料用製品ノ增加最モ著シク、全製品ノ增加ハ微々タルモノナリ。

大正八年中ニ於ケル輸出額中三千萬圓以上ノ輸出品目ヲ擧クレハ、其ノ最モ多額ナルハ生糸ニシテ 6.24億圓ヲ算シ總輸出額ノ約三割ヲ占ム、次テ綿織物 2.80億圓、綿織絲 1.14億圓、絹織物中羽二重 1.01億圓等多額ナルモノニシテ之ヨリ下リテ石炭 3,772萬圓、燐寸 3,397萬圓、豆類 3,198萬圓等アリ以上ヲ前年ニ比スルニ、豆類、綿織絲ヲ除キ他ハ孰レモ其ノ額ノ增加シ就中生糸ハ驚クヘキ巨額ノ激增ヲ見タリ。

又輸入品ニ就キ、同シク三千萬圓以上ノ主要輸入品ヲ順次列記スレハ、其ノ最モ多額ナルハ、綿絲 6.66億圓ニシテ、總輸入額ノ三割一分弱ヲ占メ、次テ鐵 2.51億圓、米及粟 1.02億圓、肥料 1.40億圓ヲ多シトシ稍ヤ下リテ機械類 8,922萬圓、羊毛 6,130萬圓、砂糖 5,818萬圓、小麥 3,853萬圓等ヲ其ノ重ナルモノトス。而シテ以上ノ主要物品ヲ前年ト比較スルニ、最モ著シク增額ヲ示セルハ小麥ニシテ、前年ニ對シ四倍强ニ當リ米及粟ハ約二倍トナリ。其ノ他鐵ヲ除キ孰レモ增加セサルナシ。

大正八年中ノ外國貿易ヲ月別ニ見ルニ最モ輸出多キハ、十二月ニシテ次テ十月、十一月、八月、七月等相次テ多ク一月及二月最モ少シ。而シテ這ハ啻ニ本年ノミナラス既往ニ於テモ以上ノ如キ狀勢ニ在ルヲ見レハ、我輸出貿易ハ上半期ニ少ク下半期ニ至リ大ニ增加スルモノナルコトヲ知ルナリ。翻テ輸入ヲ見ルニ、其ノ最モ多キハ輸出同樣十二月ニシテ、四月、九月、八月、五月之ニ次キ、一月並七月最モ少シ、即チ輸入ニ於テモ亦下半期ニ多ク上半期ニ少ナキヲ見ル。

大正八年中ニ於ケル輸出貿易港ハ合計 35港ナリ、此等輸出港中最モ多ク輸出スルハ横濱ニシテ、總輸出額ノ四割九分ヲ占メ、次テ神戸、大阪ニシテ、共ニ總輸出額ノ二割一分ヲ占ム。其他門司、敦賀、名古屋等何レモ主要ナル輸出港ニ屬ス。又同年中ノ輸入港ハ合計 34港ニシテ、此ノ中最モ主要ナル輸入港ハ神戸ニシテ、總輸入額ノ四割七分ヲ占メ、次テ横濱ノ三割二分第二位ニ在リ、之ヨリ遙ニ下リテ大阪、門司、四日市等アリ。

輸出入物品價額ヲ物品ノ積載船籍別ニ見ルニ、輸出入共ニ其ノ約八割ハ本邦ノ船舶ニ屬シ輸出ノ一割四分輸入ノ一割ハ英船ニ屬ス。其ノ他支那、露、佛、和等ノ船舶ニ依リ輸送サルヽモ極メテ少數ナリ。

大正八年中ノ金銀貨及金銀地金ノ輸出入額ハ 332,530,959圓ニシテ、內輸出 5,053,968圓、輸入 327,476,991圓差引輸入超過 322,423,023圓ナリ。之ヲ既往ニ比スルニ輸出ニ於テハ前年ニ比シ稍增額セルモ前々年ニ比スレハ極メテ少額ナリ。又輸入ニ在リテハ前年ニ比シ頗ル激增シ前々年ト稍同額ヲ示セリ。

XI. 內國商業及會社

【商業會議所】 大正七年末內地ニ於テ商業會議所ノ總數ハ 60個所アリ。同一府縣ニシテ二個所以上ヲ有スルモノハ、北海道、青森、山形、栃木、群馬、東京、新潟、富山、福井、長野、岐阜、靜岡、愛知、三重、廣島、福岡ノ 1道 1府 14縣ナリ。又全ク存セサルモノニ岩手、千葉、奈良、鳥取、愛媛、大分、宮崎、沖繩ノ 8縣アリ。他ハ悉ク一縣一個所ヲ有ス。前年ニ比シ、一個所ヲ增セシハ即チ福島商業會議所ノ新設アリシ福島縣ナリトス。通常及特別議員ノ數ハ夫々 1,851人及 425人ナリ。前年ニ比シ通常議員數ニ 14人ヲ增シ、特別議員數ニ 3人ヲ減シタリ。選擧權者ノ總數ハ 65,699人、前年ニ比シ 13,068人ヲ增加セリ。一箇年度ノ經費ハ 589,666圓、一會議所平均 9,827圓餘ニ當ル。前年ヨリ總額ニ於テ 132,308圓ヲ增シ一會議所平均 2,076圓ニ當ル。

【取引所】 大正七年末內地取引所ノ現在數ハ 42ニシテ、前年ト異ナラス。總テ株式會社組織ナリ。仲買人ハ 915人前年ニ比シ 4人ヲ增ス。取引所ノ拂込資本金ノ總計 4,175萬圓ニシテ、就中百萬圓以上ヲ有スルモノハ、東京米穀商品、東京株式、横濱、名古屋株式、京都、大阪堂島米穀、大阪株式、大阪三品アリ。60萬乃至 80萬圓ヲ有スルモノニ名古屋米穀、神戸米穀株式、博多米穀アリ。其他ハ四日市米穀株式 17萬圓ヲ除ケハ法定最低限タル 10萬圓ナルカ、或ハ多ク之ヲ出テス。準備積立金ハ 450萬 3,916圓、仲買人身元保證金ハ 1,287萬 8,797圓ニシテ、前年ニ比シ前者ハ 59萬 9,215圓後者ハ 236萬 6,884圓ヲ增セリ。一年間ノ收入金ハ總額及賣買手數料ハ共ニ前年ニ比シ 75萬 4,292圓及 127萬 7,521圓ヲ減シ、支出金總額ニ於テ 22萬 7,655圓ヲ增加セシモ內取引所稅ニ於テ 11萬 4,603圓ヲ減シタリ。

取引所中米穀取引ヲ爲ス取引所ノ數ハ 37アリ。是等ノ取引所ニ於テ大正七年中取引シタル總石高ハ 230,550,310石ニシテ前年ニ比シテ 135,609,640石ヲ減少シ、大正二年以來ノ減少ナリ。從テ各月取引ニ於テモ前年ニ比シ四月ノ 93萬石ノ增加ヲ見シ外、各月共ニ減少ヲ見タリ。而シテ本年一月ヨリ四月ニ至ル各月ハ 2,200萬石乃至 2,500萬石ヲ上下セシカ五月ニ至リ 3,172萬石トナリ。以後低落シ八月ニ至リテ俄ニ 600萬石トナリ、九、十、十一ト增進シ十二月ニ至リテ稍不振ニ終レリ。

次ニ各月公定相場ハ取引所規則第十八條ニ依リ、取引所ニ於ケル當限米ノ每日平均相場ヲ一箇月間ニ平均シタルモノニシテ、其ノ累年表ハ更ニ各取引所ノモノヲ全國平均シタルモノナリ。大正七年ノ全國平均ハ 28.34圓ニシテ前年ニ比シ 9.16圓ノ騰貴ヲ見ル。但シ前年六月ニハ 20圓臺トナリ年末ニハ 23.14圓トナリシガ大正七年ニ入リテハ益上騰ノ趨勢ニシテ、一月ニハ 23.49圓三月ニハ 25.79圓四月ニハ 26.06圓五、六、七月ニハ 26圓內外ヲ往來シ、八月ノ 28.04圓ヲ經テ十月ニハ 30圓臺トナリ。年末ニハ 37.78圓ニ昇騰シ未タ嘗テ見サル高値ヲ示セリ。更ニ之ヲ全國取引所別ニセル各地相場ノ値開キノ最モ小ナルハ、三月ノ 2.01圓ニシテ最モ大ナルハ四月ノ 11.87圓十一月ノ 10.13圓平均ニ於テ 3.62圓ナリ。北海道、山形、岡山、愛媛ハ各月概シテ高價ニシテ仙臺米穀ハ最低價ニアルハ注意ニ値ス。

【物價】 物價ハ農商務省ニ於テ各地商業會議所ヨリ報告セシメタル主要物品ノ一箇年平均物價表ニ據リテ二表ヲ發表セリ。一ハ東京、大阪、兩市ニ就キ、明治三十三年以降大正八年ニ至ル米以下十九種ノ物價累年表ニシテ、一ハ右ト同種物品ニ就キテ大正八年ニ於ケル全國 10都會ノ物價ナリ。

東京、大阪二市ニ於ケル累年物價ハ年ノ豐凶ニ依リ、供給ノ差異アル米、麥、大豆等ノ如キ、貿易ノ關係ニ依リ相場ニ高低アル綿絲、生絲、石炭ノ如キ、若クハ稅率ノ變更ニ依リ著大ノ影響ヲ受クル清酒、醬油、砂糖ノ如キ一律ナラスト雖、歐洲大戰以後特ニ諸物價ノ騰貴ヲ來シ此趨勢ハ大正七年ヨリ大正八年ニ渉リテ增々上昇シ下落ヲ見タルハ、大正七年ニ於テ大阪ノ半紙大正八年ニ於テ大阪ノ薪ノ二種アルノミニシテ、他ハ悉ク騰貴セリ。殊ニ其ノ騰貴ノ著シキハ東京ノ紡績綿絲、茶、清酒、醬油、米、和白砂糖、生絲、晒金巾、大豆、石油、大阪ノ紡績綿絲、清酒、米、茶、和白砂糖、醬油、晒金巾、石炭、大豆、石油等ナリ。

【會社】 大正七年末現在帝國內地ニ本店ヲ有スル會社ノ總數ハ 23,028會社ニシテ、其ノ拂込資本金ハ 47億 0,708萬圓ニ上ル。前年ニ比シ社數 3,332、資本金 15億 3,552萬圓ヲ增セリ。右大正七年末ノ數ヲ組織別ニ見レハ、會社數ニ於テハ株式 10,636合資 8,424、合名 3,968アリテ前年ヨリ株式 2,162、合資 635、合名 535ヲ增シ、資本金ニ於テハ株式 13億 7,929萬圓、合資 1億 0,222萬圓、合名 5,400萬圓ヲ增加セリ。

會社ノ資本金高別ハ五萬圓未滿ノ社數最モ多ク、會社總數ノ 61.40%ヲ占ム。之ニ五十萬圓未滿ノモノヲ加フルトキハ 88.37%即チ八割八分强ハ資本金五十萬圓ニ滿タサル會社ニシテ、五十萬圓以上ハ僅ニ 2,678社、11.63%ニ過キス。但シ大會社增加ノ趨勢ハ本年ニ至リ益顯著トナレリ。乃チ資本金別會社數ハ各階級共增進ヲ見サルハナシト雖其ノ比例ハ五萬圓未滿ニ於テ大正六年ノ 66.5%ヨリ同七年ハ 61.40%ニ減退シタルニ反シ、五十萬圓以上ハ大正六年ノ 8.98%ヨリ同七年ハ 11.63%ニ增加シタリ。尙大正七年末

會社ノ拂込資本金額ハ 53.60%ニシテ既ニ總資本金額ノ 約半數以上ヲ占メ、前年ニ比シ五百萬圓未滿ノ各階級ハ共ニ低下セリ。之ヲ組織別ニ細別セハ、資本金比例ハ前年ニ比シ五百萬圓以上ハ株式、合資、合名共ニ昇騰シ、合資會社ノ十萬圓未滿五十萬圓未滿ノ二階級ヲ除キ他ハ悉ク低下セリ。而シテ株式會社及合名會社ニ於テ大會社級ノ資本金ノ割合非常ニ大ナルニ反シ、合資會社ニ於テハ小會社級ニ於テ多額ナリ。

次ニ大正七年末ニ於ケル營業種類大別ニ依ル會社數ハ農業 624、商業 12,132、工業 8,221、鑛業 357、運輸業 1,094アリテ、大部分ヲ占ムルハ商業ナリ。昨年ヨリ農業 37、商業 1,418、工業 1,544、鑛業 69、運輸業 264ヲ何レモ增加ス。更ニ此ノ增加ヲ組織別ニセハ僅ニ農業ノ合資、合名會社數ニ於テ 6、ト1、鑛業ノ合資、合名會社ニ 5、ト 3、トノ減少ヲ見タルノ外ハ總テ增加セリ。殊ニ工業ノ株式會社ニ於テ 1,110ノ增加ヲ見タルノ外、商業ノ株式 723、合資 379、合名 316、ヲ增加セリ。

營業種類大別拂込資本金ハ農業 4,561萬圓、商業 19億 4,061萬圓、工業 16億 9,821萬圓、鑛業 4億 6,821萬圓、運輸業 5億 5,442萬圓ニ達ス。此等資本金ハ昔前年ニ比シ增加セリ。此增加ヲ更ニ組織別ニ付テ見レハ鑛業ノ合資會社ノ 576萬圓ヲ減シタルノ外ハ株式、合資、合名共ニ增進セサルハナシ。拂込資本金ノ比例ニ於テハ一會社平均拂込資本金ハ鑛業 1,311,513圓、運輸業 327,290圓、工業 206,570圓、商業 159,959圓、農業 73,107圓ニ達シ、特ニ鑛業ヲ最高トシ、農業ハ最低位ナリ。前年ニ比シ農業ノ 850圓ヲ低下セル外ハ各々增加セリ。株式、合資、合名組織別ハ株式最モ資本金高ク、合名ハ鑛業ヲ除クノ外合資ヨリモ資本金額高シ。尙拂込資本金總額ノ營業大別比例ハ商業 41.23%、工業 36.08%、運輸業 11.78%、鑛業 9.94%、農業 0.97%ニシテ、商業ノ最多ナルハ會社數最モ多キニ基ク。最後ニ積立金ハ總額 16億 2,943萬圓ニ達シ、前年ニ比シ 4億 7,881萬圓增加セリ。其ノ總額ハ拂込資本金ニ對シ 34.61%ニ當ル。積立金ノ營業種類大別ハ商業 9億 4,627萬圓、工業 3億 2,169萬圓、運輸業 2億 5,496萬圓、鑛業 1,096萬圓、農業 553萬圓ナリ。

營業種類細別會社數ヲ細觀スルニ、株式會社總數ハ 10,636ニシテ中、商業 5,430、工業 3,729、運輸業 935、農業 284、鑛業 258ナリ。又合資及合名會社ハ總數 12,892ニシテ中商業 6,702、工業 4,492、運輸業 759、農業 340、鑛業 99ナリ。種類少キ運輸業、農業、鑛業ハ叙セス。只商業、工業ヲ細觀セハ、商業ニ於テハ株式會社數ハ合資、合名會社數ニ比シ雜業及其他販賣業ノ內ノ其ノ他販賣ヲ除クノ外ハ、常ニ少ク、乃チ染織製品販賣業ハ株式 171ナルニ對シ、合資及合名 517アリ。機械工業品販賣業ハ株式 70ナルニ對シ、合資合名 306アリ。化學工業品販賣業ハ株式 157ナルニ對シ、合資合名 547アリ。飲食物販賣業其他ノ販賣業ハ何レモ合資合名ノ方多シ。株式會社ノ合資合名ヨリ多キハ、雜業中ノ倉庫業 315、銀行業 1,845、市場業 206、演戲場及遊戲場 218等ナリ。其ノ內貸金業及質業、不動產及有價證券ノ管理賣買及媒介、旅館料理店貸席浴場等、圖書出版及賣捌業ハ合資合名會社數ノ方多シ。工業ニアリテハ化學工業ノ株式 900ニ對シ合資合名ノ 750、特別工業ノ 561ニ對シ 38ヲ除ク外ハ株式會社ヨリモ合資合名會社ノ方多シ。即チ染織工業、機械工業、飲食物工業、雜工業等ナリ。此ノ狀態ハ其ノ細別種類別數ニ於テモ大體異ナラサルカ、合資合名會社ノ株式會社ヨリ特ニ少キハ、紡績業 58ニ對スル 11窯業 148ニ對スル 69製紙業 109ニ對スル 34製藥業 191ニ對スル 135等ニシテ、株式會社ノ方特ニ多キ特別工業ハ電氣業 470、瓦斯業 60、金屬精煉業 31ナリ。合資及合名ハ僅ニ 38ニ過キス。

一會社平均拂込資本金ハ株式組織ニ於テ鑛業ノ 165萬圓ヲ最高トシ、之ニ次テ運輸業 58萬圓、工業 42萬圓、農業 11萬圓ノ順位ナリ。之ニ對スル合資合名ニ於ケル最高ハ、鑛業ノ 40萬圓ニシテ、其他ハ皆 1萬乃至 5萬圓ヲ往來ス。更ニ營業種類細別ニ就テ一會社平均拂込資本金ハ、株式會社ニ於テ多額ナルハ石油採取業 322萬圓、其他鑛業 278萬圓、製糖業 191萬圓、紡績業 151萬圓、船舶製造業 151萬圓、瓦斯業 129萬圓、金屬精煉業 123萬圓等ナリ。合資合名ニ於テ 50萬圓以上ニ上ルモノハ其他鑛業 76萬圓アルノミニシテ、10萬圓以上ニ達スルモノハ僅ニ不動產及有價證券ノ管理賣買及媒介 31萬圓、貿易業 30萬圓、石炭採掘業 30萬圓、機械類 19萬圓、普通農業 16萬圓、銀行業 14萬圓等ニ過キス。

大正七年末現在會社ノ各府縣分布ノ狀況ヲ見ルニ、其事業ハ數府縣又ハ全國ニ及フモノアリト雖モ、主タル事務所ノ所在地ニ依レハ東京 3,125最モ多ク、之ニ次テハ兵庫 1,677、大阪 1,641、愛知 1,618、北海道 1,200、神奈川 1,008、長野 905、靜岡 802、京都 667、廣島 525、岡山 504、等ハ 500以上ヲ有スルモノニシテ 400以上ヲ有スルモノニ新潟 492、鳥取 489、福岡 477、福島 426、石川 419等アリ、100ニ滿タサルモノニ沖繩 40宮崎 91、ノ二縣アルノミ。

資本金ノ多少分布ハ必スシモ上記ノ會社數ノ多少ト一致セス。東京 19億 1,148萬圓、大阪 7億 7,787萬圓、兵庫 3億 5,344萬圓、神奈川 2億 0,602萬圓、愛知 1億 4,364萬圓、京都 1億 3,427萬圓、福岡 1億 1,529萬圓ハ最高ノ部ニシテ、之ニ次テ 5,000萬圓以上ナルハ新潟 7,583萬圓、三重 5,279萬圓ナリ。尙資本金高別ニ細觀スルヲ省略シ、單ニ五百萬圓以上ノ大會社ニ就テ一言スレハ特ニ多數存スルハ東京 129、大阪 59、兵庫 28、神奈川 16、福岡 9、愛知 7、京都 7、長崎 5ニシテ、其他 1乃至 3ヲ存スルモノハ北海道ノ外 22縣ニシテ全ク存セサルモノハ岩手、山形、宮城、茨城、栃木、埼玉、福井、滋賀、靜岡、奈良、鳥取、島根、山口、愛媛、宮崎、沖繩トス。

次ニ地方別營業種類大別ニ就テ各營業種類大別毎ニ府縣ノ分布ノ多少ヲ列記セン。農業會社ハ北海道 79ヲ最高トシ長野 58、東京 42、岐阜 34、兵庫 31、福島 23、高知 23、群馬 22ヲ多數ノ順位トス。少數ノ方面ハ栃木、山口、德島、香川ニシテ 1又ハ 2會社ナリ。全ク存セサルモノニ茨城、沖繩ノ二縣アリ。商事會社ハ東京 1,527、兵庫 919、愛知 887、大阪 766、北海道 641、神奈川 632、長野 562等多ク、少數ノ方面ハ沖繩 28、鹿兒島 45、奈良 47 德島 49、宮崎 59等ナリ。工業ニ於テ多數ナルハ東京 1,283、大阪 757、愛知 622ニシテ、之ニ次クモノニ兵庫 536、北海道 327、神奈川 279、靜岡 269、廣島 228、長野 225アリ。最少ノ部ニ屬スルモノニ沖繩 4、宮崎 22、大分 42、鹿兒島 44、奈良 49、島根佐賀共ニ 53アリ。鑛業ニ於テハ東京 152ヲ最多トシ、之ニ次ク多數ハ大阪 32、北海道 16、新潟 14、岡山 11ナリ、運輸業ニ於テハ多數ナルハ兵庫 182、北海道 137、東京 121等ニシテ之ニ次クハ愛知 83、大阪 78、靜岡 70、長野 54、鳥取 50、福岡 49、新潟 46、最少ナルモノニ宮崎 4、沖繩 6、奈良 10アリ。

XII. 產業組合及同業組合

【各種產業組合】 大正七年末現在各種產業組合ノ數ハ 12,523ニシテ、之ヲ前年末現在ニ比スルニ 498ヲ增加セリ。明治三十三年ニ產業組合法公布セラレ、其ノ年末ノ現在ハ僅ニ 21ナリシカ、累次增加シ前記ノ數ヲ示スニ至レリ。大正七年末現在ノ組合ヲソノ目的ニ依リ別テハ、信用組合 3,059、販賣組合 290、購買組合 419、生產組合 127、其ノ他ハ二種乃至四種ノ目的ヲ併有兼營スル組合ナリ。此ノ兼營組合ノ中信用販賣購賣組合 3,252ヲ最多トシ、信用購買組合 2,790之ニ次キ、生產購買組合 27ヲ最少トス。各種類ノ組合ヲ前年ニ對照スルニ、十五種ノ中前年末ヨリ增加セルモノ十種、減少セルモノ五種ナリ。而シテ最多ク增加セルハ信用販賣購買組合 288ニシテ、信用販賣購買生產組合 125之ニ次キ最少キハ生產購買組合及信用生產組合各 2トス。又減少セルモノニ就テ觀ルニ、最多ク減少セルハ信用販賣組合 34ニシテ最少ク減少セルヲ生產組合 6トス。以上ヲ通觀スルニ概シテ信用ヲ兼ヌル組合ハ信用ヲ兼ネサル組合ニ比シ一般ニ增加ノ趨勢ヲ示セリ。

產業組合ノ大正七年末各府縣分布ノ狀況ヲ見ルニ、最多キハ兵庫縣 725ニシテ、長野縣 506、群馬縣 475、愛知縣 448、新潟縣 438、廣島縣 399、岡山縣 398、茨城縣 363、千葉縣 361、埼玉縣及福島縣ノ共ニ 342、三重縣 332、北海道 324、福岡縣 320、青森縣 318、岐阜縣 309等其ノ多キモノニ屬ス。而シテ最モ少キハ沖繩縣 30ニシテ德島縣 111、滋賀縣 127、大阪府 129、長崎縣 132、高知縣 134、宮崎縣 140、香川縣 146、奈良縣 154 東京府 157等其ノ少キモノトス。產業組合ノ種類ハ信用ヲ目的トスルモノ最多キ事實ヨリ考フルトキハ、金融機關ノ完備セル東京、大阪ノ二府ノ如キ大都會ヲ有スル府縣ニ、產業組合ノ比較的少キハ、蓋シ其ノ所ナルコト首肯セラル。

產業組合ヲ組織別ニ見ルニ、大正七年末現在ニ於テハ、有限責任 8,987、無限責任 3,269 保證責任 267ニシテ、有限責任最多ク、無限責任之ニ次キ保證責任最少シ。之ヲ前年末ニ比スルニ有限責任 594ヲ增シ無限責任 107ヲ減シ、保證責任 11ヲ增シ計 498ヲ增加セリ。之ヲ本書記載ノ事實ニ依リ、明治三十九年以後ヲ通覽スルニ、明治四十一年迄ハ無限責任最多カリシカ、同四十二年以後ハ漸次有限責任其ノ數ヲ增加セリ。斯ノ如ク有限責任逐年增加シ、大正七年末ニ於テハ無限責任一ニ對シ有限責任2.75ノ割合ヲ示シ、尙近年無限責任減シ、有限責任增加スルノ傾向ヲ有スルニ至レリ。

【重要物產同業組合】 重要物產同業組合法モ亦產業組合法ト同シク明治三十三年ノ公布ニ係リ、同年四月一日ヨリ施行セラレタルモ、本書記載スル所ハ大正元年以後ノ事實ナリ。而シテ大正七年末現在ノ組合數ハ 1,131ニシテ、之ヲ前年末ノ現在ニ比スレハ 39ヲ增加セリ。大正元年末現在數ヲ 100トシテ指數ヲ求ムルニ大正六年ハ 123ニ當リ、其ノ發達敢テ速カナリトセス。又之ヲ種類別ト爲セハ、蠶絲及蠶種業組合 256最多ク、織物業 137米穀業 64、木炭業 46等之ニ次ケリ。又同業組合聯合會ハ、大正七年末現在數 53ニシテ、前年末ニ比シ 2ヲ增セリ。

【漁業組合】 漁業組合ハ明治四十三年公布ノ漁業法ニ依リ設立セラレタル組合ナリ。大正六年ハ 3,588ニシテ、之ヲ前年ニ比スルニ 34ヲ增シ、更ニ明治四十三年設立當初ノ組合數ニ比スレハ 167ヲ增加セリ。又組合員數ハ大正六年ニ於テハ 431,393ニシテ前年ニ比シ 4,753ヲ減シ、設立當初ニ比シ 27,228ヲ增加セリ。

組合數ヲ員數別ニ觀ルニ、五十人以下 1,286最多ク、員數階級ヲ增ス每ニ漸次低下シ千一人以上ノ 11最少シ。

大正六年ニ於ケル漁業組合地方分布ノ狀況ハ、長崎縣 227ヲ最多トシ、靜岡縣 179、新潟縣 170、石川縣 167、島根縣 159、山口縣及愛媛縣ノ各 144等其ノ多キモノニ屬ス。又最少キハ岐阜縣ノ 1ニシテ、山梨、長野二縣 2、滋賀縣 11、山形縣 12等ヲ少シ

ト爲ス。此ノ外埼玉、群馬、栃木、奈良ノ四縣ニハ全然漁業組合ナシ。

漁業組合共同施設事業別ヲ見ルニ、大正六年ニ於ケル組合數ハ1,957ニシテ、前年ニ比スルニ、186ヲ増シ、更ニ明治四十三年設立當初ニ比スレハ1,308ヲ増加セリ。之ヲ事業別ニ見ルニ、共同販賣572ヲ最多トシ水産増殖387遭難救恤248物資貸付151等ヲ多キモノトス。而シテ最少キハ共同製造ノ1ニシテ共同運搬6表彰ノ13亦少ナキモノニ屬ス。

漁業組合聯合會ハ大正六年ニ於テハ17ニシテ前年ニ比シ10増加セリ。

〔水産組合〕 水産組合ハ漁業組合ト同シク明治四十三年漁業法ニ依リ設立セラレタルモノナルモ、本書載スル所ハ大正五年末以降トス。而シテ大正七年末組合數ハ212ニシテ、前年ニ比シ7ヲ減シタリ。又組合員數ハ大正七年末338,085ニシテ、前年末ニ比シ9,374ノ減少ナリ。

水産組合聯合會ハ大正七年末現在數12ニシテ、前年末ヨリ1ヲ減少セリ。

XIII. 電氣事業及瓦斯事業

〔電氣事業〕 大正六年現在ノ開業電氣事業ハ573ニシテ、外ニ自家用電氣工作物2,188、官廳施設電氣工作物ハ130アリテ合計2,891トス。尙此ノ外未開業ノ事業及工作物合計212アリ。此ノ事實ヲ十四年前ノ明治三十六年.(創メテ電氣取締ニ關スル法規ヲ實施シタル年)ニ比シ、同年ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、開業ハ634、未開業ハ424ニ當リ、又前年ノ此ノ指數ニ比シ開業60、未開業62ヲ増加シ、其ノ進歩ノ著シキヲ見ル。是等事業ノ發電力ヲ見ルニ、既ニ落成シテ使用シ得ルモノ水力511,090〔キロワツト〕、火力364,473〔キロワツト〕合計875,563〔キロワツト〕ナリ。又未落成ノモノ總數686,925〔キロワツト〕アリ、苟シ夫此ノ落成未落成ヲ合算スレハ1,562,488〔キロワツト〕トナル。蓋シ盛ナリト謂フヘシ。而シテ、此ノ電力ヲ明治三十六年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、落成ハ1,979、未落成ハ1,909、合計ハ1,947ニ當リ、前年ノ指數ヨリ増スコト、落成ハ159、未落成ハ756、合計ハ426ニ當リ、本事業ノ規模ノ近ク、益々激増セルヲ知ルヘシ。殊ニ水力ニ於テ其ノ著シキモノアリ。大正六年末ノ開業電氣事業數ヲ其ノ目的ニ依リ分テハ、電氣供給事業497、電氣鐵道事業28、兩者兼營事業48ナリ。之ヲ事業ノ總數ニ對スル分節比例ヲ求ムレハ、電氣供給事業ハ86.73%、電氣鐵道事業ハ4.89%、兩者兼營事業ハ8.38%ニ當ル。電氣供給事業及電氣鐵道事業ハ共ニ増加スルモ、兩者兼營事業ハ前年ト盛衰ナシ。大正六年末現在ノ落成電力ヲ、發電原動力ニ依リテ分テハ、水力511,090〔キロワツト〕、火力364,473〔キロワツト〕ナリ。之カ總量ニ對スル分節比例ヲ求ムレハ、水力58.37%、火力41.63%ニ當ル。又各發電原動別ニ明治三十六年末ヲ百トシタル電力ノ指數ヲ求ムルニ水力ハ3,894ニシテ火力ハ1,171ナリ。此ノ指數ハ前年ヨリ増スコト水力316、火力93ニ當ル。即是等ノ事實ニ依リ水力發電ノ發達益々顯著ナルヲ認メラル。更ニ之ヲ各種類ニ就テ見ルニ營利事業ハ最モ水力ヲ利用スルコト多ク、其ノ落成電力ノ分節比例ヲ見ルニ、69.56%ハ水力電氣、30.44%ハ火力電氣ナリ。又自家用電氣工作物及官廳施設電氣工作物ハ、之ニ反シテ寧ロ火力電氣ヲ多ク用ヰラレ、自家用電氣工作物ニ於テハ水力電氣ノ28.80%ニ對シ火力電氣ハ71.20%ニ當リ、官廳施設電氣工作物ハ殊ニ火力電氣ヲ用ヰルコト多ク、水力電氣ハ僅ニ1.50%ニシテ殘ル98.50%ハ火力電氣ナリ。更ニ電氣事業數ヲ地方別ニ見ルニ營利事業ノ事業數ニ於テハ北海道最モ多ク、兵庫縣之ニ次キ、岐阜、愛知、福島、千葉、靜岡ノ諸縣多ク、東京、廣島、岩手、長野等稍多シ。又之ヲ發電力ヲ以テ比スレハ、東京府最多ク、大阪府之ニ次キ、神奈川、北海道、愛知、兵庫、京都ノ諸府縣ヲ多キ地方トス。自家用電氣工作物ヲ電力ニ依リテ比スレハ、福岡縣最多ク、之ニ次クハ兵庫、大阪、熊本、北海道、長崎等ノ諸府縣トシ、官廳施設電氣工作物ハ福岡縣最多ク、之ニ次クハ東京、群馬、大阪、兵庫等ノ諸府縣トス。

原動力別ハ發電力ヲ地方別ニ見ルニ、水力電氣ハ東京府最多ク、福岡縣之ニ次キ、其ノ他大阪、神奈川、北海道、熊本、群馬ノ諸府縣ヲ多シトシ、火力電氣ハ福岡縣最多ク其ノ他大阪、兵庫、東京、北海道、神奈川ノ諸府縣ヲ多キ地方トス。

大正六年末ニ於ケル原動力、電壓及發電力別發電所數ノ總數ハ653箇所ニシテ、此ノ原動力ノ内電氣供給518箇所、電氣鐵道9箇所、兩者兼營106箇所ナリ。此ノ總數ニ對シ分節比例ヲ求ムルニ、電氣供給事業ハ水力63.69%、汽力13.32%、瓦斯力22.99%ニ當リ、電氣鐵道事業ハ、水力11.11%、汽力88.89%ニ當リ、兩者兼營事業ハ水力47.17%、汽力38.68%、瓦斯力14.15%ニ當ル。又發電所ヲ電壓ニ依リテ分テハ、低壓41箇所、高壓460箇所、特別高壓162箇所ナリ。是亦各總數ニ對スル原動力別ノ分節比例ヲ求ムルニ、低壓ハ水力48.78%、汽力29.27%、瓦斯力21.95%ニ當リ、高壓ハ水力50.65%、汽力20.65%、瓦斯力28.70%ニ當リ、特別高壓ハ水力90.74%、汽力9.26%ニ當ル。又發電力ノ合計ニ依リ同一ノ比例ヲ求ムルニ、水力60.37%、汽力18.40%、瓦斯力21.27%ニ當レリ。

大正六年末ニ於ケル電氣事業用電線路亘長ハ37,120哩電線延長ハ132,794哩ナリ。本年末ヲ明治三十六年末ト比較シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、電線路亘長ハ2,241.8、電線延長ハ2,220.0ノ激増ニ當ル。又電線延長ヲ電壓ニ依リ分チ分節比例ヲ求ムルニ、低壓35.08%、高壓50.36%、特別高壓14.56%ニ當ル。

大正六年ニ於ケル、營利電氣事業ノ各營業決算期末ノ事業總數527其ノ拂込資本金總額5億7,835萬圓ナリ。此ノ拂込資本金ヲ明治三十六年ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ2,402ニ當リ、十四年間ニ二十四倍ノ放資ヲ見、又前年ノ指數ニ對シテハ270ノ差増ナリ。此ノ放資ノ激増ハ、啻ニ事業ノ増加ニ伴フノミナラス、各事業其ノモノヽ尨大ナルニ至リタルニ由ル。即明治三十六年ノ一事業平均拂込資本金ハ、27萬0,808圓ナリシカ、大正六年ノ平均額ハ、109萬8,570圓トナリ、又此ノ平均額ノ明治三十六年ヲ百トシタル、大正六年ノ指數406ニ當ルニ見テ明ナリ。上記電力供給營利事業ノ中、電燈事業ヲ營ムモノ519アリ。コレ總事業ノ98.48%ニ當リ、殆ト總テハ電燈事業ヲ營ムモノタリ。大正六年ニ於ケル、電燈取附總數ヲ十燭光ニ換算スレハ、1,359萬8,238箇トナリ之ヲ電力ニ換算スレハ、19萬0,484〔キロワツト〕ニ當リ、又之ヲ馬力ニ換算スレハ、31萬4,074馬力ニ當ル。(電氣鐵道事業ヲ營ムモノニ就テハ、交通ノ部ニ詳記セルヲ以テ玆ニハ掲載セス)。

大正六年末ニ於ケル供給電燈ノ總燭光數ハ、1億2,303萬燭光ニ當リ、之ヲ同年末推計人口ニ比スレハ、百ニ付219.7燭光ニ當リ、之ヲ前年ニ比シ42.3ヲ増ス。之ヲ面積ニ比スレハ、一方里ニ付4,963.2燭光ニ當リ、前年ヨリ増スコト、1,010.2燭光ナリ。此ノ面積ニ對スル燭光數ヲ、地方別ニ見ルニ東京府最多ク、大阪府之ニ次キ、神奈川縣、京都府、愛知縣、福岡縣、兵庫縣等ニ多ク、長崎縣、靜岡縣、佐賀縣、滋賀縣、奈良縣、廣島縣等ニ稍多シ。又電力供給ノ電動機ノ換算馬力ハ、80萬馬力ニシテ前年ニ比シ、18萬馬力ヲ増ス。之ヲ地方別ニ見ルニ、最高キハ福岡縣ニシテ、東京府、大阪府、兵庫縣、北海道、長崎縣、靜岡縣、愛知縣、栃木縣等之ニ次キテ多キモノナリ。

大正六年中電氣事業ノ故障災害5,229件アリ。之ヲ分テハ不可抗力1,199件、自然的損傷ニ因ルモノ827件操業者ニ因ルモノ371件、操業者外ノ過失ニ因ルモノ252件、設備不完全ニ因ルモノ79件、其他ノ原因2,401件ナリ。此ノ最多ナル原因ノ不可抗力中、83.07%ハ送電中止ニシテ、送電不完全ハ3.34%ニ當リ、死傷者ハ1.67%、火災ハ2.25%、其他ハ6.67%ニ當ル。又故障災害件數ヲ、明治四十四年(電氣事業法實施ノ年)ニ比シ其ノ百ニ對スル本年ノ指數ヲ求ムルニ、設備不完全ハ577、操業者ノ過失ハ258、操業者外ノ過失ハ1,008、不可抗力ハ179、其ノ他ハ456ニ當リ、總數ハ374ニ當レリ。又災害場所ニ就テ見ルニ、架空配電線ノ1,760箇所最多ク、之ニ次クモノハ電氣鐵道ノ789箇所、架空送電線ノ550箇所、原動力設備ノ493箇所等ナリ。

〔瓦斯事業〕 大正七年三月末日現在ノ瓦斯事業ノ總數ハ72ニシテ、此ノ拂込資本金ノ總額ハ1億9,256萬8,553圓ナリ。之ヲ明治四十四年末ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、事業者數ハ131、拂込資本金ハ263ニ當レリ。前年ノ同一指數ニ比スルニ、事業者數ハ27ヲ減シ、拂込資本金ハ25ヲ増セリ。需用家ニ於ケル取附口數ヲ明治四十四年末ニ比シ、其ノ指數ヲ求ムルニ、燈用ハ185、熱用ハ242ニ當リ、前年ノ同一指數ニ比シ燈用ハ2ヲ増シ、熱用ハ11ヲ減シタリ。又動力供給ハ基數年毎ニ増減常ナラス。本年ハ明治四十四年末ノ百ニ對スル指數81ニ下リ、力量ハ同一指數96ニ當レリ。本年中ノ重要副生物產出額ハ〔コークス〕44萬5,380噸〔コールタール〕16萬0,620石ナリ。之ヲ大正六年三月末日ニ終ル一年間ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ〔コークス〕118〔コールタール〕ハ107ニ當レリ。

XIV. 交通

〔道路及橋梁〕 大正七年末ノ調査ニ係ル全國ノ道路延長ハ、國道2,175里、縣道9,475里、里道108,625里ニシテ、之ヲ前回ノ調査ナル大正四年末ニ比スレハ、國道26町ヲ増シ、縣道60里、里道4,349里ノ減少ヲ示セリ。右ノ内縣道及里道ノ著シク減少セルハ如何ナル理由ニ因ルヤ明ラカナラスト雖、產業交通ノ發達ニ伴ヒ、從來ノ迂廻道程、其ノ他交通ニ不便ナル道路ヲ整理シタルコト亦其ノ一因ナラストセス。

國道ニ架設セル橋梁ノ總數ハ9,392個所ニシテ8町4毎ニ一橋梁アル割合ナリ。縣道ニ架設セル橋梁ハ59,553個所ニシテ、是亦8町餘ニ一橋梁ノ割合ナリ。又里道ノ橋梁ハ301,494個所ニシテ、是ハ12町7ニ一橋梁アリ。而シテ此等橋梁ノ構造ヲ見ルニ、木橋架設最モ多ク、次テ土橋多ク、鐵橋ノ如キハ僅ニ594ヲ算スルニ過キス。

〔鐵道〕 大正七年度末鐵道線路延長ハ開業線8,014哩、未開業線1,226哩ニシテ、此ノ開業線路中國有ハ6,072哩(75.8%)、私設ハ1,941哩(24.2%)ナリ。之ヲ五年前ニ比スレハ、國有ハ601哩、私設ハ1,073哩ヲ増加セリ。開業線路ノ延長ヲ面積ニ比スルニ、大正七年度末ハ百方里ニ付32哩06鎖ニ當リ、之ヲ我國鐵道開通ノ

初年ナル明治五年ノ同一比例 0.6鎖ニ比スレハ、五百倍以上ノ增加ニシテ、其ノ進步ノ著シキ寔ニ隔世ノ感ナキ能ハス。此ノ鐵道線路間ニ在ル停車場ノ總數ハ、國有 1,738個所、私設ハ 1,443個所ニシテ、國有ハ 3哩 39鎖ニ付一停車場アリ。私設ハ 1哩 27鎖ニ付一停車場アル割合ニシテ、私設ノ停車場官設ニ比シ 著シク多キヲ見ル。大正七年度末現在ノ各鐵道ノ機關車、客車、貨車、ノ數ヲ見ルニ、國有鐵道ハ機關車 2.933、客車(車輛) 7.126、貨車(車輛) 48,568ニシテ、之ヲ五年前ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、機關車ハ 117.3、客車 110.4、貨車 113.7ニ當リ機關車ノ增加最モ著シ。又私設鐵道ニ就キ見ルニ、機關車 486、客車(車輛) 1,721、貨車(車輛) 5,864ニシテ、五年前ノ百ニ對スル指數ハ機關車 245.6、客車(車輛) 220.0、貨車(車輛) 267.6ニシテ、何レモ國有鐵道ニ比シ非ス工ノ發達著シキカ如シ。

大正七年度中ニ於ケル機關車ノ走行哩ヲ見ルニ、國有ハ 8,905萬哩ニシテ、前年ニ比シ 384萬哩ノ增加ニ當レリ。又列車ノ走行哩ハ客車、貨車、混合車ノ合計 7,233萬哩ニシテ前年ニ比シ 254萬哩ヲ增加セリ。而シテ此ノ走行列車中最モ多ク走行セルハ貨物列車ニシテ、混合列車ハ貨物列車ノ三分ノ一ヲ走行セルニ過キス。又私設鐵道ノ機關車走行哩ハ 1,041萬哩ニシテ、前年ニ比スレハ 24萬哩ヲ增加シ、列車ノ走行哩ハ合計 937萬哩ニシテ、前年ニ比シ約 50萬哩ノ增加ヲ示セリ。而シテ走行列車中最モ多ク走行セルハ混合列車ニシテ、旅客列車最モ少ク國有鐵道ノ夫ト全然其ノ趣ヲ異ニセルハ蓋シ其ノ營業組織ノ然ラシムル所ナラン。

大正七年度中ニ於ケル鐵道乘客數ハ、國有 288,061,584人ニシテ、平均一日ノ乘客數 789,210人ニ當リ、之ヲ前年ノ同一數 671,875人ニ比スレハ 117,335人ノ增加ヲ示セリ。又私設鐵道ノ乘客數ハ 83,987,670人ニシテ一日平均ノ乘客數 238,322人ニ當リ、前年ノ同一數ヨリ增加セルコト 34,889人ナリ。

今國有鐵道ニ就キ乘客ヲ各等級別ト爲シ、總數ニ對スル分節比例ヲ算出スレハ、一等 0.19%、二等 5.05%、三等 94.76%ニ當リ、前年ニ比シ一等 0.04%、二等 0.23%ヲ增加シ三等ノミ 0.27%ヲ減シタリ。更ニ此ノ各等ヲ五年前ニ比シ、各百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、一等 128.3、二等 195.5、三等 170.7ニ當ル。即チ二等ノ乘客最モ增加セルヲ見ル。

本年度中ニ於ケル運送貨物噸數ハ國有 5,331萬噸、私設 1,052萬噸ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ國有 456萬噸、私設 125萬噸ヲ增加セリ。是等鐵道事業ニ從事スル職員ハ、國有 139,035人、私設 15,562人ニシテ交通機關ノ完備スルニ從ヒ、其ノ職員モ自ラ增加シ、之ヲ五年前ニ比スレハ國有ハ 26,948人、私設ハ 9,391人ヲ增加セリ。

大正七年度ニ於ケル國有鐵道營業益金ハ 9,945萬圓ニシテ、前年ニ比シ 1,029萬圓ノ增收ニ當リ、五年前ニ比スレハ四千萬圓以上ノ增收ニ當ル蓋シ近時經濟界好調ノ 反映ナラスンハアラサルナリ。又私設鐵道ノ益金ハ 821萬圓ニシテ、前年ヨリ 117萬圓ノ增加ヲ爲セリ。之ヲ五年前ニ比スレハ百四十萬圓以上ノ增收ナリ。以上ノ總益金ヲ營業哩ニ比シ一日一哩平均ヲ算出スレハ、國有ハ 45圓10錢私設ハ 12圓 22錢ニ當リ、前年ニ比シ私設鐵道ノ益金特ニ著シ。

大正七年度中ノ鐵道事故件數ハ國有 1,561件、私設 445件ニシテ、前年ニ比シ國有ハ 79件、私設ハ 64件ノ增加ナリ。又本年度中鐵道ニ因ル死傷人員ハ國有 5,279人、其ノ中死者 2,356人、傷者 2,923人、私設ハ死傷人員 303人中死者 184人、傷者 119人ナリ。前年ニ比シ國有ハ死者傷者何レモ 增加シタルモ、私設ハ反對ニ減少セリ。

【電氣鐵道】 大正七年末現在ノ 電氣鐵道會社ハ 69ニシテ、前年ニ比シ 3會社ノ增加ヲ見タリ。其ノ線路延長ハ 720哩ニシテ、一經營者ノ平均線路延長ハ 10哩餘ニ當レリ。而シテ之カ有スル車輛ハ 4,278輛ニシテ、前年ヨリ 108輛ヲ增加セリ。又大正七年中ノ乘客總數ハ 96,616萬人ニシテ、前年ニ比シ 13,443萬人ノ增加ヲ爲シ五年前ニ比シ約二倍ノ增加ニ當レリ。

【馬車鐵道】 大正七年末ノ馬車鐵道會社ハ 31ニシテ、前年ニ比シ 2會社ヲ減シ、其ノ線路延長ハ 195哩餘ニシテ一會社ノ平均延長線路ハ 5哩餘ナリ。又是等會社ノ有スル車輛ハ 852輛、馬匹ハ 586頭ニシテ、前年ニ比シ前者ハ 190輛ヲ減シ後者モ亦 58頭ヲ減少セリ。其ノ一年間ニ於ケル乘客數ハ 418萬人ニシテ、前年ニ比シ 84萬人ヲ減少セリ。大体ニ於テ此ノ種會社ノ漸次減少ノ傾向アルハ、時勢ノ要求上、電氣鐵道其ノ他ニ變更スルカ故ナルヘシ。此ノ外交通機關トシテ、人車鐵道、汽動車鐵道ナルモノアリ。何レモ地方交通ノ利便ノ爲ニ設立セラレタルモノニシテ、漸次發展シツヽアルヲ見ル。

【諸車】 大正八年度末ニ於ケル有稅諸車ノ總數ハ 4,150,857ニシテ、之ヲ種類別ト爲セハ、馬車乘用 6,827荷積用 244,805、牛車 40,587、荷車 2,084,865、自働車乘用 5,109、荷積用 444、人力車 110,541、自働自轉車 2,423、通常自轉車 1,611,897、其他 43,359ナリ。今是等諸車ニ就キ其ノ消長ノ趨向ヲ觀察センニ、乘用馬車ハ大正五年ヲ最高トシ、爾後漸次減少ヲ示シ、五年前ノ百ニ對スル指數 82.7ニ當レリ。反之荷積用馬車ハ產業ノ發達ニ伴ヒ逐年增加シテ、五年前ニ比スレハ、一割四分ノ增加ヲ爲セリ。自働車ハ時勢ノ進運ニ伴ヒ其ノ增加最モ著シク、之ヲ五年前ニ比スレハ、乘用自働車ハ實ニ七倍半ノ增加ヲ爲シ、荷積用自働車ト雖四倍以上ノ增加ヲ爲セリ。人力車ハ乘用馬車同樣年々減少ノ傾向ニシテ、五年前ノ百ニ對スル指數ハ 92.7ニ當レリ。自轉車ハ交通機關トシテ最モ簡便ナルモノナルヲ以テ 近時其增加特ニ著シク、自働自轉車ハ五年前ニ比シ四倍半、通常自轉車ハ二倍七分ノ 增加ヲ爲セリ。

【河川】 內務省ノ所謂重要河川ハ全國(北海道ヲ除ク)ニ於テ 135川アリ。此ノ重要河川中舟路、筏路ヲ合セタル航路ノ延長十里以上ノ河川ヲ擧クレハ 78川アリ。之ニ北海道ノ幹川流路延長三十里以上ノ 8川ヲ加フレハ、本邦ノ大川ハ合計 86川ト見ルコトヲ得ヘシ。而シテ此ノ大川中幹川ノ流路最長キモノハ信濃川ノ 94里、石狩川ノ 93里、利根川ノ 82里、天龍川ノ 78里、北上川ノ 62里、吉野川(阿波)ノ 60里、木曾川ノ 59里、最上川、天龍川ノ共ニ 55里等トス。又北海道ヲ除キタル各川ノ航路ヲ見ルニ、幹川ノ航路延長 72里ナル信濃川ヲ最長トシ、利根川ノ 70里之ニ次キ、北上川ノ 59里、天龍川ノ 55里、最上川ノ 50里等其ノ長キモノニ屬ス。

【港灣】 大正八年十一月一日現在ニ於ケル港灣總數ハ 1,462港ニシテ、之ヲ港種別ト爲シ分節比例ヲ求ムレハ、軍港及要港 0.4%、開港 2.46%、商港 51.92%、漁港 36.59%、避難港 8.62%、ナリ。以上ノ內、重ナル七十二港ニ就キ、大正七年中ノ船舶入港數ヲ見ルニ、汽船ノ入港最モ多キハ、下ノ關 869,894隻ニシテ、之ヨリ遙ニ下リテ、神戶 22,559隻、門司 12,333隻、高松 11,161隻等ナリ。又帆船ノ最モ多ク入港セルハ大坂 149,185隻ニシテ、次テ横濱 125,265隻、門司 78,167隻、神戶 54,079隻等ハ多キモノニ屬ス。

【航路標識】 大正七年末ニ於ケル航路標識ハ 官設燈臺 151個所、公設燈臺 29個所、其ノ他各種ノ夜標、官設 63個所、公設 42個所、各種晝標、官設 25個所、公設 95個所、私設 9個所ナリ。是等標識以外ニ官設ノ各種警號 27個所、信號所 7個所アリ。近時海運業ノ發達ニ伴ヒ、航路標識ノ設備ノ如キモ漸次完備シ、殊ニ燈臺ノ構造ニ至リテハ最モ進步セルガ如シ。即チ之ヲ前年ニ比スレハ 8個所ヲ增加シ、其ノ光達距離ノ如キ今ヤ 10—20浬ノモノ 98個所、20浬以上ノモノ 37個所ヲ見ルニ至レリ。

【船舶】 大正七年末現在ノ船舶ハ 44,272隻、3,564,047噸ニシテ、此ノ隻數ヲ種類別ト爲セハ、汽船 4,775隻(10.79%)、帆船 28,702隻(64.83%)、石數船 10,795隻(24.38%)ナリ。即總數ノ中過半數以上ハ帆船ニシテ、汽船ハ僅ニ一割餘ヲ有スルニ過キス。此ノ外、噸數五噸未滿、積石數五十石未滿ノモノ、大正八年度末ニ於テ 255,220隻アリ。

歐洲大戰開始以來我國ノ海運業ハ頓ニ活況ヲ呈シ、船舶モ亦著シク增加シ、之ヲ開戰當時ナル大正三年末ニ比スレハ 7,205隻、1,118,055噸ノ增加ヲ爲シ、又十年前ナル明治四十一年ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、隻數 150.6、噸數 169.0ノ增加ニ當レリ。而シテ噸數ノ增加率カ隻數ノ增加率ヨリ遙ニ高キヲ示セルハ、漸次、大型船舶ノ數多キヲ加フル徵證ニシテ、今ヤ二千噸以上ノ船舶 380隻ヲ算スルニ至レリ。今各船舶ニ就キ、增加ノ趨勢ヲ見ルニ、最モ著シキ增加ヲ爲セルハ帆船ニシテ、十年前ナル明治四十一年ニ於テハ僅ニ 5,879隻、384,481噸ニ過キサリシモノ、爾來年々長足ノ進步ヲ爲シ、大正七年末ニ至ルヤ 28,702隻、1,092,407噸ノ多キニ上リ、近々十年間ニ於テ隻數五倍餘、噸數ハ約三倍ノ增加ヲ示セリ。汽船ハ帆船ニ比シ增加較々遲々タルノ感アレ共、之ヲ十年前ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、隻數 207、噸數 201ニシテ、前年ノ同一指數ヨリ、前者ハ 25、後者ハ 35ノ增加ヲ爲セリ。如斯帆船、汽船共ニ增加セルニ不拘、獨リ石數船ノミハ反對ニ逐年減少シツヽアルハ注目スヘク、即チ、十年前ナル明治四十一年ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、隻數 49.7噸數 47.6ニ當リ、前年ノ同一指數ヨリ、前者ハ 10.3、後者ハ 13.9ノ減少ヲ示セリ。

大正七年末現在ノ登簿汽船ノ船質ヲ見ルニ、鋼又ハ鐵製 1,096隻、鋼及鐵製又ハ木製 14隻、木製 1,531隻ナリ。之ヲ分節比例ト爲セハ、鋼又ハ鐵製 41.5%、鋼及鐵製又ハ木製 0.5%、木製 58.0%ニシテ今尙木製過半數ヲ占ム。又此等船舶ノ船齡ヲ見ルニ、鋼又ハ鐵製船ハ十年未滿 47.3%、十年以上二十年未滿 19.2%、二十年以上三十年未滿 16.5%、三十年以上 17.0%ニシテ、木船ハ十年未滿 52.0%、十年以上二十年未滿 27.9%、二十年以上三十年未滿 15.9%、三十年以上 4.2%ナリトス。即チ鋼又ハ鐵製船、木船共二十年未滿ノ若齡船最モ多クシテ、船齡ヲ加フル每ニ減少セリ。又登簿帆船ノ船齡モ亦木船ト同一ノ狀況ニ在ルヲ以テ之ヲ贅セス。

大正七年中ニ於ケル登簿船ノ異動ヲ見ルニ、汽船ノ新規登錄 565隻、登錄ヲ抹消セシモノ 103隻アリテ、差引 462隻ヲ增加シ、噸數帆船ノ新規登錄ハ 2,322隻、登錄ヲ抹消セシモノハ 401隻ニシテ、差引 1,921隻ノ增加ヲ爲シ、石數帆船ハ新規登錄セシモノ 1隻抹消セシモノ 75隻アルヲ以テ、差引 74隻ノ減少ニシテ、結局登錄現在數ハ 2,309隻トナリ、前年ニ比シ 1,213隻、十年前ニ比シ 1,738隻ノ增加ヲ示セリ。

【造船】 大正七年末現在ノ造船所ハ 371個所ニシテ、前年ヨリ增加セルコト 33個所ナリ。又船渠數ハ 62個所ニシテ、前年ニ比シ 1個所ヲ增加セリ。而シテ同年中ニ於ケル製造船舶ハ、汽船 443隻、540,531噸、帆船(噸數船)ハ 1,804隻、161,964噸ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、汽船 199隻、276,711噸、帆船ハ 450隻、35,191噸ヲ增加セリ。如斯ハ、近時海運業ノ隆盛ニ伴ヒ船舶ノ需要激

增シタル結果ニシテ、從來ハ年々 500隻、10萬噸内外ノ造船高ニ過サリシモノ大正七年ニ至リテハ一躍、隻數 2,247隻、噸數702,495噸ノ多キニ上リ造船界空前ノ盛況ヲ呈セリ。此ノ造船高ヲ地方別ニ見ルニ、汽船ハ大阪府最モ多ク 139隻ニシテ總數ノ三割强ヲ占メ、廣島縣 60隻、兵庫縣 42隻等相次テ多シ、又帆船ノ最モ多ク製造セラルヽハ廣島縣 374隻、福岡縣 238隻、山口縣 181隻、等ナリトス。

【海員】 大正七年末現在ノ海技免狀受有者ハ 39,231人ニシテ、内國人 38,882人、外國人 349人ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ内國人 2,333人ヲ增加シ、外國人ハ 2人ヲ減シタリ。内國人ノ海技免狀受有者ハ啻ニ前年ヨリ增加シタルノミナラス、既往各年皆增加シ、之ヲ、十年前ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 178.3ニ當レリ。

内國人及外國人ノ受有スル海技免狀ヲ種類ニ依リ分チ、各總數ニ對スル分節比例ヲ算出スレハ、内國人甲、乙、丙、各種ノ船長 7.52%、運轉士 63.88%、機關長及機關士 28.60%ニシテ、外國人ハ甲種船長 50.43%、各種運轉士 13.47%、機關士 36.10%ナリ。

【遭難】 大正七年中ニ於ケル遭難船ノ合計ハ 1,569隻ニシテ、中汽船 903隻、帆船 666隻ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、汽船ハ 202隻、帆船ハ 41隻ノ增加ニシテ、汽船ノ遭難最モ多シ。而シテ其ノ遭難ノ程度ヲ見ルニ、汽船帆船共ニ損傷最モ多ク汽船ハ 854隻帆船ハ 448隻ナリ。又滅失セシモノハ汽船 49隻、帆船 218隻ニシテ、總數ノ約二割ニ當ル。遭難ノ最モ多カリシ地方ハ瀨戸内海ニシテ、北海道ノ沿海、九州ノ沿海等之ニ次ケリ。又遭難ノ最モ多カリシ月ハ九月ニシテ、七月、十一月、十月之ニ次キ、四月ハ最モ少シ。是等遭難ニ因ル死傷人員ハ 405人ニシテ、内死亡 119人、負傷 55人、行衛不明 231人ナリ。又遭難ニ際シ救助セラレタル人員ハ 649人ニシテ、之ヲ救助セシ人員ハ 864人ナリ。

【海員審判】 大正七年中地方海員審判所ニ於テ受理シタルハ、430件、604人ニシテ、其ノ中裁決セシモノ 302件、415人ナリ。此ノ人員ヲ裁決種別ト爲セハ免狀行使停止 203、譴責 111、不懲戒 101ナリ。又裁判人員ヲ事件ノ種類ニ依リ分チ總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルトキハ、衝突 51.09%、乘揚 22.41%、放棄又ハ沈沒 2.41%、汽機毀損 3.37%、汽罐毀損 2.89%、法規違反 10.36%、其他 7.47%、ナリ。之ニ依リテ見レハ衝突ニ因ルモノ最多ク、乘揚、法規違反之ニ次キ、放棄及沈沒ニ因ルモノ最少シ。又同年中高等海員審判所ニ於テ受理シタル控訴件數ハ 43件、53人ナリ。此ノ内、裁判セルモノ、25件、34人、管轄移付申請ヲ爲シタルモノ 8件 10人、決定セルモノハ移付 7件、棄却 1件ナリ。

【命令航路】 大正七年度ニ於ケル命令航路ニ屬スル汽船會社ハ、日本郵船、大阪商船、東洋汽船、日清汽船、南洋郵船、北日本汽船ノ六會社ナリ。是等會社ノ所有ニ係ル船舶總數ハ 346隻 894,633噸ニシテ、此ノ隻數ヲ分節比例ト爲セハ日本郵船 40.17%、大阪商船 44.22%、東洋汽船 3.76%、日清汽船 7.22%、南洋郵船 1.16%、北日本汽船 3.47%ナリ。又此等船舶ノ運賃收入ハ 402,075,706圓ニシテ、前年ニ比シ一億九千餘萬圓ノ增加ナリ。而シテ運賃收入ノ最モ多キハ日本郵船ニシテ其ノ額 19,560萬圓ヲ算シ、次テ大阪商船 15,554萬圓、最モ少ナキハ北日本汽船 206萬圓ナリトス。

【土木費】 大正四年度中支出シタル土木費ノ決算額ハ約 6,032萬圓ニシテ、之ヲ前年度ニ比スレハ約 539萬圓ヲ減少セリ。此ノ支出中國庫負擔分ハ 725萬圓(12.01%)ニシテ、他ノ 5,308萬圓(87.99%)ハ地方支辨ナリ。又此ノ支出ヲ各項目別ト爲シ分節比例ヲ算出スレハ、道路費 27.12%、橋梁費 9.13%、河川費 30.54%、港灣潮除其他諸費 33.21%ニ當ル。上記地方支辨ノ土木費ヲ負擔者別トナセハ、府縣費 52.43%、郡市區町村費 37.86%、寄附金 4.27%、其他 5.44%ニ當リ、更ニ此ノ負擔者別ヲ十年前ナル明治三十八年度ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、府縣費 208.4、郡市區町村費 286.0、寄附金 162.6其ノ他 108.5ニ當リ、寄附金其ノ他ヲ除クノ外、他ハ總テ倍額以上ノ增加ヲ爲セリ。

XV. 通信及郵便爲替貯金事業

【通信官署】 大正七年度末現在ノ遞信省所管通信官署ハ郵便局 7,746箇所(内船内 11箇所ヲ含ム)電信局 7箇所、無線電信局 54箇所(内船内 47箇所ヲ含ム)、電話局 27箇所ナリ。之ヲ前年度末ニ比スレハ郵便局ハ 118箇所ヲ增シ、電信局ハ增減ナク、無線電信局ハ 2箇所ヲ減シ、電話局ハ 6箇所ヲ增セリ。又本年度末現在ノ郵便受取所ハ 6箇所、電信受取所ハ 1,048箇所、電信電話取扱所ハ 1箇所、無線電信取扱所ハ 152箇所(内船内取扱所 149箇所ヲ含ム)、電話所ハ 178箇所、自働電話ハ 798箇所ニシテ之ヲ前年ニ比スルニ郵便受取所ハ 1箇所、電信受取所ハ 10箇所、無線電信取扱所ハ船内取扱所ノミ 65箇所、電話所ハ鑛業場特設ノミ 29箇所、自働電話ハ 24箇所ヲ增シタリ。此ノ通信官署ヲ十年前ノ明治四十一年度末ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ普通郵便局ハ 113、船内郵便局ハ 275、電信局ハ 87、無線電信局ノ陸上ハ 140、同船内ハ 470、電話局ハ 540、郵便受取所ハ 120、電信受取所ハ 134、自働電話ハ 291ニ當リ、電信電話取扱所、無線電信取扱所及電話所ハ十年前ハ絕無ナリキ大正七年度末現在ノ郵便切手賣捌所ハ 59,490箇所、郵便函ハ 62,573箇所ニシテ明治四十一度末ヲ百ト爲シタル指數ヲ求ムルニ郵便切手賣捌所ハ 142、郵便函ハ 113ニ當ル。本年度末現在ノ郵便切手賣捌所及郵便函ヲ同年末ノ乙種現住人口ニ比スルニ人口 36人ニ付一郵便切手賣捌所アリ、人口 890人ニ付一郵便函アル割合ニ當レリ。此ノ比例ヲ五年前ナル大正三年末ノ同一比例ニ比スルニ、郵便切手賣捌所一箇所ニ對スル人口ハ 19人、郵便函一箇所ニ付 17人ヲ增セリ。由之觀之是等通信機關ノ增設ハ人口ノ增加ニ比シ多少遲徐ノ觀アリトス。

【郵便線路】 大正七年度末現在ノ陸上郵便線路ハ、道路 8,060里、鐵道 7,949哩ニシテ、之ヲ全國ノ總面積ニ比スルニ百方里ニ付道路ハ 32.51里、鐵道ハ 32.06哩ニ當ル。又水上郵便線路(海上、河上、湖上)ハ 18,253浬ナリ。此ノ線路ヲ十年前ノ明治四十一年度末ニ比スレハ、其ノ百ニ對シ、道路 69、鐵道 160、水上ハ 81ナル指數ヲ得。斯ノ如ク道路及水上線路ノ減縮セルハ、一ニ鐵道事業ノ發達ニ由ル影響ナリトス。

【郵便物】 大正七年度中ノ引受郵便物ハ 27億 8,380萬通、配達郵便物ハ 27億 8,757萬通ニシテ、之ヲ前年度ト比較スルニ引受郵便物ハ 4億 2,100萬通、配達郵便ハ 4億 2,217萬通ヲ增加セリ。又十年前ノ明治四十一年度ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、引受郵便物ハ 173ニ當リ、配達郵便物ハ 196ニ當ル。而シテ乙種現住人口ノ明治四十一年度ニ對シ大正七年度ノ指數カ 113ナルニ比スレハ、通信ノ發達殊ニ顯著ナルモノアルヲ見ル。又上記ノ引受配達郵便物總數ヲ、年末ノ乙種現住人口ニ比スルニ一箇中ニ一人ニ付約 50通宛ノ發送、收受アリタルニ當ル。以上ノ内ヨリ外國郵便物ノミヲ摘出スレハ、大正七年度中ノ發送總數 1,858萬通、到着總數 1,504萬通ナリ。此ノ發送、到着各通數ヲ五大洲別ト爲シ、其ノ分節比例ヲ求ムレハ、發送ハ亞細亞洲 61.64%、亞米利加洲 19.83%、太洋洲 10.01%、歐羅巴洲 7.8[illegible]%、亞弗利加洲 0.64%ニ當リ。到着ハ亞細亞洲 50.41%、亞米利加洲 26.60%、歐羅巴洲 15.13%、太洋洲 7.16%、亞弗利加洲 0.61%ニ當レリ。

【小包郵便】 大正七年度中ノ小包郵便物ハ、引受總數 4,025萬箇、配達總數 3,750萬箇ニシテ、此ノ内外國ヘ發送 70萬箇、外國ヨリ到着 23萬箇ナリ。前年度ニ比シ引受 700萬箇、配達 671萬箇ヲ增セリ。上記ノ引受總數ヲ、十年前ノ明治四十一年度ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 209ニ當リ、同配達總數ハ 206ニ當ル。小包郵便モ亦普通郵便ト同樣ニ其ノ發達著シト謂フヘシ。

【電信線路】 大正七年度末現在ノ電信線路ハ、陸上架空裸線ハ 8,240里、同線條ハ 46,319里、架空「ケーブル」線ハ心線 383里、地下「ケーブル」線ハ心線 1,192里アリ。之ヲ全國ノ總面積ニ比スルニ、百方里ニ付陸上線條ハ 186.81里、心線ハ 6.35里ニ當ル。之ヲ十年前ノ明治四十一年度末ノ線條 152.79里、心線 3.50里ナリシニ比較スルニ、此ノ十年間ニ於テ增加延長スルコト百方里ニ付線條ハ 34.02里、心線ハ 2.85里ナリ。又海底、河底、湖底敷設ノ大正七年度末現在ノ電信線路ハ 6,142浬アリ、此ノ心線ハ 6,870浬ニシテ、是亦明治四十一年度末ヲ百ト爲シタル指數ヲ求レハ、線路ハ 163、心線ハ 154ニ當レリ。

【電信】 大正七年度中ノ電信通數ハ、發信 5,916萬通、着信 6,017萬通ニシテ、無線電信局ニ於テ取扱ヒタル無線電信通數ハ發信 12萬通、著信 6萬通ナリ。之ヲ十年前ノ明治四十一年度ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ發信ハ 219、著信ハ 219ニ當ル。是亦前揭ノ乙種現住人口ノ指數ニ比シ甚タ高キヲ觀ル。無線電信通數ヲ明治四十二年度ニ比較スレハ發信約十五倍强、着信約十二倍强ノ增加ニ當レリ。

【電話】 大正七年度末現在ノ電話交換取扱局所ハ 1,273箇所ニシテ之ヲ十年前ノ明治四十一年度末ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 400ニ當ル。本年度末現在ノ電話加入人員ハ 270,121人ニシテ、是亦同上ノ指數ヲ求ムルニ 344ニ當ル。局所ノ指數ニ比シ加入者ノ指數ノ少數ナルハ、電話事業ノ發達ニ伴ヒ、加入者ノ比較的少ナキ小都會モ亦之ヲ取扱フニ至リタルニ由ルモノナルヘシ。大正七年度末電話加入者數人口ニ比スルニ千ニ付 4.85ニ當リ、此ノ比例ヲ地方別ニ見ルニ東京府ノ 17.44、最大ニシテ其ノ他大阪府ノ 12.35、京都府ノ 10.85、兵庫縣ノ 6.99、神奈川縣ノ 6.91、北海道ノ 6.50、愛知縣ノ 6.32、石川縣ノ 5.22和歌山縣ノ 4.74、福岡縣ノ 4.04等大ナルモノニ屬シ、沖繩縣ノ 0.64最小ナリ。

【郵便爲替】 大正七年度中ニ遞信省所管局所ニ於テ取扱ヒタル、郵便爲替ハ振出口數 2,653萬口、拂渡口數 2,780萬口ニシテ其ノ金額振出 5億 0,315萬圓、拂渡金額 5億 2,304萬圓ナリ。(大正五年三月ヨリ取立郵便ノ口數及金額ヲ郵便爲替トシテ取扱フ規定ヲ實施セラル)。又大正七年度中ニ取扱ヒタル、外國郵便爲替ハ諸外國ヘノ振出口數 16,027口、其ノ金額 585,766圓、内聯合國 1,546口、其ノ金額 112,787圓、特約國 14,481口其ノ金額 472,979圓ニシテ、外國ヨリノ振出口數 157,259口其ノ金額 11,231,466圓、内聯合國 13,664口其ノ金額 459,791圓、特約國 143,595口其ノ金額 10,771,675圓ナリ。此ノ事實ニ依リ分節比例ヲ求ムレハ、外國ニ振出金額中聯合國ハ 19.25%、外國ヨリ振込金額中聯合國ハ 4.09%ニ當リ、此ノ他ハ特約國ニ係ルモノナリ。大正七年度中ノ外國爲替振出總額ヲ國別ト爲シ、其ノ分節比例ヲ求ムルニ、北米合衆國ノ 50.54%ノ最高トシ、英吉利ノ 11.37%、香港媒介國ノ 6.12%、瑞西ノ 4.44%、加奈太ノ 3.90%、北米合衆國媒介國 3.43%、佛蘭西ノ 3.15%ハ次第シ、殘ル 17.05%ハ其ノ他ノ諸外國ナリ。又振

込總額ハ北米合衆國ノ 49.42%最高ニシテ加奈陀ノ 29.81%、布哇ノ 13.10%、香港媒介國ノ 2.74%、關領印度ノ 2.60%等次第シ、殘ル諸外國ハ 2.33%ニ當レリ。

【郵便貯金及保管證券】 大正七年度ニ於ケル遞信省、朝鮮總督府、臺灣總督府、關東廳及樺太廳ノ所管ニ係ル郵便貯金ノ總數ハ、年末現在預人員 2,008萬人、此ノ預金額 6億 0,548萬圓、之ヲ前年ニ比スレハ人員 249萬人、金額 1億 4,712圓リ增加セリ。又十年前ノ明治四十一年度ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ人員ハ 204、金額ハ 540ニ當リ、預金者ノ數モ增加シタレトモ、就中金額ハ著シク增加シタリ。又明治四十一年度ハ年末現在預人員平均一人ノ年末現在預金額ハ 12圓 62錢ナリシニ大正七年度ニハ 30圓 14錢トナリ、約二倍半ニ昇レリ。又內地ノ預金額ヲ總人口ニ比スルニ、明治四十一年度ハ總人口一人ニ付 2圓 27錢ニ當リシカ大正七年度ニハ 10圓 65錢ニ當リ、約四倍强ニ增加セリ。又保管證券ハ前年度ニ各年トモニ總テ漸次盛況ヲ呈セシカ、大正六年度ニハ受入、拂渡トモ郵便貯金ニ反シテ低下セリ、然レトモ本年度末現在ノ總數ニ於ケル遞信省保管證券ハ人員 73萬人額面金額 7,684萬圓ニシテ、前年度末ヨリ增スコト、人員 13萬人、額面金額 1,461萬圓ナリ。是等ノ數ヲ十年前ノ明治四十一年度ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ、人員ハ 497、額面金額ハ 366ニ當リ、是亦進歩ノ著シキヲ觀ル。

【郵便振替貯金】 大正七年度末ノ遞信省、朝鮮總督府、臺灣總督府關東廳及樺太廳ノ所管ニ係ル、郵便振替貯金加入口數ハ 121,947口ナリ。之ヲ十年前ノ明治四十一年度ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ 538ニ當ル。而シテ新規加入口數ハ 20,819口、受入總金額ハ 9億 5,602萬圓ナリ。此ノ中基本預金ハ僅ニ 0.02%ニシテ、其ノ他ノ金額ハ 99.98%ニ當レリ。斯ノ如ク長足ニ進歩シタルハ、其ノ簡易便法ナルニ依ルモノナラン。

【年金恩給拂渡】 大正七年度ニ於ケル年金恩給取扱ノ總口數ハ 126萬口ニシテ、其ノ金額ハ 3,740萬圓ナリ。之ヲ五年前ノ大正二年度ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ口數ハ 111、金額 119ニ當ル。又年度末現在ノ給與人員及給與年額ニ就テ、五年前ノ大正二年度ヲ百トシタル指數ヲ求ムルニ、給與人員ハ 111、給與年額ハ 120ニ當レリ。

【郵便電信電話收入】 大正六年度ノ郵便電信電話收入ハ、決算總額 9,069萬圓、內通常郵便 3,189萬圓、小包郵便 589萬圓、郵便爲替 234萬圓、郵便貯金 254萬圓、電信 2,416萬圓、電話 2,387 萬圓ナリ。通信事業ハ上記ノ如ク、長足ノ進歩發展ヲ爲セルカ故ニ、從テ收入ニ於テモ亦斯ク著シク增加セリ。

XVI. 貨幣及度量衡

【貨幣】 大正八年度中造幣局ニ於テ貨幣鑄造ノ爲メ受領シタル地金ノ量ハ金 45,784貫 031匁、銀 22,232貫 600匁、白銅 69,054貫 089匁、青銅 214,030貫 516匁ニシテ前年度ニ比シ金 43,583貫 553匁ヲ增シ、銀 18,059貫 462匁ヲ減シ、白銅 69,034貫 136匁、青銅 213,837貫 832匁ヲ增加セリ。而シテ金ハ帝國臣民及外國人ヨリノ輸納ニ係ルモ銀以外ハ悉ク政府ヨリノ受領ナリ。

大正八年度中硬貨鑄造高ハ、金貨 36,551,080圓、銀貨 7,596,524圓、白銅貨 3,240,168圓、青銅貨 1,939,498圓合計 49,318,270圓ニシテ金貨ハ悉ク二十圓貨幣、銀貨ノ內 3,590,721圓ハ五十錢貨幣 4,005,803圓ハ十錢貨幣、白銅貨ハ五錢貨幣、青銅貨ノ內 1,910,097圓ハ一錢貨幣 20,401圓ハ五厘貨幣ナリ。

同年度中硬貨幣發行高ハ 46,170,794圓ニシテ上記鑄造高ト同シカラス、即チ金貨ハ 18,600圓ノ供試高ヲ除キ、更ニ前年度中ヨリノ造幣局在高ヲ加ヘ、本年度中發行セラレタル額 33,405,394圓ニ達ス。銀貨以下ハ各千位以下ノ端數ヲ供試ノ爲除キタル殘額、即五十錢銀貨 3,590,000圓、十錢銀貨 4,005,000圓、五錢白銅貨 3,240,000圓、一錢青銅貨 1,910,000圓、五厘青銅貨 23,400圓ヲ發行セリ、之ヲ前年度ト對照スルニ銀貨 6,605,000圓ヲ減シタル外金貨 8,883,292圓、白銅貨 2,740,000圓、青銅貨 100,400圓ヲ增加セリ。而シテ同年度中鑄潰セシモノナキヲ以テ銀貨ヲ除ク外各種貨幣ノ新ニ市場ニ流通スルニ至リシ額ハ前年度ニ比シ一層多額ナリ。

同年度末ニ於テハ前記硬貨ノ外小額紙幣五十錢 55,815,000圓、二十錢 1,000,000圓、十錢 13,685,000圓、合計 70,500,000圓ヲ發行シ以テ補助銀貨ニ代用セシメタリ。同年度ニ於テ同貨幣ノ消却セルモノアリ即チ五十錢 12,560,000圓、二十錢 2,350,000圓、十錢 2,590,000圓、合計 17,500,000圓アリテ大正八年差引流通高 158,000,000圓ナリ。

明治三年造幣寮創設以來、貨幣發行ノ狀ヲ見ルニ、同年十一月ヨリ六年ニ至ル間ニ於テハ約 5,600萬圓ノ發行アリ、爾後二十六年度ニ至ル迄ノ每五年間ニ 3千萬圓ヨリ 6千萬圓ニ次第ニ增加セシカ、明治二十七年乃至三十一年度ノ五年間ニ一躍 1億 9千餘萬圓ノ多額ニ上レリ。是レ言フ迄モナク日清戰役ニヨリ生シタル戰費ノ增大ト國力ノ發展トノ結果ニ外ナラス。次ノ五年間ニ於テモ 1億圓以上ノ發行アリ、更ニ明治三十七年度ヨリ四十一年度ニ至ル期間ニ於テ亦 2億圓ヲ突破セリ。四十二年度乃至大正二年度ノ期間ニ於テモ 1億 9千餘萬圓ノ發行アリ、最近即チ大正三年乃至七年度ノ五年間ハ 3億 1千 5百餘萬圓ニ達シ、之ニ小額紙幣 1億 5百萬圓ヲ加算セハ 4億 2千餘萬圓ニ上リ、前五年間ニ比シ二倍强ニ當ル。

尙明治三年以來ノ貨幣發行ノ總額ハ 12億 9,980萬餘圓ニシテ同期間ニ於ケル鑄潰高ノ總額ハ 7,823萬餘圓ナルヲ以テ差引 12億 2,156萬餘圓ナルモ密ニ民間ニ於テ鑄潰サレ、又ハ國外ニ輸出セラルヽ額ヲ知ルヲ得サルヲ以テ實際社會ニ流通スル貨幣ハ幾何ナルヤ容易ニ推測シ難シ。尙日本銀行兌換券ニ就キテハ之ヲ銀行及金融ノ部ニ揭ケ置キタリ。

【度量衡】 大正七年度中度量衡器ノ檢定數ハ度器 6,336,843、量器 1,031,415、瓦斯「メートル」118,953、衡器 1,879,546ニシテ、內中央度量衡檢定所竝其ノ支所ニ於テ農商務大臣カ檢定ヲ與フル所謂甲種檢定ハ度 484,614、量 246,122、瓦斯「メートル」118,953、衡 37,093ナリ。又地方長官ニ於テ檢定ヲ與フル所謂乙種檢定ハ度 5,852,229、量 785,293、衡 1,842,453ナリ。右ノ內檢定合格數ハ度器 6,231,723、量器 990,321、瓦斯「メートル」113,731、衡器 1,838,224ニシテ其ノ檢定數竝ニ合格數ハ量器ヲ除ク外各種共ニ前年度ニ比シ增加ヲ示ス。

同年度中ノ度量衡器ノ販賣即需要高ヲ見ルニ、全國ニ於テ度器 3,795,537、量器 965,521、衡器 1,110,094ニシテ、前年度ニ比シ度器ヲ減シ量、衡ノ二器ハ何レモ增加セリ。其ノ人口千ニ對スル比例ヲ見ルトキハ、度 68.19%、量 17.55% 衡 19.94%ニシテ、是レ亦前年度ヨリ度器ニ於テ減シ量衡ノ二器ハ增加セリ。右需要高人口比例ヲ府縣別ニ就テ見ルニ、度器ハ最高京都 201.70%、東京 166.06%、大阪 162.73%、福岡 158.14%、富山 130.12%、北海道 108.22%ノ順ニシテ、最低島根 30.87%、岡山 36.20%、埼玉 36.95%、沖繩 36.93%、高知 37.08%ノ順位ナリ。次ニ量器ハ京都 50.56%、福岡 31.24%、東京 27.94%、群馬 26.70%、大阪 26.14%、和歌山 24.84%ヲ高キ順位トシ、石川 5.66%、岡山 8,78%、福井 9.02%、埼玉 9.10%、鹿兒島 9.27%ヲ低キ順位トス。又衡器ハ京都 66.67%、大阪 32,54%、奈良 29.17%、愛知 28.72%等多ク、少キハ群馬 3.44%、北海道 5.18%、鹿兒島 5.72%、神奈川 7.10%等ナリ。

度量衡器ノ第一種檢査即府縣知事ニ於テ行フ取締ノ大正七年度中ノ成績ヲ見ルニ、檢査戶數 1,353,791、其ノ器數、度 468,142、量 2,954,218、衡 2,306,664ニシテ、各器ノ檢査百中不合格ノ割合ハ度 7.0%、量 5.9%、衡 8.8%ナリ。前年度ニ比シ檢査ノ戶數竝度、量、衡共ニ增加シ其ノ不合格ノ割合モ亦各々增加セリ。而シテ本年度ニ於ケル各府縣ノ檢査不合格ノ多少ヲ見ルニ度器ハ東京群馬、青森、鹿兒島、福島、等量器ハ群馬ニ於テ著シク、其ノ他ハ長崎、東京、福岡、等衡器ハ群馬、高知、長崎、北海道、香川、等不合格ノ割合高シ。右ノ外度量衡ノ檢査ニハ市町村長ニ於テ行フ所謂第二種檢査アルモ其ノ材料ナシ。

XVII. 銀行及金融

【銀行總說】 大正七年末ニ於テ帝國內(朝鮮ニ於ケル朝鮮ノ銀行ヲ除ク)ニ本店ヲ有スル銀行ノ總數ハ、合計 2,089行ニシテ、之ヲ種類別ト爲セハ、普通銀行 1,375行、貯蓄銀行 661行、特種銀行 53行ナリ。前年ニ比シ總數ニ於テ24行ノ減少ヲ示シタルハ、主トシテ普通銀行ノ合併、若クハ解散ニ因ルモノノ如シ。同年末ニ於ケル拂込資本金ノ總額ハ 9.24億圓ニシテ、積立金ハ 3.36億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、前者ハ一割九分、後者ハ一割三分ノ增加ヲ爲シ、本店一ニ對スル拂込資本金ハ 442,340圓、積立金ハ 160,615圓ニ當レリ。而シテ、此等銀行カ取扱タル同年中ノ入金ハ 4,268.15億圓、出金 4,266.40億圓ニシテ、前年ニ比シ、何レモ約 1,501.38億圓ノ激增ヲ示セリ。如斯資金轉環ノ著シカリシ結果純益金及配當金モ亦著シク增加シ、前者ハ 2.23億圓トナリ、前年ヨリ 4,266萬圓ヲ增加シ、後者ハ 7,503萬圓ニシテ、前年ニ比シ 1,330萬圓ノ增加ヲ爲セリ。

大正七年中ニ於ケル全國各種銀行ノ預金ハ、普通預金 1,332.03億圓、官公預金 66.57億圓ニシテ、合計 1,398.86億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、普通預金 505.11億圓、官公預金 20.60億圓ノ增加ニ當リ、普通預金ノ增加著シキヲ見ル。而シテ其ノ年末殘高ハ合計 82.09億圓ニシテ、前年ヨリ增加セルコト正ニ 28.49億圓ナリ。次ニ同年中ノ借入金ハ、總額 123.15億圓ニシテ、既往ニ於テ未タ嘗テ見サル所ノ巨額ナリ。從テ其ノ年末殘高モ 8.98億圓ニ上リ、何レモ前年ニ比シ、二倍以上ノ增加ヲ示シタリ。

大正七年中ニ於ケル全國各種銀行ノ貸出金ハ、普通貸付金 466.49億圓、政府貸上金 3,569萬圓、合計 466.85億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、總額 186.17億圓ノ激增ニシテ、其ノ殆ト全部ハ普通貸付金ノ增加ナリ。而シテ、其ノ年末殘高ハ 53.09億圓ニシテ、前年ヨリ增加セルコト 15.52億圓ナリ。

大正七年中ニ於ケル全國各銀行カ取扱ヒタル手形割引ノ總額ハ 161.06億圓ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 55.71億圓ノ激增ヲ爲シ、近年此種信用證券ノ流通如何ニ著シキカヲ知ルニ足ラン、又其ノ年末殘高ハ 24.65億圓ニシテ、前年ヨリ增加セルコト 9.59億圓ナリ。手形割引ノ增加ハ勢ヒ再割引手形ノ增加ヲ促シ、七年中ニ於

ケル再割引高ハ 10.38億圓ニ上リ、前年ニ比シ約八割ノ增加ヲ爲シ、其ノ年末殘高ハ 2.02億圓ニシテ、是亦前年ニ比シ、著シク增加セリ。

荷爲替手形ノ總貸付高ハ 34.87億圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ 1,17億圓ナリ。前年ニ比シ、何レモ著シク增加シ、前者ハ四割半、後者ハ約二倍ノ增加ニ當レリ。又同年中ニ於ケル預金總額ハ 475.13億圓ニ上リ、前年ニ比シ、六割以上ノ增加ヲ示シ、其ノ年末殘高ハ 10.58億圓ニシテ、是亦、增加著シ。

大正七年末ニ於ケル有價證券在高ハ 14.72億圓ニシテ、內、公債證書 11.09億圓、株券及社債 3.63億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ公債證書ハ 3.71億圓、株券及社債券ハ 1.28億圓ノ增加ニシテ、特ニ公債證書ノ增加著シキヲ見ル。金銀在高モ亦著シク增加シ、今ヤ 8.32億圓ニ達シ、之ヲ歐洲大戰開始當時ニ比スレハ、實ニ五億圓以上ノ增加ニ當レリ。

【日本銀行】 明治十五年 200萬圓ノ拂込資本ヲ以テ創立セラレタル日本銀行ハ、大正七年末ニ於テ本支店及出張所 14ヲ有シ、拂込資本金ハ 3,750萬圓、積立金ハ 3,327萬圓ノ多額ニ上リテ同銀行ノ基礎益々堅實ヲ加ヘタリ。同年中ニ於ケル入金ノ總額ハ 530.02億圓、出金高 529.40億圓ニシテ、前年ニ比シ共ニ約 163.22億圓ノ激增ヲ爲セリ。從テ純益金モ亦增加シテ 793萬圓トナリ、拂込資本金百圓ニ對シ 21.20圓ノ純益ニ當レリ。然レ共配當金ハ、前年同樣 450萬圓ナリキ。

大正七年末ニ於ケル日本銀行兌換券發行高ハ 11.44億圓ニシテ、之カ準備充當高ハ、正貨 7.13億圓、保證 4.32億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、發行高 3.14億圓、正貨準備 6.331萬圓、保證準備 2.50億圓ノ增加ニシテ、保證準備ノ增加殊ニ著シ。更ニ之ヲ五年前ニ比シ、其各百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、兌換券 268.5、正貨準備 317.8、保證準備 213.7ニ當リ歐洲大戰開始以來如何ニ兌換券ノ膨脹セシカヲ知ルニ足ラン。

大正七年中ニ於ケル預金ノ總額ハ 351.77億圓、其ノ年末殘高ハ 9.92億圓ニシテ、何レモ前年ニ比シ五割以上ノ增加ヲ爲セリ。此ノ預金ヲ官公預金ト普通預金トニ分チ見ルニ、官公預金ハ 15.4%、普通預金ハ 84.6%ニシテ、普通預金ハ其ノ八割以上ヲ占ムルモ、其ノ年末殘高ハ、官公預金 95.1%、普通預金 4.9%ニシテ、彼此轉倒ノ現象ヲ示セリ。之レ官公預金ト普通預金ト其ノ性質ヲ異ニスルヨリ生スル結果ナラン。

大正七年中ニ於ケル日本銀行ノ貸出金ハ 19.12億圓ニシテ、內政府貸上金 2,200萬圓、普通貸出金 18.91億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、政府貸上金ニハ增減ナキモ、普通貸付金ハ六割七分ノ增加ヲ爲セリ。此ノ增加ハ普通預金中主トシテ外國爲替貸付金ノ增加ニ因ルモノノ如ク。定期貸付金ハ却テ減少ヲ示セリ。而シテ此等貸出金ノ年末殘高ハ 4.69億圓ニシテ、前年ヨリ二倍ノ增加ヲ示シタリ。

本年中ニ於ケル割引手形ノ總額ハ 10.55億圓、其ノ年末殘高ハ 1.30億圓ニシテ、之ヲ開戰當時ナル大正三年ニ比スレハ、何レモ二倍半以上ノ增加ニシテ、戰時中如何ニ此種ノ用證券ノ取引盛ナリシカヲ知ルニ足ル。又本年末ニ於ケル預ケ金ハ 4,453萬圓、公債證書ハ 3,200萬圓、金銀在高 2.05億圓ニシテ、前年ニ比シ公債證書ヲ除クノ外ハ、何レモ著シク增加シ、殊ニ金銀在高ノ如キハ四割以上ノ增加ヲ示セリ。

【横濱正金銀行】 横濱正金銀行ハ明治十三年拂込資本金 140萬圓ヲ以テ開業セシカ、爾來着實ナル發展ヲ爲シ、大正七年末ニ於テハ拂込資本金 4,200萬圓トナリ、內地及支那、歐米南洋等ノ枢要ナル都市ニ支店及出張所 34ヲ有スルニ至レリ。而シテ銀行ノ信用ヲ裏書スヘキ積立金ハ 2,696萬圓ヲ擁シ、之ヲ前年ニ比スレハ 203萬圓ノ增加ヲ爲セリ。同年中ニ於ケル入金ハ 654.95億圓、出金ハ 654.74億圓ニシテ、前年ニ比シ、何レモ四割以上ノ增加ヲ爲シ、從テ營業純益金モ亦著シク增加シ、本年ハ一千萬圓以上ニ上リ、拂込資本百圓ニ對シ、23.86圓、即チ二割三分以上ノ收益ヲ收ムルコトヲ得タリ。

大正七年中ニ於ケル預金總額ハ 150.09億圓ニシテ、內當座預金 118.45億圓、定期預金 5.04億圓、官公預金 7,223萬圓、其他預金 25.88億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ、官公預金ヲ除クノ外ハ、何レモ著シク增加シ、特ニ當座預金及其他預金ニ於テ增加セルヲ見ル。而シテ總預金ノ增加ニ伴ヒ、年末殘高モ亦增加シテ 5.37億圓トナレリ。又同年中ニ取扱ヒタル貸付金ノ總額ハ 26.56億圓ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ、六割以上ノ增加ニ當リ、如何ニ資金需要ノ增加セルカヲ知ルニ足ラン。貸付金中其ノ最モ多キハ當座預金貸越、爲替當座貸、定期貸等ニシテ、政府貸上金最モ少シ、而シテ此等貸付金ノ年末殘高ハ 2.17億圓ニシテ、前年ニ比シ、六割三分ノ增加ニ當レリ。貸付金ノ多數ハ一年以下ノモノニシテ、一年以上ノ比較的長期ノモノハ、總貸付金ノ一割ニモ充タサルナリ。

大正七年中ニ於ケル割引手形ノ總額ハ 45.36億圓、其ノ年末殘高ハ 7.70億圓ニシテ、既往ニ於テ末タ嘗テ見サル所ノ巨額ナルノミナラス、實ニ全國銀行中第一位ノ割引高ナリ。次ニ同年末現在ノ有價證券在高ハ 1.03億圓ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ約四倍ノ增加ニ當レリ、而シテ此ノ有價證券中公債證書ハ 97.0%ヲ占メ社債券ハ僅ニ 3.0%ヲ有スルニ過キス、又金銀在高ハ 4,835萬圓ニシテ前年ヨリ 814萬圓ヲ增加シ五年前ニ比シ二倍以上ノ增加ヲ爲セリ。

横濱正金銀行ハ關東州及支那ニ於テノミ銀行券ヲ發行スルノ權利ヲ有ス、之ニ基キ大正七年ニ發行シタル總額ヲ邦貨ニ換算セハ 2.48億圓ニシテ前年ニ比スレハ 5,000萬圓ノ減少ヲ示シタルモ之ヲ五年前ニ比スレハ猶二倍以上ノ增加ヲ爲シ居レリ。

横濱正金銀行ニ於ケル業務ノ主要ナルモノハ實ニ其ノ爲替、殊ニ外國爲替業務ニ在リ、今大正七年中ニ於ケル爲替取引ノ狀況ヲ見ルニ買入爲替手形ハ各地ヘ向ケタルモノ 16.64億圓、內海外 10.17億圓、受ケタルモノ 13.64億圓、內海外 6.81億圓ニシテ近時外國貿易ノ隆盛ニ伴ヒ著シク增加シ、之ヲ前年ニ比スレハ何レモ約二倍ノ增加ヲ爲セリ。送金手形ハ各地ヘ向ケタルモノ 21.10億圓、內海外 6.13億圓、各地ヨリ受ケタルモノ約 19.47億圓、內海外 4.23億圓ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ買入爲替手形ノ如キ激增ハ爲サヽリシト雖近年稀ナル增加ヲ爲シ居ルハ既往ノ事實ニ比シ明ラカナリ。又代金取立手形ハ當所 3,284萬圓、內海外 848萬圓、他所 7,620萬圓、內海外 4,341萬圓ニシテ前年ニ比シ當所ハ 890萬圓、他所ハ 2,359萬圓ヲ增加シタリト雖之ヲ明治四十四年及大正元年頃ノ取扱高ト比較セハ其ノ及ハサル遠シト云ハサルヘカラス。此ノ外對外關係ノミニ屬スル爲替預金手形及利付爲替手形等アリ、何レモ既往ニ比シ增加ヲ示シ居レルモ唯爲替預金手形ノ中各地ヨリ受ケタルモノノミハ前年ニ比シ約半數以上ノ減少ヲ示シ居レリ。

【日本勸業銀行】 日本勸業銀行ハ明治三十一年 250萬圓ノ拂込ヲ以テ創立セラレシカ大正七年末ニ於テハ恰モ其十一倍 2,750萬圓ニ增加シ、積立金ハ 867萬圓ノ多額ニ上リ前年ヨリ 110萬圓ヲ增加セリ、又同年中ニ於ケル入金又ハ出金ハ共ニ約 4.91億圓ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ共ニ 9,878萬圓ノ增加ヲ示セリ。純益金ハ歐洲大戰以來著シク增加シ今ヤ 422萬圓ノ多額ニ上リ拂込資本金百圓ニ對スル純益金ハ 15.34圓ニ當レリ。而シテ此ノ純益金中配當金ニ充テラレタルハ 252萬圓ニシテ、差引殘額 169萬圓ハ、積立金、後期繰越金等ニ充當セラレタルモノトス。

勸業銀行ノ特權ニ屬スル勸業債券ノ大正七年中新ニ發行シタル總額ハ 3,995萬圓、同年中ノ償還額ハ 1,905萬圓ニシテ、差引 2,090萬圓ノ現在高トナルモ、之ニ前年ヨリノ越高 2億 1,062萬圓ヲ加フルトキハ、結局本年末ノ在高ハ 2億 3,152萬圓ノ多額ニ上レリ。

日本勸業銀行ノ預金ハ、逐年著シク增加シ、大正七年末ニ於テハ、總額 4.515萬圓、年末殘高ハ 1,175萬圓ニ達シ、之ヲ同銀行ノ預金開始當時ナル明治四十三年ニ比スレハ、實ニ 45倍ニ當レリ。又貸付金ハ總額 2.85億圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ 2.37億圓ナリ。共ニ前年ニ比シ增加セルモ、之ヲ預金ノ增加歩合ニ比スレハ、其ノ率少シト云ハサルヘカラス。而シ年末殘高カ總貸付金ニ比シ、比較的巨額ナルハ、長期間ノ貸出多キニ因ルモノナルヘク、是レ他ノ銀行ト大ニ其ノ趣ヲ異ニセル所以ニシテ、貸付金中年賦償還貸付金ハ最モ短キモノト雖、一ケ年ヲ降ラス、其ノ最モ長期ナルモノハ五十ケ年ニ及フモノアリ。此等ノ貸付金ヲ借主ノ職業別ニ依リ見レハ、農業者最モ多ク、工業者、其他諸業者、耕地整理者之ニ亞キ、農工銀行最モ少シ、同銀行本年末現在ノ有價證券在高ハ 1,596萬圓ニシテ、金銀在高ハ 20萬圓ナリ。共ニ既往ニ比シ增加著シ。

【農工銀行】 農工銀行ハ明治三十一年一月、靜岡縣農工銀行ノ開業ヲ以テ始マリ、同三十三年八月阿波農工銀行ノ開設ニ及ンテ、全國總數 46ヲ算シ、爾來大正七年ニ至ル迄增減ナキモ、支店及出張所ハ 22箇所ノ設置ヲ見タリ。

拂込資本金ハ 5,551萬圓ニシテ、前年ニ比シ 532萬圓、五年前ニ比スレハ 1,417萬圓ノ增加ヲ爲セリ。又積立金ハ 3,228萬圓ニシテ、前年ニ比シ 392萬圓ノ多額ヲ增加シ、五年前ニ比スレハ實ニ 1,803萬圓ノ增加ニシテ、最近五ケ年間ニ於テ、同銀行カ如何ニ利潤多カリシカヲ知ルニ足ラン。同年中ニ於ケル入金又ハ出金ハ各 9.94億圓ニシテ、是亦、前年ニ比シ增加著シ。本年中ニ於ケル純益金ハ 1,148萬圓ニ上リ、之ヲ歐洲大戰前ナル大正二年ニ比スレハ 388萬圓ノ激增ヲ爲セリ。從テ配當金ノ增加スルハ當然トスヘク總額 463萬圓ニシテ、拂込資本金百圓ニ對スル配當金ハ 8.34圓ニ當レリ。

農工債券ノ大正七年中ニ發行セラレタル總額ハ 2,966萬圓、同年中ニ償還シタル金額 1,604萬圓ニシテ、差引增發 1,362萬圓ナリ。之ニ前年ヨリノ越高 1.02億圓ヲ加フレハ、其ノ年末在高ハ 1.16億圓トナリ。之ヲ前年ニ比スレハ 1,362萬圓ノ增加ヲ爲セリ。

大正七年中ニ全國農工銀行ノ取扱ヒタル預金總額ハ 2.25億圓ニシテ、內、普通預金 1.84億圓、官公預金 4,086萬圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、普通預金 5,151萬圓、官公預金 1,155萬圓、合計 6,306萬圓ヲ增加セリ。而シテ其年末殘高ハ 6,719萬圓ニシテ、總預金額ノ增加ニ伴ヒ、逐年增加シツヽアリ。又貸付金ハ 2.25億圓ニシテ、前年ヨリ 2,097萬圓ヲ增加セリ。從テ其ノ年末殘高モ著シク增加シテ 1.87億圓ノ多額ニ上レリ。而シテ總貸付金ニ比シ年末殘高ノ比較的巨額ヲ示シ居レルハ勸業銀行同樣長期貸付ノモノ多キニ因ルモノナルヘク、今貸付金中最モ多キヲ占ムル年賦償還貸付金ニ就キ貸付期間ノ長短ヲ見ルニ、十五年以上二十年ノモノ最モ多ク 6,778萬圓ニシテ、總數ノ四割ニ當リ、次テ十年以上十五年ノ 4,326萬圓、二十年以上二十五年ノ 3,074萬圓等亦多キモノニ屬シ、五年未滿及二十五年以上三十年ノモノ最モ少シ。更ニ之ヲ借主ノ業證別ニ見ルニ、借主ノ最モ多キハ農業者、工業者、產業組合等ニシテ、商事會社最モ少シ。

大正七年末ニ於ケル有價證券ノ在高ハ 2,006萬圓ナリ。之ヲ種類

別ト爲セハ、公債證書 1,339萬圓、株券 183萬圓、社債券 487 圓ニシテ、公債證書ハ其ノ六割五分ヲ占メ、社債券之ニ次テ多ク、株券最モ少シ。之レ公債證書及社債券ハ株券ニ比シ一般的ニ確實信用大ナルカ故ナルヘシ。又同年末ニ於ケル金銀在高ハ 134萬圓ニシテ前年ヨリ 20萬圓ヲ增加セリ。

【北海道拓殖銀行】 本銀行ハ明治三十三年ノ開業ニ係リ、爾後漸次發展シテ大正七年末ニ於テハ支店及出張所 13箇所ヲ設置シ、拂込資本金 625萬圓ヲ有スルニ至レリ。而シテ同年末現在ノ積立金ハ 225萬圓ニシテ、前年ニ比シ 42萬圓ヲ增加シ逐年信用大ナラントス。次ニ同七年中ニ於ケル入金又ハ出金ハ 17.68億圓ニシテ、之ヲ五年前ニ比スレハ、約四倍以上ノ增加ヲ爲セリ。營業純益金ハ 87萬圓ニシテ、前年ニ比スレハ 19萬圓ヲ減少シタレ共之ヲ既往ニ比スレハ、猶多大ノ收益ナリト言ハサルヘカラス。尙ホ他ノ各種銀行ハ、何レモ近年收益增加シ居レルニ、獨リ本銀行ノミ上記ノ如ク減收セルハ如何ナル理由ニ基クヤ。但シ純益金ハ如斯減少シタルモ、配當金ハ前年ヨリ 4萬圓ヲ增加シ 56萬圓トナレリ之レ積立金等ヨリ繰入配當ヲ爲シタルカ爲ナラン。

拓殖債券ノ大正七年中ニ發行セラレタル總額ハ 660萬圓ニシテ、同年中ニ償還セラレタルモノハ 66萬圓ナリ。之ニ前年ニ比スレハ發行高ハ 333萬圓ヲ增加シ、償還額ハ 115萬圓ヲ減少シタルヲ以テ七年中ノ差引增發高ハ 593萬圓トナリ之ニ前年ヨリノ越高 2,236萬圓ヲ加フルトキハ、七年末ノ現在高ハ 2,830萬圓ノ多額ニ上リ、之ヲ五年前ニ比スレハ、實ニ八割以上ノ增加ニ當レリ。

大正七年中ニ於ケル同銀行ノ預金總額ハ 4.55億圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ 2,855萬圓ナリ。既往ニ比シ何レモ著シキ增加ヲ示シ居レルハ、一面經濟界好況ノ結果ナリト雖、亦、同銀行ノ基礎確實ナルニ因ラスンハアラス。翻テ同年中ニ於ケル貸出金ノ狀況ヲ見ルニ總額 9,640萬圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ 3,782萬圓ナリ。前年ニ比シ前者ハ殆ト倍額、後者ハ五割以上ノ增加ヲ爲シ、同銀行ノ活躍ヲ目前想起セシムルモノアリ。今貸付金ヲ其ノ種類ニ依リ別テハ年賦償還貸付金 3,152萬圓、定期償還貸付金 944萬圓、當座預金貸越 5,483萬圓、其他貸付金 6萬圓ニシテ、當座預金貸越高最モ多ク、年賦償還貸付金之ニ次ケリ。更ニ年賦償還貸付金ヲ年限別ニ見ルニ、最モ短キハ三年ニシテ、最長期ナルハ三十ケ年ニ及フモノアリ。而シテ貸付金ノ最モ多キハ十年、十五年、二十年ニシテ七年以下及二十年以上ハ最モ少シ。又此ノ貸付金ヲ借主ノ業體別ニ見ルニ、最モ多キハ、農業者、商業者、土功組合等ニシテ、水産組合及畜産組合ハ最モ少シ。

大正七年中ニ於ケル同銀行ノ割引手形ノ狀況ヲ見ルニ、總割引高 1,50億圓ニシテ、前年ニ比シ五割、五年前ニ比シ約十五倍ノ增加ニシテ、本年ノ割引高ハ、同銀行開始以來始メテ見ル所ノ巨額ナリ。從テ其ノ年末殘高モ亦增加シテ 1,525萬圓トナリ、前年ヨリ增加セルコト 279萬圓ナリ。

【臺灣銀行】 臺灣銀行ハ明治三十二年ヨリ營業ヲ開始シ、同年ニ於テハ、拂込資本金 125萬圓ナリシカ、爾來漸次發展シテ、大正七年末ニ至リテハ 2,500萬圓ニ增加シ、支店及出張所 33箇所、積立金 603萬圓ヲ有シ、臺灣ニ於ケル金融機關ノ中樞ヲ爲シ居レリ。同年中ノ入金又ハ出金ハ 264.68億圓ニシテ、前年ニ比シ四割餘ノ增加ヲ爲セリ。營業純益金ハ 376萬圓ニシテ、前年ニ比スレハ 95萬圓ノ增加ヲ爲シ、從テ配當金亦增加シ 220萬圓ノ多キニ及ヘリ。

臺灣銀行ニ於テ發行スル銀行券ハ、七年末 4,211萬圓ニシテ、是ニ對スル準備ハ、正貨 2,106萬圓(50.0%)、銀貨及銀地金 140萬圓(3.3%)、保證 1,965萬圓(46.7%)ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、發行總額 830萬圓ヲ增加シ、其ノ準備充當高ハ正貨準備ニ於テ著シク增加シ、銀準備ハ却テ減少セリ。

大正七年中ニ於ケル預金ノ總額ハ 55.55億圓、其ノ年末殘高ハ 3.89億圓ニシテ、如斯ハ、既往ニ於テ未タ見サル所ノ巨額ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ、總預金ハ七割餘、年末殘高ハ三割餘ノ增加ヲ爲セリ。又貸付金ハ總貸付高 9.72億圓ニシテ、前年ヨリ增加セルコト 4.44億圓ナリ。從テ其ノ年末殘高モ亦增加シテ 1.71億圓トナレリ。

臺灣銀行ニ於ケル割引手形ノ狀況ヲ見ルニ、歐洲大戰當時ニ於テハ 4億ニ充サルノ有樣ナリシカ、爾來每年著シキ增加ヲ爲シ、大正六年ニ至リテハ、一躍十三億圓以上ニ上リ、大正七年ニハ更ニ增加シテ 21.51億圓ノ巨額トナレリ。之ヲ大正三年ニ比スレハ、六倍以上ノ增加ヲ爲シ、其ノ年末殘高モ亦增加シテ 2.82億圓ヲ算スルニ至レリ。又荷爲替手形ハ總貸付高 4.801萬圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ 391萬圓ナリ。何レモ既往ニ比シ增加著シキヲ見ル。

大正七年末現在ノ有價證券ハ 6,604萬圓ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ、約二倍ノ增加ヲ爲シ、金銀在高ハ 2,587萬圓ニシテ、前年ヨリ 989萬圓ノ增加ヲ爲セリ。

【日本興業銀行】 日本興業銀行ハ明治三十五年拂込資本金 25萬圓ヲ以テ營業ヲ開始シ、爾來着々發展シテ、大正七年ニハ支店及出張所 3箇所、拂込資本金 2,687萬圓、積立金 317萬圓ヲ有スルニ至レリ。同年中ニ於ケル入金又ハ出金ハ共ニ 27.97億圓ニシテ、前年ニ比シ二倍以上ノ激增ヲ爲セリ。營業純益金ハ近年稀ニ見ル所ノ增加ヲ爲シ、今ヤ 266萬圓ヲ算スルニ至リ、之ヲ前年ニ比スレハ二倍ノ增加ニ相當シ、從テ配當金モ亦增加シテ 151萬圓トナレリ。

大正七年中ニ於テ、興業債券ヲ發行シタル總額ハ 1.22億圓ニシテ、例年ニ比シ約十倍ノ發行高ニ當リ、之ニ前年ヨリノ越高 7.640萬圓ヲ加ヘ、本年中ノ償還額 54萬圓ヲ控除スルトキハ、七年末ノ現在高ハ 1.98億圓トナリ、前年ニ比シ二倍以上ノ激增ニ當レリ。

大正七年中ノ總預金ハ 10.47億圓ニシテ、之ヲ種類別ト爲セハ、定期預金 8,310萬圓、當座預金 4.17億圓、其他預金 5.46億圓ナリ。何レモ前年ニ比シ、二倍以上ノ增加ヲ爲シ、殊ニ其他預金ノ如キハ、三倍以上ノ增加ニ當レリ。

次ニ同年中ニ於ケル貸付金ノ狀況ヲ見ルニ、總額 9,784萬圓ニシテ、內定期貸付金 7,793萬圓、當座貸付金 1,259萬圓、不動產擔保貸付金 68萬圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、定期貸付金ハ七割三分、當座貸付金二割八分ノ增加ヲ示シタルニ、不動產擔保貸付金ノミハ反對ニ二割餘ノ減少ヲ爲セルハ如何ナル理由ニ因ルヤ。

大正七年中ニ於ケル割引手形ノ總額ハ 2.70億圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ 6,221萬圓ナリ。之ヲ五年前ナル大正二年ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、前者ハ 210.9、後者ハ 223.4ニ當リ、其ノ增加ノ顯著ナルヲ見ル。

【普通銀行】 大正七年末現在ニ於ケル全國普通銀行ノ數ハ、合計 1,375ニシテ、其ノ支店及出張所數ハ 2,374ナリ而シテ拂込資本金ハ 5.13億圓ニシテ、積立金ハ 1.62億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、本店 23行ヲ減シ、支店及出張所 153ヲ增加シ、拂込資本金 7,608萬圓、積立金 1,942萬圓ヲ增加セリ。如斯何レモ年々增加ノ趨勢ナルニ、獨リ本店數ノミ逐年減少ヲ示シツヽアルハ、要スルニ小資本ノ銀行ヲ合併シ、大資本ノ銀行トナシ、以テ時勢ノ要求ニ應センカ爲ナルヘシ。同年中ニ於ケル入金ハ 2,351.10億圓、出金ハ 2,350.79億圓ニシテ、前年ニ比シ、共ニ約 848.00億圓ノ激增ヲ爲セリ。此等銀行ノ總純益金ハ 1.39億圓ノ巨額ニ上リ、前年ヨリ 2,627萬圓ノ增加ヲ示シタリ。從テ其ノ配當金モ亦著シク增加シ 3,888萬圓ヲ算シ、拂込資本金百圓ニ對シ 7.58圓ノ配當ニ當レリ。

全國普通銀行ノ大正七年末ニ於ケル府縣分布ノ狀況ヲ見ルニ、本店數ノ最モ多キハ兵庫縣 130ニシテ、次テ靜岡縣 128、東京府 99、長野縣 79等亦多キ地方ニ屬シ、最モ少キハ沖繩縣 3、高知縣及宮崎縣ノ各 5ニシテ德島縣ニハ一行モナシ。

大正七年ニ於ケル全國普通銀行ノ預金總額ハ 709.38億圓ニシテ其ノ年末殘高ハ 46.39億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、預金額ハ五割八分ヲ增加シ、年末殘高ハ四割三分ト云フ著シキ增加ヲ示セリ。而シテ右預金額ヲ種類別ト爲シ、五年前ノ各百ニ對スル指數ヲ求ムレハ、官公預金 290.3、定期預金 326.8、當座預金 414.4、其他預金 315.0ニシテ、當座預金ノ增加特ニ著シキヲ見ル。

同年中ニ於ケル貸付金ノ總額ハ 345.23億圓ニシテ、前年ニ比シ、約六割餘ノ增加ヲ示シ、其ノ年末殘高ハ 29.45億圓ニシテ、是亦、約三割餘ノ增加ヲ爲シタリ。此ノ年末殘高ヲ抵當別ト爲セハ、動產抵當ノモノ最モ多ク、次テ信用貸ニシテ、不動產抵當ノモノ最モ少シ。蓋シ不動產ハ擔保トシテハ最モ確實ノモノナレ共、其ノ抵當ト爲ス手續繁雜ナルヲ以テ、普通銀行ノ職掌柄右ノ如ク、不動產擔保貸付ハ少額ナリシナラン。

又同年中ニ於ケル全國普通銀行ノ手形割引高ハ 75.74億圓ノ巨額ニシテ、其ノ年末殘高ハ 11.28億圓ナリ。之ヲ既往ニ比スレハ明治四十三年以降年々增加シ、大正五年ニ至ルヤ六十五億圓以上ニ達セシカ、越テ六年ニハ一躍二十億圓ノ激減ヲ示シタルモ、本年ニ至ルヤ、再ヒ前記ノ如キ巨增ヲ爲セリ。右ノ如ク大正六年ニ限リ著シキ減少ヲ示シタルハ如何ナル原因ナルヤ之ヲ他ノ銀行ノ例ニ徵スレハ、愈不審ナラサルヲ得サルナリ。割引高ノ激增ニ伴ヒ、其ノ年末殘高モ亦增加シテ 11.28億圓ノ多額ニ上レリ。又荷爲替手形ノ總貸付高ハ 26.62億圓ニシテ、大正四年以來其ノ增加特ニ著シク、之ヲ五年前ニ比スレハ四倍以上ノ增加ニ當リ、其ノ年末殘高ハ 7,303萬圓ニシテ、五年前ニ比スレハ三倍餘ノ增加ニ當レリ。

大正七年末ニ於ケル有價證券在高ハ 8.36億圓ニシテ、內公債證書 6.36億圓、株券 8,664萬圓、社債券 1.13億圓ナリ。既往ニ比シ何レモ增加シタルモ、特ニ社債券及公債證書ニ於テ著シキヲ見ル。又金銀在高ハ 4.23億圓ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 1.07億圓ノ增加ニ當レリ。

【貯蓄銀行】 貯蓄銀行ノ大正七年末現在數ハ 661行、其ノ支店及出張所數ハ 1,684ナリ。前年ニ比シ本店 2行ヲ減シ、支店 119ヲ增加セリ。大體ニ於テ本店數ハ普通銀行同樣逐年減少ノ傾向ニシテ、支店又ハ出張所ハ增加ノ趨勢ナリ。貯蓄銀行ノ拂込資本金ハ總額 1.65億圓ニシテ、前年ニ比シ 2,200萬圓ヲ增加シ、一行當リ平均拂込資本金ハ 250,012圓ナリ。

全國貯蓄銀行ノ積立金ハ合計 5,887萬圓ニシテ、前年ニ比シ 703萬圓ヲ增加シ、一銀行當リ平均積立金ハ 89,067圓ナリ。同年中ニ於ケル入金又ハ出金ハ、共ニ 292.36億圓ニシテ、前年ヨリ增加セルコト 105.30億圓ナリ。各府縣中貯蓄銀行ノ最モ多キ地方ハ、東京府 77、愛知縣 32、神奈川縣 31、長野及靜岡兩縣 29等ニシテ、最モ少キハ宮崎並沖繩縣ノ各 1行、奈良及熊本二縣ノ各 2行ナリトス。

大正七年中ニ於ケル貯蓄銀行ノ普通預金ハ 67.74億圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ 8.43億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、總預金 25.21億圓、年末殘高 2.43億圓ヲ增加セリ。而シテ總預金中其ノ過半數ハ當座預金ニシテ、定期預金ハ其ノ一割內外ニ過キス、又貯蓄預

金ハ總額 9.44億圓ニシテ、其ノ年末殘高ハ 3.40億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ預金 2.39億圓ヲ增加シ、年末殘高ハ 8,086萬圓ヲ增加セリ。而シテ普通預金ニ比シ、其ノ年末殘高ノ比較的多キハ、貯蓄預金ハ其ノ性質上長期ノ預金者多數ナルカ故ナルヘシ。此等年末ニ於ケル預金人員ハ、合計 11,054,196人ニシテ、前年ヨリ約七十萬人ヲ增加シ、人口千人中其ノ 190人ハ預金者ナリ、此ノ預金者ヲ職業別ト爲シ見ルニ、商業者 2,929,876人、農業者 2,460,627人、工業者 1,156,857人、雜業者 4,506,836人ニシテ、商業者最モ多ク、次テ農業者、工業者ノ順序ナリ。之ヲ五年前ニ比シ、其ノ百ニ對スル割合ヲ見ルニ、農業 117.7、商業 126.2、工業 129.9、雜業 118.2ニ當リ、一般ニ貯蓄思想ノ高マリツヽアルヲ知ル。

同年中ニ於ケル貸出金ハ 46.05億圓ニシテ、前年ニ比シ五割餘ノ增加ヲ爲セリ。此ノ年末殘高ニ對スル貸出金ノ抵當別ヲ見ルニ動產抵當最モ多ク、次テ信用貸ニシテ、不動產抵當ノモノ最モ少シ。又同年中ニ取扱ヒタル割引手形ノ總額ハ 8.12億圓ニシテ、荷爲替手形ノ總貸付高ハ 6.41億圓ナリ。何レモ前年ニ比シ著シキ增加ヲ示セリ。

大正七年末現在ニ於ケル有價證券ノ總額ハ 2.96億圓ニシテ、內公債證書 1.77億圓、株券 6,834萬圓、社債券 5,081萬圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、公債證書 3.158萬圓、株券 1.425萬圓、社債券 1,216萬圓、合計 5,800萬圓ヲ增加セリ。又金銀在高ハ 6,928萬圓ニシテ、前年ニ比シ 1,849萬圓、五年前ニ比スレハ三倍半ノ增加ヲ爲セリ。

【擔保附社債信託事業】 大正七年末ニ於ケル擔保附社債信託事業ヲ營ム會社ハ 19ニシテ、前年ニ比シ 4會社ヲ增加セリ。此等會社ノ拂込資本金ハ 2.07億圓、積立金 6,508萬圓ニシテ、何レモ既往ニ比シ增加著シ。同年末ノ信託契約數ハ 31口ニシテ、金額6,356萬圓ナリ。此ノ中本年中ノ契約高ハ 4口、1,270萬圓ニシテ、他ハ凡テ前年ヨリノ越高ナリ。此ノ事業ハ最近發達シタルモノニシテ、銀行業ノ一變體ト見ルコトヲ得ヘク、目下ハ銀行ノ附帶事業トシテ經營サレツヽアリ。

【手形交換】 大正八年末ニ於ケル全國ノ手形交換所數ハ 16箇所ニシテ、此等交換所ニテ取扱ヒタル交換高ハ、枚數 2,503萬枚、金額771.1億圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、枚數 471萬枚、金額 237.0億圓ノ巨額ヲ增加セリ。交換高ノ最モ多キハ東京ニシテ、總數ノ四割五分ヲ占メ、大阪、神戸、横濱等亦相次テ多ク、熊本旭川ノ交換所最モ少シ。

【金利】 大正八年中ニ於ケル全國銀行預金利子ノ狀況ヲ見ルニ、最高 6.20%ニシテ、最低 5.07%ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ最高ハ 0.46%、最低ハ 0.26%ノ騰貴ヲ爲セリ。而シテ、之ヲ各月ニ就キ見ルニ、概シテ夏期ニ低ク、冬期ニ高キヲ見ル。即チ六月乃至八月ノ三ケ月間ハ平均 5.57%、十月乃至十二月ノ平均ハ 5.80%ニシテ、十月乃至十二月ノ利率著シク高キヲ示セリ。之即チ、夏期ハ大體ニ於テ資金ノ需用少キニ反シ、冬期ハ資金ノ需用激增セルカ故ナルヘシ。又同年中ニ於ケル貸付金利子ノ狀況ヲ見ルニ、最高 10.30%ニシテ、最低ハ 7.40%ナリ。前年ニ比シ、最高ハ 0.16%ヲ減シ、最低 0.36%ヲ增加セリ。預金利子同樣貸付金利子モ亦夏期ニ低ク冬期ニ高キヲ示セリ。

大正八年中ニ於ケル銀行手形割引相場ノ高低ヲ見ルニ、百圓ニ付日步最高ハ 2.73錢ニシテ、最低ハ 2.00錢ナリ、之ヲ前年ニ比スレハ最高ハ 0.12錢、最低ハ 0.16錢ノ騰貴ヲ示セリ。而シテ各月ニ通シ最モ高キハ十二月、一月、十月等ニシテ最モ低キハ六月及七月等ナリトス。

【外國爲替相場】 大正八年中ニ於ケル一年平均ノ外國爲替相場ハ、我金貨一圓ニ對シ倫敦向 2志 03片 06、巴里向 3法 39、伯林向 2麻 06ニシテ、桑港、紐育向ハ、我金貨百圓ニ對シ 50弗 81、上海向ハ 38兩 88、孟買向ハ 130留比 06ナリ。近時我對外貿易ハ輸出超過非常ノ巨額ニ上リシ結果、引テ爲替相場ノ下落ヲ誘致シタルモノノ如ク之ヲ前年ニ比スレハ何レモ下落シタルカ就中巴里向倫敦向ニ於テ甚タシキヲ見ル。

XVIII. 保　　險

大正七年內國保險會社ハ 79ナリ。一會社ニシテ二種以上ノ保險ヲ兼營スルモノアルヲ以テ、營業ノ種類ニ依リテ計上スレバ 134トナル。今之ヲ細別スレバ、普通生命保險會社最モ多ク、39(內兼業2)ヲ算シ、前年ヨリ一社ヲ減ス、之ニ次クハ火災保險會社ノ 35(內兼業 15)前年ニ比シ 7ヲ增加セリ。海上保險會社ハ增加最モ著シク 33(內兼業 15)ニシテ前年ヨリ 13ヲ增セリ。運送保險會社ハ總テ兼業ニシテ、其ノ數 18前年ヨリ 4ヲ增加セリ。其他ハ盜害保險會社 3(內兼業 2)徵兵保險會社 2、機關汽罐保險會社 1、信用保險會社 1(兼業)、自動車保險會社 1(兼業)、盜難保險會社 1(兼業)ニシテ、前年ト變化ナシ。疾病保險會社ハ大正四年以來其ノ跡ヲ絕テリ。本年度ハ歐洲戰爭ノ影響ニ依リ、各種保險會社ノ大ナル活躍ヲ見タリ。特ニ海上保險ノ如キ其ノ尤ナルモノナリ。

近年生命保險事業ハ殊ニ著シキ發達ヲ爲シ、其ノ拂込資本金ニ見ルモ、普通生命 1,049萬圓、徵兵 55萬圓、傷害 50萬圓ヲ算シ、積立金ハ普通生命 2億圓ヲ突破スルコト實ニ 478萬圓、徵兵 1,371萬圓、傷害 23萬圓ナリ。而シテ收入ハ普通生命 8,694萬圓(內保險料 6,777萬圓)徵兵 432萬圓(內保險料 221萬圓)、傷害 57萬圓(內保險料 51萬圓)、ナリ。又支出ハ普通生命 4,512萬圓(內保險金 1,934萬圓)、徵兵 192萬圓(內保險金 17萬圓)、傷害 41萬圓(內保險金 16萬圓)、何レモ略ヽ支出額ニ等シキ益金ヲ得タリ。本年度ノ事業成績ヲ見ルニ、年度始現在契約件數及金額ハ普通生命 203萬件 12億 9,590萬圓、前年ヨリ 18萬件 1億 6,448萬圓ヲ增シ、徵兵 31萬件 5,122萬圓、傷害 15萬件 3,085萬圓ニシテ、何レモ亦前年ヨリ增高セリ。又本年度ニ於ケル新規契約ハ既往ノ各年ニ比シテ頗ル激增シ、普通生命ハ 49萬件 4億 1,228萬圓、徵兵ハ 10萬件 2,303萬圓、傷害ハ 17萬件 4,189萬圓ノ契約アリタリ。從ツテ年度末現在契約ハ若干ノ死亡、解約、失効等ヲ差引キ、普通生命 233萬件 15億 8,323萬圓、徵兵ハ 38萬件 6,971萬圓、傷害ハ 15萬件 3,834萬圓ノ多キニ至レリ。

惟フニ生命保險事業ハ創始以來漸次發達隆盛トナリ、特ニ徵兵保險ニ於テ其ノ進步ノ長足ナルヲ見ル。普通生命保險ハ今ヤ人口百人ニ付四人テフ多數ノ被保險者ヲ有シ、契約平均額モ明治三十四年度頃ニハ 25圓ナリシモノカ、大正元年度ニハ 500圓ヲ突破シ、同五年度ニハ 600圓以上トナリ、本年度ハ 678圓トナレリ。其ノ發展寔ニ著シト謂フヘシ。

損害保險中火災保險ハ 20會社兼業 15會社アリテ、前年ニ比シ 7會社增加セリ。其ノ拂込資本金ハ 1,780萬圓、積立金ハ 2,850萬圓ニシテ、收入額ハ 4,134萬圓、支出額ハ 3,158萬圓、何レモ過半ハ保險料、保險金ノ占ムル所タリ。本年度事業成績ハ年度始ニ 133萬件 38億 6,529萬圓ノ契約アリシモノカ新規ニ 214萬件 125億 4,251萬圓ノ契約アリテ年度末ニハ 170萬件 54億 4,626萬圓ノ契約トナレリ。

此ノ外ニ日步保險ニ係ルモノ數百件アリ。本事業モ年々隆盛トナリ、全國ノ戶數百ニ付被保險家屋 16戶ノ多キニ達ス。本年度ノ支出保險金ハ昨年ニ比シ多少減シタレトモ平年ニ比シ尙著シク多額ナルハ諸所ノ大火ニ由ルモノナラン。

海上保險ハ 18會社 15兼業會社アリ。時局ノ影響ヲ蒙リテ前年ニ比シ 13會社ヲ增セリ。其ノ拂込資本金ハ 3,032萬圓ニシテ積立金ハ 6,666萬圓ナリ。本年度保險收入ハ 1億 3,782萬圓、保險金支出ハ 6,392萬圓ニシテ、大正三年以降新規契約激增シ、遂ニ 200萬件ヲ凌駕スルニ至レリ。從ツテ年度始ノ 8萬件 12億 1,804萬圓ノ契約ヨリ年度末契約 12萬件 22億 3,351萬圓ニ增加セリ。此ノ保險ノ近年著シキ發達ヲ爲セルハ、海外貿易ノ發達ニ伴フモノト謂フヘキカ如シ。

運送保險ハ悉ク兼業ニシテ 18會社アリ。前年ヨリ 4會社ヲ增セリ。由來著シキ發達ヲ示サザリシモノカ、前年ヨリ海上保險ト相俟チテ長足ノ進步ヲナシ、會社ノ增加スルノミニ止マラス、新規契約 48萬件ノ多キヲ示シ、從テ保險料ハ 61萬圓ヲ得、保險金ハ 13萬圓ヲ支出セリ。

信用保險ハ兼業ノモノ一會社アルノミ。收入保險料ハ僅カニ 3萬圓支出保險金ハ 9千圓、新規契約モ 2千件ニ過キス。設立以來其ノ進步遲々タリ。

此ノ外ニ機關汽罐保險會社 1、自動車保險兼業會社 1、盜難保險兼業會社 1アレトモ、他ニ比シ其ノ發達著シカラス、但シ自動車保險ハ自動車ノ數增加スルト共ニ、徐々ニ進步シツヽアルカ如シ。

以上記載ノ外、外國保險會社ノ我國ニソノ支店ヲ設ケテ、事業ヲ營ムモノ 33會社アリ。之ヲ前年ニ比スルニ、其中火災保險增加シ、海上保險減シ、總體ニ於テ同數ナリ。內生命ニ關スルモノ 4會社アリ、供託金 1,142萬圓ヲ提供シ、新規契約 4千件、收入保險料 309萬圓、支出保險金 165萬圓ナリ。是等外國會社ノ事業ハ從來年々發展シタリシカ、近時其ノ步ヲ緩メタルノミナラス寧衰退ノ兆アリ。是蓋シ內國保險會社ノ著シキ發達ニ壓倒サレタルモノナラン。

外國會社ノ火災保險ニ關スルモノ 27會社アリ、709萬圓ノ供託金ニテ收入保險料 859萬圓、支出保險金 325萬圓、新規契約 26萬件 25億 9,426萬圓ナリ。又海上ニ關スルモノ 2會社アリ、21萬圓ノ供託金ニテ保險料收入 459萬圓、保險金支出 274萬圓、新規契約 18萬件 10億 5,369萬圓ナリ。

【簡易生命保險】 大正五年四月ヨリ簡易生命保險實施セラルヽニ至レルヲ以テ、爾後其ノ概要ヲ揭載スルコトトセリ。其ノ事業成績ヲ見ルニ、大正五年度ニ於テハ新規契約 27萬件ナリシモノカ、大正六年度ニハ約倍加シテ 50萬件トナリ、同七年度ニハ更ニ增加シテ 58萬件トナル。從ツテ年度末現在契約ハ前年 71萬件ナリシモノ本年ハ 117萬件ニ達セリ。新契約ノ內終身保險ニ係ルモノ 34萬件、養老保險 24萬件ニシテ、之ヲ團體個人ニ分テハ團體ハ 33萬件、個人ハ 55萬件ナリ。

之ヲ府縣別ニ見ルニ、長野縣(4.3萬)東京府(3.7萬)新潟縣(3.2萬)ヲ最多トシ愛知縣(2.8萬)、北海道ノ(2.8萬)件等加入者多キ地方ナリ。之ニ反シテ沖繩縣ハ最低 264件ニシテ鳥取縣ノ 2.8千件、宮崎縣ノ 2千件、大分縣ノ 3.2千件、高知縣ノ 3.7千件等加入者少キ地方ナリ。概シテ東北、北陸地方ニ多ク、關東、近畿、九州地方ニ少シ。又之ヲ月別ニ見ルニ、新契約ハ三月(10.7萬件)最多ク、八月(2.8萬件)最低ク、他ハ漸次增減シテ一山一谷ヲナス。之ニ反シテ加入者ノ死亡ハ、十一月及六月最低最高トシ一山一谷ヲナシ、恰モ一月後レノ型式ナリ。

從ツテ月末現在契約モ亦同樣ノ現ヲ爲セリ。

拂込年限別ニ依レバ、終身保險中終身拂込ノモノ 411件、保險料 146千圓、十年拂込 143千件、保險料 62千圓、十五年拂込 42千件、保險料 16千圓、二十年拂込 110千件、保險料 39千圓ナリ。養老保險ニ於テハ、十年滿期ノモノ 57千件、保險料 32千圓、十五年滿期ノモノ 62千件、保險料 33千圓、二十年滿期ノモノ 287千件、保險料 120千圓ニシテ最高ク、二十五年滿期ノモノ 20千件、保險料 9千圓、三十年滿期ノモノ 22千件、保險料 9千圓、三十五年滿期ノモノ 3千件、保險料 1千圓ニシテ最低ク、四十年滿期ノモノ8千件、保險料 3千圓ナリ。

被保險者ヲ職業別ニ見レハ、農業者最多ク、17萬件ニシテ、總數ノ約二割五步ヲ占ム。無職業者ノ 14萬件、商業者ノ 10萬件、諸業者被雇職工及ヒ一般使役人ノ 8萬件等多キモノニ屬ス。最少キハ職業不詳ヲ除キテハ敎員及漁獵業者ノ 各 1.2萬件ニシテ學生ノ 1.1萬件之ニ次ク。

然レドモ、國勢調査ノ結果全國民ノ職業表ヲ得テ割合ヲ 求ムルトキハ、其順位ニ多少ノ變化アルベシ。

以上ノ如ク簡易生命保險ハ實施以來日尙淺ク、保險額ノ少額ナルニ拘ラス 100萬件ヲ越シ下層社會ノ加入者ヲ 包含スルニ至リシハ社會政策上着々其ノ步ヲ進メツヽアルモノト謂フヘシ。

XIX. 官廳使用現業員共濟組合

本料ニ收載セルモノハ、勅令ニ依リ設ケラレタル 內國官廳使用現業員ノ共濟組合ニシテ、明治四十年度ニ鐵道院ニ之ヲ設ケタルヲ創メトシ、本年度末ニ於テハ印刷局現業員共濟組合、鐵道院現業員救濟組合、專賣局現業員共濟組合、海軍共濟組合、爲替貯金局及地方遞信官署現業員共濟組合ノ五組合アリ。此ノ組合員ハ總數 293.274人アリテ、前年ヨリ 28,941人ヲ增セリ。本年度中ノ收入ハ掛金總額 2,079.411圓、年度末現在組合員ニ對比スレハ一人平均 7圓 9錢ニ當ル、政府ノ補助金 1,403,671圓、其ノ他收入 626,902圓アリ。又本年度中ニ救濟金ノ給與ヲ受ケタル者 80,341人アリ年末組合員ノ 27%ニ當リ、支出金ノ總額ハ 2,037,520圓ニシテ、總收入金ノ 50%ニ當ル。今支出金ノ重ナルモノヲ揭クレハ、脫退給與金ハ 664,276圓ニシテ總支出金額ニ對シ 32.60%ヲ占メ、次テ死亡給與金ノ 487,508圓ニシテ、同シク 23.93%、傷痍給與金ノ 1,435.881圓 21.39%、醫療金 153,510圓ノ 7.53%、勤續給與金 125,749圓ノ 6.27%等ナリ。而シテ之ノ救濟金受領者ノ分節數ヲ算出スレハ、脫退給與金 59.47%、醫療金 17.73%、勤續給與金 7,65%、療養金 6.53%、死亡給與金 3.38%、疾病給與金 1.93%、傷痍給與金 1.73%、產婦給與金 0.89%、特症救濟金 0.26%、罹災給與金 0.25%、老衰救濟金 0.18%ナリ。

【印刷局現業員共濟組合】　大正八年度末ノ組合員ハ男 1,884人、女 1,609人、計 3,493人アリ。此ノ組合員ノ大部分ハ職工ニシテ、男 1,434人、女 1,520人、男ハ總員ノ 76%、女ハ同ク 94%、總數ハ同ク 85%ニ當ル。本年度ノ掛金ハ總額 23,967圓、年度末現員ニ比シ一人平均 6圓 85錢ニ當ル。政府ノ補給金 15,978圓アリ。其ノ他ノ收入ヲ合シ、收入總額 67,324圓トナル。又本年度中救濟金ノ給與ヲ受ケタル者ハ 1,479人アリ、年末組合總員ノ 42%ニ當リ、前年ノ同一比例ヨリ 1%以上減少ス。而シテ此ノ被給與者ノ 71%ハ勤續給與金受領者ニシテ、一箇年以上勤續者ノ脫退シタル者タリ。前年ニ比シ此ノ數ノ稍低キハ職工ノ 移動少ナキニ由ル。其ノ他傷痍療養金ヲ受ケタル者 267人、疾病退職給與金ヲ受ケタル者 93人、死亡給與金ヲ受ケタル者 49人アリ。給與金總額ハ 26,598圓、支出總額ノ 33%ニ當ル。

【鐵道院現業員共濟組合】　大正八年度末ノ組合員ハ 142,712人ニシテ、當然組合員タルヘキ甲種組合員 141,650人アリ、總組合員中ノ大部分ヲ占ム。七年度ニ特ニ丙種組合員ノ 激減シタルハ規則改正ノ結果、掛金完了者以外ノ丙種組合員ヲ廢シタルニ依リシカ本年度ハ尙更ニ 97人ヲ減シ、甲種組合員ハ 17,520人、乙種組合員ハ 202人ヲ何レモ增セリ。本年度中ノ掛金總額ハ 1,193,724圓、年度末現員ニ比シ其ノ一人平均額 6圓 53錢ニ當ル。外ニ政府ノ給與金 680,644圓アリ。其ノ他ノ收入ヲ加ヘテ總收入額 2,155,885圓トス。本年度中救濟金ヲ給與シタル人員ハ 28,308人アリ。組合總員ノ 19.84%ニ當リ、此ノ比例ヲ前年ニ比スルニ 2.20%高ク、累年漸減ノ傾向アルニ、本年度ハ之ニ反セリ。從來此ノ給與者中最多キハ退職救濟金受領者ナリシガ、本年度ハ疾病救濟金受領者、前年ニ倍增シ 13,467人ニシテ、其ノ首位ヲ占メ、次テ退職救濟金受領者ノ 12,084人、死亡救濟金受領者 1,700人等之ニ次ク。支出金總額ハ 1,253,707圓ニシテ、其ノ大部分ハ救濟金ノ 1,249,105圓ナリ。而シテ、此ノ救濟金ヲ種別シテ百分比ヲ示セハ、死亡救濟金 32%、公傷救濟金 30%、退職救濟金 25%、疾病救濟金12%、養老救濟金 1%ナリ。前年ニ比シ公傷救濟金ハ 8%、疾病救濟金ハ 5%ヲ增シ、反之シテ、退職救濟金ハ 10%死亡救濟金ハ 2%ヲ減シタリ。

【專賣局現業員共濟組合】　大正八年度末ノ組合員ハ男 7,328人、女 24,849人、計 32,177人ニシテ、職工ノ 31,864人其ノ大部ヲ占ム。本年度ノ掛金總額ハ 100,733圓年度末ノ現員ニ比シ其ノ一人平均額ハ 3圓 13錢ニ當ル。此ノ外政府ノ補助金 70,307圓アリ。本年度ニ救濟金ヲ受ケタル者ハ 20,904人ニシテ組合總員ノ 65%ニ當リ、前年ヨリ 3%高シ。此ノ被給與者中最多キハ脫退給與金受領者ニシテ、總數ノ 79%ヲ占ム。之ニ次クハ年功給與金ノ 9%疾病給與金ノ 7%等ナリ。支出金ハ總額 138,482圓ナルカ、之ハ總テ給與金ニシテ、脫退給與金 74,844圓年功給與金 37,041圓、死亡給與金 9,071圓等其ノ多キモノニ屬ス。此ノ組合モ亦、脫退者救濟ノ爲ニ盡力シツヽアルヲ見ル。

【海軍共濟組合】　大正八年度末組合員ハ男 63,454人、女4,142人、計 67,596人ニシテ、此ノ中職工ハ 66,346人ニシテ、總員中ノ大部ヲ占ムルコト他ノ組合ト同ジ。本年度ノ掛金總額ハ 516,910圓、年度末現員ニ比シ、其ノ一人平均額ハ 8圓 14錢ニ當ル。此ノ外政府ノ給與金 474,836圓アリテ、其ノ他ヲ合セ 1,184,116圓ノ收入トナル。本年度中ニ救濟金ヲ受ケタル者ハ 7,843人ニシテ、總數ノ 11%餘ニ當リ、前年ト殆ト差違ナシ。此ノ被給與者中最多キハ療養救濟金受領者ノ 4,340人ニシテ、55%餘ヲ占メ、次テ脫退救濟金受領者ノ 2,495人、32%弱其ノ他ハ極メテ少部分ナリ。本年度中ノ支出金總額ハ 253,552圓ニシテ、雜費 101圓ノ外ハ悉ク救濟金ナリ。而シテ、脫退救濟金 83,902圓最多額ニシテ、傷病救濟金ノ 55,007圓、死亡救濟金ノ 50,502圓療養救濟金ノ 43,354圓特症救濟金ノ 17,686圓等ニシテ、葬祭料ハ皆無ナリ。此ノ組合ニハ他ニ見サル所ノ特症救濟金アリテ肺結核ニ罹サレ 雇傭ヲ解カレタル者ニ給スル救濟金ナルカ、本年度ニハ 210人ヲ算セリ。

【爲替貯金局及地方遞信官署現業員共濟組合】　大正八年末組合員ハ男 31,216人、女 16,080人、計 47,296人ニシテ、現業雇員ノ 28,432人其ノ過半ヲ占ム。本年度ノ掛金總額ハ 244,077圓、(年度末現員ニ比シ其ノ一人平均額ハ 5圓 16錢ニ當ル)。此ノ外政府ノ補給金 161,906圓アリテ、全額 491,603圓ノ收入アリ。本年中ニ救濟金ヲ受ケタル者 21,807人、組合總員ノ 46%ニ當リ、其ノ中最多キハ脫退給與金受領者ノ 16,671人ナリ。而シテ之ニ附帶給與スヘキ勤續給與金受領者ハ 3,251人、醫療給與金受領者ハ 780人アリ。支出金總額ハ 312,518圓ニシテ、雜費 9,812圓ヲ除ク外ハ、總テ救濟ノ目的ニ支出セルモノナルガ、之ヲ種類別トシテ順位ヲ示セハ、脫退給與金 57%、勤續給與金 23%、死亡給與金 10%、療養給與金 4%、雜費 3%、傷痍給與金 2%醫療給與金 1%、災害給與金 0%、ニ當リ、疾病給與金ハ本年度ニ在リテハ皆無ナリ。是亦殆ト脫退者ノ爲ニ存スルモノノ如シ。

XX. 救育及慈惠

【罹災救助基金】　大正七年度中罹災救助基金ノ支出總額ハ 380,707圓ニシテ、之ヲ前年ノ 498,618圓ニ比スレハ 117,911圓ノ減額ナリ、又之ヲ前五箇年間一年平均 436,837圓ニ比スレハ 56,130圓ノ減額ナリ。以テ本年度ハ救助ヲ要スル罹災ノ小カリシヲ知ルニ足ル。本年度支出額ヲ費途ニ依リテ別チ、總數ニ對スル分節比例ヲ算出シ、之ヲ近キ五箇年平均(大正二年度乃至同六年度)ノ同一比例ト比スルニ避難所費ハ 3.76%(過高2.14%)、食料費ハ 64.58%(過高 27.23%)、被服費ハ 2.18%(過高 0.78%)、治療費ハ 0.61%(過高 0.44%)、小屋掛費ハ 14.15%(過高 0.10%)、就業費ハ 13.82%(過低 31.17%)、雜費ハ 0.90%(過高 0.48%)ナリ、此ノ內食料費ハ最增加シ、就業費ハ著シク減少セリ。是根本的救助ヲ要スルモノ甚タ尠カリシニ因ルヘシ。

大正七年度中支出罹災救助金ヲ府縣別ト爲セハ、最多額ナリシハ兵庫縣 101,854圓ニシテ、德島縣 39,884圓、大阪府 38,977圓之ニ次ク其ノ他岡山縣 21,284圓、靜岡縣 16,260圓、新潟縣 14,414圓、島根縣 11,588圓、岩手縣 10,050圓等其ノ多額ナルモノニ屬ス北海道、群馬、千葉、山梨、廣島、愛媛、高知、大分、長崎、沖繩等ノ絕無ノ縣ヲ除キ最少額ナリシハ、栃木縣 25圓、佐賀縣 50圓等ナリ。

【救濟人員】　大正七年中恤救規則ニ基キ國庫費ヲ以テ救濟セル人員ハ 1,171人、地方費ヲ以テ救濟セル人員ハ 10,093人、國庫費救濟者ニ地方費ヲ以テ補給セシ者ハ 588人、總計 11,852人ナリ。明治三十八年以來救濟人員漸次減少シ、同四十二年以來更ニ著シク減少セシカ、大正二年ニ至リ稍增シ次テ再ヒ減少ノ傾向ヲ見ルモ、本年ハ昨年ニ比シ 903人ヲ增シタリ。明治四十二年以前ハ單ニ國庫費救濟者ノミニシテ周知ノ地方費救濟者ナカリシカ、同年以降地方費救濟者アリテ年々其ノ數ヲ增加スルモノヽ如シ。(地方費救濟ノ統計ハ 大正二年以後存ス) 從テ年々國庫費救濟者ノ數ヲ減スルノ傾向ヲ見、大正四年、同五年ハ地方費救濟者モ減少シタリシカ、昨年度ヨリ地方費救濟者ノ數ヲ增加シタリ。本年中救濟者ノ死亡數及廢停數ヲ總員ニ比例スルニ、國庫費救濟者ハ死亡 22.95%廢停 10.46%地方費救濟者ハ死亡 12.31%廢停 20.60%、國庫費及地方費救濟者ハ死亡 9.45%、廢停 6.50%ナリ。廢停ハ地方費救濟者最高ク、死亡モ亦其割合低クカラス。

大正七年中ノ救濟者ヲ地方別ニ見ルニ、最多キハ東京府 818人ニシテ、岡山縣 786人、新潟縣 739人、之ニ次キ、其ノ他滋賀縣 565人、德島縣 532人、廣島縣 531人、石川縣 530人等ハ其ノ多キモノニ屬セリ。

大正七年中ノ救濟人員ヲ種別ニシ其ノ總數ニ對スル分節比例ヲ算出スルニ、國庫費救濟者ニ於テハ癈疾 38.00%、老衰 20.84%、

疾病 33.73%、幼弱 7.43%、國庫費及地方費救濟者ニ於テハ癈疾 17.18%、老衰 20.07%、疾病 30.78%、幼弱 31.97%、地方費救濟者ニ於テハ癈疾 8.76%、老衰 35.26%、疾病 33.89%、幼弱 16.76%其ノ他 5.33%ナリ。

大正七年中ニ支出シタル救助金ハ、國庫費 45,058圓、地方費 177,017圓、計 222,075圓ニシテ、地方費ノ中 17,823圓ハ國庫費救濟ノ者ニ補給シタルモノトス。此ノ金額ト前記ノ人員トヲ以テ一人平均ノ金額ヲ算出スルニ、總體ニ於テハ 18圓 74錢ニ當リ、地方費ノミニテハ 15圓 77錢ニ當レリ。國庫費ハ地方費補給ノ分ニ對スル費額不明ナルカ故ニ明瞭ナラサルモ、假リニ國庫費ノミヲ以テ救濟セル人員ニ國庫費ノ總額ヲ割當ツレハ一人平均 3圓 48錢ト爲リ、國庫費救濟人員ト國庫費及地方費救濟人員トヲ合セタル者ヲ以テ國庫費額ト地方費ノ國庫費救濟者ニ對スル補給額トヲ合セタルモノヲ除スルニ一人平均 35圓 77錢ト爲レリ。斯ノ如ク國庫費救濟者ノ費額多キハ、之ヲ地方費救濟者ニ比シテ其ノ期間長キモノ多キ故ナルヘシ。本年中救濟費支出額ヲ地方別ニ見ルニ、國庫費ニ於テ前年ト同ク北海道 12,277圓最多ク、東京府 4,508圓、神奈川縣 4,124圓之ニ次キ、其ノ他青森縣 3,615圓、廣島縣 2,417圓、岡山縣 2,170圓、福岡縣 2,026圓、石川縣 1,705圓等多キモノニ屬ス。又地方費ニ於テモ前年ト同ク、東京府 49,353圓、大阪府 22,800圓ヲ最多シトナシ、其ノ他岡山縣 9,495圓、新潟縣 7,540圓 石川縣 6,350圓、島根縣 5,300圓、兵庫縣 4,568圓等多キモノニ屬セリ。

【棄兒】 大正七年末現在ノ養育棄兒ハ 1,472人ニシテ、前年末現員ヨリ少キコト 136人ナリ。之ヲ養育費ノ出所ニヨリテ分テハ國庫費 215人、國庫費養育者ニ地方費ヲ以テ補給スル者 877人、地方費養育者 139人、私費 241人ナリ。之ヲ總數ニ對スル分節比例トナセハ、國庫費ノミハ 14.61%、國庫費及地方費ハ 59.58%、地方費ノミハ 9.44%、私費ハ 16.37%ニ當ル。而シテ其ノ養育費中國庫費ハ 19,064圓、地方費ハ 55,670圓ニシテ、地方費ノ中 46,194圓ハ國庫費養育ノ者ニ補給シタル額ナリ。私費ノ養育費ハ明瞭ナラサルカ故ニ之ヲ除キ、國庫費及地方費ノ總數ニ就テ一人一箇年ノ平均養育費ヲ算出スレハ 60圓 71錢ニ當リ、地方費ノミノ養育費ハ平均 54圓 79錢ニ當レリ。

大正七年末現在ノ養育棄兒ヲ地方別ニ見レハ、東京府 767人最多ク、大阪 [illegible]9人、之ニ次キ長崎縣 97人、佐賀縣 71人、福岡縣 68人、北海道 65人、神奈川縣 64人等其ノ多キモノニ屬ス。又養育費ノ中、國庫費ノ支出額最多キハ東京府 9,281圓ニシテ、大阪府 2,648圓、之ニ次キ、神奈川縣 1,439圓、佐賀縣 1,195圓、福岡縣 776圓、北海道 650圓、兵庫縣 563圓、岡山縣 438圓等其ノ多キモノニ屬ス、又地方費ノ支出額ハ東京府 45,192圓最多ク、大阪府 4,563圓之ニ次キ其他福岡縣 1,732圓、神奈川縣 1,647圓、兵庫縣 515圓等多シ。

【行旅病人及行旅死亡人】 大正七年末現在ノ行旅病人ハ 男 1,459人、女 686人、計2,145人ニシテ、前年末ヨリ 909人少シ。大正七年中ニ新ニ救護ヲ受ケタル行旅病人ハ 7,470人ニシテ、之ニ前年末現員ヲ合セ救護總員ハ 10,524人ト爲リ、本年ハ少シク多シ。此ノ中 3,217人ハ死亡シ 5,162人ハ扶養義務者ニ引渡シタリ。此ノ死亡者ヲ救護總員ニ比スレハ其ノ 30.06%ニ當リ、大正三年ニ於テハ其ノ比 34.02%、大正四年ニ於テハ 27.40%、大正五年ニ於テハ 30.00%、大正六年ニ於テハ 31.28%ニ當ル。右ノ行旅病人ニ關シ道府縣費ヨリ辨償シタル金額ハ 213,955圓ニシテ、前年ニ比シ 20,872圓ニ減シ、救護總員一人ノ平均金額ヲ算出スレハ 20圓 33錢トナル。此ノ辨償金ヲ最多ク支出シタルハ東京府 101,544圓ニシテ、之ニ次クハ大阪府 27,885圓、北海道 25,159圓ナリ。其ノ他愛知縣 6,674圓、神奈川縣 6,216圓、兵庫縣 4,870圓、福岡縣 4,800圓等多キモノニ屬セリ。

大正七年中ノ行旅死亡人（行旅病人ノ死亡者ヲ含マス）ハ 3,846人ニシテ、前年ヨリ多キコト 63人ナリ。之ヲ男女ニ分テハ男 3,127人、女 719人ニシテ男ハ 81.31%、女ハ 18.69%ニ當リ、之ヲ變死、病死ニ分テハ病死 1,366人、變死 2,480人ニシテ、病死 35.52%、變死 64.48%ニ當ル。病死ヲ男女ニ分テハ、男ハ 87.77%、女ハ 12.23%ニ當リ、變死ハ男 77.74%、女 22.26%ニ當ル。又男女ヲ變死、病死ニ分テハ、男ハ病死 38.34%、變死 61.66%、女ハ病死 23.23%、變死 76.77%ニ當レリ。女ノ變死ノ比例男ニ比シテ高キハ注目ニ値スヘシ。行旅死亡人中、相續人ヨリ取扱費用ノ辨償ヲ得サリシ場合ニ遺留品ヲ賣却シ、尚不足ナルカ爲道府縣費ヨリ辨償シタル金額ハ 17,411圓ニシテ、前年ヨリ多キコト 486圓ナリ此ノ辨償金ヲ最多ク支出シタルハ大阪 2,783圓ニシテ東京府 2,242圓之ニ次キ、其他神奈川縣 957圓、北海道 745圓、栃木縣 635圓 福岡縣 620圓、兵庫縣 578圓、靜岡 549圓等多キモノニ屬セリ。

XXI. 災　害

【水害】 大正六年中ニ於テ水害ニ罹リシ市町村數ハ 4,225箇所之ヲ前年ニ比スレハ 1,309箇所ノ增加ニシテ、近年稀ナル被害數ナリ水害ノ最モ多カリシ地方ハ福島ノ 278箇所、長野ノ 249箇所、茨城ノ 170箇所、新潟ノ 163箇所、和歌山ノ 154箇所、三重縣ノ 153箇所等ニシテ長崎縣ノ 6箇所、山口縣ノ 9箇所等ノ最モ少ナキ地方ニ屬シ沖繩縣ノミハ何等ノ被害ナカリキ。此等水害ニ因ル諸損耗ハ見積價額 2,062萬圓ニシテ、復舊費ノ見積額 1,211萬圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、諸損耗ノ 1,325萬圓復舊費ハ 787萬圓ヲ增セリ。而シテ諸損耗ノ最大ナル地方ハ大阪府ノ約 330萬圓、新潟縣ノ約 204萬圓、奈良縣ノ約 157萬圓、福島縣ノ約 109萬圓等ニシテ沖繩縣ノミハ擧クヘキ損耗ナシ。又復舊費ヲ最多ク要セシ地方ハ新潟縣ノ 142萬圓、大阪府ノ 116萬圓、奈良縣ノ約 113萬圓等ニシテ、最少キハ、長崎縣ノ 5,235圓ナリトス。以上ノ事實ニ依リ觀レハ大正六年ハ明治四十二年以來此ノ九年間ニ於テハ水害割合ニ多ク猶前年ニ比シテハ著シク增加シ居レリ。

【潮災】 大正六年中潮災ニ罹リタル市町村數ハ 197箇所ニシテ、前年ニ比シテハ 52箇所ヲ減シタリ。之ヲ地方別ニ見レハ被害府縣 13ニシテ最多カリシハ千葉縣ノ 65箇所靜岡縣ノ 40箇所、東京府ノ 31箇所等ナリ。全然被害ナカリシハ青森縣外 33府縣ナリ。潮災ニ因ル諸損耗見積額ハ 1,096萬圓復舊費見積額ハ約 134萬圓ナリ。而シテ之ヲ前年ニ比スレハ諸損耗ハ 1,093萬圓復舊費ハ約 19萬圓ヲ增加セリ。如斯潮災被害地方減少セシニ反シ損失價額ノミ增加セシハ一回ノ潮災ニ多大ノ損害ナリシヲ思ハサルヘカラス。

【暴風雨被害】 大正六年中ニ於テ暴風雨ノ爲被害アリタル市町村數ハ 1,582箇所ニシテ、前年ニ比シ 1,031箇所ヲ增加セリ。全國中被害ノ最多カリシハ茨城縣ノ 380箇所、千葉縣ノ 354箇所、愛知縣ノ 141箇所ニシテ、全然被害ナカリシハ京都府外 13縣ナリ是等被害ニ因ル諸損耗見積額ハ約 2,846萬圓ニシテ、之ヲ地方別ニ依リ見レハ、千葉縣ノ約 1,438萬圓、茨城縣ノ 749萬圓、神奈川縣ノ約 240萬圓等最損耗ノ多キモノナリ。又復舊費ハ合計 111萬圓ニシテ、前年ヨリモ 68萬圓ヲ增加セリ。

【火災】 大正七年中ノ火災度數ハ放火 1,032回、失火 12,369回計 13,401回ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ放火 55回ヲ增加シ失火 3,666回ヲ減少セリ。此ノ火災ノ爲生シタル損害ノ見積額ハ 3,394萬圓ニシテ前年ニ比シ約 353萬圓ヲ減少セリ。如斯損害見積額ノ著シク減少セシハ勿論火災度數ノ減少セシニ因ルナルヘシ。而シテ損害見積額ヲ地方別ニ依リ見レハ最著シキモノハ兵庫縣ノ 366萬圓、東京府ノ 315萬圓、大阪府ノ約 244萬圓、茨城縣ノ約 222萬圓等ニシテ最少ナカリシハ滋賀縣ノ約 3萬圓、香川縣ノ 4萬圓ナリトス。火災度數ヲ月別ニ見ルニ地方ヲ異ニスルニ依リ必スシモ同一ナラサルヘキモ、大體ニ於テ何レノ月ニ最火災多キカヲ警告スルノ料ト爲スヲ得。即明治四十二年ヨリ大正七年ニ至ル十ケ年間ノ事實ニ基キ平均一ケ月ノ火災度數ヲ算出スレハ最多キ月ハ一月ニシテ其ノ度數 1,941度ヲ算シ、次テ三月ノ 1,800度二月ノ 1,772度四月ノ 1,738度十二月ノ 1,716度等多キ月ニ屬シ、最少キ月ハ九月ノ 894度、十月ノ 959度七月ノ 1,032度等ナリトス。

XXII. 衛　生

【醫師、齒科醫師、藥劑師、產婆、病院、藥種商及製藥者】 大正七年末ノ醫師ハ 46,121人、前年ニ比シ 31人ヲ增シ、之ヲ年末ノ人口ニ比スルニ一萬ニ付 8.29人ニ當レリ。昔テ醫師ノ員數ニ尠ナカラサル重複アリキ。明治三十四年ニ內務省ハ特ニ醫師及藥劑師ノ現在調査ヲ行ヒ、一時ニ 23%餘ノ醫師ノ虛數ヲ除キタルコトアリシカ、當時人口一萬比例ハ 7.26人ナリキ。然ルニ今ヤ其ノ比例ノ增加上記ノ如ク 1.03人ヲ高メ、又明治三十四年ヲ百ト爲シタル指數ハ 139.85ニ當レリ。斯ノ如キハ醫育機關ノ增設ニ依リ新免許者多キ爲カ、將タ再ヒ舊時ノ轍ヲ踏ミテ重複ヲ來シタル爲カ、何レニモセヨ注目スヘキ現象ナリ。但シ玆ニ揭クル醫師ノ員數ハ內務省カ醫師免許證ヲ下附シタル者ノ數ニシテ、必スシモ內地ニ在住シテ醫業ニ從事スル者ノ數ニアラス、外國在留者モ殖民地在留者モ包含シ、又陸海軍ノ醫務若クハ其ノ他ノ公務ニ身ヲ委ネ、一般社會ノ醫療ト沒交涉ナル者ヲモ包含スルナリ。次ニ揭クル齒科醫師及藥劑師ニツキテモ亦然リ。

大正七年末現在ノ齒科醫師ハ 4,732人、內 5人ハ醫師ニシテ齒科醫師ヲ兼ヌル者ナリ。之ヲ前年ノ 4,129人ニ比スレハ 603人ヲ增シ、明治三十四年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 891.14ニ當リ、約九倍ナルヲ見、增加ノ頗ル著シキヲ知ル。併シナカラ之ヲ人口ニ比スルニ其ノ一萬ニ付僅ニ 0.85人ニ當リ、尙甚タ少キヲ思ハシム。

藥劑師ノ大正七年末現員ハ 7,370人、內 2人ハ醫師ニシテ藥劑師ヲ兼ヌル者ナリ。之ヲ前年ノ 6,950人ニ比スレハ 420人ヲ增シ、明治三十四年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ 203.04ニ當リ約二倍ノ增加ヲ爲セリ。斯ノ如ク增加著シト雖、藥劑師ハ其ノ員數甚タ多カラサルカ故ニ、增加セル本年ニ於テ人口一萬ニ對シ僅ニ 1.32人トナルノミ。

產婆ハ大正七年末ノ現員 34,348人、前年ニ比シ 53人ヲ增シ、人口一萬ニ對シ 6.17人ニ當ル。此ノ員數ヲ以テ見レハ本邦ノ助產機關ハ稍整ヘルカ如クナレトモ、3萬有餘ノ產婆中ニハ所謂從來ノ產婆、限地產婆等少ナカラサルヘク、從テ實際ニ於テハ尙幾多ノ新知識アル產婆ノ輩出ヲ要スト云フベキナリ。

病院ハ大正七年末ニ 1,237院アリ。之ヲ前年ニ比スレハ 86院ヲ增セリ。但シ玆ニ謂フ病院トハ陸海軍ノ病院、傳染病院隔離病舍、娼妓病院等特殊ノ目的ヲ有セル病院ヲ包含セス。一般社會ノ治療機關トシテノ働キアルモノヽミノ謂ヒナリ。之ヲ官公、私立ニ分テハ、官立ハ 7院ニシテ前年ト增減ナク公立ハ 77院ニシテ一院ヲ減シ、私立ハ 1,153院ニシテ 87院ヲ增セリ。此ノ病院總數ヲ人口ニ比スルニ百萬人ニ付 22院弱ニ當ル。

藥種商ハ大正七年末現在 27,613人、前年ヨリ減スルコト 596人製藥者ハ大正七年末現在 1,924人、前年ヨリ增スコト 90人ナリ。

【賣藥】 大正七年末現在ノ免許方數ハ 92,968方、之ヲ前年ニ比スレハ 2,502方ヲ增シ、十年前ナル明治四十一年ニ比シ其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 117.54ニ當ル。又大正七年中ノ賣藥印紙稅總額ハ 4,489,860圓、前年ニ比シ 1,128,570圓ヲ增シ、十年前ナル明治四十一年ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムレハ 249.82ニ當ル。若シ夫印紙稅ヨリ賣藥ノ定價ヲ推定シ、之ヲ人口ニ比スレハ一人ニ付 80錢强ニ當レリ。

【傳染病】 大正八年中ノ法定傳染病ヲ見ルニ、虎列刺ハ大正五年ノ大流行ノ餘波ハ昨年ニ於テ全ク止ミシカ本年 2,912人ノ發生アリヲ內死者ハ 915人ナリ。赤痢ハ患者 12,915人、死者 2,920人ヲ出シ、前年ヨリ患者ニ於テ 1,082人少ク、死者ニ於テハ 97人多シ。腸チフスハ甚タ多ク、前年ニ比シ患者 11,555人、死者 1,283人ヲ增セリ、之レ實ニ明治二十年以來ノ流行ニシテ總患者 54,706人、總死者 11,156人アリ。パラチフスハ患者 7,417人、死者 836人、是亦前年ヨリ多ク、患者 1,623人、死者 89人ヲ增セリ。流行性腦脊髓膜炎ハ昨年四月法定傳染病ニ指定セラレタルモノニシテ、本年ノ患者ハ 2,456人、死者ハ 1,261人アリタリ。痘瘡ハ患者 4,055人、死者 1,115人ヲ出シ、前年ヨリ患者ニ於テ 2,588人多ク、死者ハ 170人少シ。發疹チフスハ大正三年ノ流行以後漸次其ノ數ヲ少クシ、本年ハ患者 225人、死者 30人ヲ出シ、昨年ニ比シ患者ニ 4人ヲ減シ死者ハ 2人ヲ增セリ。猩紅熱ハ本年少シク多ク患者 1,325人、死者 109人、前年ニ比シ患者 307人、死者 44人ヲ增セリ。ヂフテリアハ患者 14,280人、死者 3,343人ヲ出シ、前年ニ比シ患者 1,468人、死者 506人ヲ減セリ。ペストハ患者 3人、死者 2人ヲ出セシニ過キス。

大正八年中ノ傳染病發生數ヲ地方別ニ見ルニ、虎列刺ハ沖繩縣ニ最多ク、全國總數ノ 8割强ニシテ 2,505人ノ發生アリ。之レニ次キ、福岡 199人、大阪 66人、兵庫 47人、大分 26人等、諸府縣ニ多シ。赤痢ハ廣島縣最多ク、熊本縣之ニ次キ、其ノ他岩手、福岡、東京、兵庫、長崎、大阪、香川、山口、青森等ノ諸府縣ニ稍多ク、腸チフスハ福岡縣最多ク、東京府、北海道之ニ次キ、大阪、兵庫、廣島、靜岡、福島、京都、神奈川、秋田、愛知等ノ諸府縣ニ多シ。パラチフスハ北海道最多ク、大阪府之ニ次キ、新潟、靜岡、東京、神奈川、京都、兵庫、福岡、埼玉等ノ諸府縣ニ多ク、流行性腦脊髓膜炎ハ大府府ノ 731人最多ク、次テ福岡縣 512人、兵庫縣 218人、東京府 126人等多シ。痘瘡ハ兵庫縣最多ク、鹿兒島縣之ニ次キ、大阪府、德島縣、和歌山縣、山口縣、茨城縣、北海道ニ多シ。發疹チフスハ青森縣最多ク、秋田、山形、岩手ノ三縣ニ多ク、猩紅熱ハ東京、京都、大阪ノ三府ニ多ク、神奈川縣兵庫縣、北海道之ニ次イテ多シ。ヂフテリアハ北海道及東京、大阪ノ二府ニ最多ク、其ノ他福島、新潟、長野、宮城、群馬、栃木ノ諸縣ニ多ク、ペストハ兵庫、神奈川ノ二縣ニアリタルノミ。

【種痘】 大正七年中ニ施行セル第一期第一回種痘ノ總員ハ 1,473,952人ニシテ、內 98.16%ハ公種痘、1.84%ハ私種痘ナリ。此ノ種痘人員中 46,656人ノ檢疹未了ヲ除キ、善感比例ヲ算出スレハ 93.63%ニ當リ、之ヲ公種痘ノミヲ以ツテ算スレハ 93.80%ニ當リ、私種痘ノミヲ以テ算スレハ 85.07%ニ當レリ。此ノ第一回種痘ノ不善感者及前年ノ不善感者等ニシテ、本年第二回種痘ヲ行ヒタル者 118,177人アリ。此ノ內 96.92%ハ公種痘 3.08%ハ私種痘ナリ。又此第二回種痘者中檢疹未了者 4,806人ヲ除キ善感比例ヲ算出スレハ 60.31%ニ當リ、公種痘ノミハ 60.94%ニ當リ、私種痘ノミハ 41.27%ニ當レリ。

大正七年中ノ第二期第一回種痘施行總員ハ 1,295,924人ニシテ、中 97.56%ハ公種痘 2.44%ハ私種痘ナリ。此ノ種痘人員中 26,904人ノ檢疹未了人員ヲ除キ善感比例ヲ算スルニ 67.69%ニ當リ、公種痘ノミハ 68.67%、私種痘ノミハ 87.23%ニ當ル。又此ノ第一回種痘ノ不善感者及前年ノ不善感者等ニシテ、第二回種痘ヲ行ヒタル者 300,671人アリ。此ノ內 98.71%ハ公種痘 1.29%ハ私種痘ナリ。又此ノ內檢疹未了者 6,755人ヲ除キ、善感比例ヲ算スルニ 27.19%ニ當リ、公種痘ノミハ 27.18%、私種痘ノミハ 27.88%ニ當レリ。

【水道】 本邦ニ於ケル上水道ハ明治二十年ニ横濱水道ノ成レルヲ最初トシ、爾來年ヲ追テ增加シ、晩近殊ニ著シキ歩武ヲ以テ進ミ、大正七年末ノ現在ハ 75箇所ニ其ノ竣成ヲ見タリ。就中、最大ナル東京水道ハ一日ノ平均給水量 4,720萬瓦倫ヲ算シ、大阪水道ハ 3,733萬瓦倫、横濱水道ハ 1,310萬瓦倫、京都水道ハ 1,010萬瓦倫、神戸水道ハ 989萬瓦倫、名古屋水道ハ 594萬瓦倫ヲ一日ノ平均給水量トス。斯ノ如キモ尙以テ滿足スヘキニアラス、試ニ大正七年末ノ給水戸數(自宅引用及共同栓用合計)ヲ大正七年末調ノ其ノ市ノ總戸數ニ比スルニ、上記ノ大水道ト雖、更ニ擴張スヘキ要アルヲ見ル。即チ、東京市水道ハ東京市總戸數ノ約 56%ニ給水スルノミ。同ジク大阪水道ハ約 64%、京都水道ハ約 42%、横濱水道ハ約 70%、神戸水道ハ約 50%、名古屋水道ハ約 23%ニ給水スルノミナルカ故ニ、他ハ推シテ知ルヘキナリ。然レハ大都市ヲ包有スル地方ニ於テ、腸チフス赤痢等ノ發生少ナカラサルモノ偶然ナラサルナリ。

XXIII 教 育

【學齡兒童】 大正七年度末ニ於ケル全國ノ學齡兒童中既ニ就學ノ始期ニ達シタル者ハ男 4,300,625、女 4,052,492、合計 8,353,117ニシテ、之ヲ大正七年末ノ人口ニ對比セハ男ハ 15.4%、女ハ 14.6%其ノ平均 15.%ニ當ル。

學齡兒童ノ就學歩合ハ益優良ノ度ヲ加ヘ男ハ 99.12%、女ハ 98.67%其ノ平均 98.86%ノ割合ニ上リ、之ヲ前年ニ比スレハ男ハ 0.07%、女ハ 2.9%平均、1.3%ヲ增歩セリ。學齡兒童ノ就學歩合ヲ地方別トシテ見ルニ、一般ニ優良ニシテ就中岡山(99.74%)宮城(99.75%)山形(99.57%)佐賀(99.51%)ノ如キハ殆ント百中百ニ達スルニ垂トセリ、之ニ反シテ沖繩(94.96%)德島(96.51%)大阪(96.89%)ノ如キハ他地方ニ比シテ稍低歩ナリ。

【學齡兒童中ノ盲及聾啞者】 大正七年度末ニ於テ學齡者中ノ盲者ハ 3,124聾啞者ハ 6,006ニシテ、學齡兒童一萬中前者ハ 3.21後者ハ 6.17ニ當ル。是等兩者ノ中、盲者ハ逐年減少著明ニシテ聾啞者モ亦漸減ノ傾向ヲ呈セリ、上記ノ內學校ニ於テ修業スル者ハ盲 248、聾啞 740ニシテ何レモ逐年增加ノ趨勢ヲ呈セリ。

【小學校數】 大正七年度末ニ於ケル小學校數ハ 25,625ニシテ一市町村平均二校强ニ當ル。小學校ノ種類ハ尋常科ノミノモノ 11,326尋常高等ノ兩科併置ノモノ 14,012高等科ノミノモノ 287ニシテ、尋常高等兩科併置ノモノハ逐年增加シ、之ニ反シテ尋常科ノミノモノ及高等科ノミノモノハ逐年減少シ、兩者相殺ノ結果小學校ノ全數ハ前年ト大差ナシ。

【小學校學級數】 大正七年度內三月一日現在ニ於テ全國ノ小學校學級數ハ 159,991ニシテ、一校平均 6.24ニ當ル。學級數ハ逐年漸々トシテ增加シ、十年以前ニ比スレハ 29,611(23%)ヲ增加シ、又前年ニ比スレハ 5,459ヲ增加セリ。

小學校ノ數ハ近時殆ント固著ノ姿ニシテ甚シキ增減ナキニ反シ學級數ハ逐年增加スルヲ以テ結局一校平均ノ學級數ハ漸次增加シ之ヲ十年前ニ比スレハ 1.24學級ヲ增加シ、前年ニ比スレハ 0.21學級ヲ增加セリ。

學校一ニ付學級數ヲ各地方別ニ見ルニ多少ノ程度一樣ナラス。其ノ最多ナルハ東京(11.26)大阪(11.23)ニシテ亞テ佐賀(9.41)兵庫(9.19)福岡(9.12)愛知(8.85)香川(8.68)沖繩(8.64)神奈川(8.62)等ニシテ、之ニ反シテ學級數ノ少キモノハ岩手(3.57)青森(3.97)北海道(4.00)高知(4.04)等之ニ屬ス。

【小學校教員】 大正七年度末ニ於ケル全國ノ小學校教員ハ 172,979ニシテ、內尋常小學校ノ教育ニ從事スル者 151,734高等小學校ノ教育ニ從事スル者 21,245ナリ。

小學校教員ヲ資格別ニ見ルニ本科正教員ハ 125,920(72.8%)專科正教員 8,384(4.8%)准教員 15,944(9.2%)代用教員 22,731(13.2%)ニシテ逐次資格ノ向上スルヲ見ル。

小學校教員ノ男女別ヲ見ルニ男ハ 119,461(69.1%)女ハ 53,518(30.9%)ニシテ、男女各逐年增加スルモ殊ニ女子增加ノ歩合高シ。

學校一ニ付本科正教員ノ割合ハ全國平均 4.人 91ニシテ、之ヲ各地方別ニ見レハ、其ノ間ニ甚シキ懸隔アリ。即チ其ノ多キ地方ハ東京(9.88)大阪(9.81)福岡(8.09)佐賀(7.36)兵庫(7.19)等ニシテ其ノ少キ地方ハ北海道(2.47)岩手(2.60)青森(3.06)高知(3.21)福島(3.22)島根(3.65)鳥取(3.74)岐阜(3.82)秋田(3.86)宮城(3.97)等ナリ。

【小學校兒童】 大正七年末ニ於テ學齡兒童中小學校ニ在學スル者ハ全國ニテ 8,137,347ニシテ一市町村平均 663人一府縣平均 173,986ニ當ル。各地方別ニ兒童數ノ多少ヲ見ルニ三十萬臺ナルハ東京(381,942)、北海道(338,883)、兵庫(323,722)、大阪(306,177)、愛知(303,520)ニシテ、亞テ二十萬臺ナルハハ福岡(297,996)、新潟(289,455)、廣島(246,857)、靜岡(244,140)、長野(227,558)、鹿兒島(222,751)ナリ。之ニ反シテ其ノ少キ地方ハ鳥取(64,134)、沖繩(75,619)、宮崎(93,616)、奈良(93,823)、高知(94,448)、福井(96,155)、山梨(96,832)ニシテ何レモ十萬以下ナリ。

學校一ニ付兒童ノ數ハ逐年增加シ最近ニ於テハ 318人ニシテ、之ヲ十年以前ニ比スレハ 70人ヲ增加シ、前年ニ比スレハ 10人ヲ增加セリ。之ヲ地方別ニ見ルニ大體 200人臺 300人臺ノモノ多キヲ占ムルモ、往々東京ノ 615人、大阪ノ 612人アリ、亞テ神奈川、靜岡、愛知、兵庫、香川、福岡、佐賀、沖繩ハ何レモ 400人臺ナルモノアリ。之ニ反シテ其ノ少キモノハ岩手、島根、高知ニシテ何レモ 100人臺ナリ。

【盲啞學校】 盲啞者ニ對スル教育施設ハ逐年發達シ大正七年度ト十年以前トヲ比較スレハ學校ハ 42ヨリ 74ニ、教員ハ 242ヨリ 495ニ、生徒ハ盲生 1,108ヨリ 2,203ニ、啞生 888ヨリ 1,438ニ、卒業者ハ盲啞合計 258ヨリ 469ニ何レモ增加シ、之ヲ前年ニ比スルモ獨リ學校數ニ異動ナキ外他ハ何レモ若干增加セリ。

之ヲ地方別ニ見ルニ山梨、三重、奈良、德島、高知、佐賀、宮

崎、沖繩ハ其ノ施設ナク、他ノ府縣ハ多クハ一校ヲ有シ、其ノ多キモノニ至リテハ五校ヲ有スルモノアリ。隨テ其ノ生徒數ニ於テモ甚シキ懸隔アリテ其ノ最モ多キハ東京ノ 566人アリ之ニ亞テ大阪(296)、新潟(260)、愛知(252)、京都 230)、等ハソノ多キモノニ屬シ、其ノ他ハ 100人內外ヨリ數十人ノモノナリ。

【師範學校】 師範教育ハ近時不振ノ狀況ニテ教員、生徒、卒業者共皆漸次減少セリ。即チ教員ハ大正四年度ノ 1,696ニ對シ 1,667トナリ、生徒ハ大正二年度ノ 27,928ニ對シ 25,285トナリ、本科卒業者ハ大正三年度ノ 7,490ニ對シ 6,796トナレリ。

各地方別ニ見ルニ一校又ハ二校ヲ有スルモノ多ク、往々三校ヲ有スルモノアリ。生徒ハ東京(1,284) 最多ニシテ亞テ福岡 (1,003) 兵庫(898) 愛知(829) 熊本(821)等多キモノニ屬シ、其ノ最モ少キモノハ鳥取(184)ニシテ他ハ概ネ 300—500人內外ナリ。

【高等師範】 高等師範學校(男子)ハ東京及廣島ニ各一校、女子高等師範學校ハ東京及奈良ニ各一校合計四校アリ。其ノ教員、生徒、卒業者ハ近時頗ル不振ノ狀況ニテ寧ロ衰微ノ傾向ヲ呈セシカ本年ハ聊カ進況ヲ見タリ。

尙外ニ臨時教員養成所一アレトモ、是亦不振ノ狀況タルヲ免レズ。

【教員檢定】 大正七年度ニ於ケル教員檢定合格者ハ小學校教員 16,808、中等教員 807ナリ。而シテ小學校教員合格者ハ數年來逐次減退シテ、殆ント半數ニ近キ迄ニ減少セシカ、本年ハ頓ニ其ノ傾向一變シテ一躍 6,000人ニ近キ增加ヲ見以テ既往最盛時ニ近接セントスルノ觀アリ。之ニ反シテ中等教員合格者ハ尙一振一弛シテ不振ノ狀況ニ在リ。

【中學校】 中學校ノ施設ヲ大正七年度ト十年以前トヲ比較スルニ學校數ハ 305ヨリ 337ニ、教員ハ 5,891ヨリ 6,991ニ、生徒ハ 118,133ヨリ 158,974ニ、本科卒業者ハ 15,885ヨリ 23,682ニ增加シ、之ヲ前年ニ比スルモ亦何レモ增加シ諸般ノ教育施設中發展最モ著明ナルモノナリ。

學校一ニ付生徒數ハ逐年增加シ最近 471人ニシテ之ヲ十年以前ニ比スレハ 85人ヲ增加シ、前年ニ比スレハ 4人ヲ增加セリ。

教員一人ニ對スル本科生徒ノ割合ハ數年前迄ハ常ニ 20人餘ナリシカ、近時少シク增歩シテ前年 23人トナリ、本年亦此ノ歩合ヲ維持セリ、是レ生徒ノ增加ニ對シ教員ノ增加之ニ及ハサル結果ニ外ナラサルニ依ル。

地方別ニ見ルニ學校ハ東京ノ 36校ヲ有スルモノ特ニ著明ナリ降テ福岡 16、大阪 13、新潟兵庫各 12、岡山 11、廣島愛知各 10校多キモノニ屬シ、其ノ少キモノハ滋賀、沖繩各 2、青森、山梨、島根、宮崎各 3校等是ナリ。

生徒ハ東京 20,599最多ニシテ嶄然一頭地ヲ拔ク、福岡 (8,308) 大阪(7,335)ハ之ニ亞キ、愛知 5,505) 兵庫(5,486) 岡山(5,255)更ニ之ニ亞ク。其ノ少キモノハ沖繩 817特ニ少ク他ハ 1,000—2,000人ナルモノ 11地方、2,000—3,000人ナルモノ 15地方、3,000—4,000人ナルモノ 10地方、4,000—5,000人ナルモノ 4地方ナリ。

學校一ニ付本科生徒ハ 501以上 13地方、401—500 26地方、301—400 8地方ナリ。

教員一ニ付生徒ハ各地方間ニ大差ナク 20—25ノ範圍ニ在ルモノ多シ。

【高等女學校】 高等女學校ノ施設ヲ大正七年度ト十年以前トヲ比較スルニ學校數ハ 178ヨリ 257ニ、教員ハ 2,743ヨリ 4,082ニ、生徒ハ 51,781ヨリ 94,525ニ、本科卒業者ハ 8,771ヨリ 18,457ニ增加之ヲ前年ニ比スルモ亦何レモ增加シ、前節中學校ト共ニ教育施設中發展著明ナルモノヽ一ナリ。

學校一ニ付生徒ハ逐年增加シ最近 359人ニシテ十年以前ニ比スレハ 77人ヲ增加シ前年ニ比スレハ 4人ヲ增加セリ。

教員一ニ付生徒(本科及技藝專修科)ハ從前 20未滿ナリシカ近時 20ヲ超エ尙增歩ノ傾向著明ナリ。

地方別ニ見ルニ學校ハ東京ノ 29特ニ多ク亞テ福岡 16、大阪 15、京都 14、愛知 13、岡山 11、兵庫 10等多キモノニ屬シ其ノ少キモノハ秋田、福井、山梨、德島、沖繩各 1、青森、茨城、富山、石川、滋賀、鳥取各 2等是ナリ。

生徒ハ東京 12,027最多ニシテ遙ニ降テ大阪(6,525) 福岡(5,143) 京都 4,332) 岡山(4,250) 愛知(4,173) 等多キモノニ屬シ其ノ少キモノハ沖繩 310特ニ著シ。他ハ 1,000迄ハ 11地方、1,001—2,000ハ 24地方、2,001—3,000ハ 4地方、3,001—4,000ナルハ 1地方ナリ。

學校一ニ付本科及技藝專修科生徒ハ 501以上 5地方、401—500ハ 10地方、301—400ハ 25地方、300以下ナルハ 7地方ナリ。

教員一ニ付生徒ハ 20—25ノ範圍ニ在ルモノ多キモ、往々 20以下ノモノアリ。又其ノ多キモノハ 40ヲ超ユルモノアリ。

明治四十五年大正元年度ヨリハ別ニ實科高等女學校ノ施設アリ是亦發達著明ニシテ、即チ當初ニ比シ學校ノ 90ヨリ 163ニ、教員ハ 607ヨリ 1,205ニ、生徒ハ 10,257ヨリ 24,417ニ、本科卒業者ハ 1,832ヨリ 5,788ニ增加シ、前年ニ比スルモ亦各增加セリ。

學校一ニ付本科生徒ハ最近 142人、又教員一ニ付本科生徒ハ 19人ニシテ何レモ高等女學校ニ比スレハ少數ナリ。

地方別ニ見ルニ三重、大阪、島根、沖繩ニハ施設ナク、大分 10廣島、靜岡、熊本各 8、鹿兒島 7等ハ其ノ多キモノニ屬シ、北海道、青森、山形、愛知、京都、鳥取、高知、宮崎ハ各 1ニシテ少

キモノニ屬シ其ノ他ハ何レモ 2—6校ヲ有ス。

生徒ハ 1,001以上ノモノ 7地方、501—1,000ノモノ 16地方、500以下ノモノ 20地方ニシテ往々 100內外ヨリ數十人ノモノアリ。

學校一ニ付生徒ハ 100—200ノモノ多ク、又教員一ニ付生徒ハ概ネ 20內外ナリ。

【專門學校】 (實業專門學校ヲ除ク) 大正七年度末ニ於ケル全國ノ專門學校數ハ 72ニシテ、前年ヨリ 2ヲ增シ、其ノ教員ハ 2,501ニシテ、前年ヨリ 244ヲ增セリ。又生徒ハ 40,096ニシテ、前年ヨリ 2,240ヲ增シ、卒業者ハ 4,612ニシテ前年ヨリ 413ヲ增セリ。

生徒ノ男女別ハ男 38,089(95%)、女 2,007(5%)ニシテ各學科中醫學、文學、宗教、音樂ハ男女生アリ。家政學ハ女生ノミ、其ノ他ハ男生ノミナリ。

生徒ヲ學科別ニ見ルニ法學(9,311)首位ニアリ。醫學(6,454)、商科(6,289)、經濟學(5,483)、之ニ亞キ文學、宗教ハ 2,000臺、藥學、齒科醫學、理工科ハ 1,000臺、數學理化學、音樂、美術、家政、植民ハ 300—1,000ニシテ體育ノ 70末位ニアリ。

本科卒業者ハ醫學(1,049)最多ニシテ、法學(672)、商科(616)、經濟學(514)、文學 459)之ニ亞キ、宗教(378)、齒科醫學(247)、藥學(212)、理工科(151)、美術(106)、家政(96)、植民(74)更ニ之ニ亞キ、音樂(20)、體育(18)、ハ甚ダ少ナシ。

【高等學校】 大正七年度末ニ於ケル全國ノ高等學校數ハ 8アリ。其ノ教員ハ 356、生徒ハ 6,781、卒業者ハ 1,756ニシテ近時增減ノ動搖殆ント之ナキニ似タリ。

【帝國大學】 大正七年度末ニ於ケル帝國大學ハ五大學アリテ、本年度ヨリハ北海道帝國大學一ヲ增セリ。而シテ東京帝國大學ハ法、醫、工、文、理、農ノ六分科アリ。京都帝國大學ハ法、醫工、文、理ノ五分科アリ。東北帝國大學ハ醫、理、農ノ三分科及醫學、工學ノ二專門部アリ。九州帝國大學ハ醫、工ノ二分科アリ。北海道帝國大學ハ農科一アル外、其ノ豫科及土木、水產ノ二專門部アリ、尙各大學ニ大學院ヲ置ク。

各大學ノ講座數ハ 458、教員ハ 970ニシテ、內東京帝國大學ハ諸座 206教員 459、京都帝國大學ハ講座 128教員 268、東北帝國大學ハ講座 41教員 104、九州帝國大學ハ講座 56教員 93、北海道帝國大學ハ講座 27教員 106ナリ。之ヲ十年以前ニ比スレハ講座 125、教員 376ヲ增加シ、前年ニ比スレハ講座 17、教員 46ヲ增加セリ。

五大學ヲ通シテ學生ハ 7,366、生徒ハ 1,674ニシテ、兩者共近時甚シキ增減ナシ。之ヲ各分科別ニ擧ゲレハ、法科ハ 2,945(38.0%)、醫科ハ 1,527(19.7%)、工科ハ 1,304(16.8%)、農科ハ 1,015(13.1%)、文科ハ 518(6.7%)、理科ハ 439(5.7%)ナリ

學生ノ卒業者ハ合計 1,908ニシテ十年以前ニ比シ 458ヲ增シ、前年ニ比シ 52ヲ減少セリ。內法科 711、工科 391、醫科 305、農科 215、文科 121、理科 98ナリ。

【實業補習學校】 實業補習學校ノ種類ハ工業、農業、水產商業、商船、ノ五科ニシテ其ノ校數ハ農業補習ノ 8,827最多ク、他ノ諸科ハ之ヨリ遙ニ少クシテ商業補習ハ 272、工業補習ハ 146、水產補習ハ 144、商船補習ハ 1ナリ。尙外ニ是等ノ諸科ヲ併置スル學校 2,823アリ。農業補習ハ逐年急速ニ增加シテ十年以前ニ比スレハ 4,286(93%)ヲ增加シ、前年ニ比スレハ 919(12%)ヲ增加シ、他ノ種ノ補習學校ハ增減ノ趨勢著明ナラス。

生徒ハ農業補習男 462,823、女 58,392、商業補習男 19,491、女 914、工業補習男 10,848、女 3,303、水產補習男 5,947、女 400商船補習男 15ニシテ、商船補習ヲ除ケハ、他ハ皆逐年增加セリ。

修了者ハ農業補習男 105,052、女 13,163、商業補習男 15,687、女292、工業補習男 6,693、女 1,014、水產補習男 1,515、女 94、商船補習男 6ナリ。

【實業學校】 實業學校ノ種類ハ工業、農業、商業、水產、商船ノ五科ニシテ、工業以外ノ各科ハ甲種及乙種ノ別アリ。但シ商船ハ甲種ノミニシテ乙種ノ事實ナシ。

學校數ハ工業 40、甲種農業 83、乙種農業 200、甲種商業 87、乙種商業 40、甲種水產 8、乙種水產 3、甲種商船 11ニシテ、何レモ逐年增加ノ趨勢ヲ呈セリ。

教員ハ工業 646、甲種農業 1,016、乙種農業 1,057、甲種商業 1,547、乙種商業 288、甲種水產 69、乙種水產 7、甲種商船 129ニシテ是亦逐年增加セリ。

生徒ハ工業男 8,933、女 22、甲種農業男 16,924、女 91、乙種農業男 19,352、女 4,004、甲種商業男 35,603、女 486、乙種商業男 6,464、女 614、甲種水產男 685、乙種水產男 184、女 18、甲種商船男 2,435ニシテ各科共大體逐年增加シ、十年以前ニ比シ工業ハ 82%、甲種農業ハ 34%、乙種農業ハ 137%、甲種商業ハ 89%、乙種商業ハ 198%、甲種商船ハ 16%ヲ增シ甲種及乙種水產ハ三箇年ノ事實アルノミニシテ、甲種水產ハ僅ニ增加シ乙種水產ハ少シク減少セリ。

本科卒業者ハ工業男 1,610、甲種農業男 3,922、乙種農業男 5,865、女 859、甲種商業男 4,684、女 39、乙種商業男 1,690、女 144、甲種水產男 147、乙種水產男 28 女 4、甲種商船男 485ニシテ各科共逐年增加セリ。

實業學校ノ施設ヲ地方別ニ見レハ次ノ如シ。

工業學校ハ北海道、千葉、岐阜、滋賀、山梨、鳥取、島根、山口、愛媛、長崎、宮崎、鹿兒島、沖繩ノ十三地方ニハ一モナク、他

ノ三十四地方ニハ各一校、又ハ二校アリ、福岡ハ三校ヲ有ス。

甲種農業學校ハ其ノ施設ナキモノ一モ之アルコトナクシテ、各地方共一校若ハ二三校アリ、東京ハ五校ヲ有ス。

乙種農業學校ハ北海道、青森、石川、高知、長崎、沖繩ノ六地ニハ一モナク、他ノ四十一地方ニハ各數校ヲ有スルモノ多ク、長野ハ 22校、福岡ハ 14校、千葉ハ 12校ノ多キモノアリ。

甲種商業學校ハ岩手、青森、埼玉、奈良、宮崎ノ五地方ニハ一モナク、他ノ四十二地方ニハ各一校、若ハ數校ヲ有スルモノ多ク、東京ハ特ニ多クシテ 10校アリ。

乙種商業學校ハ四十七地方中之ヲ有スルモノト、否ラサルモノト殆ント相半シ、之ヲ有スル地方ハ岩手、宮城、福島、茨城、栃木、東京、神奈川、新潟、石川、長野、滋賀、三重、京都、兵庫、和歌山、島根、岡山、香川、愛媛、佐賀、宮崎ノ二十一地方ニシテ一校、又ハ二校ヲ有スルモノ多ク、往々五、六校ヲ有スルモノアリ。

甲種水產學校ハ北海道、岩手、宮城、新潟、福井、鹿兒島、沖繩ノ七地方ニ之アルノミ。而シテ宮城ニ二校アルノ外、他ハ凡テ一校ヲ有ス。

乙種水產學校ハ茨城、三重、鳥取ノ三地方ニ各一校ヲ有スルノミナリ。

甲種商船學校ハ北海道、富山、三重、兵庫、岡山、廣島、山口、香川、愛媛、佐賀、鹿兒島ノ十一地方ニ各一校ヲ有スルノミナリ。

【徒弟學校】 大正七年度末ニ於ケル徒弟學校ハ 136、教員 902、生徒 17,399、本科卒業者 4,081ニシテ、其ノ發達著明ナリ。

地方別ニ見ルニ岩手、群馬、埼玉、神奈川、靜岡、京都、鳥取、高知、佐賀、長崎ノ十地方ニ施設ナキ外、他ノ三十七地方ニテハ各數校ヲ有スルモノ多ク福岡ハ 11校、鹿兒島ハ 10校ヲ有ス。

【實業專門學校】 大正七年度末ニ於ケル實業專門學校ハ 24アリテ、內、工業ニ關スルモノ 9、農業ニ關スルモノ 7、商業ニ關スルモノ 8ナリ。之ヲ十年以前ニ比スレハ工業 2、農業 3、商業3ヲ增加シ前年ニ比スレハ一モ增減ナシ。

教員ハ工業 342、農業 239、商業 307ニシテ何レモ逐年增加セリ。

生徒ハ商業(4,089)最多クシテ、工業(3,335)之ニ亞キ、農業(1,828)末位ニ在リ。各科共其ノ生徒ハ逐次增加シ之ヲ十年以前ニ比スレハ商業ハ 32%、工業ハ 20%、農業ハ 18%ヲ增加セリ。

本科卒業者ノ工業 1,061、農業 431、商業 874ナリ。

地方別ニ見ルニ、工業ニ關スル專門學校ハ秋田、山形、群馬、東京、愛知、京都、大阪、福岡、熊本ニ各 1校アリ。農業ニ關スル專門學校ハ東京ニ 2校岩手、千葉、長野、京都、鹿兒島ニ各 1校アリ。商業ニ關スル專門學校ハ東京ニ 3校、北海道、兵庫、大阪、山口、長崎ニ各 1校アリ。

【各學校入學志願者及入學者】 中學校、高等女學校、專門學校、高等學校、帝國大學、實業專門學校ノ本科入學志願者ハ、何レモ逐年增加シ、殊ニ中學校、高等女學校、實業專門學校等著明ナリ。入學者モ亦逐年增加スト雖、入學志願者ノ增加ニ及ハサルカ爲メ、各學校入學率ハ漸次減少スルモノ多シ。今入學志願者ニ對スル入學者ノ割合ノ最モ少キモノヨリ順次列擧スレハ商業專門學校 13.76%、工業專門學校 14.38%、高等學校 19.16%、醫學專門學校 27.09%、農業專門學校 32.15%、中學校 46.77%等ニシテ、其ノ他ノモノハ過半數以上ノ入學者ヲ見ルモノナリ。

【海外官費留學生】 海外留學生ハ大正七年度末ニ文部省ヨリ 128人、大正八年末ニ外務省ヨリ 23人ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ文部省ハ 23人、外務省ハ 6人ヲ增加セリ。

文部省留學生中最モ多キハ英米 29人ニシテ、英米佛 28人之ニ亞ク。又米 18人、英米佛瑞 15人、英米瑞 14人更ニ之ニ亞ク。

外務省ヨリハ露西亞 8人、支那、西班牙ノ各 5人、暹羅、和蘭各 2人ヲ派遣セリ。

【公學費】 府縣、郡、市、町村ニ於テ教育ノ爲ニ要スル費用ハ大正六年度ニ於テ 95,914千圓ニシテ、其ノ內譯ハ府縣公學費 20,591千圓 21%、郡公學費 2,758千圓 3%、市公學費 15,086千圓 16%、町村公學費 57,477千圓 60%ナリ。

公學費ハ逐年增加シ、之ヲ十年以前ニ比スレハ總額ニ於テ 24.00萬圓 35%ヲ增加シ、其ノ內譯府縣ハ 400萬圓、郡ハ 135萬圓、市ハ 530萬圓、町村ハ 1,160萬圓ヲ增加セリ。

最近ニ於ケル公學費ノ平均額ヲ見レハ、府縣公學費ハ一府縣平均 438,110圓、郡公學費ハ一郡平均 4,337圓、市公學費ハ一市平均 195,934圓、町村公學費ハ一町村平均 4,710圓ニ當レリ。

公學費ヲ學校別ニ見ルニ、府縣公學費ハ其ノ總額 20,591千圓中中學校ニ 5,879千圓、師範學校ニ 3,979千圓、實業學校ニ 3,428千圓、高等女學校ニ 1,633千圓、專門學校ニ 1,019千圓、小學校、圖書館其ノ他ニ 4,940千圓ヲ費シ、郡公學費ハ其ノ總額 2,758千圓中實業學校ニ 1,151千圓、高等女學校ニ 807千圓、中學校、各種學校圖書館其ノ他ニ 800千圓ヲ費シ、市公學費ハ其ノ總額 15,086千圓中小學校ニ 12,413千圓、實業學校ニ 1,428千圓、幼稚園、盲啞學校、中學校、高等女學校、專門學校各種學校、圖書館其ノ他ニ 1,245千圓ヲ費シ、町村公學費ハ其ノ總額 57,477千圓中、小學校ニ 54,293千圓、實業學校ニ 1,492千圓、幼稚園、盲啞學校、中學校、高等女學校、實業學校、各種學校、圖書館其ノ他ニ 1,692千圓ヲ費セリ。

【公學收入】 府縣、郡、市、町村ノ公學收入ハ大正六年度ニ於テ 16,488千圓ニシテ、其ノ內譯ハ府縣公學收入 6,390千圓、郡公學收入 935千圓、市公學收入 3,183千圓、町村公學收入 5,980千圓ニシテ、何レモ前記ノ公學費ノ一小部分ニ過キス。其ノ不足額ハ實ニ 79,426千圓ニシテ是皆地方費ノ負擔スル所ナリ。

公學收入ノ途ヲ見ルニ、府縣ハ授業料 4,146千圓、基本財產ヨリ生スル收入、教育資金普通教育奬勵費補助、國庫補助、寄附金雜收入 2,244千圓、郡ハ授業料 325千圓、基本財產ヨリ生スル收入、教育資金普通教育奬勵費補助、國庫補助、寄附金雜收入 610千圓、市ハ授業料保育料 2,455千圓、基本財產ヨリ生スル收入、教育資金普通教育奬勵費補助、國庫補助、寄附金雜收入 728千圓、町村ハ授業料保育料 2,078千圓、寄附金雜收入 2,371千圓、基本財產ヨリ收入、教育資金普通教育奬勵費補助、國庫補助 1,531千圓ナリ。

【公學資產】 府縣、郡、市、町村公學資產ハ大正六年度末ニ於テ 357,623千圓ニシテ、其ノ內譯ハ府縣 71,410千圓、郡 5,599千圓、市 75,060千圓、町村 205,552圓ニシテ逐年增加シ、最近ニ於ケル平均額ヲ見レハ、府縣資產ハ一府縣平均 1,519千圓、郡資產ハ一郡平均 8千圓、市資產ハ一市平均 974千圓、町村資產ハ一町村平均 17千圓ニ當レリ。

【出版圖書】 大正七年ニ於ケル出版圖書ノ數ハ 36,903ニシテ內著作 36,755、翻譯 148ナリ。出版圖書ハ大正五年ニ至ル迄ハ逐年增加セシカ、大正六年ニ至テ少シク減少シ、本年亦大ニ減少シテ前年ニ比スレハ 80%ニ當ル。

出版圖書ノ種類ハ產業(6,180)最モ多ク、教育(4,207)之ニ亞キ、文學(3,920)、宗教(2,658)、畫畫(1,556)、法律 1,272)、醫事(1,243)、技藝(1,151)更ニ之ニ亞ク。其ノ他經濟、兵事、地理、理科、小說、美術、音樂、語學ハ 500—1,000、ノ範圍內ニ在リ。政治、統計、天文、交通、數學、漁獵、經典、式禮、歷史、傳記、哲學、倫理修身、俗謠、字書、感化慈善ハ 500以下ナリ。

【圖書館】 大正七年末ニ於ケル全國ノ圖書館數ハ官立 759、私立 600、合計 1,359ニシテ、前年ニ比シ 122ヲ增加シ十年以前ニ比スレハ 4.8倍トナレリ。

所藏圖書冊數ハ官公立 2,707,059、私立 2,068,207、合計 4,775,266ニシテ、一館平均官公立ハ 3,566、私立ハ 3,447ナリ。所藏圖書ヲ和漢及洋ノ別トシテ見ルニ、官公立ニ在リテハ和漢 94%、洋 6%、私立ニ在リテハ和漢 96%、洋 4%ナリ。

閱覽延人員ハ官公立 7,135,039、私立 2,381,495、ニシテ、一館一日平均官公立ハ 26人、私立ハ 11人ニシテ、前年ニ比シ官公立ハ 1人ヲ增シ私立ハ 1人ヲ減セリ。

閱覽延人員ヲ地方別ニ見ルニ、其ノ最モ多キハ東京(2,178,366)ニシテ、之ト比肩スルモノ他ニ一モ之アルコトナシ。之ヨリ遙ニ下テ石川(533,324)、新潟(497,085)、宮城(435,754)等ニシテ、其ノ少キモノハ岩手、神奈川、福井、靜岡、鳥取、沖繩ノ如キ五萬ニ達セサルモアリ。

XXIV. 社寺教會

【神社及神職】 大正八年末現在ノ神宮及官、國幣社ノ合計ハ 181社ニシテ前年ニ比シ 4社ヲ增加セリ。府縣社、鄕社、村社ノ合計ハ 49,278社ニシテ、即チ前年ヨリ增スコト 9社、境外無格社ハ 66,738社ニシテ、前年ヨリ減スルコト 680社、以上總計 116,197社、前年ヨリ減スルコト 667社ナリ。斯ノ如ク神社數ノ減少ヲ見タルハ境外無格社ノ合祀セラレタルモノ多キニ因ル。

大正七年末ノ神職總員ハ 14,759人ニシテ、之ヲ其ノ所屬ニ從ヒ大正七年末ノ府縣社及ニ割リ當テ一社ノ平均神職人員ヲ見ルニ、國幣社以上ハ 4.14人、府縣社ハ 1.48人、鄕社ハ 0.99人、村社ハ 0.19人ノ割合ト爲ル。更ニ境外無格社ニ至リテハ、一社平均神職人員 0.02人ニシテ到底比スヘクモ非ス。

神職總員ヲ前年ニ比スルニ 27人ヲ增シ、十年前ナル明治四十一年ニ比シ、其ノ百ニ對スル指數ヲ求ムルニ 59.49ニ當レリ。此ノ減少ハ主トシテ無所屬神職ノ減少ニ歸スルモノナラム。

【寺院及住職】 大正七年末ノ寺院總數ハ 71,681箇寺ニシテ、前年ニ比シ 49箇寺ヲ增加セリ。之ヲ各宗ニ就テ見ルニ、其ノ增加シタルモノハ、曹洞宗、眞宗、天台宗、淨土宗各 2箇寺ニシテ、時宗、黃檗宗、融通念佛宗、法相宗、華嚴宗ハ何等ノ增減ナク、減少シタルモノハ眞言宗ノ 4箇寺、臨濟宗ノ 2箇寺、日蓮宗ノ 3箇寺ナリ。此ノ外境外佛堂ハ 36,109箇所アリテ、前年ヨリ 42箇所ヲ減シタリ。今寺院數ヲ宗派別ト爲シ、其ノ百分比ヲ算出シ、率ノ高キモノヨリ順次ニ擧クレハ、眞宗 27.42%、曹洞宗 19.84%、眞言宗 17.24%、淨土宗 11.69%、臨濟宗 8.46%、日蓮宗 6.98%、天台宗 6.35%、黃檗宗 0.72%、時宗 0.69%、融通念佛宗 0.52%、法相宗 0.05%、華嚴宗 0.04%ト爲ル。

大正七年末現在ノ住職總員ハ 52,250人、前年ニ比シ 887人ヲ增シタリ。之ヲ各宗ニ就テ見ルニ、增加シタルハ曹洞宗 409人、眞言宗 263人、臨濟宗 239人、眞宗 169人、黃檗宗 7人、時宗 2人、華嚴宗 1人ニシテ、減シタルハ日蓮宗 119人、天台宗 36人、淨土宗 25人、融通念佛宗 21人、法相宗 2人ナリ。又此ノ住職ノ員數ト寺院數トヲ對照スルニ、各宗共ニ住職ノ充實セルハナク、皆寺院ノ數ハ住職ノ員數ヨリ多シ。試ニ一住職ニ對スル寺院數ノ比例

ヲ算出シ其ノ割合ノ高キモノヨリ列擧スレハ、法相宗 2.69、眞言宗 1.72、天台宗 1.69、華嚴宗 1.68、融通念佛宗 1.65、黃檗宗 1.54、時宗 1.42、臨濟宗、眞宗ハ共ニ 1.32、淨土宗、日蓮宗ハ共ニ 1.28、曹洞宗 1.22トナル。

【教會堂】 大正七年末現在ノ神佛以外ノ宗教(基督教)用會堂及講義所ハ 1,483箇所ニシテ、前年ニ比シ 33箇所增加セリ。之ヲ宗派別ニ見レハ、增シタルモノハ、救世軍 16箇所ヲ始メ〔ハリスト〕正教 6箇所、浸禮教會 4箇所、日本聖公會 3箇所、天主公教、組合基督教會、日本メソヂスト教會、福音教會各 2箇所ニシテ、福音路帖ハ增減ナク、日本基督教會 3箇所、其他ニ於テ 2箇所ノ減少ヲ見タリ。尙同年末ニ於ケル此等宗派別ニ就キ百分比ヲ算出スルニ、日本基督教會 17.19%最高ク、日本聖公會ノ 14.56%之ニ次キ、以下日本メソヂスト教會 12.55%、天主公教 13.35%、組合基督會 9.17%、ハリスト正教 9.11%、浸禮教會 4.79%、救世軍 4.19%、福音教會 1.62%、美普教會 1.48%、福音路帖教會 0.81%ノ順序トナリ、而シテ、其ノ他ハ綜合シテ 10.18%ノ割合ナリ。

【宗教宣布者】 大正七年末現在神道十三派ノ內、大成教ヲ除ク各派ニ 1人ノ管長アリ、大成教ニハ管長事務取扱 2人ヲ置ケリ。神道各派ヲ合シテ教師 70,537人アリ、之ヲ前年ニ比スレハ 871人ヲ減セリ。此ノ教師ヲ男女別ニセハ、男 91.67%、女 8.33%ノ比例ナリ。

佛教ニ於テハ大正七年末ニ管長 56人アリ。之ヲ宗派別トナセハ、臨濟宗 14人、眞言宗 12人、眞宗 10人、日蓮宗 9人、天台宗 3人、淨土宗 2人、其他六宗各 1人アリ。各宗ヲ通シテ教師ハ 71,856人ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ 1,227人ヲ減セリ。此ノ教師ノ內、各寺院ノ住職ヲ兼ヌル者必ス若干アルヘキモ 今其ノ數ヲ詳ニセス教師ヲ男女ニ別テハ男 97.94%、女 2.06%ニ當ル。佛教各派ニハ教師ノ外ニ、非教師 51,149人アリ。是ハ布教ニ從事セサル僧侶ノ謂ニシテ、此ノ非教師中ニモ各宗寺院ノ住職タル者若干アルヘキモ、今其ノ數ヲ詳ニセス。此ノ非教師ヲ男女ニ別テハ、男 93.08%、女 6.92%ニ當ル。

神佛道以外ノ宗教宣布者ハ大正七年末ニ於テ 2,566人アリ。之ヲ前年ニ比スレハ 45人ヲ增セリ。又之ヲ內外人ニ別テハ本邦人 67.95%、外國人 32.05%ノ割合ナリ。

XXV. 警 察

【警察官署及警察官】 大正七年四月現在數ニツキ警察署ハ 709ニシテ、警察分署ハ 500アリ。又巡査及巡査部長派出所(警部補派出所ヲ含ム)ハ、2,868巡査駐在所及巡査立番所ハ 14,585ナリ。以上ノ內水上警察官所ハ、警察署及同分署 17、巡査及巡査部長派出所 144ナリ。而シテ之ヲ前年ニ比スルニ警察署ハ 1、警察分署ハ 4、巡査及巡査部長派出所ハ 71、巡査駐在所及巡査立番所ハ 219ヲ何レモ增セリ。又水上警察署ハ增減ナク、同巡査及巡査部長派出所ハ 12ヲ增シタリ。惟フニ警察署ハ大正元年末最多ク、爾來漸次減少セシカ、大正五年末ヨリ少シク增セリ。警察分署ハ明治三十四年末最多ク爾來漸次減少シ、本年ニ至リテ 4ヲ增セリ。巡査及巡査部長派出所ハ屢增減アリテ最近ニ增加シ、巡査駐在所及巡査立番所ハ大正三年マテ著シク增加シ來リシカ、大正四年ハ同三年ニ比シ 32ヲ減シ、同五年以來亦著シク增加セリ。此ノ官署ノ數ヲ大正七年ノ行政區劃數ニ對比スルニ、警察署及警察分署ヲ合セテ、一郡市ニ付平均 1.69餘ニ當リ、巡査及巡査部長派出所ハ一市平均 36.30ニ當リ、巡査駐在所ハ一町村平均 1.20ニ當レリ。

大正七年四月現在ノ警察官中警部、警部補巡査ノ員數ヲ擧クレハ、警部 1,473人、警部補 1,290人、巡査 40,886人ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、警部 27人、警部補 43人、巡査 509人ヲ增シタリ。此ノ巡査ノ員數ヲ大正六年末ノ人口ニ比スルニ、巡査一人ニ對スル人口ハ 1,371人ニ當リ、前年ノ同一比例 1,368人ニ比シ 3人ヲ增シタリ。此ノ巡査ニ對スル人口ノ比例ヲ地方別ニ見ルニ、東京府 518人ニシテ巡査ノ割合最多ク、神奈川縣 873人、兵庫縣 1,082人、京都府 1,124人、愛知縣 1,349人等多キモノニ屬ス。之ニ反シ此ノ比例ニ由リテ巡査配置ノ稀疎ナル地方ヲ擧クレハ、沖繩縣 2,244人、高知縣 2,057人、鹿兒島縣 2,041人、愛媛縣 1,965人、熊本縣 1,960人等ナリトス。

【檢擧及犯則者取扱】 大正七年中ニ檢擧シタル犯罪人並ニ取扱ヒタル諸犯則人員ノ總數ハ 888,541人ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ 16,527人ヲ增シタリ。此ノ中刑法犯者ハ 355,949人、陸海軍刑法犯者ハ 240人、警察犯處罰令違犯者ハ 181,203人、諸條例諸規則違犯者ハ 62,048人、廳府縣ヨリ發シタル命令違犯者ハ 289,101人ナリ。今是等ノ各犯者ヲ總數ニ對スル分節比例ト爲セハ、刑法犯者ハ 40.06%、陸海軍刑法犯者ハ 0.03%、警察犯處罰令違犯者ハ 20.39%、諸條例諸規則違犯者ハ 6.98%、廳府縣ヨリ發シタル命令違犯者ハ 32.54%ニ當ル。又各犯者ノ實數ヲ前年ニ比スルニ、刑法犯者ハ 25,755人ヲ增シ、陸海軍刑法犯者ハ 88人ヲ減シ、警察犯處罰令違犯者ハ 4,490人ヲ增シ、諸條例諸規則違犯者ハ 14,213人ヲ增シ、廳府縣ヨリ發シタル命令違犯者 583人ヲ增シタリ。而シテ刑法犯中最多キヲ占ムルモノハ、賭博及富籤ニ關スル罪ニシテ、刑法犯總數ノ 26.59%ニ當リ、(前年ニ比シ 3,027人增)次ハ竊盜ノ 26.00%、(前年ニ比シ是亦 9,783人增)之ニ次テ多キ詐欺及恐喝罪ハ 13.69%、(前年ヨリ 1,843人增)次ハ傷害罪 5.56%、(前年ヨリ 65人減)放火及失火ノ罪ハ 3.63%、(前年ヨリ 430人增)騷擾ノ罪ハ 2.39%(前年ヨリ 8,141人增)等ニシテ就中本年ハ特ニ騷擾ノ罪ヲ增シタルハ米價騰貴ノ際各地騷擾ヲ釀シタル者多ク檢擧セラレタルモノ多カリシニ依ル。

【盜難】 大正七年中ニ取扱ヒタル盜難ノ總件數ハ 321,833件、之ヲ類別スレハ强盜 0.46%、竊盜 77.54%、掏摸 1.03%、拐帶誑騙 20.91%、ニ當ル。此ノ盜難件數ヲ人口ニ比スルニ千ニ付 5.79ニ當リ、前年ノ同一比例ヨリ 0.40ヲ增シタリ。此ノ內强盜件數ハ前年ニ比シ 491ヲ增シ、之ヲ類別スレハ家 75.80%、船 1.22%、人 22.98%、ニ當リ、竊盜件數モ亦前年ヨリ 14,102ヲ增シ、之ヲ類別スレハ屋內 62.68%、家ノ屋外 26.49%、船 1.41%、人 9.42%ニ當リ、家ノ屋外、人ノ遭遇セル竊盜ハ殊ニ多キヲ見タリ。

盜難ヲ其ノ遭遇シタル月ニ依リテ分チ、一年平均一日ノ盜難千ニ付各月平均一日ノ盜難比例ヲ算出シ見ルニ、明治三十二年以降大正七年ニ至ル二十年間ノ平均ニ於テハ二、三、四月ニ稍多ク六月最少ク、夫ヨリ漸次多キヲ加ヘ、十一月十二月最多シ。即九月ヨリ十二月マテノ四箇月ハ平均以上ニシテ、他ノ八箇月ハ平均以下ナリ。然ルニ、大正七年ノ盜難月別ハ少シク其ノ型ヲ異ニシ、平均以上ナルハ二月、三月、四月、五月、九月、十二月ノ六箇月ニシテ、此ノ內最高ナルハ二月ニシテ次ハ十二月ナリ。平均以下ハ即一、六、七、八、十、十一月ニシテ此ノ內最低ハ八月ナリ。前記ノ二十年平均ニ比シ大正七年ニ於ケル型ハ二月ニ比較的高ク、八月、十一月ニ比較的低シ。斯ノ如キハ何等カ基ク所ノ社會的因由アリヤ、將タ偶然ノ結果ナリヤ、今其ノ原因ヲ詳ニセス。次ニ大正七年ノ盜難ヲ種類ニ依リ分チ、更ニ之ヲ月別ニ觀察スルニ、竊盜ハ盜難全體ト同型ニシテ、强盜ハ少シク之ト異ナリ、平均以上ナルハ八月、九月ニシテ、此ノ內最高ナルハ八月ナリ。最低ハ六月ニシテ次ハ二月ナリ。又掏摸ハ一、乃至五月ノ五箇月ニ多ク、四月最高ク、五月三月之ニ次ク最低ハ十月ニシテ八月、九月之ニ次テ低シ。是等ノ現象モ之ヲ仔細ニ觀察スレハ恐ラク偶然ナラサル特殊ノ社會的關係ニ基クモノナルヘキモ、今ハ唯事實ヲ呈示スルニ止ム。

【被殺害者】 大正七年中警察上取扱ヒタル被殺害人員ハ 2,140人ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ 482人ヲ減シタリ。之ヲ前年マテノ五年間一年平均 2,577人ニ比スレハ 437人ヲ減シタリ。又之ヲ人口ニ比スルニ、大正七年ハ其ノ百萬比例 38人ニ當レリ。又被殺害者ヲ其ノ殺害スルニ至レル原因ニ依リテ分テハ、多キモノハ爭論上又ハ一時ノ怒ニ因ルモノニシテ、總數ノ 10.75%、ヲ占メ、痴情又ハ嫉妬ニ因ルモノ、之ニ次キ 6.78%、貧困ニ因ルモノ 3.64%、怨恨ニ因ルモノ 2.80%、瘋癲人ノ爲メニ因ルモノ 2.34%、利慾上ノ爲ニ因ルモノ 2.10%、等其ノ多キモノニ屬ス。

【災害死者】 大正七年中警察上取扱ヒタル災害其ノ他ノ事故ニテ死セシ人員ハ 17,986人ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ 183人ヲ減シ、之ヲ前年マテノ五年平均ニ比スレハ 879人ヲ增シタリ。又之ヲ人口ニ比スルニ、大正七年ハ百萬ニ付 323人ニ當ル。此ノ死者中最多キハ過失ニ因リ汽車、電車等ニ觸レタル者ニシテ、總數ノ 48.42%ヲ占メ、途中ニテノ發病之ニ次キ 7.90%、積雪ニ壓セラレ又ハ凍ヘタル者 4.85%、難船 4.56%、鑛業 4.31%等其ノ多キモノニ屬ス。

【自殺】 大正七年中警察上取扱ヒタル自殺者ハ 12,624人ナリ。之ヲ男女ニ分テハ、男 7,553人、女 5,071人ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ、男ハ 695人、女ハ 649人ヲ增セリ。又前年マテノ五年間一年平均男 7,519人、女 4,539人ニ比スレハ、男 34人、女 532人ヲ增セリ。又之ヲ各性人口百萬ニ比スルニ、男ハ 270人、女ハ 183人ニ當ル。試ニ此ノ比例數ヲ十年前ナル明治四十一年ノ同一比例、男 237人、女 151人ニ比スレハ、男女共ニ增シ、四十一年ノ百ニ對シ、男ハ 128.0、女ハ 136.9ニ當レリ。自殺者ヲ其ノ手段ニ依リテ分チ、各性ノ總數ニ對スル手段別ノ分節比例ヲ算スルニ、男女共ニ最多キハ縊死及入水ニシテ、轢死之ニ次ク。併シナカラ各手段ノ比例數ハ、男女ノ間頗ル不同アリ。即縊死ハ男 54.15%、ニシテ過半ヲ占ムレトモ、女ハ 37.57%、ニシテ尙未タ半數ニ達セス。入水ハ男 18.88%、ニシテ、縊死ノ半ハニ達セサレトモ、女ハ 43.05%ニシテ、寧ロ縊死ヨリ多シ。轢死ハ、男 15.20%、女 10.86%、刃物ヲ用ヒタルハ、男 4.47%、女 2.54%毒ヲ仰ケルハ、男ハ 3.28%ナレトモ、女ハ刃物ヲ用ヒタルヨリモ多ク 4.12%ナリ。銃ニテノ自殺ハ最少ク、男 1.79%、女 0.38%ナリ。自殺ノ手段ニ於テモ自ラ男女ノ別ノ截然タルモノアルヲ見ルヘシ。

明治三十二年以降大正七年ニ至ル二十年間ノ自殺者ヲ月別ト爲シ、一年平均一日ノ自殺千ニ付各月平均一日ノ自殺比例ヲ算出スレハ、自殺ハ夏季ニ多ク、冬季ニ少ク、七月ヲ頂巔トセル急峻ナル山形ヲ形成スルナリ。即四月乃至九月ノ六箇月ハ平均以上ニシテ、最高ノ七月ハ 1,281ニ當リ、最低ノ十二月ハ 761ニ當ル。唯玆ニ一ノ奇異ナル現象ハ均シク高位ニハ在レトモ六月ハ五月七月ノ間ニ挿マレテ一段低ク、截痕狀ヲ呈スルコトニシテ、彼ノ雙峰山テフ筑波山ノ形貌ニ似タリ。何故ニ斯カル截痕アルカ、所謂梅雨期ナル此ノ六月多雨ノ際ハ自殺者ヲ少クスル何等カノ原因ノ働アルカ、兎モ角モ、注意スヘキ現象ナリ。而シテ大正七年ノ自殺者ヲ

月別ニ觀察スレハ、最高點ハ同シク七月ニシテ 1,293ニ當リ、最低ハ一月ニシテ 713ニ當ル。即大正七年ニ於テハ一月ノ比較的低キコト强ク、十一月ノ比較的高キコトニシテ、七月ノ最高ナルコトモ、六月ノ截痕アルコトモ、全ク二十年間ノ觀察ト異ナル所ナシ。大正七年ノ各性自殺者ヲ年齡ニ依リテ別チ、各分節比例ヲ算出スレハ、十六歲未滿者ハ、男 1.59%、女 1.85%、ニシテ最少ク、十六歲以上二十歲未滿者ハ、男 5.30%、女 10.99%、ニシテ女ハ此ノ年齡者ニ於テ既ニ稍多ク、二十歲以上三十歲未滿者ハ男 23.65%、女 26.19%、ニシテ、此ノ年ニ於テモ女ノ比例高ク、三十歲以上四十歲未滿者ハ、男15.46%、女ハ 13.98%、ニシテ、此ノ年齡ヨリ女ノ自殺者減シテ男ノ比例高ク、四十歲以上五十歲未滿者モ男高ク 13.08%、ニシテ、女ハ 10.96%、五十歲以上者ハ男 40.92%、女 36.03%、ニシテ、男愈高ク、此ノ外年齡不詳者アリ。男ハ總數ノ 4.33%、ニ當リ、女ハ 1.81%、ニ當ル。

大正七年ノ各性自殺者ヲ其ノ自殺ノ因由ニ依リテ分チ、各分節比例ヲ算出スレハ、男女共ニ最多キモノハ精神錯亂ニシテ、男 25.29%、女 26.25%ヲ占メタリ。次ハ病苦ニ因ルモノ、男 24.83%女 25.89%、ニシテ、女ハ斯カル苦惱ニモ耐エ能ハサルコト男ヨリモ多シ。生計ノ困窮又ハ薄命ヲ嘆キテ自殺セルモノ、男ハ 6.06%、女ハ 3.31%、男ハ生活ノ維持者タルコト女ヨリモ多キタケニ此ノ原因ニ襲ハルヽコト多シ。痴情又ハ嫉妬ニ困ルモノ、男ハ 0.69%、女ハ 1.82%、女ニ此ノ原因ノ働キ强キハ寧ロ當然ナラン。前非ヲ悔ヒ又ハ慚愧ニ耐エス自殺セル者、男 1.71%、女 0.93%、女ノ廉恥ヲ知ル者尠シト言フニアラサレトモ、所謂男子ラシキ自殺ノ男子ニ多キモ亦當然ナルヘシ。親族間ノ不和ニ因ルモノ、男 1.92%、女 5.31%ナリ。コレニヨリテ觀レハ女ハ男ヨリモソノ意志薄弱ナルカ如シ。罪ノ發覺ヲ懼レ又ハ刑ノ免レ難キ爲自殺セル者、男 2.16%、女 0.73%ニシテ、斯カル機會ニ遭遇スルコト男ハ女ヨリ遙ニ多カルヘシト想像セラル。將來ノ事ヲ苦慮セルニ因ル自殺、男 1.74%、女 1.93%ニシテ、男女共ニ殆ト同シキハ必スシモ偶然ナラサルヘシ。商業等ノ爲損失又ハ負債償却ニ苦ミテ自殺セル者男ハ 1.23%、女ハ 0.20%ナリ。是亦家計ノ維持者トシテノ男ニ此苦惱多カルヘキハ多言ヲ要セサル所ナラン。淫逸放蕩ノ末自殺ノ己ムナキニ陷レル者、男 1.68%、女 0.32%ナリ。雇主又ハ父兄等ノ懲戒又ハ譴責ニ因ル者、男 0.48%、女 0.83%、ニシテ、斯カル機會ニ遭遇スルコト男ニ多カルヘキモ尙且女ノ比例高キハ上來述フル女ノ意思カ薄弱ナルノ結果然ラシムル所ナルヘシ。離緣ヲ悲ミテ自殺セル、男 0.32%、女 0.93%、男ニモ亦斯カル原因ニ依リテ自殺セル者アルハ注意スヘシ。夫又ハ子等ノ不行狀ヲ嘆キテ自殺セル者、男 0.25%、女 0.85%、女ハ男ヨリモ其ノ場合多キノミナラス、是モ亦、所謂女ラシキ自殺ト言ハンカ。私通姙娠ヲ憂ヒテ自殺セルモノ、男 0.03%、女ニ 1.12%アリ。老衰ノ身ノ不自由ヲ苦慮シテ自殺セル者、男 2.05%、女 2.58%、女ハ男ヨリモ高齡者多キハ從テ此ノ原因ノ働キ多キニ至ルナルヘシ。婚姻ヲ忌ミテノ自殺者、男 0.04%、女ハ 0.71%、男ニ取リテハ是敢テ重大ノ原因ナラサレトモ、女ニハ決シテ易々タル原因ニアラスト知ラレタリ。身體ノ不具ナルヲ嘆キテ自殺セル者、男 0.45%、女 0.65%、是レ女ニ高キハ女ノ特質上寧ロ斯クアルヘク。欝憂ニ因ル自殺者、男 1.03%、女 1.20%、此ノ曖昧ナル原因モ女ノ多クカ陰欝ナルタケ女ニ働クコト强キヲ當然視セラルヽナリ。親又ハ夫妻ノ病氣ヲ苦ニシテ自殺セル者、男 0.29%、女 0.43%、是亦、女ニ多ク、親又ハ夫妻若シクハ子等ノ死去ヲ嘆キテ自殺セルモノ、男 0.46%、女 1.20%、アリテ女ニ强ク、此ノ兩原因ノ死去ニ强クシテ病氣ニ弱キハ自ラ然ルヘシ。而シテ共ニ女ニ强ク男ニ弱キモ其ノ女ラシク、男ラシキ所ナルヘク見ラルヽナリ。以上列記以外ノ原因ニ依リテ自殺セル者、男ニ 16.69%、女ニ 17.51%、アリ、原因不詳ノ自殺者ハ、男ニ 10.54%、女ニ 5.30%アリ。

【警察上賞與及賞詞】 大正七年中ニ警察上ノ功ニ依リ金圓ヲ賞與セル人員 37,734人アリ。之ヲ前年ニ比シ、1,231人ヲ增シ、賞詞ヲ交付セル人員 4,743人アリテ、前年ニ比シ 361人ヲ減セリ。是等受賞者ヲ警察事務ニ從事スル者ト職務ノ爲ニアラサル者トニ分テハ、警察事務ニ從事スル者ハ、賞與者ニ 87.63%、賞詞者ニ 64.41%アリ。職務ノ爲ニアラサル者ハ、賞與者ニ 12.37%、賞詞者ニ 35.59%アリ。而シテ一人平均賞與金額ハ、警察事務ニ從事スル者 1圓 36錢餘、職務ノ爲ニアラサル者 1圓 48錢餘ニ當ル。賞與者及賞詞者ヲ合セテ其ノ受賞ノ事由別ニ分節比例ヲ算スレハ、警察事務ニ從事スル者ノ約 95.13%、マテ犯罪人ノ搜査檢擧又ハ逮捕ニ由ルモノニシテ、職務ノ爲ニアラサル者ノ約 80.55%マテハ人命救助ニ由ルモノタリ。

【退隱料遺族扶助料等】 大正七年末現在ノ退隱料受領者中、巡査 18,085人、警部補 1,231人、此ノ金額一人平均巡査 61圓 32錢弱、警部補 81圓 54錢强、同遺族扶助料受領者巡査 4,086人、警部補 102人、此ノ金額一人平均巡査 23圓 27錢强、警部補 31圓 67錢强ナリ。又大正七年中ニ退職一時金療治料、給助料及弔祭料ヲ受ケタル者、巡査ハ 3,930人、警部補ハ 147人アリ。其ノ金額平均一人巡査ハ 32圓 48錢强、警部補ハ 77圓 37錢弱ニ當ル。

XXVI. 裁判及登記

【裁判所及司法職員】 大正七年末現在ノ裁判所數ハ 307箇所ニシテ、大正六年ノ數 289ニ比シ 18箇所ヲ增シタリ。而シテコレ單ニ區裁判所ノミノ增加ニ屬ス。又、司法職員ヲ數フルニ判事ハ 946人、檢事ハ 456人ニシテ、前年ニ比シ判事ニ 59人ヲ增シ、檢事ニ 28人ヲ加ヘタリ。其ノ他司法官試補、書記、廷丁等ハ各若干名ヲ增シタルモ、雇員ニ 63人ヲ減シ、書記長ニハソノ增減ヲ見ス。之ヲ所屬裁判所別ニ觀レハ、判事ニアリテハ大審院ニ 5人ヲ增シ、控訴院ニ 1人ヲ減シ地方裁判所ニ 30人、區裁判所ニハ 25人ヲ增加セリ。檢事ニアリテハ大審院 2人、控訴院 1人、地方裁判所ニ 27人ヲ增シ、區裁判所ニ屬スル員數ニハソノ增減ヲ見ス、コレ兼務ノ有無ニ由ルカ爲メナルヘシ。又年末現在ノ執達吏ハ 546人ニシテ大正六年ニ比シ 47人ヲ減シタリ。辯護士ハ 2,957人ニシテ前年ニ比シ 10人ヲ增シ、公證人ハ反之 16人ノ減少ニヨリテ 260人トナレリ、又破產管財人ハ 449人ニシテ前年ニ比シ 13人ノ減少ヲ見ル。

甲 民 事 裁 判

【區裁判所】 大正七年中ニ區裁判所受理ニ係ル民事々件總數ハ 634,548件ニシテ前年ニ比シ 94,800件少ク 14.94%ノ減少ナリ。而シテ新受理件數ハ 595,464件ニシテ、前年ニ比シ少キコト 88,628件ナリ。即 14.88%ノ減少ニ當ル。終局件數ハ 598,797件、是亦前年ヨリ少キコト 90,103件ニシテ 15.05%ノ減少トナル。之ヲ區裁判所々屬ノ判事現在員 445人ニ配スルトキハ、一人ニ付 1,345件ニ當リ、前年ヨリ 295件ヲ減シ、前々年ヨリ 1,012件ヲ減シタリ。是民事々件ノ漸次減少シタルト、判事ノ增員トニ由ルモノナリ。又新受理(以下單ニ新受ト略ス統計表ニ於テモ亦然リ)件數ヲ事件ノ種類ニ分テハ、和解事件ハ 853件ニシテ、前年ヨリ 189件ヲ增シ、督促事件ハ 203,011件ニシテ 66,403件ヲ減シ、第一審訴訟件數ハ實ニ 18,762件ヲ減少シ、强制執行ハ 5,084件、家資分產ハ 106件、再審ハ各 1件ヲ減シ、戶籍ニ關スル抗告ハ 6件、非訟事件ハ 1,532件ヲ各增加セリ。而シテ其ノ分節比例ヲ揭クレハ、和解事件 0.14%、督促事件 34.09%第一審訴訟件數 24.86%、戶籍ニ關スル抗告件數 0.01%、强制執行 2.53%、家資分產 0.06%、非訟事件 38.31%再審 0.00%ニ當ル。

【地方裁判所】 大正七年中ニ地方裁判所ノ取扱ヒタル民事々件ノ總數ハ 43,721件、前年ヨリ 3,530件多ク即其ノ比 8.07%ヲ增シタリ、又新受件數ハ 29,735件ニシテ前年ヨリ 2,356件、7.92%ヲ增セリ。而シテ本年中ノ終局件數ハ 27,792件、前年ヨリ 1,586件ソノ比 5.71%ヲ增セリ。是ヲ地方裁判所ニ屬スル判事ノ總員ニ比スルニ、一人ニ付平均 70.0件ニ當リ、前年ノ平均ヨリソノ比 1.4件ヲ增シタリ。又本年中ノ新受理件數ヲ裁判ノ種類ニ分チテ前年ト比較スレハ第一審訴訟事件ハ 21,010件ニシテ、前年ヨリ 3,169件ノ激增ヲ示シ、反之シテ控訴件數ハ 1,032件、抗告事件ハ 287件、破產事件ハ 26件ヲ各減少セリ。其他非訟事件ハ 2,073件ニシテ 502件ヲ增シ、ソノ再審事件ハ前年ト同シク 4件ニ止マル。即第一審訴訟事件ハ 5.61%增シテ 70.67%、控訴事件ハ 5.47%ヲ減シテ 19.74%、抗告事件ハ 1.24%ヲ減シテ 2.26%、破產事件ハ 0.13%ヲ減シテ 0.36%、非訟事件ハ 1.23%ヲ增シテ 6.97%ニ當ル。之ヲ要スルニ第一審訴訟事件及非訟事件ハ何レモ增加シ、其他就中控訴事件ハ最モ多ク減シタリ。

【控訴院】 大正七年中控訴院ノ取扱ヒタル事件ノ總數ハ 4,017件ニシテ、前年ヨリ 16件、即 4.00%少シ。又新受件數ハ 2,148件ニシテ前年ヨリ 34件即 1.56%ヲ減少セリ。尙終局件數ハ 2,153件ニシテ、同シク 11件 0.51%ヲ減セリ。即控訴院所屬ノ判事一人平均 29.5件ニ當リ、前年ヨリ極メテ僅ニ增シタリ。又新受件中控訴件數ハ 1,979件ニシテ、前年ヨリ 9件ヲ減シ、而シテ上告事件ハ全ク無ク、抗告事件ハ 164件ニシテ前年ヨリ 4件、特別訴訟ハ 3件ニシテ前年ヨリ 15件、ソノ再審事件ハ 2件ニシテ、前年ヨリ 5件何レモ減シタリ。即控訴件數ハ 92.13%ニシテ、抗告件數 7.64%特別訴訟 0.14%、再審 0.09%ニ當ル。

【大審院】 大正七年中ニ大審院ノ取扱ヒタル事件ノ總數ハ 1,583件ニシテ、前年ヨリ 132件、即 7.68%ヲ減シタリ。又本年中ノ新受件數ハ 1,357件ニシテ前年ヨリ 117件 7.94%ヲ減シタリ、而シテ終局件數ハ 1,106件ニシテ、前年ヨリ 25件、2.21%ヲ減シタルハ、審理ノ進行前年ヨリモ不良ナラズムバ事件ノ複雜ナルモノ多カリシニ由ルヘシ。況乎大審院所屬ノ判事一人ニ對スル平均ハ 35.6件ニ當リ、前年ヨリ 7.9件ノ減少ナルニ於テヲヤ。又總件數ヲ其ノ種類ニ分テハ、上告審ノ中通常訴訟ハ前年ニ比シ 19件ヲ減シタル 1,299ニシテ、證書及爲替訴訟ハ同シク 4件ヲ減シテ僅カニ 3件、特別訴訟ハ 3件ヲ減シタル 7件、人事訴訟モ亦 1件ヲ減シテ 16件ナリ。即チ上告事件ノ總數ハ前年ヨリ 27件ヲ減シタル 1,325件ニシテ、抗告審ハ前年ヨリ 105件ヲ減シタル 260件、再審ハ前年ト同シク一件ニ留マル。而シテ其ノ割合ヲ示セハ上告審 83.54%

抗告審 16.36%ニ當レリ。

【和解事件】 是ヨリ民事裁判ヲ種類ニ分チテ觀察センニ、之カ大正七年中ノ新受件數ハ 853件、舊受件數 32件、合計 885件ニシテ前年ニ比シ 190件ノ增加ナリ。而シテ本年中和解ノ調ヒタルモノハ 393件ニシテ、總件數ニ對シ 44.41%ニ當リ、前年ニ比シ 1.35%ノ減少ナリ。又和解不調ニ了リタルモノハ 334件、總件數ノ 37.74%ニシテ、前年ヨリ 2.06%多ク、別ニ取下及却下シタルモノ 119件、總件數ノ 13.45%アリ。次ニ大正三年乃至同七年ノ五ケ年間一年平均ノ和解終局件數ヲ種類別トスレハ、人事 4.31%土地、建物、船舶 33.99%、金錢證券 46.04%、米穀物品及雜事 15.66%ニ當ル。然ルニ大正七年ハ人事 3.90%、土地建物、船舶 44.92%金錢證券 39.01%、米穀、物品及雜事 12.17%ニシテ、五ケ年間一年平均ニ比シ、人事 0.41%、金錢證券 7.03%、米穀、物品及雜事 3.49%ヲ減シ、土地、建物、船舶 10.93%ヲ增シタリ。尙平均總數ヲ 100トセハ、大正七年度ノ指數ハ 117.6ニ當ル。今試ニ總件數ニ對スル和解不調ノ趨勢ヲ觀ルニ、明治二十三年ニハ 27.81%、同二十八年ニハ 34.95%、同三十三年ニハ 53.47%、同三十八年ニハ 54.83%ニ逐次上昇シタレトモ、其ノ後ハ概シテ低下ノ指數ヲ示シタリシカ、大正七年ニ至リテハ 39.48%ニ降下セリ。是レ蓋シ比較的單純ナルモノヽミチ和解事件ニ供チタルモノナラン乎。

【督促事件】 大正七年中ノ督促事件ハ總數 203,012件、此ノ中支拂命令ヲ發シタルモノ 202,503件アリ。此ノ支拂命令ニ對シ異議ノ申立ヲ爲シタルモノ 39,266件(19.39%)支拂命令ニ次テ執行命令ヲ發スルニ至リタルモノ 42,687件(21.08%)アリ。是ニ依レハ、其ノ過半 59.58%ハ無事ニ解決シタルモノト見ルヘシ。督促事件ハ明治二十四年 117,196件ヨリ概ネ增加ノ步調ヲ執リ大正四年ノ 442,672件ヲ最多トシ、最近ニ至リ漸ク低下シ、七年ノ如キハ、四年ヲ百トセル指數ハ僅ニ 45.86ニシテ過半減少セリ。而シテ之カ効果ヲ觀ルニ、明治三十年ニハ支拂命令ニ對シ異議ノ申立ヲ爲シタルモノ 16.25%、同執行命令ヲ發スルニ至リタルモノ、22.78%同四十年ニハ前者 17.81%、後者 21.91%、大正六年ハ前者 18.58%、後者 23.22%ナリ。即大體略同一ノ成績ニアリ。大正三年ヨリ大正七年ニ至ル五ケ年平均ノ督促事件ヲ種類別トセハ、一定ノ金額ニ係ルモノ 98.76%、代替物ニ係ルモノ 1.24%、有價證券ニ係ルモノ 0.00%ニシテ、大正七年ノ同一比例ヲ示セハ、一定ノ金額 97.76%、代替物 2.23%、有價證券 0.01%ナリ。

【訴訟事件】 大正七年中ノ第一審事件ノ總件數ハ區裁判所 182,006件、地方裁判所 30,477件、合計 212,483件ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ前者ハ 22,026件ヲ減シ、後者ハ 3,240件ヲ增シタリシカ、結局第一審訴訟事件ハ前年ヨリ少キコト 17,786件ナリ。又本年中ノ新受件數ハ區裁判所 148,047件、地方裁判所 21,010件、合計 169,057件ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、區裁判所ハ 18,762件ヲ減シ、地方裁判所ハ 3,199件ヲ增セリ。結局總數ニ於テ 15,563件ヲ減セリ。之ヲ既往ニ遡リテ按スルニ、區裁判所ニ於テハ明治二十四年ハ著シク前年ヨリ增加シタリシカ、翌二十五年ヨリ漸次減少シ、明治三十年ニ至リ再ヒ增加ノ步武ヲ示シ、同三十七年ニ至リテ再ヒ減少シ、同四十二年以降復增加シ、最近大正五年ヨリ三度減少ノ傾向ヲ示シタリ。最モ高キ大正四年ヲ百トセル大正七年ノ指數ハ實ニ 66.49ニ低下セリ。又地方裁判所ニ於テハ一高一低常ナク、最低ノ二十三年ニ比スレハ、同年ヲ百トセル大正七年ノ指數ハ 158.3强ノ增加ニシテ、又最高ノ明治三十四年ヲ百トセル指數ハ 65.1强ノ減少ナリ。更ニ明治二十四年以降各年ノ人口一萬ニ對スル新受件數(樺太ヲ含マス)ハ、明治二十三年ニ在リテハ區裁判所 39.35地方裁判所 4.43同二十八年ハ區裁判所 28.45、地方裁判所 3.77同三十三年ハ區裁判所 30.90、地方裁判所 6.37同三十八年ハ區裁判所 30.11、地方裁判所 4.26同四十三年ハ區裁判所 28.94、地方裁判所 3.96大正四年ハ區裁判所 40.86、地方裁判所 2.89同七年ハ區裁判所 26.60、地方裁判所 3.63ニ當レリ。是等訴訟ノ多少ハ一面ニ於テ時ノ社會的事情ノ反映ナリトモ見ルヘク、曾テ訴訟ノ旺盛ナリシ時代アリシカ、最近復タ減少ノ傾向アリトス。大正三年ヨリ同七年ニ至ル五年間平均一年ノ第一審訴訟事件ヲ種類ニ分テハ區裁判所ニ在リテハ通常訴訟 70.66%證書及爲替訴訟 2.01%、公示催告事件 0.97%、假差押、假處分 25.48%裁判所ニ繫屬シタル訴訟外ノ申立 0.93%ニ當リ、地方裁判所ニ於テハ通常訴訟 63.13證書及爲替訴訟 5.76%、假差押及假處分 11.14%、特別訴訟 0.01%、人事訴訟 19.96%ニ當リ、大正七年ハ區裁判所ノ通常訴訟 72.53%、證書及爲替訴訟 2.37%、公示催告 2.28%、假差押及假處分 21.60%、裁判所ニ繫屬シタル訴訟外ノ申立 1.22%ニシテ、地方裁判所ニ於テハ通常訴訟 63.36%、證書及爲替訴訟 5.52%、假差押及假處分 11.47%、特別訴訟 0.03%、人事訴訟 19.62%ニ當レリ。即チ區裁判所ニ在リテハ假差押及假處分ノミ五年間ノ一年平均ヨリ低ク、他ハ何レモ多少ノ增加ニシテ、地方裁判所ニ於テハ格別ノ輕輕アルナシ。大正七年中ノ第一審訴訟事件ノ終局件數ハ區裁判所 150,327件、地方裁判所 18,953件ナリ。之チ各總件數ニ比スルニ區裁判所ハ 82.59%ニ當リ、地方裁判所ハ 62.19%ニ當レリ。之ヲ前年ニ比スレハ、區裁判所ハ 0.76%地方裁判所ハ 1.73%ヲ何レモ減セリ。此ノ終局件數ヲ種別スレハ區裁判ニ於テハ闕席判決 20.48%、拋棄、認諾ニ基ク判決 0.28%、其他ノ終局判決 11.80%、取下 27.28%、和解 9.86%、訴狀差戻 0.04%、其他ノ結果 30.26%ニシテ、地方裁判所ハ闕席判決 11.21%、拋棄認諾ニ基ク判決 0.14%、其ノ他ノ終局判決 33.69%、取下 30.84%、和解 4.75%、訴狀差戻 0.08%、其ノ他ノ結果 19.79%ニ當リ何レモ取下ノ比例尠カラサルハ注目ニ値スヘシ。

大正七年中ノ第一審訴訟事件ノ新受件數中、金錢又ハ價格ニ見積リ得ヘキモノヲ金額ニ依リ分チテ分節比例ヲ求ムレハ、區裁判所ハ十圓迄 10.55%、五十圓迄 40.42%、百圓迄 21.83%、五百圓迄 26.65%、一千圓迄 0.32%、一萬圓迄 0.22%、一萬圓以上 0.01%、ニ當リ、地方裁判所ハ百圓迄 0.03%、五百圓迄 0.71%、千圓迄 43.81%、一萬圓迄 48.63%、一萬圓以上 6.22%ニ當ル。區裁判所ト地方裁判所トノ間ニ金額ニ大差アルハ素ヨリ其ノ所ニシテ、區裁判所ハ五十圓以上百圓迄ニ於テ、地方裁判所ハ千圓以上一萬圓迄ニ於テ、其ノ割合最モ大ニシテ何レモ訴訟金額ノ增大ヲ示セリ。而シテ其ノ金額及見積價額ノ積算ヲ見ルニ、區裁判所ハ 11,402,299圓ニシテ、地方裁判所ハ 54,342,013圓ナリ。兩者殊ニ地方裁判所ニ於テ增加ノ大ナルヲ見ル。之レ前年ノ現象ト異ル所ナリ。試ニ十年前ナル明治四十一年ヲ百トセル指數ヲ求ムレハ區裁判所 253.0、地方裁判所 221.1ニ當ル。是レ明治三十八年以來追次改正セル區裁判所權限ノ擴張ニ因ルト雖、區裁判所ハ最高ナル大正四年ノ事實ニ比スレハ、件數ニ於テ 46,082件、金額及見積價格ニ於テ 1,704,759圓ヲ何レモ減少セリ。又地方裁判所ハ明治二十三年以降ノ最高時ナル同三十四年ノ事實ニ比スルトキハ 9,347件ノ減少ニシテ、最近大正二年以降ノ各年ニ比スレハ、若干ノ增加ナレトモ、其ノ金額及見積價格ニ於テハ、尙テ比類ナキ增高ナリ。之レ社會經濟狀態ノ然ラシムル所ニシテ、五百圓以上、特ニ千圓以上一萬圓以內ノ件數ノ增加ハ實ニ顯然タルモノアリ。

大正七年ノ終局件數ニ依リテ、第一審訴訟事件ヲ其ノ種類ニ別テハ區裁判所ハ土地 2.56%、建物及船舶 3.11%、金錢 55.70%、米穀 1.69%、物品 1.84%、證券 0.30%、雜事 34.80%、又地方裁判所ハ人事 25.06%、土地 8.20%、建物及船舶 2.24%、金錢 34.74%、米穀 0.41%、物品 1.66%、證券 0.91%雜事 26.78%ニシテ、何レモ金錢ハ係爭物トシテ其ノ大部分ヲ占メ、之ニ亞クモノハ雜事ニシテ、啻タ後者ニ於テハ人事殆ト之ニ匹敵シ、尙土地係爭物件稍高キ者ニ屬ス。他ハ概シテ言フニ足ラストスヘシ。是等係爭物ノ推移ヲ知ランカ爲、區裁判所ト地方裁判所トヲ通シテ、各種類ノ明治四十二年ノ事實ヲ百トセル、十年後ナル大正七年ノ指數ハ人事 137.1、土地 131.4、建物及船舶 177.2、金錢 130.8、米穀 131.4、物品 139.2、證券 128.7、雜事 80.0ニ當リ、總數ハ 108.5ニ當レリ。即建物及船舶最モ增加大ニシテ、物品之ニ亞キ、雜事ノ獨リ低下セルヲ除ケハ、何レモ增加セリ。前年ハ金錢ノ係爭最モ多カリシカ、本年ハ上記ノ如ク建物及船舶殆ト八割弱ノ增加ヲ示セルハ注目ニ値スヘシ。

【上訴】 大正七年中ニ區裁判所ニ於テ取扱ヒタル、戶籍ニ關スル抗告事件ハ 37件ニシテ、中却下セルモノ 26件(70.27%)、市長村長ニ相當ノ處分ヲ命シタルモノ 4件(10.81%)ニシテ、前年ニ比シ、總件數 7件、却下シタルモノ 12件ヲ增シ、市長村長ニ處分ヲ命シタルモノ 5件ヲ減シタリ。大正七年中ニ地方裁判所ニ於テ取扱ヒタル控訴總件數ハ 9,759件アリ。此ノ中新受件數ハ 5,869件ニシテ、之ヲ本年中區裁判所ノ判決總數 48,932件ニ比スレハ 11.99%ニ當ル。之ヲ十年前ナル明治四十一年ノ同一比例 12.44%ニ比スレハ 0.45%、低ク前年ニ比スレハ 0.25%高シ。而シテ地方裁判所カ此ノ控訴ニ下シタル判決ハ棄却 2,793件、廢棄 1,078件ナリ、即棄却ハ總件數ノ 28.62%、廢棄ハ 11.05%ニ當ル。之ヲ前年ト比スルトキハ棄却 1.66%、廢棄 1.83%何レモ少シ。又控訴院カ取扱ヒタル控訴總件數ハ 3,801件ニシテ、新受件數ハ 1,979件ナリ之チ本年中地方裁判所第一審判決總數 8,537件ニ比スレハ 23.18%ニ當リ、十年前ナル明治四十一年ノ同一比例 24.00%ニ比スレハ 0.82%低ク、前年ニ比スレハ 0.84%低シ、而シテ控訴院カ之ニ下シタル判決中棄却セルモノ 919件、廢棄セルモノ 388件アリ、即總件數ニ對シ棄却 24.18%、廢棄 10.21%ニ當リ、前年ニ比シ前者ハ 0.28%ヲ增シ、後者ハ 1.38%少シ。

大正七年中ニ大審院ノ取扱ヒタル上告總件數ハ 1,586件新受件數ハ 1,357件ナリ、之ヲ地方裁判所及控訴院カ下シタル控訴審判決總數 5,178件ニ比スレハ、26.21%ニ當リ、之ヲ十年前ナル明治四十一年ノ同一比例 13.16%ニ比スレハ 13.05%ヲ又前年ニ比シ 1.44%ヲ增シタリ。而シテ此ノ上告審ノ結果ハ棄却 72.33%、破毀 15.55%、取下 12.12%ナリ、即前年ニ比シ棄却 1.06%、取下 0.97%低ク、破毀 2.02%高シ。

大正七年中ニ地方裁判所カ取扱ヒタル抗告總件數ハ 874件、新受件數 672件ナリ。此ノ新受件數ヲ十年前ナル明治四十一年ニ比スレハ 781件ヲ減シ、控訴院カ取扱ヒタル抗告總件數ハ 196件、新受件數 164件ニシテ明治四十一年ノ新受件數ニ比スレハ 781件ヲ減シタリ。又控訴院カ取扱ヒタル抗告件數ハ 196件、新受件數 161件ナリ。之ヲ明治四十一年ノ新受件數ニ比スレハ 462件ノ減少ニシテ、大正二年以降漸次甚シキ減少ノ傾向アリ。

又大審院カ取扱ヒタル抗告總件數ハ 260件ニシテ、明治四十一年ニ比スレハ 97件ヲ增シタレトモ、最近自大正二年至同六年ノ五年平均ニ比スルトキハ 290餘件ヲ減少セリ。斯クノ如ク控訴院及大審院トノ抗告件數ニ相違アルハ、制度ノ變更ニ由ルモノヽ如シ。

【强制執行】 大正七年中區裁判所カ取扱ヒタル强制執行ノ總件數ハ 17,302件、新受件數 15,065件ニシテ明治四十一年ノ新受

件數ニ比シ 425件ノ減少ナリ。又本年中ニ執行シタル終局件數ハ 15,530件ニシテ其ノ債權額ハ 11,788,385圓ナリ。即一件ノ平均債權額 759圓餘ニ當リ明治四十一年ノ 885圓餘ニ比スレハ 126圓ノ減少ナリ。又執達吏ノ取扱ヒタル有體動產ニ對スル 强制執行ノ終局セルモノ 115,379件アリテ、明治四十一年ニ比スルトキハ 16,838件ヲ增セリ。又此ノ債權總額ハ 23,147,719圓、其ノ一件ノ平均額 200圓餘ニシテ、明治四十一年ノ其レニ比シテ 13圓餘ノ增加ナリ。

【家資分產】 大正七年中區裁判所ニ於テ 家資分產ノ宣告ヲナシタルモノ 355件ニシテ、明治四十一年ヨリ 48件ヲ減シ、此ノ債權額ハ 162,833圓、其ノ一件平均額 458圓餘ニ當リ、明治四十一年ニ比シ 13圓餘ノ增加ナリ。又本年中復權ノ申立ヲナシ許可ヲ與ヘタルモノ 98件ニシテ、宣告件數ニ對シ 27.61%ヲ占ム。

【破產宣告】 大正七年地方裁判所ニ於ケル 破產宣告總件數 458件、本年中ニ宣告シタルモノ 107件ニシテ、明治四十一年ノ總件數ヨリ 241件ノ增加ナリ。又此ヲ種別ニスレハ個人 82.22%會社 17.78%ニ當リ、之ヲ明治四十一年ニ比スレハ、前者ハ 2.29%ヲ減シ後者ニ之ヲ增シタルヲ觀ル。而シテ終局件數中終局計算ニ據ルモノ 40.74%、協諧契約ニ因ルモノ 2.22%、其他ノ方法ニ因ルモノ 57.04%ナリ。

【非訟事件】 大正七年中區裁判所ニ於ケル 非訟事件ノ總數ハ 231,297件、新受件數 228,093件ナリ。而シテ明治四十一年ノ新受件數ニ比スレハ 22,904件ヲ增シタリ。又地方裁判所ニ於ケル非訟事件ノ總數ハ 2,146件、新受件數 2,073件ニシテ、同シク明治四十一年ノ新受件數ニ比シ 1,385件ヲ增セリ。尙本年中區裁判所ニ於ケル非訟事件ノ終局セルモノ中、隱居廢家子ノ懲戒家督相續人及親族會ニ關スル事件 24.59%、相續ノ承認及拋棄ニ關スル事件 1.75%戶籍及身分登記ニ關スル事件 22.11%其他ノ事件 51.55%ナリ。

乙 刑事裁判

【區裁判所】 大正七年中區裁判所カ取扱ヒタル 第一審刑事々件ハ、108,053件ニシテ前年ヨリ 3,088件ヲ減シ、五ケ年前ナル大正二年ニ比スレハ 25,026件ヲ增ス。此ノ件數ヲ區裁判所々屬ノ判檢事ニ比スレハ判事一人ニ付平均 242.8件、檢事一人ニ付同シク 463.7件ニ當ル。

【地方裁判所】 大正七年中、地方裁判所カ取扱ヒタル刑事々件ハ、第一審 4,668件、控訴審 10,298件、抗告審 20件ニシテ前年ニ比シ、第一審ハ 1,877件ヲ減シ、控訴審ハ 719件ヲ減シ、抗告審ハ 7件ヲ減シタリ。而シテ又五年前ナル大正二年ニ比シ第一審ハ 15,317ヲ減シ、控訴審ハ 1,924件、抗告審ハ 2件ヲ各增シタリ。是ニ依リテ之ヲ觀レハ逐年增加ノ傾向アリシ控訴審ハ本年ニ至リ減少ノ傾向ヲ示シ、大正六年ヨリ 719件ヲ減シタリ。此等各審ノ總件數ヲ地方裁判所々屬ノ判檢事員數ニ比スルニ、判事一人ニ付平均 37.7件、檢事一人ニ付同 89.1件ニシテ、前年ヨリ著シク少キハ事件ノ減少ニ加フルニ、判檢事ノ定員ヲ增シタルニ由ル。

【控訴院】 大正七年中、控訴院カ取扱ヒタル刑事事件ハ、控訴審 2,721件、抗告審 29件ニシテ、前年ヨリ控訴審ハ 483件ヲ減シ抗告審ハ 9件ヲ增シタリ。又之ヲ五年前ナル大正二年ニ比スルトキハ、控訴審ハ 3,147件ヲ抗告審ハ 20件ヲ何レモ減シタリ。此ノ各審ニ於ケル控訴院所屬判檢事一人平均ハ、判事 37.7件、檢事 98.2件ニシテ、前年ヨリ何レモ少シ。

【大審院】 大正七年中、大審院カ取扱ヒタル刑事々件ハ、上告審 4,196件、抗告審 13件、再審 38件ニシテ、前年ヨリ上告審ハ 110件、抗告審ハ 6件、再審ハ 10件ヲ何レモ增セリ。又之ヲ五年前ナル大正二年ニ比スレハ、上告審 1,030件、抗告審 3件ヲ增シ、再審ハ 10件ヲ減シタリ。此ノ各審ノ總件數ヲ大審院所屬ノ判檢事ニ比スレハ、判事一人ニ付平均 137.0件、檢事一人ニ付同 530.9件ニ當ル。

【搜査】 大正七年中ノ犯罪搜查件數ハ、起訴 106,053件、不起訴 180,530件ナリ。不起訴ノ中 16.91%ハ證憑不充分、48.26%ハ起訴猶豫ニシテ、34.83%ハ其他ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、起訴ハ 4,048件ヲ減シ、不起訴ハ 16,604件ヲ增シタリ。即チ不起訴ノ中證憑不充分ハ 3.46%、起訴猶豫ハ 0.17%ヲ各減シタリ。之ヲ五年前ナル大正二年ニ比スレハ、起訴ハ 4,823件ヲ減シ、不起訴ハ 47,446件ヲ增シタリ。又不起訴ノ中證憑不充分ハ 4.84%、起訴猶豫ハ 3.17%ヲ何レモ增シタリ。

【豫審】 大正七年中ノ豫審終結被告人ハ、免訴 607人、公判ニ付セラレタルモノ 11,923人ナリ。免訴ノ中 82.70%ハ證憑不充分ナルカ。之ヲ前年ニ比スレハ、免訴 6人ヲ減シ、公判ニ付セラレタルモノ 479人ヲ增シタリ。又五年前ナル大正二年ニ比スレハ、免訴 664人、公判ニ付セラレタルモノ 1,002人ヲ各減シタリ。

【公判】 大正七年中ノ第一審總件數ハ 112,721件、新受件數 105,523件ニシテ、前年ヨリ總件數 4,965、新受件數 4,970件ヲ各減シタリ。又五年前ナル大正二年ニ比スルトキハ總件數 11,081件、新受件數 15,458件ヲ何レモ增加セリ。而シテ、本年中ノ終局件數ハ 105,514件ニシテ、總件數ノ 93.61%、未終局件數ハ 7,207件、即 6.39%ニ當ル。尙本年中ノ被告人總數ハ男 70,669人、女 3,934人、計 74,603人ニシテ、男 94.73%、女 5.27%ニ當ル。此ノ男ノ中 87.26%ハ刑法犯ニシテ 12.74%ハ特別法犯ニ屬シ、女ノ 89.17%ハ刑法犯 10.83%ハ特別法犯ノ被告人ナリ。而シテ終局被告人中 98.63%ハ有罪ニシテ 1.37%ハ無罪免訴管轄違及其他ナリ。此ノ有罪比例ヲ前年ニ比スレハ僅カニ 0.10%高ク、又之ヲ犯罪ノ種類ニ依リ分テハ刑法犯ハ 69.54%、特別法犯 30.46%ニ當ル。

【刑事略式事件】 大正七年中ニ受理シタル 刑事略式事件被告人員ハ 100,667人ニシテ、刑法犯 55.29%、特別法犯 44.71%ニ當ル。此ノ被告人ニ對シ罰金ヲ命シタルモノ 76,350人、科料ヲ命シタルモノ 17,712人アリ。此ノ命令ニ對シ、正式裁判ノ申立ヲ爲シタル者 1,479人ニシテ、刑法犯 38.80%、特別法犯 61.20%ナリ而シテ再ヒ罰金又ハ科料ニ處セラレタル者 91.48%、無罪免訴其他 8.52%ナリ。又被告人中略式手續法第三條及第六條ニ依リ略式命令ヲ爲スヲ得サル者及之ヲ爲スヲ相當トセサル者 752人、又第六條ニ依リ異議ノ申出ヲ爲シタル者 2,224人アリ。之ニ依リテ爲シタル刑事第一審事件ハ 2,053件、其ノ被告人員ハ 3,118人アリ。之ヲ種別ニスレハ刑法犯 53.59%、特別法犯 46.41%ニ當ル。此ノ第一審ニ於テ有罪ノ決定ヲ與ヘタルモノハ終局人員ノ 91.73%ニ當レリ。

【違警罪即決事件】 大正七年中ノ違警罪即決被告人員ハ 459,568人、前年ニ比シ 12,579人ヲ減セリ。之ヲ種別ニスレハ刑法犯 0.04%、特別法犯 66.16%、警察犯 33.80%ニ當リ、此ノ即決ニ依リ拘留ヲ命シタル者 11.83%、科料ヲ命シタル者 86.89%、免除シタル者 1.28%ナリ。又此ノ即決ニ服セス正式裁判ノ申立ヲ爲シタル者 809人ニシテ其ノ結果有罪トナリシ者ハ 66.75%ナリ。

【上訴】 大正七年中ノ刑事控訴總件數ハ 13,019件、新受件數 11,795件ナリ。之ヲ前年ニ比レハ、總件數ハ 1,202件、新受件數ハ 1,184件ヲ各減シタリ。又之ヲ五年前ナル大正二年ニ比スレハ、總件數 1,242件、新受件數ハ 1,245件ノ減少ナリ。此ノ新受件數ヲ控訴申立人ニ依リテ分テハ、檢事 6.01%、被告人 93.37%、其ノ他ノ關係人 0.62%ナリ。又本年中ノ控訴終局件數ハ 11,976件ニシテ、總件數ノ 91.99%ニ當リ、判決ヲ下シタルモノ 77.12%アリテ更ニ之ヲ分テハ、原判決取消 36.50%、控訴棄却 63.50%ニ當リ、前年ノ同一比例ニ比スレハ、前者ハ 1.15%ヲ增シ、後者ハ之ヲ減シタリ。

大正七年中ノ刑事上告總件數ハ 4,196件、新受件數 3,628件ニシテ、前年ニ比シ總件數 110件ヲ增シ、新受件數ハ 60件ヲ減シタリ更ニ之ヲ大正二年ニ比スレハ、總件數 502件、新受件數ハ 335件ヲ何レモ增シタリ。新受件數ヲ上告申立人ニ依リ分テハ、檢事 6.99%、被告人 93.91%其ノ他ノ關係人 2.10%ニ當ル。又本年中ノ終局件數ハ 3,768件ニシテ、總件數ノ 89.80%ニ當リ、此ノ中判決ヲ下シタルモノ 82.70%ニ當リコレヲ百トスレハ、ソノ內譯別ハ原判決ヲ破毀シタルモノ 9.40%、棄却シタルモノ 90.60%トナル。之ヲ前年ニ比スレハ、棄却シタルモノ 1.96%ヲ減シタリ。

【刑法犯】 大正七年中ノ刑法犯第一審有罪被告人ハ 115,693人ニシテ、之カ罪名別ノ百分比例ヲ算出スレハ、賭博及富籤ノ罪 51.98%、竊盜罪 16.41%、詐欺及恐喝ノ罪 5.92%、傷害ノ罪 5.16%、橫領ノ罪 4.99%、失火ノ罪 2.94%、騷擾ノ罪 2.82%、贓物ノ罪 1.73%、過失傷害ノ罪 1.44%等ハ其ノ多キモノニ屬ス。又此ノ第一審有罪被告人員ヲ各控訴院管內別トセル百分比例ハ、東京控訴院 29.20%、大阪控訴院 22.61%、名古屋控訴院 11.68%、廣島控訴院 9.49%、長崎控訴院 11.18%、宮城控訴院 8.42%、函館 7.42%ナリ。

大正七年中ノ刑法犯確定被告人ハ總數 160,410人、男 147,823人女 12,587人、之ヲ罪名ニ依リ順位ヲ示セバ、男ニ於テハ賭博及富籤ノ罪、詐欺及恐喝ノ罪、傷害ノ罪、橫領ノ罪、騷擾ノ罪、贓物ニ關スル罪、過失傷害ノ罪、文書僞造ノ罪等ハ多キモノニ屬シ、女ニ在リテハ、賭博及富籤ノ罪、失火ノ罪、竊盜ノ罪、墮胎ノ罪、橫領ノ罪、過失傷害ノ罪、詐欺恐喝ノ罪、贓物ニ關スル罪、文書僞造ノ罪、猥褻ノ罪、放火ノ罪、傷害ノ罪、嬰兒殺ノ罪等多キモノニ屬ス。而シテ是等ノ被告人中、男ノ總數ハ第一審ニ於テ、其ノ 94.14%ハ有罪、0.95%ハ無罪及免訴ニシテ控訴審ニ於テハ有罪 3.47%、無罪及免訴 0.25%、ニシテ上告審ニ於テハ、有罪 1.18%、無罪及免訴 0.01%ナリ。又女ハ第一審ニ於テ 95.28%ハ有罪、1.23%ハ無罪及免訴ニシテ控訴審ニ於テハ有罪 2.54%無罪及免訴 0.21%、又上告審ニ在リテハ、有罪 0.73%、無罪及免訴 0.01%ナリ。

刑法犯有罪確定被告人ヲ各性人口一萬ニ比スレハ、男ハ 35.86女ハ 2.98ニシテ總數 19.51ニ當リ、之ヲ前年ト比スルニ男ハ 1.08高ク、女ハ 0.09低ク總數ハ 0.46高シ、而シテ之ヲ罪名別ニ見レハ賭博及富籤ノ罪ハ嶄然トシテ高ク、男 19.60女 1.55ニシテ常ノ如ク、竊盜罪之ニ次キ男 6.03 女、0.28詐欺及恐喝ノ罪ハ男 2.03、女 0.06傷害罪ハ男 1.95、女 0.03、橫領罪男 1.83 女 0.11ハ前年ト殆ト相似タリ。而シテ、女ニ在リテ比較的高率ナルハ、前揭ノ外、失火ノ罪 0.46、墮胎ノ罪 0.14、橫領ノ罪 0.11等ナリ。

次ニ刑法犯ノ有罪確定被告人ノ科刑狀態ヲ觀ルニ、依然罰金最多ク、其ノ總數ノ 51.47%ニ當リ、次テハ有期懲役 40.33%、科料 7.99%ニシテ、他ノ 2%餘ハ即死刑、無期懲役、有期禁錮、拘留等ニ處セラレシモノナリ。死刑ハ前年ヨリ 22人ヲ減シタル 39人無期懲役ハ 86人ニシテ 8人ヲ增セリ。此ノ有罪確定被告人ヲ人口一萬ニ比スレハ、有期懲役ハ 8.38ニシテ、前年ヨリ稍高ク、罰金ハ 10.70ニシテ 1.52高シ。而シテ獨リ科料ノミハ稍低キモ、總數

ハ漸次增シ 1.75即 2人弱ノ增加ヲ示セリ。

次ニ有罪確定被告人ノ罪名ト刑罰トヲ綜合シテ觀察センニ、賭博及富籤ニ關スル罪ハ有期懲役 11.98%、罰金 77.37%、科料 10.65%ニシテ窃盗罪ハ前年ト同シク盡ク有期懲役ナリ。詐欺及恐喝ノ罪ハ有期懲役 99.65%、罰金 0.35%ニ當リ、傷害罪ハ有期懲役 37.28%、罰金 52.46%、科料 10.24%、拘留 0.03%ニシテ、墮胎ノ罪ハ盡ク有期懲役ナリ。横領罪ハ有期懲役 46.82%、罰金 16.85%、科料 36.33%ニシテ强盗ノ罪ハ死刑 4.45%、無期懲役 4.21%有期懲役 91.34%等ナルカ、死刑及無期懲役ノ刑ニ處セラレタルハ、放火ノ罪、殺人ノ罪、强盗ノ罪ヲ犯シタルモノヽ外アルコトナシ。

刑法犯第一審被告人ニ就キ、累犯ノ加重、減輕及免除ヲ見ルニ初犯者及再犯加重ヲ爲サヽル者 89.17%ニシテ前年ニ比スレハ、實ニ 43.13%ヲ增シ、再犯加重者ハ 6.93%ニシテ 6.09%ヲ減シ、減輕者ハ 1.96%ニシテ 0.24%ヲ減シ、免除者ハ 0.01%ニシテ增減ナシ。而シテ累犯加重ニ係ル者ノ犯數ヲ見ルニ、其ノ總數ニ對シ、再犯ハ 63.94%、三犯ハ 25.85%、四犯及四犯以上ハ 10.21%ニ當リ、又減輕者ヲ分テハ法律上ノ減輕ハ 33.67%ニシテ、酌量減輕ハ 66.33%ナリ。

刑法犯有罪被告人ニ對シ、刑ノ執行猶豫ヲ言渡シタルモノ 5,207人ニシテ、之ヲ有罪被告人ノ總數ニ比スレハ 4.56%ニ當リ、前年ニ比シ 1.01%ヲ減セリ。此ノ執行猶豫ヲ期間ニ依リテ分テハ、一年以上二年迄 0.97%、二年以上三年迄 16.72%、三年以上四年迄 64.21%、四年以上五年迄 18.10%ニ當ル。而シテ本年中執行猶豫ヲ取消シタルモノ 306人アリテ、前年ニ比シ 10人ヲ減シタリ。

【特別法犯】 大正七年中ノ特別法犯有罪確定被告人ハ、總數 50,678人アリ。之ヲ前年ニ比スレハ、實ニ 30,515人ヲ減セリ。之ハ大正六年ニ總選擧ノ行ハレタルニ依リ、選擧ニ關スル犯罪ノ多キニ因ルヘシ。之ヲ罪名別ニ分テハ商事産業ニ關シ 12,861人、警察、著作、出版、新聞紙ニ關シ 10,871人、衞生ニ關シ 8,267人、軍事ニ關シ 7,811人、議員選擧其他ニ關シ 6,313人、租稅、專賣ニ關シ 2,932人、通信運輸ニ關スルモノハ 1,623人ナリ。此ノ特別法犯有罪確定被告人ヲ男女ニ分テハ男 91.06%、女 8.94%ニ當リ、此ノ男女ノ各總數ニ對スル罪名別ノ分節比例ヲ算出スルニ男ニ於テハ商事、産業 26.58%、警察、著作、出版、新聞紙 21.36%、軍事 16.80%、衞生 14.42%、議員選擧其他 13.18%、租稅專賣 4.57%、通信、運輸、電氣 3.08%ニシテ、女ニ在リテハ衞生ニ關シ 35.56%、警察、著作、出版、新聞紙 22.41%、租稅專賣 18.11%、商事産業 13.15%、議員選擧其他 5.05%、通信、運輸、電氣 4.46%、軍事 1.26%ノ順位ナリ。

又此ノ特別法犯有罪確定被告人ヲ人口一萬ニ對スル比例ヲ求ムルニ、男ハ 16.49、女ハ 1.70總數ハ 9.10ニ當リ、此ノ總數ニ於ケル比例ヲ罪名別トナセハ商事、産業 2.31、警察、著作、新聞紙 1.95、衞生 1.49、軍事 1.40、議員選擧其他 1.13、租稅、專賣 0.53通信、運輸、電氣 0.29ニ當レリ。

特別法犯有罪確定被告人ヲ刑名別ニ分テハ、罰金 75.40%、前年ヨリ 7.25%低ク、科料 21.26%、同シク 6.88%、有期懲役 2.19%、同シク 0.83%何レモ高ク、有期禁錮 0.38%、同シク 0.82%低ク、拘留 0.77%、同シク 0.36%高ク、別ニ死刑 1人アリ。

特別法犯有罪確定被告人ニ刑ノ執行猶豫ヲ言渡シタル者 304人アリ。之ヲ有罪被告人ノ總數ニ比スルニ 0.60%ニ當ル、之ヲ期間ニ依リ分テハ、一年以上二年迄 2.96%、二年以上三年迄 32.24%、三年以上四年迄 57.56%、四年以上五年迄 7.24%ナリ。本年中刑ノ執行猶豫ヲ取消サレタルモノ 4人アリ。

【犯罪地】 大正七年中ノ刑法犯有罪確定被告人ヲ其ノ犯罪地ニ依リテ分チ、其ノ地方ノ人口一萬ニ對スル比例ヲ算出スレハ北海道 37.27、近畿 28.26、東海 21.93、關東 21.88、西國 20.85東山 17.92、北陸 17.78、中國 16.66、東北 16.37、九州 14.85、沖繩 14.06、朝鮮、臺灣、樺太、關東州及外國 6.17 ナリ。又之ヲ各性人口ニ比例シテ見ルニ、男ニ於テハ北海道 65.72、近畿 51.07、東海 41.79、關東 40.80、四國 37.87、東山 33.85、北陸 32.92、中國 31.14、東北 28.96、九州 28.01、沖繩 27.17、朝鮮、臺灣、樺太、關東州及外國 9.71ニ當リ、女ノ順位必スシモ男ト同シカラサルニモ拘ラス、總數ト全然順位ヲ同シクセルハ、女ノ影響ヲ感セサルモノニシテ、女ノ犯罪者ノ絕對ニ寡少ナルヲ語ルモノナルカ、之カ女ノ順位ヲ示セハ北海道 10.35、近畿 4.22ナルハ男ト同シク高ク、次テ四國 3.79、東北 3.72、北陸 2.96、中國 2.06關東 2.37、東山 2.30、東海 2.21、九州 1.85、沖繩 1.73、朝鮮、臺灣、樺太、關東州及外國 1.31ニ當リ、總數ト其ノ順位ヲ大ニ異ニスルモノアリ、以テ地方ト男女ノ犯罪關係トヲ窺フニ足ラン。

次ニ重ナル罪名ニ就テ地方別ノ關係ヲ知ランカ爲、總數ニ對スル罪名別ノ分節比例ヲ算出シテ比較スルニ、賭博及富籤ノ罪ハ、近畿、東海、四國、北陸、關東、北海道、東山、朝鮮臺灣樺太及關東州外國、中國、東北、九州、沖繩ノ順位ニシテ、窃盗ノ罪ハ沖繩、九州、關東、北海道、近畿、東山、中國、東北、東海、北陸、朝鮮臺灣樺太關東州及外國、四國ノ順位ニアリ。又詐欺及恐喝ノ罪ハ、朝鮮臺灣樺太關東州外國、沖繩、東山、中國、九州、東北、北海道、四國、北陸、關東、東海、近畿ノ順位ニシテ、傷害罪ハ中國、四國、東北、東山、沖繩、北陸、朝鮮臺灣樺太關東州及外國、北海道、東海、九州、關東、近畿ノ順位ニアリ。尙失火

ノ罪ハ朝鮮臺灣樺太關東州及外國、東北、北陸、九州、北海道、東山、四國、中國、沖繩、關東、東海、近畿ノ順位ニアリ。賍罪ノ罪ハ東海、九州、近畿、中國、沖繩、東山、四國、北陸、關東、東北ノ順位ニシテ、贓物ノ罪ハ沖繩、東北、北陸、關東、九州、東山、朝鮮臺灣樺太關東州及外國、北海道、中國、近畿、東海、四國ノ順位ナリ。尙殺人ノ罪ハ中國、朝鮮臺灣樺太關東州及外國、四國等ノ諸地方比較的多ク、又强盗ノ罪ハ朝鮮臺灣樺太關東州及外國特ニ高ク、關東、近畿次テ高シ。是等ノ順位ハ聽テ其ノ地方ノ氣候、民情、文化、信仰等ノ狀態ヲ窺察スルニ足ルモノアルヘシ。

【犯罪原因】 犯罪原因ノ總數ニ對スル重ナルモノヽ分節比例ヲ擧クレハ、男ニ在リテハ、利慾 40.11%、習癖 13.29%、射倖 13.17%、出來心 12.22%、憤怒 5.51%、遊蕩 4.61%、貧困 2.92%等ナリ。而シテ利慾ハ窃盗、賭博及富籤、詐欺及恐喝、横領、贓物等ノ原因トシテ働キ强ク、射倖ハ殆ント總テ賭博及富籤ニ働キ、習癖ハ賭博及富籤、窃盗、詐欺及恐喝等ヲ犯シ、出來心ハ窃盗、賍罪、賭博及富籤、詐欺及恐喝等ノ原因ヲ爲シ、憤怒ハ殆ント總テ傷害ノ原因トナリ、遊蕩ハ窃盗、詐欺及恐喝等ニ、又貧困ハ窃盗、賍罪、詐欺及恐喝等ニ多ク働ク。女ニ於テハ、利慾 36.70%、出來心 18.52%、射倖 16.78%、習癖 11.21%、貧困 5.96%等ニシテ、男ト異ナルハ、憤怒、遊蕩ノ原因ニ依ルモノ少キニアリ。而シテ利慾ハ窃盗最モ多ク、其他賭博及富籤、贓物、詐欺及恐喝等ニモ働キ强ク、出來心ハ墮胎最モ多ク、次テ窃盗、賭博及富籤等多ク、射倖ハ殆ト總テ賭博及富籤ニシテ、習癖ハ窃盗、賭博及富籤ニ、又貧困ハ窃盗、墮胎、嬰兒殺ノ原因ヲ作ス者ノ如シ。之ヲ要スルニ此等ノ原因、結果ハ、男女共ニ、常在的ノモノト見ルヲ得ヘシ。尙之等ヲ身上ニ基クモノニ依リ分チ百分比例ヲ算出スレハ、男ニ在リテハ、偶發 73.05%、習慣 26.68%、不詳 0.25%、遺傳 0.02%、ニシテ、女ハ偶發 80.01%、習慣 19.91%、不詳 0.08%、ナリ。何レモ偶發ニ因ルモノ大部分ヲ占ム。

【年齡】 男ノ總數ニ對スル年齡別百分比例（年齡不詳ヲ除ク）ヲ算出スレハ、二十歲未滿者ハ 6.35%、二十歲以上三十歲者ハ 30.80%、三十歲以上四十歲者ハ 31.62%、四十歲以上五十歲者ハ 20.08%、五十歲以上六十歲者ハ 7.87%、六十歲以上者ハ 3.28%ニ當リ、又女ニ在リテハ、二十歲未滿者ハ 6.00%、二十歲以上三十歲者ハ 21.31%、三十歲以上四十歲者ハ 28.63%、四十歲以上五十歲者ハ 23.44%、五十歲以上六十歲ハ 13.24%、六十歲以上者ハ 7.38%ニ當レリ。二十歲未滿者ハ男女ノ比例著シキ懸隔ナケレトモ、二十歲以上三十歲者ニ於テハ、男高キコト 9.49%ニシテ、三十歲以上四十歲者ハ何レモ其ノ割合最モ高クシテ、男ハ女ニ比シ 2.99%高シ。四十歲以上五十歲者ニ於テハ、男ハ大ニ低下シ、其ノ最高率ヨリ少キコト 11.54%ニシテ、女モ亦 5.19%少シ。五十歲以上六十歲者ハ何レモ益減シ、男ハ二十歲未滿者ヨリ纔カニ 1.52%高ク、女ハ男ノ約二倍ヲ占メ、其ノ二十歲未滿者ニ倍ス。六十歲以上者ノ男ハ其ノ最低位ニ達シ、女ハ男ノ約二倍餘ニ當リ、其ノ二十歲未滿者ヨリ尙 1.38%高シ。依是觀之、男ノ犯罪年齡ハ比較的短ク、反之、女ハ比較的長シト謂フヘシ。

【配偶】 配偶關係ニ在リテ有配偶及無配偶ノ百分比例ヲ算出スレハ、男ハ有配偶 49.09%、無配偶 50.91%ニシテ、後者纔ニ多ク、女ノ有配偶ハ、男ノ其レニ反シ 53.41%ヲ占メ、無配偶 46.59%ナリ。次ニ配偶ノ有無ト重ナル犯罪トノ關係ヲ觀ルニ、男ニ在リテ有配偶ノ高キモノヨリ擧クレハ、瀆職ノ罪ハ有配 90.98%、無配偶 9.02%僞證及誣告ノ罪ハ有配偶 83.51%、無配偶 16.49%、賍物ニ關スル罪ハ有配偶 79.61%、無配偶 20.39%、賭博及富籤ノ罪ハ有配偶 79.17%、無配偶 20.83%ナリ。又無配偶ノ割合高キモノハ、强盗ノ罪ハ無配偶 70.41%、有配偶 29.59%、窃盗ノ罪ハ無配偶 67.12%、有配偶 32.88%、猥褻姦淫及重婚ノ罪ハ無配偶 61.93%、有配偶 38.07%、失火及放火ノ罪ハ無配偶 60.47%、有配偶 39.53%、住居ヲ侵ス罪ハ無配偶 57.79%、有配偶 42.21%、殺人ノ罪ハ無配偶 55.45%、有配偶 44.55%、横領ノ罪ハ無配偶 53.55%、有配偶 46.45%、等ナリ。尙又女ニ在リテハ、殆ント此ノ區別ヲ認ムルノ要ナキカ如ケレトモ、猥褻姦淫及重婚ノ罪ハ殆ント有配偶ニシテ、無配偶ハ僅ニ 2.78%ニ過キス。通貨有價證券僞造ノ罪ハ有配偶 69.57%、無配偶 30.43%、賍物ノ罪ハ有配偶 69.49%、無配偶 30.51%、賭博及富籤ノ罪ハ有配偶 66.81%、無配偶 33.19%、横領ノ罪ハ有配偶 64.71%、無配偶 35.29%ニシテ、又無配偶ノ多キモノヲ擧クレハ、殺人及嬰兒殺ノ罪ハ無配偶 54.49%、有配偶 45.51%、放火及失火ノ罪ハ無配偶 53.85%、有配偶 46.15%、詐欺及恐喝ノ罪ハ無配偶 53.04%、有配偶 46.96%、窃盗ノ罪ハ無配偶 51.93%、有配偶 48.07%等ナリ。

【教育】 犯罪者ノ教育程度ヲ別チテ其ノ總數ニ對スル百分比例ヲ算出スレハ、男ニ於テハ被高等教育者 0.11%、被中等教育者 0.80%、被普通教育者 22.31%、讀書シ得ル者 26.28%、全ク教育無キ者 6.12%、略式手續ニ依リ調査セサル者及不詳ノ者 44.38%ニ當リ、女ニ於テハ被高等教育者 0.01%、被中等教育者 0.11%、被普通教育者 5.72%、讀書シ得ル者、14.03%、全ク教育ナキ者 19.08%、略式手續ニ依リ調査セサル者及不詳ノ者 61.05%ニ當レリ。次ニ主ナル犯罪ニ就テ之ノ關係ヲ觀レハ、男ニ在リテ、賭博及富籤ノ罪ハ、被高等教育者 0.01%、被中等教育者 0.10%、被普通教育者 11.47%、讀書シ得ル者 17.04%、全ク教育ナキ者 4.3

8%調査ナキ者及不詳ノ者 67.00%、窃盗ノ罪ハ被高等教育者 0.05%、被中等教育者 0.95%、被普通教育者 41.20%、讀書シ得ル者 46.25%、調査ナキ者及不詳ノ者 11.55%、詐欺及恐喝ノ罪ハ被高等教育者 0.39%、被中等教育者 3.05%、被普通教育者 43.90%、讀書シ得ル者 44.15%、調査ナキ者及不詳ノ者 8.51%ニシテ即チ教育關係ノ判明セル者ニ就テ之ヲ觀レハ、其ノ程度低キ者ニ犯罪概シテ多シ。又是等ヲ女ニ就テ觀レハ、賭博及富籤ノ罪ハ被高等教育者ハ全ク無ク、被普通教育者 2.23%、讀書シ得ル者 8.64%、無教育者 12.79%、調査ナキ者及不詳ノ者 76.34%、窃盗ノ罪ハ被高等教育者、調査ナキ者及不詳ノ者、各 0.35%、被中等教育者 17.63%、被普通教育者 35.72%、無教育者 45.95%、嬰兒殺ハ被中等教育者 0.76%、被普通教育者 11.36%、讀書シ得ル者 39.39%、無教育者 48.49%、墮胎ノ罪ハ被高等教育者全ク無ク、被中等教育者 0.24%、被普通教育者 18.63%、讀書シ得ル者 33.02%、無教育者 48.11%、詐欺及恐喝ノ罪ハ、被高等教育者 0.52%、被普通教育者 20.21%、讀書シ得ル者 39.89%、無教育者 39.38%、職物ノ罪ハ被高等教育者及不詳ノ者ニハ無ク、被中等教育者 0.74%、被普通教育者 15.44%、讀書シ得ル者 36.03%、無教育者 47.79%等ニシテ、男ト同シク無教育者ニ最モ犯罪者多ク、次テ讀書シ得ル者ニ多シ。

【信教】 信教ノ明ナル者ノ百分比例ヲ算出スルニ、男ニ於テハ、神道 2.16%、佛教 83.89%、耶蘇教 0.40%、雜教 1.86%、無信教 11.69%ニシテ、女ニ於テハ、神道 1.99%、佛教 85.10%、耶蘇教 0.24%、雜教 0.85%、無信教 11.82%ナリ。次ニ主ナル罪名ニ就キテ之ノ關係ヲ觀レハ、男ニ於テハ、窃盗ノ罪ハ、佛教最モ多ク 79.56%、無信教 12.07%、神道 1.81%、雜教 1.54%ニシテ、最モ少キハ耶蘇教 0.31%ナルモ、其他不詳ニ屬スルモノ 4.68%アリ。賭博及富籤ノ罪ハ佛教最モ多ク 81.37%、無信教 10.18%、雜教 2.15%、神道 1.69%、耶蘇教最モ少ク 0.13%ナルモ、不詳 1.48%、アリ。詐欺及恐喝ノ罪ハ、佛教 80.47%、無信教 11.56%、神道 3.12%、雜教 2.23%、耶蘇教 0.60%、ノ順位ニシテ不詳ハ 2.02%、ナリ。横領ノ罪ハ佛教 78.55%、無信教 13.62%、神道 2.72%、雜教 1.82%、耶蘇教 0.84%、不詳 2.45%ナリ。傷害ノ罪ハ、佛教 82.89%、無信教 8.10%、雜教 2.27%、神道 1.13%、耶蘇教 0.34%、其ノ他不詳 5.27%ナリ。職物ニ關スル罪ハ佛教徒ニ於テ最モ多ク 81.78%、無信教 11.83%、雜教 2.49%、神道 1.93%、耶蘇教 0.24%及不詳 1.68%ナリ。又女ニ於テハ窃盗ノ罪ハ佛教 93.70%、無信教 4.20%、神道 0.84%、雜教 0.42%及不詳 0.84%、ナリ。詐欺及恐喝ノ罪ハ、佛教 78.26%、無信教 15.65%、神道 1.74%、雜教 0.87%、不詳 3.48%ナリ。殺人ノ罪(嬰兒殺ヲ含ム)ハ佛教 76.28%、無信教 13.46%、神道 3.84%、雜教 0.64%、不詳 5.78%ニシテ、何レモ佛教大部分ヲ占メ、次テハ無信教者ナリ。

【資産】 資産ノ有無ニ依リ分テハ、男ハ有産者 7.45%、無産者 92.55%ニシテ、女ハ有産者 4.93%、無産者 95.07%ニ當リ、之ヲ主ナル罪名ニ就キ分テハ、男ニ於テ窃盗ノ罪ハ有産者 4.24%、無産者 95.76%、賭博及富籤ノ罪ハ有産者 9.60%、無産者 90.40%、詐欺及恐喝ノ罪ハ有産者 10.09%、無産者 89.91%、横領ノ罪ハ有産者 7.59%、無産者 92.41%、傷害ノ罪ハ有産者 8.74%、無産者 91.26%、職物ノ罪ハ有産者 10.03%、無産者 89.97%、文書僞造ノ罪ハ有産者 17.78%、無産者 82.22%、殺人ノ罪ハ有産者 7.29%、無産者92.71%ニシテ、女ニ於テハ窃盗ノ罪ハ有産者 2.01%、無産 97.99%、賭博及富籤ノ罪ハ有産者 3.78%、無産者 96.22%、墮胎ノ罪ハ有産者 10.78%、無産者 89.22%、殺人ノ罪(嬰兒殺ヲ含ム)ハ有産者 7.10%、無産 92.90%、詐欺及恐喝ノ罪ハ有産者 3.48%、無産者 96.52%、職物ノ罪ハ有産者 5.08%、無産者 94.92%ナリ。

【月別】 全年ノ一日平均ヲ千トシ、各季一日平均ヲ算出センカ爲月別ヲ斟約スレハ、春季(三月乃至五月)ハ 976.8ニ當リテ、最モ平均ニ近ク、夏季(六月乃至八月)ハ 853.3、秋季(九月乃至十一月)ハ 851.2ニ當リテ、何レモ平均ヨリ低ク、冬季(十二月乃至二月)ハ1,325.0ニシテ獨リ平均ヨリ高シ。是レ一月ノ窃盗最モ多キ月ト、一月、二月ナル賭博最多キ月ヲ包含スルニ由ルモノナリ。

【職業】 主ナル職業者ノ總數ニ對スル主ナル罪名ノ百分比例ヲ算出スレハ賭博及富籤ノ罪ハ、商業者最多ク 62.14%、農業者之ニ次キ 58.90%、漁業者 55.40%、土木建築業者 52.01%、鑛業者 44.44%、自由業者 22.79%ナリ。窃盗罪ハ土木建築業者最多ク 17.44%、自由業者 14.43%、鑛業者 11.89%、農業者 8.63%、漁業者 8.57%、商業者 6.92%ナリ。詐欺及恐喝ノ罪ハ、自由業者最多ニシテ 12.37%、商業者之ニ次キ 7.80%、土木建築業者 5.73%、漁業者 5.00%、農業者 4.15%、鑛業者 3.05%ナリ。傷害罪ハ鑛業者最多クシテ 14.55%、土木建築業者 9.89%、漁業者 6.12%、農業者 4.94%、自由業者 4.63%、商業者 3.66%、ナリ。横領ノ罪ハ自由業者最多ク 15.55%、次テ漁業者ハ 9.55%、農業者 6.46%、鑛業者 4.02%、商業者 3.72%、土木建築業者 2.55%ナリ。依是觀之、賭博及富籤ノ罪ハ商業者ニ多ク、詐欺及恐喝ノ罪ハ自由業者ニ多ク、傷富ノ罪ハ鑛業者、土木建築業者ニ多ク、横領罪ハ自由業者ニ最多シ。最等ハ以テ職業者ノ地位、智識程度ヲ推スニ足ルヘシ。

【受刑度數】 刑法犯有罪確定被告人ニ就テ男女各性ノ總數ニ對スル受刑度數ノ分節比例ヲ算出スルニ、一度ハ、男 69.91%、女 85.60%、二度ハ 男 14.15%、女ハ 80.2%、三度以上五度ハ、男 12.24%、女 5.14%、六度以上十度ハ 男 2.89%、女 0.87%、十一度以上ハ、男 0.81%、女 0.29%ニシテ、男女共ニ、就中女ニ一度ノ者多シ。而シテ之ヲ前年ニ比スルニ、男ハ一度ノミ 1.93%多ク、女ハ、一度 2.03%、十一度以上 0.01%多シ。尙ニ三ノ罪名ニ就テ一度ノ者ノ比例ヲ觀ルニ、賭博及富籤ノ罪ハ、男 71.58%、女 82.84%ニシテ、男ハ總數ヨリ高ク女ハ低シ。窃盗罪ハ、男 53.38%、女 65.43%ニシテ、共ニ總數ヨリ遙ニ低ク、即チ窃盗ハ習癖ニ依ルモノ多キヲ知ルヘク、詐欺及恐喝ノ罪ハ、男 58.41%、女 73.06%ニシテ、是亦共ニ總數ヨリ低ク、其ノ他男ノ傷害罪カ 76.45%ニシテ、總數ヨリ高ク、女ノ猥褻姦淫及重婚ノ罪カ 97.47%ニシテ、總數ヨリ遙ニ高キハ、是等ノ犯罪カ其ノ偶發的ナルコトヲ示シタルモノト謂フヘシ。

丙 登 記

大正七年中ノ登記總件數ハ 4,888,307件ニシテ、之ヲ前年ニ比スレハ 164,348件ヲ減シタリ。此ノ中ノ大部分ナル 97.80%ハ不動産及船舶ノ登記ニシテ、他ノ 2.20%ハ永代借地權、華族世襲財産ノ創設、法人及其ノ他ノ登記ナリ。不動産ノ登記中 3.73%ハ登錄稅ヲ課セサルモノニシテ 96.27%ハ一般ノ不産物登記件數ナリ。此ヲ分類スレハ、土地 91.72%、建物 8.05%、船舶 0.23%、ニ當ル。又本年中ノ登錄稅總額ハ 39,632,145圓ニシテ、前年ヨリ多キコト、實ニ 12,133,215圓トレトモ、件數ハ前記ノ如ク減シタルカ之レ土地ノ登記件數ノ減少シタルニ由ルモノナリ。

土地ノ登記ヲ其ノ事由ニ依リ分テハ、家督相續ニ因ル所有權ノ取得 4.26%、賣買ニ因ル所有權ノ取得 33.57%ニシテ、此レ以外ノ事由ニ屬スルモノ 62.17%ナルカ、就中從來保有セル所有權ノ保存及登記ノ更正變更等 46.80%、ノ大部分ヲ占ム。又建物ノ登記ヲ其ノ事由ニ依リテ分テハ、家督相續ニ因ル 所有權ノ取得ハ僅カニ、2.50%、賣買ニ因ル所有權ノ取得 16.21%、他ノ事由ニ屬スルモノ 81.29%ニシテ、是亦、從來保有セル所有權ノ保存及登記ノ更正變更等 64.56%ノ大部分ヲ占ム。

本年中ニ於ルケ商事會社ノ設立登記 8,966件アリ。中 8,601件ハ本店設立ニシテ、前年ニ比シ、實ニ 3,193件ヲ增シタリ。又産業組合ノ設立登記 876件アリテ、前年ニ比シ 214件、漁業組合ノ設立登記 41件ニシテ 10件ヲ何レモ增シタリ。而シテ商事會社ニシテ解散セルモノ 3,123件ニシテ、前年ヨリ 622件ヲ、産業組合ハ 405件ニシテ、68件ヲ何レモ增シ、漁業組合ハ 6件ニシテ、4件ヲ減シタリ。

XXVII. 監 獄

【監獄及職員】 大正七年末現在ノ監獄ハ 52箇所、外ニ分監 52箇所、出張所 51箇所アリ。監獄ハ前年ト增減ナク、分監ハ 1箇所ヲ減シ、出張所ハ 3ケ所ヲ增シタリ。大正七年現在ノ監獄職員ハ典獄 52人、典獄補 24人、其ノ他ノ職員 9,195人ニシテ、前年ニ比シ監獄醫、教誨師、女監取締ハ各若干人ヲ增シ、教師、雇傭ハ各若干人ヲ減シ、看守ハ 74人ヲ減シ他ハ增減ナシ。

【在監人員】 大正七年末在監人員ハ合計 59,356人、之ヲ前年ニ比スレハ 3,148人ヲ增シ、更ニ大正六年ヲ終リトスル五ケ年平均一年 56,197人ニ比スレハ 3,159人ヲ增シタリ。此ノ在監人ヲ男女ニ分テハ男 96.34%、女 3.66%ニシテ之ヲ大正六年ヲ終リトスル五年平均ノ男 95.75%、女 4.25%ニ比スレハ、男ハ 0.59%ヲ增シ、女ハ 0.59%ヲ減シタリ。又大正七年末ノ現員ヲ種類別ト爲シ百分比例ヲ算出スレハ受刑者 89.38%、勞役場留置者 0.47%、刑事被告人 10.10%、乳兒 0.05%ナリ。此ノ各種別ヲ男女ニ別チ各百分比ト爲セハ受刑者ハ男 96.30%、女 3.70%、勞役場留置者ハ男 94.64%、女 5.36%、刑事被告人ハ男 97.00%、女 3.00%、乳兒ハ男 48.39%、女 51.61%ニ當レリ。

大正七年ノ各月末ニ於ケル在監人員ヲ見ルニ、九月最モ高ク、十月、八月、十一月、十二月、相次キテ皆一年ノ各月平均(各月末ノ現員ヲ合算シ十二分シタルモノ以下同シ)ヨリ高ク、六月、五月、七月等順次一年平均ヨリ低ク、一月最低シ。斯ノ如キハ裁判ノ進行ト進隨スヘキモノニシテ、是ノミヲ以テハ何等ノ社會的特徵ヲ見出シ得ルモノニアラサレトモ、監獄事務ノ上ニハ至大ノ關係アル數字ナリ。

【入監出監】 大正七年中ノ入監出監數ヲ見ルニ、總數ハ前年越ノ者 56,208人、之ニ本年中入監シタル者 107,251人ヲ加ヘ、出監、104,123人ヲ差引キ、年末現在員 59,339人ト爲ル。之ヲ男女別ニ見レハ前年越ノ者男 96.00%、女 4.00%、本年中入監男 94.55%、女 5.45%本年中出監男 94.28%、女 5.72%ニ當ル、又各種類ニ就テ本年中ノ出入ヲ見ルニ受刑者ハ 46,572人、入監シテ 45,173人出監シ、勞役場留置者ハ 5,711人入監シテ 5,990人出監シ、刑事被告人ハ 54,817人入監シテ 52,807人出監シ、乳兒ハ 154人、携帶入監 25人監内ニテ出生シ、153人ハ出監セリ。以上ノ出入人員ヲ各合計シ、之カ種類ニ分チ、總數ニ對スル分節比例ヲ算出スレハ、

出監者中受刑者 43.38%、勞役場留置者 5.75%、刑事被告人 50.7[illegible]%、乳兒 0.15%ニシテ、入監者中受刑者 43.41%、勞役場留置者 5.32%、刑事被告人 51.10%、乳兒ハ監内出生ヲ加ヘテ 0.17%ナリ。以上ノ中受刑者ノ入監者ハ男 93.35%、女 6.65%ナリ。此ノ男女ヲ入監ノ事由ニ依リテ分テハ、男ハ 99.89%迄ハ新受刑者、女ハ 98.74%迄ハ新受刑者ナリ。又男ノ出監者ハ滿期者 88.49%、其他ノ事由ニ依ル者 8.09%、死亡者 3.42%ニシテ女ハ滿期者 90.39%、其他ノ事由ニ依ル者 8.45%、死亡者 1.16%即チ死亡者ハ前年ニ比シ 男 1.13%、女 0.72%ヲ增シタリ。

【在監受刑者】 大正七年末現在々監受刑者ヲ 罪名別ニ見レハ、男ノ 98.95%ハ刑法犯ノ 0.09%ハ陸海軍刑法犯、其ノ他ノ 0.96%ノミ特別法犯ニ屬ス。女ノ 98.93%ハ刑法犯 ニ シテ 1.07%ハ特別法犯ニ屬ス。又此ノ刑法犯在監者ノミヲ觀レハ 男ノ最多キハ竊盜 54.25%、詐欺及恐喝 11.82%之ニ次キ、賭博及富籤 5.19%横領 5.04%强盜 4.62%、殺人 4.56%等、又女ハ同シク竊盜最多ク 46.78%ヲ占メ、次テ放火 13.28%、殺人 10.19%、嬰兒殺 7.46%、詐欺恐喝 5.46%、賭博及富籤 3.55%、墮胎 3.09%等多キモノニ屬ス。又在監受刑者ヲ刑名別ニ觀ルニ、男ハ無期懲役 1.10%、有期懲役 98.49%、有期禁錮 0.17%、拘留 0.24%ニ當リ、女ハ無期懲役 1.37%、有期懲役 97.71%、拘留 0.92%ニ當リ、男ニ比シテ無期懲役ノ割合多キハ殺人、放火ノ如キ重罪犯ノ比例高キニ因ルヘク、又拘留ノ高キハ違警罪ノ割合多キニ因ルモノナルヘシ。更ニ在監受刑者ヲ刑期別ニ觀レハ男ハ無期 1.10%、有期 98.90%、女ハ無期 1.39%、有期 98.61%ニシテ、男ノ有期中最多キハ一年以上三年未滿ニシテ 32.82%ヲ占メ、次テ高キハ六ケ月以上一年未滿 18.36%、五年以上十年未滿 17.98%ナリ。女ハ男ト同シク一年以上三年未滿、最多クシテ 38.18%ヲ占メ、次テハ六ケ月以上一年未滿 14.65%、三年以上五年未滿 14.64%ナルカ一年未滿ノ者ハ漸次比例低下ノ兆アリ。

【新受刑者】 大正七年中ノ新受刑者ニ對スル 罪名別ノ百分比例ヲ算出シテ觀察セントス。是レ在監受刑者ハ刑期長キ者次第ニ累加スルヲ以ツテ、輕近ノ犯狀ヲ知悉スルニ適セサルヲ以テナリ、即チ男ニ在リテハ刑法犯 88.06%、陸海軍刑法 0.23%、森林法違犯 0.80%、徵兵令違犯 0.10%、警察犯處罰令違反 7.39%、其ノ他ノ特別法犯 3.42%ナルニ、女ハ刑法犯 56.67%、森林法違反 0.23%、警察犯處罰令違反 37.44%、其ノ他ノ特別法犯 5.69%ニシテ、警察犯處罰令違反ノ男ニ比シテ甚タ多キハ、其ノ社會的地位ト性情トニ據ルヲ想像シ得ルカ如シ。然レトモ、之ヲ前年ニ比スレハ警察犯處罰令違反ハ 8.39%ノ減少ニシテ刑法犯ハ 8.67%ヲ增シタリ。更ニ此ノ刑法犯ノミヲ罪名別ニ觀察スレハ、男ニ於テハ平年ト大差ナク竊盜ノ 43.94%ヲ最多トシ、賭博及富籤ノ 17.36%之ニ次キ、其ノ他詐欺及恐喝 12.57%、横領 6.62%、傷害 4.61%等ハ其ノ多キ部ニ屬ス、女ニ於テモ亦竊盜 40.33%ヲ占メテ最多ク、賭博富籤 13.78%之ニ次キ、其ノ他墮胎 11.83%、殺人(嬰兒殺ヲ含ム)9.06%、詐欺及恐喝 6.64%、放火 5.25%等多キ部ニ屬ス。又新受刑者ヲ刑名別トシ百分比例ヲ算出スレハ男ハ 無期懲役 0.19%、有期懲役 89.36%、有期禁錮 1.67%、拘留 8.67%、死刑 0.11%ニシテ、前年ニ比シ拘留刑ノミ多ク其他ハ盡ク減シタリ。又女ハ無期懲役 0.16%、有期懲役 56.77%、拘留 43.04%、死刑 0.03%ニシテ前年ニ比シ有期懲役ハ增シ、拘留ハ減シテ其ノ地位ヲ顚倒シタルニ過キスシテ、他ニハ殆ト異動ナキヲ知ル。

次ニ新受刑者ノ懲役ヲ有期無期ニ分テハ、男ニ於テハ無期 0.21%、有期 99.79%、女ニ於テハ無期 0.29%、有期 99.71%ニシテ、之ヲ在監受刑者ニ比スレハ、何レモ無期ノ比例遙ニ低シ。又之ヲ有期ニ就テ見ルニ、六ケ月未滿ハ男 37.68%、女47.56%、六ケ月以上一年未滿ハ男 28.93%、女 21.56%、一年以上三年未滿ハ男 22.82%、女 23.26%、三年以上五年未滿ハ男 5.07%、女 3.96%、五年以上十年未滿ハ男 3.77%、女 2.81%、十年以上十五年未滿ハ男 0.79%、女 0.29%、十五年以上ハ男 0.73%、女 0.23%ナリ。是ニ依リテ之ヲ觀レハ、其ノ刑期ノ短キ者程多キハ當然ナルカ蓋フニ此レ在監受刑者ニ見ル能ハサル所ナリ。

次ニ新受刑者(死刑、拘留及換刑輕禁錮ニ當ルモノヲ包含セス)ニ就テ、犯罪上ノ諸關係ヲ見ルニ、其ノ年齡別ハ二十歲未滿ハ男 10.34%、女 12.87%、二十歲以上三十歲未滿ハ男 35.64%、女 23.49%、三十歲以上四十歲未滿ハ男 26.74%、女 25.10%、四十歲以上五十歲未滿ハ男 17.64% 女 20.45%、五十歲以上六十歲未滿ハ男 7.07%、女 11.89%、六十歲以上ハ男 2.57%、女 6.20%ナリ即チ男ノ最高ハ二十歲以上三十歲未滿ニ在リテ 其ノ前後ニ割合ヲ低メテ稍急峻ノ山ヲ構成シ、女ハ三十歲以上四十歲未滿ヲ最高トスレトモ、其ノ窮隆甚タ緩ナリ。蓋スルニ女ノ犯罪年齡ハ比較的長キモノナルコトヲ示ス。此ノ比例數ヲ十年前ナル明治四十一年ノ同一比例ニ比スルニ、二十歲未滿及三十歲未滿ハ 男女共ニ減少シタレトモ、殊ニ女ニ甚シク、四十歲未滿ニ在リテハ、男ノミ稍減少シ、女ハ 3.31%ノ增加ニシテ、六十歲以上ハ男ノミ稍減少シ女ハ 2.01%ヲ增加シ其他ノ各年齡ハ何レモ若干ノ增加ナリ。尙之ヲ前年ニ比シテ其ノ增減ノ跡比較的著シキモノヲ擧クレハ二十歲未滿ノ女ハ 1.37%ヲ減シ、三十歲未滿ノ男 2.07%增、女ハ 1.33%減シ、四十歲未滿ハ男 1.16%減、女ハ 2.48%增、六十歲未滿ノ女 1.37%增等ニシテ、女ハ、概シテ高年者ニ增加ヲ來セリ。又大正七年ノ事實ヲ以テ之カ罪名ト年齡トノ關係ヲ窺フニ、各性、各年齡ヲ通シテ最多キハ竊盜ニシテ、之ニ次ク罪名ハ 各性各年齡ニ依リテ同一ナラス。即チ二十歲未滿ノ男ハ竊盜 73.79%、詐欺及恐喝 6.67%、横領 5.33%ニ當リ、同女ハ竊盜 63.39%、殺人 13.39%、墮胎 11.16%、放火及失火 5.80%ニ當リ、二十歲以上三十歲未滿ノ男ハ竊盜 52.94%、詐欺及恐喝 13.10%、横領 7.76%、賭博及富籤 6.21%、傷害 5.54%ニ當リ、同女ハ竊盜 49.13%、墮胎 11.91%、傷害 11.41%、詐欺及恐喝 6.45%、放火及失火 6.20%ニ當リ、三十歲以上四十歲未滿ノ男ハ竊盜 35.26%、賭博及富籤 22.64%、詐欺及恐喝 13.67%、横領 6.78%、傷害 5.63%、贓物 4.03%ニ當リ、同女ハ竊盜 37.76%、賭博及富籤 16.48%、詐欺及恐喝 8.92%、殺人 8.70%、墮胎 7.55%ニ當リ、四十歲以上五十歲未滿ノ男ハ賭博及富籤 33.21%、竊盜 29.40%、詐欺及恐喝 13.37%、横領 5.76%、同女ハ竊盜 31.92%、賭博及富籤 23.16%、墮胎 10.17%、殺人 8.76%ニ當リ、五十歲以上六十歲未滿ノ男ハ賭博及富籤 33.86%、竊盜 27.43%、詐欺及恐喝 13.83%、横領 5.23%、贓物 4.65%ニ當リ、同女ハ竊盜 29.47%、賭博及富籤 23.67%、墮胎 13.53%、贓物 6.76%、放火及失火 6.28%ニ當リ、六十歲以上ノ男ハ、賭博及富籤 36.49%、竊盜 30.11%、詐欺及恐喝 9.79%、贓物 5.32%、横領 3.94%ニシテ、同女ハ墮胎 32.71、賭博及富籤 25.23%、竊盜 18.69%、放火及失火 7.48%ナリ。以上ハ主ナル罪名ヲ擧ケタルニ過キサレトモ年齡ト 犯罪關係ヲ窺フノ料トナスニ足ラン。

次ニ飲酒ノ嗜好ト犯罪トノ關係ヲ見ルニ、大正七年中ノ新受刑者中男ハ酒ヲ嗜ムモノ 58.66%、酒ヲ嗜マサルモノ 41.34%ニシテ、女ハ酒ヲ嗜ムモノ 12.43%、酒ヲ嗜マサル者 87.57%、ナリ 之ヲ前年ニ比スレハ酒ヲ嗜ムモノニアリテハ男稍減シ、女稍增シタリ。飲酒ノ嗜好アル男中最モ多數ヲ占ムル 犯罪ハ竊盜ノ 40.20%ニシテ賭博、富籤之ニ次キ 16.28%、詐欺及恐喝 10.24%、横領 7.14%、傷害 6.43%ノ順序ニシテ飲酒ノ嗜好ナキ男ハ竊盜 49.40%、賭博及富籤 18.97%、詐欺及恐喝 10.24%、横領 5.91%、贓物 3.52%、通貨、有價證券、文書僞造 2.16%、傷害 2.07%ニ當ル。是ニ依リテ之ヲ觀レハ飲酒ノ嗜好ナキ男ノ 竊盜比較的增加シタルノミニシテ他ハ前年ト大差アルナシ。又女ニ於テハ飲酒ノ嗜好アルモノハ竊盜 36.57%、賭博及富籤 22.22%、詐欺及恐喝 7.87%、墮胎 6.48%、放火及失火同シク 6.48%、殺人 4.63%ニ當リ、又嗜好ナキモノハ竊盜 40.98%、墮胎 12.56%、賭博及富籤 12.43%、殺人 9.65%、詐欺及恐喝 6.48%、放火及失火 5.09%ニ當リ、自ラ兩者ノ間ニ差異アルヲ知ル。

次ニ資產ノ有無ト犯罪トノ關係ヲ見ルニ、大正七年ノ事實ハ男ニ於テハ、資產アルモノ 1.51%、稍資產アル者 7.13%、資產ナキモノ 65.06%、赤貧ノモノ 26.30%ニ當リ、女ニ於テハ資產アルモノ 0.75%、稍資產アルモノ 4.21%、資產ナキモノ 60.88%、赤貧ナルモノ 34.16%ニ當レリ。之ヲ十年前ナル明治四十一年ニ比スレハ、男ハ資產ナキモノ 4.01%ヲ增シ、赤貧ノモノ 4.04%ヲ減シ女ハ赤貧者 1.94%ヲ減シ、他ハ概シテ差異アルナシ。資產アルモノト稍資產アルモノトヲ合セテ、其ノ罪名別ヲ見ルニ、男ハ竊盜 25.04%、賭博及富籤 22.43%、詐欺及恐喝 17.04%、横領 6.76%通貨、有價證券、文書僞造 6.16%、傷害 5.42%、贓物 4.40%ニ當リ、女ハ墮胎 25.88%、竊盜 16.47%、殺人 12.94%、賭博及富籤 10.59%ニ當ル。又資產ナキ者ト赤貧ナルモノトヲ合セテ 其ノ罪名別ヲ見ルニ、男ハ竊盜 45.52%、賭博及富籤 17.00%、詐欺及恐喝 12.22%、横領 6.62%、傷害 4.55%、贓物 3.18%、通貨、有價證券、文書僞造 2.27%、賍擄 2.14%ニシテ、女ハ賭博及富籤 13.97%、墮胎 11.04%、殺人 8.79%、詐欺及恐喝 6.77%、放火及失火 5.13%、贓物 3.42%ニ當ル。

大正七年中ノ新受刑者ヲ其ノ出生時ノ身分ニ依リテ分テハ、男ハ嫡出子 96.36%、庶子 0.32%、私生子 2.85%、身分不詳 0.47%ニ當リ、女ハ嫡出子 95.69%、庶子 0.40%、私生子 3.10%、身分不詳 0.81%ニ當リ、嫡出子ノ犯罪者多キ事常ノ如シ。

大正七年中ノ新受刑者ニ就テ其ノ養育ヲ受ケタル 家庭ノ關係ヲ見ルニ、實父母ノ下ニ養育セラレタル男ハ總數ノ 81.68%、女ハ 85.18%ニ當リ、漸次減少ノ傾キアリ、養父母ニ養育セラレタル者ハ男 1.15%、女ハ 1.38%ナリ。

大正七年中ノ新受刑者ニ就テ、教育ノ關係ヲ見ルニ、男ハ高等教育アルモノ 0.34%、中等教育アルモノ 3.61%、普通教育アルモノ 57.16%、普通教育ヲ受ケサル者 29.48%、無筆者 9.41%ニ當リ、女ハ高等教育アルモノ 0.11%、中等教育アルモノ 0.46%、普通教育アルモノ 24.27%、普通教育ヲ受ケサルモノ 34.10%、無筆者 41.06%ニ當ル。然レトモ總人口ノ的確ナル教育程度ヲ知ラサルカ故ニ何レノ教育程度ノ者カ新受刑者ニ多キヤヲ明ニセスト雖、上記ノ分節比例ヲ累年ニ見ルニ、男ニ於テハ、高等教育アルモノ漸次增加シタルカ、前年ニ於ケルカ如ク著シカラスシテ、中等教育アルモノ、普通教育アルモノハ僅少ナレトモ減少シ、普通教育ヲ受ケサルモノ及無筆者ハ稍增加セリ。又女ニ於テハ 從來皆無ナリシ高等教育アルモノ 2人アルハ注目ニ値スヘク、普通教育アルモノ、特ニ無筆者ノ增加甚タシク、又中等教育アルモノハ僅ニ減少シ、普通教育ヲ受ケサルモノハ 7.65%ノ減少ヲ看ル。

【累犯】 大正七年中ノ新受刑者中ニハ男 12.915人女 341人ノ累犯者アリ、之ヲ新受刑者ノ各性總數ニ比スルニ男ハ其ノ 23.60%、女 19.59%ニ當ル。此ノ累犯者ヲ年齡十八歲未滿ト十八歲以

上ト＝分テハ、男ハ十八歳未滿、1.50%、十八歳以上 98.50%＝シテ、女ハ十八歳未滿 2.93%、十八歳以上 97.07%＝當リ、少女ノ累犯者ハ少年＝比シ稍高シ。又十八歳未滿ノ累犯者ヲ犯數＝分チテ見ルニ、男ハ再犯 92.27%、三犯以上 7.73%＝シテ、女ハ再犯 80.00%、三犯以上 20.00%＝當リ、十八歳以上ノ累犯者ハ男ハ再犯 63.33%、三犯以上五犯迄 32.93%、六犯以上 3.74%＝シテ、女ハ再犯 67.98%、三犯以上五犯迄 28.10%、六犯以上 3.92%ナリ。是等ノ事實＝徵スレハ概シテ女ハ男＝比シテ犯數多キ者寧多キカ如ク啻タ十八歳以上ノ三犯以上ノモノヽミ男ニ多シ。今累犯者ヲ罪名別トシ其ノ百分比例ヲ算出シテ其ノ主ナルモノヲ擧クレハ 十八歳未滿ノ男ハ窃盜 87.63%ノ大部分ヲ占メ、横領 6.19%、詐欺及恐喝 4.64%＝當リ、同シク女ハ全部窃盜ナルハ前年＝同シ。又十八歳以上ノ男ハ窃盜 54.32%、賭博及富籤 19.94%、詐欺及恐喝 11.92%、横領 4.99%、傷害 2.79%＝當リ、女ハ窃盜 61.03%、賭博及富籤 23.26%、詐欺及恐喝 6.95%、墮胎 3.63%＝當ル。

【作業】 大正七年中在監人ノ一日平均作業入員ハ男 37,564人、女 1,459人、計 38,723人＝シテ、之ヲ種類＝依リテ分テハ、男ハ官司業從事者 7.68%、受負業從事者 79.04%、委託業從事者 13.28%＝當リ、女ハ官司業從事者 3.62%、受負業從事者 76.88%、委託業從事者 19.50%＝當ル。而シテ官司業ノ男カ從事スル主ナル作業ハ耕耘 24.32%、抄紙工 20.58%、藁工 14.31%、木工 9.77%、印刷工 4.01%、同女ハ裁縫工 38.10%、抄紙工 33.33% 機械工 16.67%ナリ。受負業ノ男カ從事スル主ナル作業ハ機械工 34.47%、麻工 15.99%、草履工 6.90%、藁工 6.15%、綱工 5.10%、同女ハ機械工 41.08%、麻工 15.04%＝シテ、委託業ノ男カ從事スル主ナル作業ハ裁縫工 22.24%、莫大小工 13.87%、機械工 13.13%、木工 10.92%、藁工 3.70%、鍛冶工 3.49%、麻工 3.29%、同女ハ莫大小工 36.73%、裁縫工 31.86%、機械工 22.12%等ナリ。

【疾患】 大正七年中ノ在監人ノ罹病者ハ、男 78,488人、女 2,589人、計 81,077人ナリ。此ノ中入監時既＝罹病シアリタル者、男 8,566人、女 133人、計 3,699人アリ。故＝入監後發病シタル者ハ男 74,922人、女 2,433人、計 77,355人トナル。此ノ入監時ノ罹病者ヲ本年中ノ各性入監人員＝比スルニ、男ハ 35.17%、女ハ 22.74%＝當リ、之ヲ前年ノ同一比例＝比較スルニ、男ハ 0.02%高ク女 1.40%高シ。又入監後＝發シタル罹病者ヲ年末ノ各性在監人員＝比スルニ、其ノ千＝付男ハ 1,303.3 女ハ 1,117.6＝當リ、之ヲ前年ノ同一比例＝較スルニ、男ハ 177.6女ハ 125.2高シ。斯ク驚クヘク高キ罹病率ハ更＝增加ノ歩武ヲ進ムルモノヽ如シ。而シテ是等本年中ノ罹病者ノ外、前年ヨリ繰越シタル罹病者アリ。之ヲ合算スルトキハ總罹病者、男 82,360人、女 2,719人、計 85,079人トス。此ノ總罹病者中、本年中＝治癒シタル者、男 73,885人、女 2,422人、計 76,307人アリ。之＝由リテ、治癒比例ヲ算出スレハ、男ハ 89.71%、女ハ 89.08%、＝當リ、前年ノ治癒比例ヨリ高キコト、男ハ 1.81%、女ハ 1.01%ナリ。又本年中ノ死亡者ハ、男 1,446人、女 38人、計 1,484人アリ。之＝由リテ死亡比例ヲ算出スレハ、男ハ 1.76%、女ハ 1.40%＝當リ、前年ノ死亡比例ヨリ高キコト、男ハ 0.48%、女ハ 0.80%ナリ。

大正七年中ノ入監者＝就テ、其ノ入監當時ノ罹病數ヲ主ナル病症別＝見ルニ、急性傳染病＝於テハ、本年秋季ヨリ全國＝流行セル流行性感冒＝罹レル者、各性入監者＝對シ、男ハ 5.74‰女ハ 7.23‰アリ。其ノ他ノ急性傳染病ハ、男＝腸チフス 1人、マラリア 6 人アリタルノミ。結核性疾患＝罹レル者、男ハ 16.08%、女ハ 12.66%＝當ル。此ノ入監時ノ罹病者ハ入監時ノ健康診斷＝由リテ發見セラレタルモノニシテ、單リ結核性疾患ノミナラス總テノ罹病者中自身＝病アルコトヲ覺知セサルモノモアリシナルヘク、縱シヤ之ヲ覺知スルモ罪ヲ犯シ得ル程度ノ人々ナルコトヲ思ハサルヘカラス。癲罹病者ハ女＝於テハ唯 1人ナリシモ、男ハ入監者ノ 2.68%アリ。結核性疾患ノ六分一ヲ占メタルハ、自暴自棄＝陷レル結果＝因ルモノト見ルヘク、寔＝恐ルヘキ事實ナリト謂フヘシ。黴毒ハ男＝ 22.12%、女＝ 21.70%アリ、黴毒以外ノ花柳病(淋毒、軟性下疳)ハ男＝ 41.26‰アリテ、女＝ハ皆無ナリキ。入監者＝花柳病罹病者多カルヘキハ想像＝難カラサル所ナルニ、女＝淋毒軟性下疳皆無ナルハ甚タ意外ノ感ナキ能ハス。健康診斷ハ内診＝及ホサヽルカ爲カ、若クハ、淋毒ノ如キヲ婦人生殖器ノ疾患トシテ算ヘタルカ爲カ、何レニシテモ奇異ノ事實タルヲ失ハス。脚氣ハ男＝ 16.66%、女＝ 5.42‰アリ。脚氣カ青年ノ男ヲ侵スコト强キハ玆＝於テモ知ラレタリ。癌ハ男＝ 3人アリタルノミ。是ハ入監者ノ年齡壯者多キ＝鑑ミテ當＝然ルヘキコトナラン。腦脊髓病＝罹リタル者男＝ 3.83‰アリテ、女＝ 1人モ無シ。トラホームハ男＝ 14.07%、女＝ 28.93%、其ノ他ノ眼病ハ男＝ 5.07%、女＝ 5.42‰アリ。女＝ハ男＝倍シテ「トラホーム」＝罹ル者多キコト注目＝値スヘシ。普通病＝ハ特＝擧クヘキモノナク、呼吸器病ハ男＝ 18.96‰女＝ 10.85%、胃腸病ハ男＝ 22.79%、女＝ 34.36%、腎臟炎ハ男＝ 3.06%、女＝ 1.81‰アリ。入監者＝殊＝多キ皮膚病ハ男＝ 111.54%、女＝ 37.97%、外傷ハ、男＝ 15.22%、女＝ハ唯 1人アリシノミナリ。

又大正七年中＝發生セル罹病者(入監時ノ罹病者ヲ除ク)ヲ病症別ト爲シ、年末現在ノ各性在監人員ノ千＝比スルニ、急性傳染病＝於テハ、腸チフス男 0.72女ナシ。マラリア男 2.96、女 1.81、流行性感冒男 274.65、女 206.90ナリ。此ノ別世界モ亦流行性感冒ノ襲撃ヲ受ケタルコト著シカリシヲ見ルヘシ。結核性疾患ハ男 10.51 女 6.90＝當リ、前年ノ男 7.89、女 4.01＝比シ迥＝增加セリ。花柳病ハ黴毒男 9.81、女 12.41、淋毒男 10.18、女 3.22、軟性下疳男 3.06、女 1.84＝當リ、女ノ軟性下疳ヲ除クノ外、男女各病共＝前年ヨリ低シ。入監時ノ罹病者ノ如ク甚シカラサレトモ、女ノ黴毒以外ノ花柳病ノ男＝比シテ低キハ監獄醫務ノ上注意＝價スヘシ。又入監後ノ花柳病ハ潛伏病毒ノ發現スルモノヽ外、新＝感染スヘキ機會絶無ナルカ故＝、其ノ罹病比例ノ高カラサルハ當然ノコトナリトス。ロイマチス性疾患ハ男 18.43、女 31.94、貧血及萎黃病ハ男 6.38、女 2.30、脚氣男ハ 6.23、女 5.06＝當ル。是等ノ病症ハ監内生活ノ影響＝依リテ增減スルモノナルヘク、而シテ女＝著シク「ロイマチス」性疾患多ク、女＝多カルヘクシテ却テ男＝貧血及萎黃病多ク、一般社會＝於テハ男女ノ間＝格段ノ差アル脚氣モ、玆＝於テハ僅＝女低キノミナルカ如キ注目スヘキモノ少シトセス。精神病ハ男 1.82、女 1.38＝シテ女ハ男ト大差ナク、神經衰弱ハ男 13.99、女 6.90＝シテ男著シク多キモ、女ニハ「ヒステリー」25.75アルアリ。腦脊髓ノ疾患ハ男 9.13、女 13.79アリテ女迥＝高シ。夜盲症ハ男 3.76、女 1.38、「トラホーム」ハ男 3.13、女 2.76共＝男＝高キモ、其ノ他ノ眼病ハ男 48.43、女 59.31＝シテ女＝高ク、耳ノ疾患ハ男 5.14、女 3.22＝シテ男＝高シ。心臟及其ノ他ノ血行器病ハ一般社會＝於テハ女少シク高キヲ常トスレトモ、玆＝ハ男 9.06、女 8.28＝シテ、男少シク高ク、呼吸器病ハ男 21 1.63、女 163.22＝シテ、一般社會ト同樣＝男高シ。消化器病中胃腸病ハ男 258.95、女 240.92、痔疾ハ男 21.91、女 18.39、其ノ他ノ消化器病ハ男 47.18、女 23.91＝シテ、是亦男＝高ク一般社會ト反セリ。腎臟炎ハ一般社會＝於テモ女少シク高ク 成書ノ定説ト違フモノアレトモ、玆＝ハ男 4.79ナル＝對シ、女ハ 7.36ノ高キヲ示シ懸隔甚タ大ナルモノアリ。是果シテ何＝原因スルモノソ。婦人生殖病ハ 4.00アリ。妊娠及產＝因スル疾患ハ 6.90アリ。監内＝於テ正規ノ分娩ヲ爲セル者モ亦此ノ中＝包含スルナラン。皮膚ノ疾患ハ男 153.58、女 80.46、外傷ハ男 102.52、女 84.60アリ。是ハ男女ノ監内作業＝異ナルモノアルニ基ツク結果ナリ。以上列記スル罹病ノ狀態ハ、男女ノ監内生活ヲ表現スルモノトモ謂フヘク、更＝之ヲ監獄別ト爲シ仔細＝考察スレハ、監獄行政上其ノ改善＝資スヘキモノ決シテ尠ナカラサルヲ思フ。

大正七年中ノ在監人ノ死亡者ヲ死亡原因別ト爲シ、男ノ死亡總數＝對スル男ノ各死亡原因ノ分節比例ヲ求ムルニ、結核性疾患最高ク 22.48%ヲ占メ、肺炎之＝次キ 18.26%アリ。其ノ他胃腸病 10.51%、腦脊髓病 9.41%、血行器病 5.88%、肺炎肋膜炎以外ノ呼吸器病 5.05%、流行性感冒及肋膜炎各 4.77%、腎臟炎 3.18%等其ノ高キモノニ屬シ、以上列記外ノ疾病及不慮＝因ル死亡ハ 18.87%ナリ。女ハ死亡總數 38人＝過キス。其ノ中最多キハ腦脊髓病ノ 7人、胃腸病、腎臟炎ノ各 6人、結核性疾患ノ 5人ナリ。而シテ又男ノ各病死亡者ヲ罹病者＝比例シテ各病ノ死亡比例ヲ算出スレハ、「腸チフス」ハ 35.71%、流行性感冒ハ 0.43%、肺結核ハ 28.18%、其ノ他ノ結核ハ 23.42%、癲ハ 3.30%、貧血及萎黃病ハ 4.30%、脚氣ハ 2.22%、精神病ハ 10.11%、腦脊髓疾患ハ 20.96%、血行器病ハ 13.62%、氣管支炎ハ 1.38%、肺炎ハ 45.13%、肋膜炎ハ 10.33%、胃腸病ハ 1.00%、腎臟炎ハ 13.86%＝當レリ。在監人ノ健康＝對シテハ、其ノ在監人タルノ故ヲ以テ特殊ノ影響ヲ被ムルコト勿論ナレトモ、各病ノ死亡比例ハ又以テ一般ノ場合ヲ推想スルノ料ト爲ス＝足ルモノナキ＝アラス。但シ流行性感冒＝シテ肺炎ヲ發シタルモノハ之ヲ肺炎トシテ算ヘタルコト＝注意ヲ要ス。

XXVIII. 陸 軍

【壯丁】 大正八年＝於ケル徵兵檢査人員中測尺不能者ヲ除キタル、全國ノ壯丁數ハ 488,832人＝シテ、人口千＝付 8.69＝當ル。之ヲ前年＝比スレハ 15,395人(人口毎千比例0.36)ヲ增加セリ。更＝之ヲ十五年前ナル明治三十七年＝比スレハ 80,831人ノ增加＝シテ、一年平均 5,389人ノ割ヲ以テ增加セルコトヲ示セリ。然レトモ之ヲ各年＝就キテ見ルニ、逐年必スシモ此ノ勢ヲ以テ增加セルニハアラス。三十八、九年ハ共＝減シ、更＝四十三、四年＝至リ再ヒ遞次減少シ、大正二年亦少シク減少シタルノ事實アリ。其ノ他ハ漸次增加シテ最近ノ數＝及ヒ大正七年ヲ以テ最高トス。

大正八年ノ右人員ヲ各府縣＝就キ見ルニ、人口多キ府縣必スシモ壯丁多キ＝非ス。又其ノ尠キ府縣カ常＝壯丁尠キ＝非ス。玆＝壯丁人員ノ多キ地方ヲ順次列擧スレハ、東京 19,246人、兵庫 19,112人、愛知 17,914人、新潟 17,218人、福岡 16,952人、大阪 16,132人、北海道 15,509人、廣島 14,585人等ノ順位＝シテ、人口ハ東京、大阪、兵庫、愛知、北海道、福岡等ノ順位ナリ。即チ知ル、其ノ人口ト相一致セサルコトヲ。右ハ固ヨリ人口ノ男女及年齡ノ權衡、徵兵猶豫、寄留等ノ關係＝依ルモノニシテ、是等ノ關係ヲ研究セハ自ラ解決セラルヘシト雖モ、玆＝ハ單＝問題トシテ揭クルニ止ム。

大正八年ノ壯丁人員ヲ身長別＝依リテ見ルニ、五尺六寸以上 13,799人(2.82%)、五尺五寸以上 26,288人(5.38%)、五尺四寸以上 54,739人(11.19%)、五尺三寸以上 86,481人(17.69%)、五尺二寸

以上 103,791人(21.23%)、五尺一寸以上 91,829人(18.78%)、五尺以上 62,147人(12.71%)、四尺九寸以上 30,862人(6.31%)、四尺八寸以上 12,498人(2.56%)、四尺八寸未滿 6,456人(1.32%)ナリ。由是觀之五尺二寸以上三寸未滿ノ者最モ多ク、全員ノ 1.47强ヲ占ム。之ヲ前年ニ比スルニ五尺二寸以上ノ身長高キ階級ハ何レモ其ノ增加著シキニ反シ、五尺二寸未滿ノ身長低キ階級ハ何レモ減少セリ。故ニ大正八年ノ壯丁ハ前年ニ比シ五尺三寸以上ハ幾分カ身長增加シ、五尺二寸以下ハ減退シタルカ如キ觀アリ。此ノ傾向ハ既往十數年來ノ實蹟ニ於テ多少ノ例外存スルモ、漸次增高スル所ニシテ、今暫ク中間ノ年次ヲ觀過シ、十六年前ナル明治三十七年ノ各階級ヲ百トシタル大正八年ノ指數ヲ求ムレハ、五尺六寸以上 203.2、五尺五寸以上 171.9、五尺四寸以上 155.4、五尺三寸以上 139.0、五尺二寸以上 126.2、五尺一寸以上 111.2、五尺以上 99.0 四尺九寸以上 91.0四尺八寸以上 81.4四尺八寸未滿 68.4ニ當レリ。此ニ由リ身長增加ノ趨勢ヲ窺フニ足ルヘシ。更ニ大正八年壯丁檢査ニ於ケル各身長級百分比例ニ依リ地方ノ狀況ヲ概觀スルニ、全國平均ニ比シ身長高キ者ノ多キ地方ハ、近畿區、北海道、中國區、東山區等ニシテ、身長低キ者ノ多キ地方ハ沖繩縣、九州區、四國區等ナリ。尙之ヲ府縣ニ就キテ見ルトキハ、近畿各府縣ハ一般ニ高尺ニシテ京都府ヲ第一位トシ滋賀縣、大阪府、鳥取縣等之ニ亞キ、低尺地ハ沖繩縣ヲ第一位トシ埼玉、千葉、群馬、栃木、新潟ノ諸縣之ニ亞ク。

次ニ壯丁ノ普通教育程度ヲ見ルニ、大正七年壯丁ノ教育檢査執行人員ハ 508,149人ニシテ、之ヲ教育ノ程度ニ依リテ分テハ、大學卒業及同等者 2,333人、高等學校並專門學校卒業及同等者 4,201人、中學校卒業及同等者 25,893人、高等小學校卒業及同等者 169,151人、尋常小學校卒業及同等者 231,364人、稍讀方算術ヲ爲シ得ル者 65,666人、讀方算術ヲ知ラサル者 9,541人ナリ。之ヲ前年ニ比スルニ總人員ノ增加ハ 3.32%ニシテ、大學卒業者及同等者 2.82%、中學卒業及同等者 5.37%、高等小學卒業者及同等者 3.85%、稍讀方算術ヲ爲シ得ル者 16.35%ノ增加ヲ示シ他ハ皆減少セリ。由是觀之高等教育ヲ受クル者ノ增加セルト無學者ノ減少セルトハ洵ニ喜フヘキ現象ニシテ、讀方算術ヲ知ラサル者ノ減少ハ殊ニ喜フヘク、之ヲ明治三十五年ノ無學者 71,871人(壯丁人員ノ 16.8%)ナリシニ比スレハ大正七年ノ 9,541人(總員ノ 1.9%)ナルヲ見、其ノ文盲者減少ノ如何ニ大ナルカヲ窺フニ足ラン。

【學生生徒】 陸軍ニ於ケル學生生徒ヲ教育スル機關ノ種類ハ、各師團及陸地測量部修技所ヲ合シテ十七種トス。是等ノ諸機關ニ於ケル教員ノ大正七年末現在數ハ各師團ヲ除キ 981人ニシテ、明治四十三年ヲ劃シ俄ニ 300餘人ヲ增加シタル以後ハ大ナル異動ナクシテ今日ニ及ヘリ。大正七年末ニ於ケル內譯ハ勅奏任 590人、判任及雇 310人、囑託 66人、外國人 15人ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ勅奏任 35人ヲ增加シ、判任及雇 29人囑託 4人外國人、1人ヲ減セリ。大正七年末學生生徒ノ總數ハ 4,528人ニシテ、前年ニ比シ 221人ヲ減少セリ。現在人員中官費生 3,182人、半官費生 121人、自費生 1,225人ニシテ、半官費及自費ハ中央、地方ノ幼年學校ニ之アルノミ。ソノ他ハ悉ク官費ナリ。同年中、學生生徒ノ異動ヲ見ルニ入學 4,472人、卒業 4,010人、各師團在勤士官候補生ノ士官學校又ハ經理學校ヘ派遣 529人、退學 131人、死亡 23人ナリ右ノ內、死亡ハ前年ヨリ 13人ヲ增シ、其ノ最モ多キハ見習士官及士官候補生ノ 8人ナリ。退學者ハ前年ヨリ 34人ヲ增シ、之ヲ學校別ニ見レハ師團 24人、士官學校 26人等最モ多シ。死亡退學者ノ各師團及士官學校ニ多キハ、其ノ總員多數ナルカ爲ナルヘク、特ニ他ノ學校ヨリ是等ノ原因トナルヘキモノノ多キニハ非サルヘシ。

【憲兵隊】 大正八年末ニ於ケル憲兵隊ノ部屬ハ、司法部ノ外、朝鮮駐劄、臺灣、關東州ヲ含ミタル21憲兵隊及支那駐屯憲兵並青島守備軍憲兵隊トス。其ノ人員ハ將官 2人、上長官 39人、士官 166人、准士官 77人、下士 670人、兵卒 1,927人、傭人 714人、計 3,595人ニシテ、前年ニ比シ 2,302人ヲ減セリ。右現在人員ノ最モ多キハ朝鮮駐劄憲兵隊ノ 1,202人ニシテ總員ノ約三割三分ヲ占ム。而シテ同隊ニハ此ノ外尙士官 7人、兵卒 310人ノ朝鮮人アリ。右總員ノ外ニ青島守備軍憲兵隊ニ通譯 3人、司令部ニ判任文官 5人アリ。

大正八年中憲兵ノ取扱ニ係ル犯罪人員ハ、陸軍軍人 1,015人、海軍軍人 160人、陸軍軍屬 53人、海軍軍屬 11人、朝鮮人陸軍軍人 2人、同陸軍軍屬 2人ノ外、軍人軍屬以外ノ犯罪者取扱數 37,629人アリ。今其ノ內譯ヲ見ルニ、內地人男 1,908人、女 65人、朝鮮人男 34,493人、女 1,007人、外國人男 156人、女ハ絕無ナリトス。

以上ヲ前年ト比較スルニ、朝鮮人陸軍軍人並陸軍軍屬ノ前年ト同一ナル外、陸軍軍人 17人ヲ增シ、海軍軍人 18人、海軍軍屬 1人、朝鮮人陸軍軍屬 4人ヲ減セリ。次ニ軍人軍屬以外ノ者ハ內地人男 2,195人、女 192人、朝鮮人男 35,037人、女 2,073人ナル異常減少ヲ來セルハ大ニ喜フヘキ現象ナルヘク、外國人亦 283人ノ減少ナリ。尙朝鮮人ノ犯罪ニ關スル數ハ更ニ本書朝鮮ノ部ニ於テ之ヲ見ルヘシ。

【衞戍監獄】 大正八年末ニ於ケル內地ヨリ朝鮮、臺灣、關東州、滿州ニ亘リ帝國陸軍 22衞戍監獄ニ於ケル未決、既決ノ殘留在監人ハ 426人ニシテ、同年中一日平均在監人員ハ 492.86人ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ、殘留人 30人平均人員 33.68人ヲ增加セリ。未決ノ入監者ハ 1,793人、出監者ハ 1,792人ニシテ、前年ニ比シ共ニ增加シ、既決ニ在リテハ入監者 2,231人、出監者 2,200人ニシテ、之レ亦、前年ヨリ增加セリ。死亡者ハ未決既決共ニ 2人ヲ見ル。

【疾患】 大正七年中ノ患者ハ、新患者 309.538人、之ニ前年ヨリノ越患者 2,443人ヲ合セ、總數 311.981人ナリ。此ノ總患者ノ治療延日數ハ 2,816,361日ニシテ、一患者ノ平均治療日數ハ 9.11.63ニ當リ、前年ノ同一比例ニ比シ 2日ヲ減シ、其ノ短キコト既往十數年間ニ曾テ見サル所ナリ。然ルニ此ノ治療日數ニ基キ一箇年間ヲ通シ平均一日ノ患者數ヲ求ムルニ 7,716人ニ當リ、前年ノ同一比例ニ比シ 1,758人多ク、其ノ多キコト既往十數年間ニ曾テ見サル所ナリ。又此ノ患者ニ依リテ兵員每百ニ對スル一日平均ノ患者比例ヲ算スルニ 3人 55ニ當リ、前年ノ同一比例ヨリ高キコト 0人 75ニシテ明治三十六年以後始メテ見ル高率ナリ。之ニ依リテ觀レハ本年ノ陸軍兵員ノ患者ハ平年ニ比シテ著シク多數ナリシモ、而モ其ノ患者ハ輕症ノモノ甚タ多キヲ占メタルモノヽ如シ。此ノ患者中不幸ニシテ死亡ノ轉歸ヲ取リタル者 651人、罹病ノ爲除役ノ已ム無キニ至リタル者 4,503人アリ、之ヲ前年ニ比スレハ死亡 266人除役 1,282人ヲ增セリ。而シテ是等ノ轉歸者ヲ總患者ニ比スレハ死亡ハ 0.21%、除役ハ 1.44%ニ當リ、前年ノ同一比例ニ比シ死亡ハ 0.02高ク、除役ハ 0.16低ク、兩者ノ高低ヲ相殺スレハ、本年ハ前年ニ比シ寧ロ 0.14低キコトヽ爲リ、除役ノ手續ヲ取ル遲ナク死亡ニ至リタル者、即急性疾患者多カリシコトヲ思ハシムルナリ。

以上ノ事實ヲ部隊別ニ見ルニ、內地ノ諸部隊學校ニ於テハ、兵員每百一日平均ノ患者ハ 3人 50、患者ノ死亡比例ハ 0.20%ニシテ兩ナカラ總數ヨリ少シク低キモ、患者ノ除役比例ハ 1.48%ニ當リ總數ヨリ少シク高シ。臺灣守備隊ハ兵員每百一日平均ノ患者 4人 74ニシテ、前年ヨリモ高ク、又內地ノ諸部隊ヨリモ高キモ、死亡比例ハ 0.18%、除役比例ハ 0.64%ニ當リ內地ヨリモ低シ。朝鮮駐屯部隊ノ兵員每百一日平均ノ患者ハ 3人 76、前年ヨリモ又內地ヨリモ僅カニ高キノミ死亡比例ハ 0.22%ニ當リ是亦內地ヨリ少シク高キモ、除役比例ハ 1.00%ニシテ內地ヨリ低シ。關東州駐屯部隊ハ兵員每百一日平均患者ハ 3人 90ニ當リ、前年ヨリハ稍高キモ內地ト比シテハ左マテニ高カラサルカ、死亡比例ハ 0.50%、除役比例ハ 2.23%ノ高率ヲ示シ他ノ總テヨリモ遙ニ高シ。支那駐屯部隊ハ兵員每百一日平均患者比例 1人 20ニ當リ、死亡比例ハ 0.18%、除役比例ハ 0.92%ニシテ何レモ內地ヨリ低シ。青島守備隊ハ兵員每百一日平均ノ患者 2人 45、死亡比例、0.23%除役比例 1.03%ニ當レリ。

更ニ內地ノ各師團ニ就テ見ルニ、兵員每百一日平均患者ノ最高キハ第九師團(金澤、鯖江、富山)ノ 4人 68ニシテ、之ニ次クハ第十一師團(丸龜、德島、善通寺、高知)ノ 4人 23、近衞師團(東京、習志野、千葉)ノ 4人 10、第三師團(名古屋、岐阜、津)ノ 4人 03、第十四師團(宇都宮、水戶、高崎)ノ 4人 00ナリ。第二位ノ高率ハ第十師團(姬路、鳥取、福知山)ノ 3人 98、第一師團(東京、甲府、佐倉、習志野、國府臺、下志津)ノ 3人 84トシ、第十八師團(大村佐賀、久留米)ハ內地部隊ノ平均ト等位ノ 3人 50ナリ。以上ハ內地部隊ノ平均以上ノ高率ナルモノニシテ、第三位即平均ヨリ稍低キハ、第八師團(青森、弘前、秋田、盛岡)ノ 3人 48、第十七師團(福山、岡山、濱田、松江)及第十六師團(大津、敦賀、京都、奈良)ノ共ニ 3人 21、第十五師團(豐橋、靜岡、濱松)ノ 3人 20、第十三師團(新發田、松本、村松、高田)3人 18、第六師團(熊本、鹿兒島都城)ノ 3人 17、第五師團(廣島、松山、山口)ノ 3人 04ニシテ、第四位ノ最低キハ第十二師團(小倉、大分、福岡)ノ 2人 96、第二師團(仙臺、若松、山形)ノ 2人 50、第七師團(札幌、旭川)ノ 2人 30第四師團(大阪、篠山、和歌山)ノ 2人 00ナリ。患者ノ死亡比例ノ群ヲ抽イテ高キモノヲ第七師團ノ 0.52%ト爲シ、之ニ次ク高率ハ第四師團ノ 0.38%、第十六師團ノ 0.36%ナリ。第二位ノ內地部隊ノ平均ヨリ高キハ第六師團ノ 0.25%、第十及第十三師團ノ共ニ 0.24%、第二師團ノ 0.22%、第十七師團ノ 0.21%ニシテ、平均ト等位 0.20%ナルハ第一、第十一及第十八師團ナリ、第三位ノ平均ヨリ稍低キハ第十四師團ノ 0.19%、第五師團ノ 0.18%、第三、第八及第十五師團ノ共ニ 0.17%、第十二師團ノ 0.16%ニシテ最低キハ第九師團ノ 0.12%、近衞師團ノ 0.10%トス。又患者ノ除役比例ハ第五師團ノ 2.46%最高ク、第一師團ノ 2.18%、第四師團ノ 2.03%之ニ次テ高ク、第二位ハ第十師團ノ 1.93%、第十七師團ノ 1.91%、第十三師團ノ 1.81%、近衞師團ノ 1.70%、第十五師團ノ 1.50%ニシテ、以上ヲ內地諸部隊平均ヨリ高キモノトス。平均ヨリ稍低キ第三位ハ第三及第八師團ノ共ニ 1.45%、第二師團ノ 1.32%、第十四師團ノ 1.23%、第十二師團ノ 1.22%、第十六師團ノ 1.14%、第十一師團ノ 1.07%、第九師團ノ 1.00%ニシテ、最低キハ第六、第七及第十八師團ノ共ニ 0.85%ナリ。

XXIX. 海　軍

【海軍】 大正八年末現在帝國海軍ニ於ケル軍艦ハ、艦數 147隻、排水量約 74萬噸、馬力約 200萬馬力ナリ。前年ニ比シテ艦數 8隻、馬力 19萬馬力、排水量 43.505噸ヲ增セリ。即チ同年中嚴島、叢雲、夕霧除籍セラレ、戰艦長門二等巡洋艦球磨、一等驅逐艦澤風、峯風、沖風、二等驅逐艦樅、榧、梨、竹、柿、楢等新ニ艦籍ニ加ハレリ。帝國軍艦ハ明治三十八九年ニ於テ俄ニ膨脹シ

同四十年度最高ニ達シ、同四十一年隻數噸數共ニ減少シ、爾來隻數ノ增加多カラス、漸ク大正元年ニ至リテ回復シタルモ同二年三年再ヒ減少シ、大正四年驅逐艦ノ新造ニヨリテ俄ニ隻數ヲ增シ、終ニ今日ノ隻數ヲ示スニ至レリ。噸數ハ明治四十一、二兩年相次テ少シク減少シタル外、常ニ若干ノ增加ヲ爲シツヽアリ。以上隻數、噸數並ニ馬力ノ變遷ノ狀ニ依リ艦ノ性質ヲ略察知スルヲ得ヘシ。大正八年末水雷艇ハ 20隻、2,511噸、51,830馬力ニシテ前年ヨリ艦數 4、噸數 608、馬力 14,400ヲ減セリ。水雷艇ハ明治三十七年ノ 85隻、7,565噸ヲ最大ノ極限トシ、爾來隻數、噸數共ニ漸減シ、殊ニ大正二年減少甚シク以テ今日ニ至レリ。

【海軍軍人】 大正八年末帝國海軍軍人ノ總數ハ 106,278人ニシテ內現役 72,625人、豫備 21,222人、後備 12,431人ナリ。前年ニ比シ現役 4,261人、豫備 529人增加シ、後備 159人ヲ減少セリ。之ヲ明治三十四年以來ノ數ニ就キテ見ルニ、大體豫後備ノ逐年增加スルノミナラス、現役モ亦大正二年ニ一度減少シタル外、常ニ增加セリ。大正八年ノ現役軍人ヲ階級別ニ見レハ、將官 138人(內甲板 94、機關 17)、上長官 1,749人(內甲板 980、機關 350)士官 3,151人(內甲板 1,404、機關 517)、候補生 186人(內甲板 115、機關 49)、准士官 1,802人(內甲板903、機關 646)、下士 13,832人(內甲板 7,478、機關 4,506)、卒 50,769人(內甲板 28,567、機關 18,611)ナリ。右ノ內大正八年末海軍本省以下官衙勤務ノ海軍軍人ハ 8,618人ニシテ、將官 92、上長官 903、士官 1,057、候補生 22、准士官 383、下士 1,881、卒 4,190人ナリ。此ノ外海軍官衙事務ニ從事スル者勅奏判任以下軍屬 3,003人アリ。

【海軍徵兵及募兵】 大正八年ニ於テ帝國海軍ニ徵募シタル兵卒ハ、其ノ徵兵ニ係ル者 6,316人、募兵ニ係ル者 6,361人、合計 12,677人ナリ。前年ニ比シ徵兵 686人、募兵 198人、合計 878人ヲ增加セリ。徵募兵ヲ兵種別ニ見レハ徵兵ハ水兵 3,501人、機關兵 2,414人、其ノ他 401人ニシテ募兵ハ水兵 3,489人、機關兵 2,416人、其ノ他 456人ナリ。徵募員ノ累年總數ヲ見ルニ、明治三十八年及同四十年ノ特ニ多數ナルト、大正二年ノ著シク少數ナルトノ外、逐年增加ノ傾向ヲ示ス。サレハ大正六年ノ激減ハ一例外ト認ムヘキカ。徵兵ト募兵トノ割合モ亦稀有ノ例外ヲ除キ、年々殆ト同數ニシテ募兵僅ニ多カリシカ大正六年ニ於テ大差アリシハ是亦一變調ト見ルヘシ。尙大正八年末徵兵ノ兵員ヲ所屬鎭守府別ニ示セハ、橫須賀 3,087人、吳 3,096人、佐世保 3,737人、舞鶴 2,757人ナリ。

海軍ニ於ケル其ノ所要兵員ハ、海軍志願兵條例ニヨリ募兵却テ徵兵ヨリ多キハ前揭ノ如クナルカ、大正八年ニ於ケル募兵ノ募集府縣別ヲ見ルニ、山口縣 371人ヲ最多トシ福岡縣 350人、新潟縣 268人、廣島縣 263人、鹿兒島縣 253人等之ニ次テ多ク、又沖繩縣 10人ヲ最少トシ、山梨縣 31人、鳥取縣 37人、群馬縣 42人等之ニ次テ少シ。

【海軍各學校】 大正七年末海軍各學校ハ七校ニシテ、其ノ教員數ハ、勅奏任 349人、判任及雇 60人、囑託 90人、合計 499人、外ニ外國人 5人アリ。前年ニ比シ 4人ヲ減セリ。學生生徒ノ總數ハ、機關砲術水雷各學校ニ於ケル下士卒練習生ヲ包含シ 3,635人ニシテ、前年ニ比シ 273人ノ增加ナリ。右學生生徒ノ總數中將來各科ノ候補生タル生徒ハ、兵學校ノ 491人、機關學校ノ 188人、經理學校ノ 64人ニシテ、他ハ悉ク既ニ士官又ハ下士卒タル學生及練習生ナリ。同年中ノ異同ハ入學 5,104人、卒業 4,810人、退學 121人ニシテ死亡者 8人アリタリ。

【海軍監獄】 大正八年末、橫須賀、吳、佐世保、舞鶴、旅順ノ五海軍監獄ニ於ケル未決殘留人員ハ 15人ニシテ、前年ニ比シ 11人ノ減少ナリ。同年中ノ入監ハ 375人ニシテ、前年ヨリ 8人ヲ減シ。出監ハ 386人ニシテ、前年ヨリ 10人ヲ增加セリ。又同年末既決在監人ハ 146人ニシテ、前年ヨリ 16人ヲ減ス。右年末人員 146人中 145人ハ有期懲役、他ノ 1人ハ有期禁錮ナリ。

【疾患】 大正七年中ノ新患者ハ 68,284人ニシテ之ニ前年ヨリノ繰越患者ヲ合スレハ總數 70,229人ナリ。此ノ患者ノ治療日數ハ 1,183,037日ニシテ、一患者平均 17日弱ニ當リ、前年ニ比シ約 4日ヲ減シタリ。此ノ治療日數ニ基キ平均一日ノ患者ヲ算出スレハ 3,241人ニ當リ、前年ノ同一比例ニ比シ 176人ヲ增シ、又此ノ患者數ニ依リテ兵員每百ニ對スル平均一日ノ患者比例ヲ算出スルニ 5人 47ニ當リ、前年ノ同一比例ニ比シ 0人 23ヲ增セリ。之ニ由リテ觀レハ、大正七年ハ明治四十一年以後最モ多ク患者ヲ出シタル年ニシテ、而モ其ノ患者ハ經過甚タ長キモノナラサリシコト上記治療日數ノ短キニ依リテ知ラル、即此ノ事實ハ本年ノ秋季ヨリ全國ヲ風靡セル流行性感冒ノ爲ナリシナリ。

上記ノ總患者中大正七年ニ於テ全治シタル者 59,538人、不幸ニシテ死亡シタル者 941人、兵役免除ノ止ムナキニ至リタル者 976人アリ。此ノ轉歸別ヲ總患者ニ比スルニ、全治 84.78%、死亡 1.34%、免除 1.30%ニ當ル之ヲ前年ニ比スルニ死亡ハ殆ト倍シテ 0.66%高ク、免除ハ略等位ニシテ 0.03%低シ。

海軍ノ艦船乘組員ト陸上勤務者トニ分チ上記ノ事實ヲ見ルニ、艦船乘組員ハ兵員百ニ對スル平均一日ノ患者比例 3人 75ニ當リ、死亡比例ハ 1.58%、免除比例ハ 0ナリ。然ルニ陸上勤務者(各鎭守府、要港部、學校、造兵廠、派遣部隊等)ハ兵員百ニ對スル平均一日ノ患者比例遙ニ高ク 9人 25ニ當リ、死亡比例ハ又之ニ反シテ遙ニ低ク 0.88%ヲ示シ、免除比例ハ 3.84%ニ當レリ。斯ノ如キハ艦船乘組者ト陸上勤務者トノ間ニ健康上ニ差違アルニ由ルモノナルヘク、而モ艦船乘組者ニ一人ノ免除者ナキハ、其ノ免除ノ止ムヲ得サルニ至ルハ恐ラク帶患轉轉役ナルカ爲ナルニ依ルナラン。

XXX. 財 政

(甲) 國 家 財 政

【一般會計歲入歲出】 大正九年度豫算額ニ依レハ、歲入ハ經常部 10億 1,261萬圓、臨時部 3億 658萬圓、合計 13億 1,920萬圓ニシテ、歲出ハ經常部 7億 1,115萬圓、臨時部 6億 813萬圓、合計 13億 1,929萬圓ナリ。之ヲ前年度豫算ニ比スレハ、歲入經常部 7億 7,347萬圓、同臨時部 8,153萬圓、合計 2億5,501萬圓、歲出經常部 2億 521萬圓、同臨時部 5,287萬圓、合計 2億 5,808萬圓ノ增加ニ當ル。次ニ右總歲入歲出ノ權衡ハ、大正九年度豫算不成立ノ爲メ、大藏省ニ於テ調製セル實行豫算ニ其後官報ニ依テ公布セラレタル追加豫算ヲ加算計上シタルヲ以テ、其結果、歲出超過八萬餘圓ヲ見タリ。而シテ經常部ノミヲ以テスレハ、歲入ハ 3億 146萬圓ヲ超過ス。又人口一人ニ對スル比例ハ、歲入歲出共ニ、23圓 20錢ニ當ル。

帝國臣民ノ負擔スル行政費ハ、中央政費ノ外府縣郡市町村ニ亘リ各階級ノ公共團體ノ費用アルヲ以テ、人口一人當リノ負擔右 23圓 20錢ニ止マラサルナリ。地方政費ハ(乙)地方財政ノ部ニ揭ケタレトモ、今玆ニ其歲出ヲ算シテ公費ノ全般ヲ窺フヘシ。此レカ大正九年度ノ額ニ未タ調査ヲ經サルモノアルヲ以テ、本年所揭ノ最近大正六年度決算ニヨレハ、同年度道府縣郡ノ歲出ハ合シテ 1億 1,637萬圓、市區町村ノ分ハ 2億 6,175萬圓ナリ。同年ノ人口一人ニ付道府縣郡費 2圓 7錢、市區町村費 4圓 67錢ナリ。右ノ內ニハ素ヨリ上級團體タル道府縣ニ於テ、一度支出ト爲リ、更ニ郡又ハ町村ニ於テ再ヒ支出トシテ重復計上セラルヽ額ヲ含ムヲ以テ、之ヲ合計スルハ極メテ疎笨ノ譏ナ免レスト雖、假リニ大正六年度國費負擔額ト合計スルトキハ、同年度帝國臣民ハ直接間接ニ一人ニ付約 19圓 86錢ヲ負擔スト言ヒ得ヘシ。而シテ水利土功組合等ノ費用ヲ、其組合區域內ノ住民ニ於テ、負擔スルハ右ノ計算外ナリ。

今國家歲入歲出ノ大數ヲ內閣制施行後即チ明治十九年以降累年ニ見ルニ、年々多少ノ異動アリ。之ヲ政治上經濟上並ニ法政上ノ變遷ト結合シ仔細ニ觀察シ行クトキハ、頗ル興味アルヘク、又極メテ明確ニ解釋シ得ラルヘシト雖モ、玆ニ其繁ヲ省キ、單ニ歲出ノ總額ヲ略觀スルニ、大略三段ノ進展ヲ經由セルコト明白ニ觀取セラル。即チ明治十九年度ヨリ同二十八年度ニ至ル十年間ハ、歲出總額常ニ七八千萬臺、人口一人ニ付二圓前後ニ過キサリシニ明治二十九年度ニ於テ過渡ノ狀ヲ經テ、同三十年度ヨリ三十七年度ニ至ル八年間ハ、一躍 2億圓ヲ超過シ、人口一人ニ對スル比例ハ、5圓乃至 6圓ノ間ニ進ミタリ。尋テ明治三十八年度中ヨリ倏ニシテ、從來ノ二倍ニ躍進シ、4億ヨリ 5億ニ進ミ、時トシテハ 6億ヲ突破セル數ヲ示セルコトアリ。從テ其人口ニ對スル比例ハ、約 9圓ヨリ 12圓ノ邊ニシテ、往々 12圓ヲ超過セルアリ。而シテ本年度實行豫算ニ於テハ、實ニ 23圓ヲ超過セリ。

國家一般會計ノ歲入ハ特ニ臨時特別ノ狀況ニ依リ、臨時部歲入ニ多額ヲ要スル場合ノ外ハ、經常歲入其主要部ヲ占ム。大正九年度實行豫算モ亦、歲入總額 13億 1,920萬圓中、10億 1,261萬圓ハ經常部ニ屬ス。而シテ經常歲入ノ年々ノ增減ハ、經濟上法制上ノ重大ナル更革ナキ限リ多クノ變動ヲ見スシテ累年漸增セリ。就中日露戰後ノ膨脹特ニ著明ナリ、而シテ右ノ例外トシテ明治四十二年度及大正四年度ニ於テ前年度ヨリ減少ノ數ヲ示ス、前者ハ官業及官有財產收入ノ減少ニ基キ、後者ハ租稅收入ノ減少ニ因ル。大正九年度實行豫算ニ於ケル經常歲入ヲ細別シ見ルニ、租稅 6億 1,899萬圓(60.6%)、印紙收入 6,605萬圓(6.5%)、官業及官有財產收入 2億 830萬圓(28.6%)、雜收入 706萬圓(0.7%)、預金特別會計ヨリ繰入 3,656萬圓(3.6%)ニシテ半額以上ハ租稅收入トシ、官業及官有財產收入之ニ次ク。印紙收入以下ハ甚タ多カラス。而シテ玆ニ歲入決算ノ上ニ於テ累年ノ傾向ノ觀過スヘカラサルハ、租稅收入ノ實額尙年々增加ヲ示シ經常收入中ノ首要部ヲ占ムルモ、其程度ハ漸次低下シ、反之官業及官有財產ノ收入ハ實額ニ於テモ比例ニ於テモ共ニ年々增進シツヽアリシカ、大正六年度以後再ヒ此ノ傾向ヲ轉倒セリ。

尙租稅並官業及官有財產收入ニ就キ最近大正九年度ノ數ヲ細別シ、百萬圓單位ヲ以テ擧クレハ、租稅ハ所得稅 1億 81.5、酒稅 1億 32.4、地租 73.7、關稅 66.3、營業稅 43.2、織物消費稅 39.5、砂糖消費稅 39.2、取引所稅 9.7、通行稅 8.0、鑛業稅 7.4、醬油稅 5.3、相續稅 4.1、兌換銀行券發行稅 1.4、石油消費稅 0.8、噸稅 0.7、藥營業稅 0.2ナリ。右ノ內大正六年度決算ニ比シ減額ヲ見タルハ相續稅、石油消費稅、取引所稅ニシテ相續稅 44.9萬圓、取引所稅 108.9萬圓、石油消費稅 22.3萬圓ノ減額ナリ。本年度所得稅ノ激增セシハ、主トシテ所得ノ增加ト稅法改正ニ依ル稅額ノ增加ヲ計上シタルニ基ク。官業及官有財產收入ノ主要ナルモノニ、郵便電信及電話收入、專賣局益金等アリ。大正九年度實行豫算ニ於

テ前者ハ 1億 6,053萬圓、後者ハ 8,952萬圓ニ上ル。之ニ次キ多額ナルハ森林收入ノ 2,480萬圓ナリトス。

次ニ一般會計ノ歳入臨時部ノ大正九年度總額ハ 3億 658萬圓ニシテ、前年度繰入金 1億 5,811萬圓ヲ最多トシ、公債募集金 5,427萬圓、雜收入 3,588萬圓、官有物拂下代 2,456萬圓ノ順位ナリ。

大正九年度實行豫算歳出ノ經常臨時ノ總額ヲ所管別ニ見、之ヲ百萬圓單位ヲ以テ揭クレハ、最高ハ海軍省 3億 53.3(26.8%)ニシテ、之ニ次テ大藏省 3億 13.7(23.7%)、陸軍省 2億 10.4(16.0%)、遞信省 2億 10.1(15.9%)、内務省 1億 3.1(7.8%)、文部省 43.4(3.3%)、農商務省 41.7(3.2%)、司法省 23.8(1.8%)、外務省 14.8(1.1%)、皇室費 4.5(0.3%)ナリ。即チ最モ多額ノ經費ヲ要スル海軍ハ全體ノ二割七分弱ヲ占ム。經常費ヨリモ臨時費ノ多額ナルハ海軍省 8.2%ニ對スル 18.5%、内務省ノ 2.6%ニ對スル 5.1%、農商務省 1.1%ニ對スル 2.0%等ナリ。

今少シク其内容ヲ檢スレハ、海軍省所管經常歳出 1億 835萬圓中最多額ハ軍事費 1億 840萬圓ナリ。又同省臨時部 2億 4,435萬圓中、最多額ハ軍備補充費(軍艦製造費) 1億 9,482萬圓ニシテ、之ニ次テハ水陸設備費 1,863萬圓、航空隊設備費 650萬圓、準備軍需品臨時充實費 440萬圓等多額ナリ。次テ歳出多額ナル大藏省所管中經常部 1億 8,176萬圓中ニ於テ最多額ナルハ國債整理基金繰入 9,324萬圓ニシテ帝國國債ノ元利支拂額ニ當リ、又同省臨時部 1億 3,200萬圓中最多額ナルハ、大正三年臨時事件豫備費 1億 200萬圓ニシテ、次テ多額ナルハ特別會計經費補充金 1,377萬圓ナリ。更ニ次テ多額ナル陸軍省所管ニ於テハ 經常部 1億 5,325萬圓ニシテ其内最多額ナルハ軍事費 1億 4,705萬圓ナリ。又同省臨時部 5,718萬圓中最多額ナルハ青島守備軍民政部費 1,312萬圓、軍備充實費 1,261萬圓等ナリ。是等陸海軍費及大藏省ノ費用ヲ除キタル殘餘即チ歳出總額ノ約三割三分强ノ内ニ於テハ、遞信省費著シク多シ。同省費中ニテハ經常部ノ遞信事業費 6,683萬圓、年金及恩給 5,546萬圓等、臨時部ノ電話交換擴張費 4,010萬圓、電信擴張及改良費 800萬圓等主要ナルモノナリ。次ニ内務省ノ費用ハ、經常部ヨリモ寧ロ臨時部多ク其主ナルモノハ水道、河川改修、港灣修築、道路改良、東京府立精神病院建築、協調會事業等ノ補助費 718萬圓、治水事業費 2,311萬圓、河川改良費 440萬圓、港灣改良費 700萬圓、北海道拓殖費 1,469萬圓等ナリ。内務省ニ次キ多額ナルハ文部省ニシテ、殊ニ逐年增加ノ趨勢ニ在リ。其主ナルハ經常部ニ於テ普通教育費 1,256萬圓、大學及學校圖書館支出金 1,254萬圓、臨時部ニ於テ高等諸學校創設及擴張費 680萬圓等ナリ。之ニ次ク農商務省ノ歳出ハ臨時部カ經常部ニ比シ多ク約二倍ニ達セントシ、其主ナルモノハ製鐵所擴張費 1,004萬圓、産業奬勵費 595萬圓、國有林野經營費 534萬圓等トス。之ニ次クヲ司法省トシ、各省中最モ歳出額少キハ外務省トス。

【特別會計歳入歳出】 特別會計ノ數ハ大正九年度ニ於テ 外務省所管 1、大藏省所管 15、陸軍省所管 4、海軍省所管 3、文部省所管 6、農商務省所管 2、遞信省所管 1、鐵道省所管 3、合計 35トス。特別會計ノ數ハ前年ニ比シ 1ヲ增加セリ。コレ賠償金 1ヲ新設シタルニ因ル。又帝國鐵道資本勘定、帝國鐵道收益勘定及帝國鐵道積立金勘定ハ本年度ニ於テ鐵道省新設ト共ニ 大藏省所管ヨリ分離シ鐵道省所管ニ移レリ。特別會計ノ歳入歳出ハ其資金又ハ勘定ノ如キ、單ニ帳簿上ノ金額收支ニ止マルモノアリ。又極メテ廣汎複雜ナル事業事務ヲ伴フモノ、例ヘハ朝鮮臺灣ノ兩總督府ノ如キアリ。又一般會計ト年々收支密接ノ關係ニアルモノアリ。或ハ永ク獨立ノ狀態ニ在ルモノアリ。又歳入額ノ多額ヲ以テスレハ、大正九年度實行豫算ニ於テ、國債整理基金 6億 9,391萬圓、帝國鐵道收益勘定 4億 3,167萬圓、帝國鐵道資本勘定 4億 2,031萬圓、專賣局 2億 5,835萬圓、公債金 1億 5,788萬圓、朝鮮總督府 1億 2,380萬圓、製鐵所 1億 339萬圓等ノ如キ巨大ナルモノアリ。

【所得税】 大正八年度所得税納税義務者人員ハ 第一種法人所得 31,734、第三種所得 1,387,485、合計 1,419,219アリ。前年ニ比シ第一種所得 5,863、第三種 360,165、合計 366,028ヲ增加セリ。第二種所得税ハ第一種第三種所得税ト納税手續ヲ異ニシ茲ニ謂フ所ノ納税人員ナシ。

右所得税納税義務者ノ所得額並ニ第二種公債社債ノ 利子額ノ合計ハ、大正八年度分 29億 5,864萬圓ニ上リ、其内第一種法人所得 14億 3,618萬圓、第二種公債社債利子額 5,209萬圓、第三種所得 14億 7,035萬圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ第一種法人所得 5億 9,660萬圓、第二種376萬圓、第三種 4億 5,228萬圓增加セリ。第三種所得額ノ增加中金高ニ於テ最モ著シキハ千圓以上二千圓以下級 1億 3,285萬圓、千圓以下級 1億 667萬圓、三千圓以上五千圓以下級 5,316萬圓並ニ二千圓以上三千圓以下級 5,286萬圓等ナリ。

次ニ大正八年度所得税額ハ第一種 1億 1,027萬圓、第二種 129萬圓、第三種 8,356萬圓、合計 1億 9,513萬圓ニシテ前年ニ比シ、總額ニ於テ 7,023萬圓ノ激增ヲ見タルカ、内 4,822萬圓ハ第一種ノ增加ニ、17萬圓ハ第二種ノ增加ニ、2,183萬圓ハ第三種ノ增加ニ係ル。

大正八年度第三種所得税額ヲ府縣別ニ見ルニ、最モ多キハ東京 1,530萬圓、大阪 1,219萬圓ニシテ、二百萬圓以上ヲ擧クレハ兵庫 463萬圓、福岡351萬圓、愛知 329萬圓、京都 318萬圓、新潟 261萬圓、北海道 237萬圓、長野 229萬圓、神奈川 208萬圓ノ順位ナリ。

【營業税】 大正八年度國税 營業税納税人員ハ 570,415人ニシテ、其ノ税額ハ 4,461萬圓ナリ。之ヲ前年度ニ比スルニ人員 83,152人税額 982萬圓ヲ增加セリ。税額ニ就キテ累年狀況ヲ見ルニ、明治三十六年度ヨリ同四十一年度ニ至ル期間ニ急速ノ 膨脹ヲ現ハシタリシカ、大正二年度ニ及ンテハ甚タシキ增加ナキモ、亦若干ノ增進ヲ示シ、次第ニ增加ノ傾向ニ在リシニ、大正四年度ニハ俄然トシテ減額セリ。惟フニ、是レ税法改正ニ基ク結果ナランカ。夫レヨリ年々更ニ增進シ今日ニ及ヘリ。

大正八年度ノ數ヲ營業種類別ニ就キテ見ルニ、最モ人員多キハ物品販賣業ノ 397,371人ニシテ總人員ノ約 2/3 ニ當ル。其納税額ニ於テモ之レト同樣ニ最モ多額ニシテ 1,927萬圓ニ上リ、總税額ノ約 2/5 ヲ占ム。次テ多キハ人員ニ於テモ税額ニ於テモ製造業ニシテ 56,506人 741萬圓ナリ。又人員ニ於テ多キハ金錢貸付業、請負業、料理店業、問屋業ニシテ、税額ヨリ見テ百萬圓以上ニ上ルモノハ銀行業、問屋業、運送業、金錢貸付業、請負業等ナリ。尙各種營業税額ヲ前年ト對比スルニ總テ皆前年ヨリ增加セリ。殊ニ税額人員共ニ增加ノ著シキハ物品販賣業ナリ。

次ニ大正八年度營業税額ヲ地方別ニ見ルニ最多ナルハ東京 1,173萬圓ニシテ、大阪 784萬圓、兵庫 341萬圓、愛知 190萬圓、神奈川 158萬圓、福岡 147萬圓、京都 138萬圓、北海道 106萬圓ハ相次テ多額ニシテ皆百萬圓以上ナリ。次テ靜岡 80萬圓、長野 75萬圓、新潟 67萬圓、廣島 63萬圓、三重 60萬圓等多額ノ部ナリ。若シ夫レ人員ノ多少ヨリスレハ、税額多クシテ人員却テ少數ナルモノアリテ順位ノ異ナルモノアリ。是レ主トシテ各營業種類ノ配置如何ニ關係ス。例ヘハ保險銀行業ノ如キ營業比較的多キ地方ハ納税人員少キニ拘ラス、其納税額多キカ如キコレナリ。

【税關收入】 大正八年度税關收入ハ關税 8,113萬圓、噸税 83萬圓、雜收入 33萬圓、合計 8,231萬圓ニシテ、前年ニ比シ 1,241萬圓ノ激增ナリ。關税收入ハ大正二年度ヲ最高トシ、戰爭初年ノ大正三年ニ激減シ、大正四年ニ更ニ、激減ノ度ヲ增シタルモ、爾後大正五年六年ト引續キ稍ヤ漸增ヲ示シ。其細別ヲ見ルニ、關税噸税共ニ同一ノ傾向アリ。而シテ大正八年度ニ於テハ最高タリシ大正二年度ヲ遙ニ凌駕スルニ至レリ。大正八年度ノ合計ヲ税關別ニ見ルトキハ横濱 3,496萬圓、神戸 2,636萬圓、大阪 767萬圓、門司 614萬圓、臺灣總督府 516萬圓、長崎 150萬圓、函館 49萬圓ノ順位ナリ。

【國債】 大正八年度末現在國債額ハ内國債 19億 6,673萬圓、外國債 13億 1,113萬圓、合計 32億 7,787萬圓ニ上ル。借入金年度末現在 2億 1,187萬圓ハ此ノ以外トス。同年中ニ起債シ、償還セシモノヲ差引スレハ、結局前年ニ比シ、内國債 2億 2,609萬圓ノ增シ、外國債ハ增減ナク、合計 2億 2,609萬圓ヲ增加セリ。帝國國債ヲ大正四年度以降最近五箇年ニ見ルニ、内國債ハ漸次增加ニ向ヒ、大正八年ハ右ノ如ク特ニ激增ヲ示ス。然ルニ外國債ハ之レト趣ヲ異ニシ大正三年度以降遞減ヲ示セリ。

【特別資金及官業資本】 大正七年度末特別資金ハ 12種、合計 1億 6,384萬圓ニシテ、前年ニ比シ種類ニ增減ナク、金額ニ於テ 1,871萬圓ヲ增加セリ。大正七年度末官業ハ十箇所合計 14億 5,012萬圓、内固定資本 13億 4,677萬圓、運轉資本 1億 334萬圓ニシテ前年ニ比シ合計 1億 1,105萬圓ヲ增加セリ。

【國庫預金、保管金及供託金】 大正八年度末國庫預金ハ 普通預金 9,855萬圓、中央金庫預リ郵便貯金 7億 4,873萬圓ニシテ、前年ニ比シ前者ハ 3,399萬圓ヲ增シ、後者ハ 1億 3,538萬圓ヲ激增セリ。又保管金及供託金ノ同年度末現在額ハ 2,287萬圓ニシテ是レ亦前年ニ比シ增加セリ。

【貸付金】 大正八年度末貸付金ハ 1,121萬圓ニシテ、前年度末現在ニ比スレハ追加高ヨリモ減少高多カリシ爲メニ、80萬圓ヲ減少セリ。本貸金中最多ヲ占ムルモノハ、水害凶作救濟資金貸付金ナリ。

(乙) 地 方 財 政

【道府縣】 北海道及府縣自治體ノ 大正六年度歳入決算ハ合計 1億 2,758萬圓ニシテ、前年度ニ比シ 1,723萬圓ヲ增加ス。道府縣收入中租税收入ハ 8,189萬圓ニシテ總收入ノ約 64%ヲ占メ、税外收入ハ 36%ニ當ル。又税收入ヲ細別スレハ、國税附加税 4,208萬圓。道府縣税 3,767萬圓市町村分賦額 212萬圓ナリ。更ニ税ヲ細觀スルニ地租割及反別割 3,538萬圓、戸數割及家屋税 1,882萬圓、雜種税及北海道水産税 1,404萬圓等多額ナリ。其他ノ税ハ甚タ多カラス。

府縣收入ヲ單ニ主ナル收入ニ就キ各々道府縣別ニ觀察シ、其著シキモノヲ揭クレハ、大正六年度地租割及反別割收入ノ最モ多キ地方ハ新潟ナリ。次テ愛知、兵庫、埼玉、福島、岡山ニシテ何レモ皆、百萬圓以上アリ。秋田、山形、栃木、千葉、靜岡、宮城、茨城、富山、長野、三重、福岡ハ此ニ次テ多額ノ部ニ屬ス。次ニ戸數割、家屋税ハ東京 151萬圓ノ特ニ多額ナルヲ初メトシテ北海道、福島、神奈川、新潟、靜岡、愛知、大阪、廣島ハ 50萬圓以上ヲ示ス。次ニ大正六年ニ於テ道府縣債收入ノ特ニ多キハ 新潟 148萬圓ニシテ、之ニ次ク大阪 121萬圓、宮城 99萬圓ヲ除ケハ他ハ其額大ナラス。國庫補助金、同補給金及同下渡金ノ名目ノ下ニ道府縣ニ

交付セラルル金額ノ合計ヲ見ルニ、其ノ特ニ高額ヲ呈スルハ東京126萬圓、大阪、宮城 40萬圓ニシテ其最少額ハ高知ノ 4萬圓ナリ。

道府縣歳出ノ大正六年度總額ハ 1億 435萬圓ニシテ前年ニ比シ、728萬圓ノ膨脹ヲ示セリ。歳出費目ハ經常臨時ノ區別ヲ撤シ、費目中同種類ノモノヲ一纒メニ綜合シ、以テ種類ヲ粗大ニ分チタルモノナリ。之ニヨレハ、同年度支出中、土木費及同補助費 12,410萬圓ヲ最多トシ、之ニ次テ警察費及建築修繕費 1,934萬圓、教育費及同補助費 1,718萬圓、勸業費及補助費 1,126萬圓、道府縣債費 735萬圓ノ順位ニシテ其他ハ 400萬圓以下ナリ。

歳出ノ道府縣別モ亦歳入ニ於ケルカ如ク、大正六年度ノ主ナルモノニ就キ、著シキ二三ノ府縣ヲ掲記スレハ、先ツ土木費ニ於テハ大阪 135萬圓ヲ最高トシ、次テ愛知 123萬圓、新潟 120萬圓、富山 109萬圓、京都 106萬圓ハ多額ノ部ナリ。次ニ警察費及建築修繕費ハ東京 314萬圓、大阪 160萬圓著シク多額ナリ。次テ多キハ、兵庫、北海道、愛知、京都、福岡、神奈川ノ諸縣ナリ。教育費ハ土木費又ハ警察費ノ如ク特ニ多額ノ支出ヲナスモノナク、又非常ニ小額ノ支出ナシ。勸業費及同補助費ノ最多ハ愛知 43萬圓、新潟 40萬圓ニシテ、次テ福岡 37萬圓、北海道 34萬圓、京都 33萬圓、岐阜、大阪共ニ 32萬圓、岡山 31萬圓、兵庫 30萬圓ノ順位ナリ。

【郡】 大正六年度郡自治團體ノ全國收入總額ハ 1,385萬圓ニシテ、之ヲ前年ニ對照スルニ、162萬圓ヲ增加ス。又收入ノ種類ニ依リ別チ見ルニ、町村分賦額 870萬圓ニシテ總收入ノ 63%ヲ占ム。之ニ次テ繰越金 146萬圓、府縣補助金 100萬圓多額ニシテ、此ノ外ノ收入ハ極メテ少シ。大正六年度收入ヲ郡制ノ施行アル府縣ニ就テ略觀スルニ、最モ郡收入ノ多キハ福岡 163萬圓ニシテ福島 64萬圓、愛知 59萬圓、宮崎 57萬圓、兵庫 52萬圓、新潟 51萬圓、之ニ次ク。其他ハ郡收入ノ一府縣總額 50萬圓以下ニシテ、其最少ナルハ埼玉ノ 7萬圓ナリ。又郡收入ヲ主ナル種類ニ就テ見ルニ、町村分賦額ノ最モ多キ府縣ハ福岡 87萬圓ニシテ、次テ福島 43萬圓兵庫 37萬圓、長野 35萬圓、愛知 33萬圓、新潟 31萬圓、島根 28萬圓多額ナリ。府縣補助金ノ多キモノヲ列擧スレハ福岡 15萬圓、愛知 6萬圓、岐阜 5萬圓アリ。尙郡收入ハ財產ニ基ツクモノ甚タ少ク、全國總額僅ニ 262,868圓ニ過キス。就中財產收入ノ多キハ熊本 12萬圓ニシテ、其他ハ特ニ多額ナルモノナク、新潟 1.2萬圓、兵庫、福岡共ニ 1.1萬圓、大分 1.0萬圓ヲ除ケハ他ハ皆 1.0萬圓以下ナリ。

次ニ郡支出ハ大正六年度決算額 1,202萬圓ニシテ、前年ニ比シ 171萬圓ヲ增加シタリ。道府縣歳出ニ就テ述ヘタルカ如ク、郡支出ハ其費目ヲ粗大ノ種目ニ綜合シタルモ其ノ支出種目ノ多額ナルハ勸業費同補助費 305萬圓、土木費同補助費 301萬圓、教育費同補助費 209萬圓、合計 876萬圓ニシテ總額ノ 73%ヲ占ム。此ノ三種目ニ對照スレハ、右以外ノ種目ハ甚タ少額ナリ。

右支出ヲ府縣別ニスレハ、支出合計ノ多少順位ハ收入ニ於ケルト略同位ナルカ故ニ茲ニハ只主ナル種目ニ就テ概觀スルニ、先ツ勸業費ヲ最モ多ク支出スルハ石川 14萬圓、兵庫 13萬圓、福島、島根、廣島ノ各 12萬圓、茨城、熊本ノ各 11萬圓、山口、大分、福岡ノ各 10萬圓ニシテ、其他ハ 10萬圓以下ナリ。次ニ土木費ノ多キハ福岡 57萬圓、愛知 21萬圓、福島 20萬圓、相次テ多ク同年度ノ土木費ノ支出ナキハ埼玉、東京、大阪一縣二府ニ過キス。又教育費ノ支出 10萬圓以上ハ福岡 29萬圓、新潟 12萬圓、靜岡、長野 10萬圓ニシテ、其少額ナルハ青森 9,958圓ノ最少ヲ初メトシ、東京 12,512圓、高知 13,037圓アリ。

【市及區】 大正六年度末現在全國ノ市及北海道、沖繩ノ區ハ其數 78アリ。前年ニ比シ室蘭區、八王子、大牟田、八幡ノ一區三市ヲ增ス。同年度收入總額ハ 1億 7,326萬圓ニシテ、前年ヨリ、5,677萬圓ヲ增シタリ。此ノ總額ヲ細別シ見ルニ、稅收入 2,938萬圓、財產收入 301萬圓、使用料及手數料 3,844萬圓、公債金 5,704萬圓ナリ、稅收入ハ全收入ノ 17.0%ニ過キサルヲ以テ、市及區ノ現狀ハ主トシテ稅外財源就中使用料及手數料竝ニ公債金等ニ依リ、只其ノ不足額ヲ稅收入ニ求ム。

大正六年度ニ於ケル全國市區ノ支出總額ハ 1億 1,809萬圓ニシテ、之ヲ前年ニ對比スルニ、2,747萬圓ヲ增加ス。前掲新設一區三市ノ支出合計ハ 561,515圓ニ過キサレハ之ヲ差シ引クモ、右增加額ハ大部分ハ主トシテ既存市區支出ノ膨脹ニ歸セサルヲ得ス、今市區歳出ノ內譯ヲ檢スルニ、上級自治團體トハ大ニ差アルヲ見ル、即チ支出ノ最大部分ヲ占ムルハ電氣瓦斯事業費 3,724萬圓、公債費 2,670萬圓、教育費 1,486萬圓、衛生費 1,345萬圓ナリ。殊ニ教育費、衛生費ノ多額ハ都會人口ノ關係上自ラ然ル所ニシテ上級自治團體ト異ナル點ナリ。

【町村】 大正六年度ニ於ケル全國町村歳入總額ハ 1億 5,775萬圓ニシテ前年ニ比シ、1,695萬圓ヲ增加ス。町村收入ノ內譯ハ稅收入最モ多ク、其額 1億 142萬圓ニ達シ、總收入ノ約 65%ヲ占ム。他ハ財產收入 809萬圓、上級團體交付金 508萬圓、上級團體補助金 460萬圓、使用料及手數料 438萬圓、公債金 295萬圓等ナリ。之ヲ前年ニ對比スルニ、北海道地方稅及府縣稅附加稅中營業稅 132,937圓ヲ減シタル外、他ハ總テ增加ヲ見タリ。

大正六年度ニ於ケル全國町村ノ歳出總額ハ 1億 4,366萬圓ニシテ、前年ニ比シ、1,356萬圓ヲ增ス。今其ノ支出額ヲ種類ニ就テ見ルニ、著シク多額ナル教育費 5,736萬圓ヲ第一トシ、次テ役場費 2,619萬圓、財產造成費管理及積立金 1,678萬圓、土木費 1,128萬圓、諸稅及負擔 988萬圓、衛生費 582萬圓、寄附及補助金 388萬圓、公債費 340萬圓ノ順位ナリ。之ヲ前年ニ對比スルニ、衛生費 585萬圓、公債金 340萬圓ノ減退ヲ見タル外ハ、他ハ皆增加セリ。

【市町村基本財產】 現行市制町村制ノ規定ハ市町村自治體ノ經濟ハ先ツ其ノ財產ヨリ生スル收入ヲ以テ支辨スヘキコトヲ定メ、而シテ市町村ノ收益財產ハ總テ基本財產トシテ造成管理スヘキコトヲ命ス。右基本財產ノ大正六年度末現在ハ市及區有 3,432萬圓、町村有 1億 8,545萬圓ニ上ル、之ヲ平均スレハ、一市區 446,069圓、一町村 15,178圓ニ當ル。今日既ニ稅ノ徵收ヲ爲サヽル所謂模範町村アリト雖、此ノ平均ヲ以テシテハ前途尙遼遠ナリト云フヘシ。而シテ大正六年度ノ數ハ前回ノ調査期タル三年前ニ比シ町村ハ 6,057萬圓ヲ增シ、市區ハ 293萬圓ヲ減退セリ。財產ノ種類ハ土地最モ多シ、之ニ次テ多額ナルハ現金ナリ。

【普通水利組合】 普通水利組合ノ大正六年度全國總收入ハ 873萬圓ニシテ、郡經濟ニ比シ、其約三分ノ二ニ垂ントセリ。即チ前年ニ比スレハ、276萬圓ヲ增加セリ。同收入ハ近年頻リニ減退ヲ示セシカ、本年度ニ於テ俄然增加セリ。收入ノ種類ハ組合費トシテ徵收スル反別割、地租割 334萬圓及公債金 315萬圓等主要ナルモノニシテ、總額ノ約三分ノ二以上ヲ占ム、此外ハ尠少ナリ。

次ニ同年度支出總額ハ 778萬圓ニシテ其內容ヲ見ルニ公債費 348萬圓主ナルモノニシテ總支出ノ 45%ヲ占ム。次テ事業費 286萬圓、管理費 49萬圓ハ多額ノ部ナリ。

【水害豫防組合費收入】 水害豫防組合ノ大正六年度收入總額ハ 179萬圓ニシテ前年ニ比シ、48萬圓ヲ增加セリ。本組合收入ノ內容ハ組合費トシテ徵收スル段別割、地租附加稅、家屋割 69.8萬圓ノ外ハ公債金 37.2萬圓、上級團體補助金 19.4萬圓多額ノ部タリ。同年度中支出總額ハ 144萬圓ニシテ、是レ又前年ヨリ增加ヲ示ス。其內容ハ事業費最モ多額タルハ論ヲ俟タス。總支出ノ 50.6%ヲ占メ、公債費ノ之ニ次テ多額ナルハ水利組合ト同シ。

【地方債】 大正七年度末ニ於ケル地方公共團體ノ公債ハ總額 3億 9,142萬圓ニシテ、內 1,063萬圓ハ不要許可債、3億 8,079萬圓ハ要許可債ナリ、要許可債ヲ種類別ニ擧クレハ、最大ナルモノハ市區債 3億 928萬圓ニシテ、之ニ次テ府縣債 5,642萬圓、町村債 627萬圓、水利組合債 586萬圓、郡債 182萬圓、北海道地方費債 61萬圓、市町村組合債 50萬圓ナリ。之ヲ前年ニ對比スルニ、總額 1,177萬圓ノ減少ナリ、之ヲ種類別ニセハ、北海道地方費債ハ增減ナク、府縣債ハ 2,767,432圓ヲ、町村債ハ 47,931圓ヲ、市町村組合債ハ 22,013圓ヲ增加シ、郡債ハ 75,239圓ヲ市區債ハ 16,154,540圓ヲ、水利組合債ハ 171,943圓ヲ減少シタルト不要許可債ニ於テ 1,781,231圓ヲ增加シタルトニ依リ、結局總額ニ於テ上記ノ減少トナレリ。

大正七年度地方債ヲ使用ノ目的別ニ見ルトキハ、勸業費 1億 7,746萬圓ヲ最高トシ、次テ衛生費 6,049萬圓、普通土木費 4,949萬圓、舊債償還 4,407萬圓、災害土木費 3,816萬圓、教育費 1,416萬圓ノ順序ナリ。而シテ之ヲ公共團體ノ種類ニ就テ見ルニ、少シク趣ヲ異ニスルモノアリ。即チ勸業費ハ市債、水利組合債ニ於テ概シテ高額ヲ占メ、土木費ハ府縣債ニ於テ最多額ヲ、衛生費ハ市債ニ於テ最多額ヲ、區債ニ於テモ亦多額ヲ、教育費ハ町村債ニ於テ最多額ヲ占ム、各特ニ然ルヘキヲ思ハシム。

同年度地方債ヲ地方別ニ見ルニ、最モ多額ヲ示スモノハ、東京 1億 2,184萬圓ニシテ、次テ大阪 8,254萬圓、兵庫 4,052萬圓、京都 2,373萬圓、愛知 1,458萬圓、神奈川 1,402萬圓皆多額ノ部ニ屬ス。更ニ之ヲ使用目的別ニ就テ見ルニ、東京、兵庫ハ勸業費ヲ多額トシ衛生費之ニ次キ大阪ハ勸業費多額ニシテ之ニ次ク ヲ舊債償還費トシ京都ハ舊債償還費ヲ多額トシ勸業費之ニ次キ愛知ハ衛生費多額ヲ占メ舊債償還之ニ次キ神奈川ハ衛生費土木費ニ於テ最モ多シ。

【罹災救助基金】 大正六年度末道府縣ノ有スル罹災救助基金ノ總額ハ 5,597萬圓ニシテ、前年ニ比シ約 180萬圓ヲ增加シタリ。同年度中支出ハ 74萬圓アリシニ對シ、收入ハ 255萬圓アリタレハ結局右ノ增加ヲ見ル。府縣中ニ罹災救助金ヲ最モ多ク有スルハ愛知 319萬圓ニシテ次テ三重 279萬圓、岐阜 243萬圓、兵庫 206萬圓、新潟 199萬圓、廣島 193萬圓、岡山 184萬圓等ハ高額ノ部ナリ。

【租稅滯納處分】 租稅滯納處分ハ國稅及府縣稅ノ二者ニ係リ必シモ地方財政ノミニ屬セサルモ便宜合シテ茲ニ概觀ス。

大正七年度ニ於テ國稅ノ滯納ヲ處分決行徵收シタルモノニ其人員 1,797、其稅額 172,537圓アリ。稅金缺損ニ人員 2,368、稅額 264,468圓アリ。之ヲ前年ニ比スレハ、處分決行徵收シタルモノハ人員稅額共ニ減退シ、稅金缺損ハ人員稅額共ニ增加セリ。今國稅滯納ノ狀況ヲ既往ニ見ルニ、明治四十一年以來金額ニ於テハ多少ノ增減アリシモ、人員ハ逐年減少ノ傾向ヲ持續シ、收稅成績ノ良好ニ向ヘルヲ證スルモノタリシカ、本年度ニ於テハ稅金缺損ニ於テ著シキ增加ヲ示セルヲ見ルハ殊ニ注目ヲ要スル所ナリ。

國稅滯納處分ヲ稅目ニ就テ見ルニ、處分決行シタルモノ最モ多數ナルハ地租 674人ニシテ次テ醬油稅 358人、所得稅 264人、鑛業稅 217人、營業稅 194人多數ノ部ナリ。稅金缺損シタルモノハ所得稅 877人、營業稅 487人、醬油稅 447人、地租 317人、鑛業稅 175人等多數ナリ。

府縣稅ノ大正七年度中其處分決行徵收シタルモノノ人員 158,602、其金額 188,569圓、稅金缺損ノ人員 170,233、其稅額 143,254

圓アリ。之ヲ前年ニ比スルニ、人員金額共ニ皆減少セリ。

大正七年度國税滯納處分ヲ決行徴收シタルモノノ人員ヲ府縣別ニ見ルニ、其ノ處分ヲ決行徴收シタルモノナキハ岐阜ノ1縣、其最モ少ナキハ神奈川、福井、沖繩ノ各1ニシテ、次テ奈良2、群馬、埼玉、鳥取、香川ノ各3、和歌山、德島ノ各4、靜岡5、岩手、石川ノ各6栃木、島根ノ各7、茨城8、千葉、佐賀ノ各9、福島、宮崎ノ各10等少數ノ部ナリ。其ノ最モ多キ部ハ北海道726、大阪145、東京89タリ。之レト同樣ニ、府縣税ニ就テモ處分決行徴收シタルモノナキハ香川1縣其最モ少ナキハ和歌山8、千葉10、奈良14、福井20、埼玉23、德島27ニシテ、最モ多キハ大阪32,167、長崎29,995、長野14,533、秋田10,692等ナリトス。

XXXI. 爵位勲章及褒章

【爵位】 大正八年末有爵者ノ數ハ938人ニシテソノ内、公爵16人、侯爵38人、伯爵99人、子爵382人、男爵403人ナリ。前年ニ比シ、侯爵ハ同數ニシテ、公1、伯1、合計2人ヲ減シ、子2、男5、合計7人ヲ增セリ。右ノ數ヲ明治三十四年788人以來各年ノ狀況ヲ見ルニ、大正元年ニ於テ前年ヨリ6人ト昨年ノ前年ヨリ3人ヲ減シタル外常ニ增加シテ大正七年ニ及ヘリ。殊ニ明治四十年ニ於テ約百名ノ增加ヲ見タルハ、三十七八年戰役ノ論功行賞ノ結果タリ。各爵中增加ノ最高キハ男爵ニシテ、即明治二十四年ニ對スル有爵者ノ總增加160人中122人ヲ算ス。大正八年末有爵者ヲ位階別ニ見ルトキハ、從四位最多ク其ノ數184人ニシテ、次テ多キハ正五位ノ160人、正四位ノ152人、正三位ノ112人、從三位ノ99人ナリ。其ノ他ハ百人ニ達スルモノナシ。尙有爵中ノ無位者ハ侯爵以下70人アリ。右ノ外、朝鮮貴族侯6、伯3、子18、男34、合計61人アリ。其ノ位階ハ正三位以下從五位ニシテ無位者3人アリ。

【勲章】 大正八年末勲章佩用個數ハ1,185,682個ニシテ、佩用人員ハ1,039,343人ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ個數5,599人員5,408ヲ增加セリ。今其ノ佩用人員(二個以上ノ勲章佩用者ノ場合ハ、其ノ最高級ノ勲章階級ヲ取リテ計算セリ)ニ就キ勲章等級別ヲ見ルニ、大勲位佩用人員ハ菊花頸飾章3人、菊花大授章14人、計17人ナリ。勲一等佩用人員ハ桐花大授章13人、旭日章125人、瑞寶章81人、寶冠章17人、計236人ナリ。次ニ勲二等佩用人員ハ旭日章263人、瑞寶章320人、寶冠章8人、計591人ナリ。勲三等佩用人員ハ旭日章1,222人、瑞寶章1,931人、寶冠章3人、計3,156人ナリ、勲四等佩用人員ハ旭日、瑞寶、寶冠三種ヲ合シテ8,343人、勲五等ハ10,597人。勲六等ハ26,542人、勲七等ハ146,602人ヲ算ス。金鵄勲章ハ功七級ノミノ佩用者122人アリ。功六級以上ノ有勲者ハ昔上級勲章併用者ナルヲ以テ別ニ現ハレス。最後ニ勲八等佩用人員ハ843,137人ナリ。是等ノ佩用人員ヲ單ニ種類別ニ揭クレハ、旭日章ハ勲一等以下合計658,480人、瑞寶章ハ378,677人、寶冠章ハ2,634人、金鵄勲章ハ122人ナリ。右ノ内旭日佩用者ト瑞寶佩用者トヲ比較スルトキハ、兩者ノ間各等級ニ尠カラサル差異ヲ認ム。即チ兩勲章總數ニ於テ、前記ノ如ク恰モ2ト1トノ比ニ近キ大差ヲ有シナカラ各等級ニ於テハ多少全ク地位ヲ轉倒スルモノアリ。先ツ勲八等ハ旭日佩用者526,998人、瑞寶佩用者314,465人ニシテ兩者ノ間隔總數ト殆ント相等シキ比例ニアリ。然ルニ勲七等ハ旭日佩用者109,447人、瑞寶佩用者36,932人ニシテ旭日ノ多キ割合3ト1トノ比トナル。反之勲五等ニ至リテハ兩者多少ノ關係全然轉倒シ旭日佩用者却テ瑞寶佩用者ヨリ少ク4,367人ト6,203人トナル是ヨリ上級ハ凡テ此ノ現象ヲ持續シ、最後ニ勲一等ニ至リテ再ヒ旭日佩用者ノ數却テ超過シ125人ト81人トノ割合ヲ示ス。次ニ佩用個數ヲ勲章ノ種類ニ分ツトキハ、桐花大授章以上45個ヲ除キ、旭日章682,798個、瑞寶章430,092個、寶冠章2,035個、金鵄勲章70,712個ナリ。右ノ内旭日、瑞寶二種ニ就テ見ルニ旭日章甚タ多ク、之ヲ等級別ニ見レハ六等以上ハ却テ瑞寶章多シ。

大正八年中各勲章新受領者ハ19,430人ナリ。大正五年新受領者ノ102,852人ニ比スレハ甚タ少キ感アルモ、此ノ年ノ新受ハ大正三四年戰役行賞ノ結果ニシテ、寧ロ異常ニ屬シ、本年ハ平年ヨリ多シ。

旭日勲章ノ年金受領者ハ大正八年末ニ於テ尙5,255人アリ。其ノ年金額ハ275,523圓ヲ算ス。金鵄勲章ノ年金受領者ハ大正八年末現在65,519人ニシテ、其ノ金額ハ8,330,400圓ナリ。之ヲ前年ニ比スレハ340人、71,900圓ヲ減少セリ。大正八年中外國人ニ帝國勲章ヲ贈與シタル數ハ290個ニシテ、前年ニ比シ283個ヲ減少シ勲三等ヲ最多トス。又之ヲ國別ニ見ルニ英國ノ107個最多ク次ハ佛國ノ79個ナリ。

【褒賞】 勲章ヲ除クノ外褒賞以下ヲ下賜スルハ今日ノ制度ニ於テ、中央政府即チ賞勲局ヨリスルト、地方廳ニ於テスルトノ二アリ。大正八年中賞勲局ヨリセル表彰受領人員ハ總計1,221人ニシテ前年ニ比シ182人ヲ減セリ。内褒章ヲ受ケタル者ハ、人命ニ依ル者3人、德行ニ依ルモノ7人、公益ニ盡セルニ依ル者11人ナリ。

地方廳ノ表彰ニ依ルモノハ大正七年中580,474人アリ。右ノ内485,827人ハ金十圓未滿ノ寄附者ニ對スル表彰ナリ。之ヲ除クノ外318人ハ人命救助ニ對シ、66人ハ德行ノ嘉スヘキ者ニ對シ、93,263人ハ公益ニ盡セシニ對スル褒賜ナリトス。

XXXII. 議員選擧

【貴族院多額納税者議員】 貴族院多額納税者議員ハ明治二十三年以來每七年ノ選擧ニシテ、最近ハ大正七年六月第五回目ノ選擧ニ係ル。同年選擧ノ際ニ於ケル互選權ヲ有スルモノハ704人(内ニ華族7人アリ)ニシテ、前回選擧ノ際ニ於ケル673人ニ比シ31人ノ增加ナリ。是レ今回ヨリ新ニ互選規則ヲ北海道、竝ニ沖繩縣ニ施行セラレタル結果ナリ。全國各府縣互選權ヲ有スル者ノ直接國税總納額ハ6,183,168圓ニシテ、前期ニ比シ270萬圓餘ノ增加ナリ。從テ一人平均納税額8,783圓モ、前期ニ比シ3,617圓ヲ增セリ。之ヲ明治二十三年第一回ノ選擧ノ際ニ於ケル直接國税總納額736,748圓、竝一人納税額1,091圓ニ比スレハ8倍强ノ增加ナリ。是主トシテ税法税率ノ變更ニ基クモ、一人ノ最高納税額ノ殊ニ强ク增加セル事情等ヨリ見ルトキハ、所謂大富豪ノ增大ヲ爲セルノ狀ヲ察スルニ足ランカ。一人ノ最低納税額モ每期增加ノ傾向アルモ、今回ノ俄然255圓ニ低落セルハ、沖繩縣ノ加ハリタルニ依ル。各府縣中互選權者納税額合計ノ最多キハ大阪府ノ985,977圓ニシテ、東京、兵庫、長野、新潟、北海道等ヲ多シト爲シ、又少キハ沖繩縣ノ6,042圓ヲ最低トシ、高知、大分、茨城、千葉、群馬、佐賀等之ニ次ク。而シテ大阪府ノ最高ト沖繩縣ノ最低トノ差ハ約98萬圓ニシテ一人平均納税額ノ差ハ65,300圓トナル。

【衆議員議員】 最近ノ總選擧タル大正九年五月ノ衆議院議員ノ選擧ハ、改正法律ニ依リ始メテ行ハレタリ。右ノ結果ハ議員數464人ニシテ、從前ニ比シ83人ヲ增加セリ。之ヲ一府縣平均ニ見レハ從來8.1人ハ9.8人ト爲ル。從テ前回、即チ、大正六年ノ選擧ノ際ハ議員一人ニ對スル人口144,978人タリシニ今回ハ121,235人ニ減少シ、略明治三十六、七年ノ割合ト相似タリ。選擧權ヲ有スル者ノ數ハ、其ノ納税資格低下ノ結果3,069,787人ト爲リ、前回ニ比シ1,647,669人ヲ增加セリ。從テ議員一人ニ對スル有權者數6,616人ト爲リ、前回ヨリ約3,000ヲ增加セリ。右有權者中投票セル者2,661,605、投票セサリシ者408,196ニシテ、即チ13.30%ハ投票セサリシ者ナリ。此割合ハ大正四年7.87%、大正六年8.08%ニ比シ著シク昇昂セリ。之レ恐クハ選擧權急激擴張ノ結果ナランカ。投票數中有効ト無効トノ比例ハ99.1%ト0.9%トシテ之レ亦前回及前々回ニ比シ無効票ヲ增加セリ。其理由亦棄權數ノ大ト同一ナルモノアランカ。又是等ヲ各府縣別ニ就テ見ルニ、議員數ハ東京府ノ最大25名ヨリ鳥取縣ノ最少4名ニ至ル。議員一人ニ對スル人口ハ、京都148,533人ヲ最高トシ東京138,304人、埼玉135,770人、宮城133,900人、北海道133,606人等ノ順ニシテ、少キハ三重98,982人、香川99,070人等ナリ。而シテ其ノ少キハ人口寡少ノ獨立市ヲ包含スルニ依ルモノヽ如シ。又議員一人ニ對スル有權者ノ比例ノ高キ府縣ヲ擧クレハ、滋賀10,032、岡山9,122、石川8,405、埼玉8,386、愛知8,011、千葉7,969等ニシテ、其ノ低キハ北海道3,050、山形3,341、香川4,423等ナリ。同年ノ選擧ニ於テ棄權歩合ノ最高キ府縣ハ、鹿兒島28.8%、宮崎26.3%、神奈川22.2%、岩手20.6%、香川19.0%等ニシテ、少キハ鳥取6.7%秋田8.4%、福島8.6%、山梨8.8%、大分9.0%等ナリ。

大正九年選擧ノ際ノ議員ノ年齡別ハ、三十五歲未滿14人、四十歲未滿46人、四十五歲未滿71人、五十歲未滿79人、五十五歲未滿116人、六十歲未滿75人、六十歲以上63人ナリ。即チ、五十歲以上五十五歲未滿最モ多數ヲ占メ、次ニ四十五歲以上五十歲未滿、五十五歲以上六十歲未滿ノ順ニシテ、大體ニ於テ年長者ヲ增スノ傾向ヲ認メラル。即チ、從來四十五歲以上五十歲未滿ノ階級ニ多數ヲ占メタリシカ、前回ノ選擧以來五十歲以上五十五歲未滿ノ階級最多數タルニ至リ、六十歲以上ノ高齡者モ亦今回著シク增加セリ。大正九年ノ選擧ニ於ケル議員ノ職業ハ65人ノ無職業ヲ除クノ外、農業93人、會社員89人、辯護士68人、商業36人、官公吏30人、新聞及雜誌記者25人等ナリ。農業ハ初期以來、最多數ヲ占メ來リシモ近時稍減少ノ傾向アリシカ今回14名ノ增加ヲ見タリ。會社員ノ數ハ明治四十五年ノ選擧以來激增シ、今回又36名ノ增加ヲ見タリ。辯護士ノ數ハ從來殆ト一定ノ狀況ニ在リシカ今回12名ヲ增セリ。商業ハ前回激減ノ反動ヲ示シ19名ヨリ36名ニ增加セリ。殊ニ官公吏ハ前回1名ナリシカ、今回三十名ニ激增シ、反之、醫師及藥劑師ハ前回ノ15名ヨリ8名ニ減少セリ。

【府縣會議員】 府縣會議員選擧ノ最近ハ大正八年ノ選擧ニ係ルモノニシテ、内同年選擧ノ行ハレサリシモノ即チ佐賀縣ハ大正六年島根縣ハ大正七年ノ事實ヲ揭ケタリ。府縣會議員ノ總數ハ、北海道、沖繩ヲ除キ議員1,737人ソノ内、市部266人、郡部1,471人ナリ。有權者總數ハ2,409,401人ナルガ、其ノ最モ多キハ愛知111,689人ニシテ、兵庫94,055人、新潟85,894人、長野85,128人、廣島84,006人等之ニ次ク、少キハ鳥取18,674人、山梨24,668人、香川25,411人、奈良28,098人、高知29,774人等ナリ。有權者中有効投票數1,992,937人無効投票23,202人、棄權393,286人ナリ。

【郡會議員】 郡會議員ノ選擧ハ大正八年分報告未着ナルヲ以テ大正四年ノ數ヲ揭ケタリ、其ノ當時ノ議員ノ全國四十五府縣ノ總數ハ12,789人ニシテ、有權者數ハ2,267,217人ナリ。右有權者中、投票シタルモノ有効票1,472,316人、無効票31,672人、投票セサリシ者768,213人ナリ。

【市町村會議員】 市町村會ニ關スル數ハ、上記各會ト異リ、實際ニ行ハレタル選擧ノ際ノ數ニアラス、各年末ノ現在數ヲ揭ク。即チ大正八年末全國市會ハ 73、議員 2,505人、有權者 300,318人ナリ。大正四年以後會數ニ於テ 8、議員 285人、有權者 1,303人ヲ增セリ。大正四年ハ其ノ前年ヨリ有權者數ヲ減シタルハ營業稅率改正ノ結果タルヲ想像セシムルモ、其ノ後尙增率ノ遲々タルハ原因詳ナラス。

町會ハ大正八年末會數 1,317、議員 22,389人、有權者 677,779人、何レモ前年ニ比シ增加セリ。町會數ノ最多キハ千葉縣ノ 75、最少キハ鹿兒島 6、山梨 7ナリ。議員及有權者ノ最高ハ愛知ノ議員 1,316人、有權者 51,964人ニシテ最少キハ山梨ノ議員 106人、有權者 2,115人トス。

村會ハ大正八年末會數 10,292、議員 130,802人、有權者 3,734,739人ナリ。前年ニ比シ會數 8ヲ減シ議員 1,145人、有權者 27,924人ヲ增セリ、村會數ノ減少ハ勿論村ノ合併又ハ町ニ變改ノ爲メナリ。右ノ外、大正八年末ニ町村組合會 52アリ。其ノ議員 725人、有權者 17,019人アリ。町村總會ハ年々減少ノ傾キアリテ、大正八年末ニハ會數 1、有權者 7アルノミナリ。

北海道ノ區制及一二級町村制ニ依ルモノ竝ニ 沖繩縣及東京、鹿兒島等ノ島嶼町村制ニ依ル區會及町村會ハ前記以外ナリ。其ノ數區會 7、議員 201人、有權者 9,726人又町會ハ 32、議員 608人、有權者 11,418人、村會數 266、議員 3,282人、有權者 151,072人ナリ。而シテ北海道ニ町村組合會 2、議員 16人、有權者 35人アリ。

XXXIII. 官吏公吏及恩給

【官吏】 大正八年末現在國庫ヨリ俸給ヲ受クル 帝國文官ノ數ハ勅任 852、奏任 9,844、判任 85,395、計 99,091人ニシテ其ノ俸給年額勅任 3,548,690圓、奏任 15,698,322圓、判任 38,093,497圓、計 57,340,509圓ナリ。之ニ更ニ雇傭人員 182,185人、其ノ俸給 47,997,950圓ヲ加フルトキハ、國庫ヨリ俸給ヲ受クル文官並雇傭ノ合計ハ人員 278,277人、俸給年額 105,338,459圓ナリトス。右ノ內臨時雇傭及門衞等並休職官吏ハ之ヲ含マス。又陸海軍武官及地方費支辨ノ官吏ハ此ノ以外ナリ。上記國庫官吏ノ數ハ之ヲ前年ニ比スルニ勅任ヨリ雇傭ニ至ルマテ、各階級悉ク人員俸給共ニ增加ヲ示セリ。而シテ一人平均年俸ヲ算出シ見ルニ勅任 4,165.1圓、奏任 1,594.7圓、判任 446.1圓、雇傭 263.4圓ニシテ前年ニ比シ勅任 103.8圓、奏任 77.2圓、判任 30.3圓、雇傭 25.9圓ヲ增加セリ。右ハ文官總體ノ最近ニ於ケル現狀ナルカ其ノ年々ノ變遷ハ本書統計表ニ依リテ窺知セラルヘシ。

大正八年末文官人員ヲ各省廳別ニ見ルニ、勅任官ハ文部省 357人最モ多ク、司法省 104人、朝鮮總督府 88人之ニ亞ク、奏任官ハ司法省 1,945人ヲ最多トシ、府縣 1,416人、文部省 1,407人、朝鮮總督府 1,044人之ニ亞ク。判任官ハ地方費支辨ノ者 7,519人ヲ除外シテ各廳ヲ比較スレハ、遞信省 18,056人各省中ノ第一ニシテ、次テ大藏省 11,213人、內閣 8,860人、府縣 7,997人、朝鮮總督府 7,668人等多シ。雇傭ハ遞信省 55,781人、內閣 47,582人、朝鮮總督府 24,138人、臺灣總督府 17,329人、司法省 12,952人等多數ナリ。文官總人員(雇傭ヲ含ム)ノ多キモノヽ順位ハ遞信、內閣、朝鮮、臺灣、司法等ノ各省府ナルモ俸給ノ多少ハ右ト同シカラス。其ノ最多キハ內閣ニシテ次ハ朝鮮、遞信、臺灣、司法等ナリ。內閣ノ俸給多キハ必スシモ高官ノ人員多シト云フニ非スシテ、寧ロ其ノ多數ノ雇傭員鐵道從業者カ他官廳ノ者ニ比シ比較的高給ヲ給セラルヽニ職由ス、朝鮮、臺灣ノ人員ニ於テハ遞信省ト格段ノ差アルニ不拘俸給ニ於テ殆ト相似タルハ其ノ殖民地タル關係上平均俸給高キニ依ル。

文官ノ各廳各部局ノ分配ニ關シテハ茲ニ其ノ記述ヲ省略スルモ今在外公館ノ官吏ヲ見ルニ、大正八年末大使館公使館人員ハ 141人、領事館人員 637人ナリ。前年ニ比シ前者ハ 19人、後者ハ 34人ヲ增セリ。而シテ領事館人員中 324人ハ警視警部及巡査ナリ。在外公館人員モ逐年增加ノ趨勢ニ在リテ只累年ノ 數字ノ上ニ大正二、三年ノ減少ト明治三十七、八年ノ激增トノ變態ヲ認ムルニ止マル。一ハ行政整理ニ基ク減員ニシテ他ハ戰時ニ於ケル 臨時增員ノ結果ナルヘシ。

大正八年末現役在職武官ノ數ハ陸軍ハ准士官以上人員 17,532人其ノ年俸 17,134,399圓、海軍ハ候補生下士ヲ含ミ人員 20,612人、其ノ年俸 10,776,966圓ナリ。前年ニ比シ陸軍ハ 477人、1,512,078圓、海軍ハ 1,227人、612,458圓ヲ增加シ、且大正二年ノ行政整理ノ年ヲ除クノ外年々增加ノ數ヲ示ス。大正八年現役者中、將官ハ陸軍 214人、海軍 109人、上長官及士官ハ陸軍 15,339人、海軍6,174人、准士官ハ陸軍 1,979人、海軍 1,767人 ナリ。又海軍ノ下士 13,832人、候補生 186人ナルモ陸軍ハ是等ノ數ヲ缺如ス。

大正八年末文武官吏ノ休職、待命、停職ノ數ハ高等官 705人、判任官 566人、計 1,271人ナリ。前年ニ比シ 226人減少セリ。累年ノ數ヲ見ルニ明治三十四、五、六年頃最モ多ク、其ノ以後ニ於テハ明治四十二年及大正二年等所謂增俸及整理ノ際ニ於テ 著シク多數ヲ呈ス。尙大正八年末ノ休職者ヲ細觀スレハ文官 649人、武官 622人、內陸軍 376人、海軍 246人ナリ。而シテ武官ハ高等官多ク文官ハ判任官多キノ事實前年ト同シ。又文官中ニテハ內閣、府縣、司法省等特ニ多ク、司法省ノ殆ント全部ハ高等官ニシテ內閣及府縣ノ判任官多數ナル等亦前年ト同シ。

【恩給及扶助料】 大正八年末現在政府ヨリ恩給又ハ扶助料ヲ受クル總人員ハ 275,539人、其ノ年額 30,594,709圓ナリ。前年ニ比シ 6,178人、2,920,575圓ヲ增加セリ。今大正八年ノ數ヲ恩給ト扶助料トニ分揭スレハ、恩給 168,083人、23,469,465圓、扶助料 107,456人、7,125,244圓ナリ。而シテ右恩給金額ノ內容ハ文官 5,515,048圓、陸軍 13,102,891圓、海軍 4,851,526圓ニシテ文官ハ恰モ武官ノ $^1/_2$ ニ當リ、又扶助料ハ文官 790,816圓、陸軍 5,657,344圓海軍 677,084圓ニシテ文官扶助料ハ武官ノ約 $^1/_8$ ニ相當ス。

尙大正八年末現在恩給及扶助料ヲ受クル者ヲ 勅奏判任ノ階級別ニ見ルニ、勅任ハ文官 783人、730,766圓、陸軍 447人、692,212圓海軍 258人、416,841圓ニシテ此階級ニ於テハ文官多シ。奏任ハ文官 6,251人、1,995,395圓、陸軍 21,603人、6,996,102圓、海軍 3,596人、1,538,398圓、又判任ハ文官 26,515人、3,176,626圓、陸軍 41,878人、3,812,387圓、海軍 18,932人、2,165,104圓、外ニ巡査、看守 7,145人、376,527圓アリ。而シテ右勅奏判任ノ外、卒ハ陸軍 127,912人、7,257,998圓、海軍 20,126人、1,408,267圓アリ。

恩給及扶助料受領者ノ現狀ハ上記ノ如クナルカ、大正八年中新ニ之ヲ受領シタル人員及金額ハ 勅任 373人、546,471圓 奏任 13,155人、4,430,831圓、判任 23,626人、2,464,307圓、卒68,662人、4,066,692圓、計 105,816人、11,508,301圓ナリ。

恩給及扶助料ノ外、軍人恩給法、官吏遺族扶助法其ノ他ノ法令ニ依リ一時賜金ヲ受領シタル者、大正八年中人員 2,387人、294,376圓アリ。內勅任 7人 9,900圓、奏任 451人、135,754圓、判任 1,835人、138,556圓、卒 94人、10,165圓アリ。其ノ大部分ハ陸海軍軍人ナリトス。

【宮內官吏】 大正八年末宮內官吏ノ現在員ハ雇傭ヲ 含マサル總數 3,121人、其ノ年俸 1,933,457圓ナリ。前年ニ比シ 92人、150,503圓ヲ增加セリ。現在員ノ內譯ハ勅任 94人 210,300圓、奏任 382人、537,440圓、判任 2,645人、1,185,717圓トナリ。其ノ一人平均ヲ算出スルトキハ、勅任 2,237圓、奏任 1,407圓、判任 448圓ナリ。之ヲ國費ノ官吏ト對照スルニ勅任ノ平均俸 $^1/_2$ ナルハ是レ宮內勅任官ニ殆ント名譽職ニ等シキ者ヲ 含メルカ爲ナルヘク奏任ハ約 187圓少シ。是亦李王職、式部職、侍從職其ノ他地位高クシテ而モ俸給比較的少キモノ多キノ結果ナルヘシ。判任ハ國庫ノ官吏 446圓ナルニ對シ宮內官吏 448圓ニシテ、其ノ差 2圓ノ高キヲ見ル。而モ國庫ノ判任官平均中ニハ地方費支辨ノ郡官吏及巡査等比較的薄給ノ者ヲ含マサルニ反シ、宮內判任官中ニハ主殿寮ノ警守、諸陵寮ノ陵墓守部等極メテ下級ノ者ヲ含ミタル 平均ニシテ、尙且、2圓ノ高額ナルヲ見レハ間接ニ國庫判任官ノ俸給ノ厚カラサル證左ト爲ス。

【公吏】 大正八年末ニ於ケル府縣以下地方自治體ニ於ケル公吏員ノ數ハ府縣名譽職參事會員及吏員 11,163人、郡名譽職參事會員及吏員 4,334人、市參事會員及市町村吏員 299,633人、合計府縣郡市町村ノ地方自治行政ニ從事スル總人員ハ 315,130人ナリ。

府縣名譽職參事會員ノ數ハ法令ノ定ムル所ナルヲ 以テ前年ト異ナルナク 7名若クハ 10名ナリ。府縣有給吏員ノ數ハ大正八年末現在 10,827人ニシテ前年ニ比シ 1,402人ヲ增加セリ。其ノ員數ノ多少ハ府縣ニ依リ大差アリ。多キハ愛知 953人、岡山 724人、栃木 641人、愛媛 530人、京都 440人、秋田 414人等ニシテ其ノ少キハ熊本 57人、奈良 65人、佐賀 75人等ナリ。而シテ其ノ俸給ハ最多愛知 214,172圓、栃木 204,380圓、大阪 148,863圓等ヨリ最少熊本 15,686圓、奈良 19,377圓等ニ至ル。

大正八年末現在郡名譽職參事會員ノ數ハ 2,635人ニシテ、前年ヨリ更ニ 5人ヲ增加ス。名譽職常設委員ハ 47人ニシテ、前年ニ同シク、之ヲ置ク府縣ハ全國中僅ニ 7府縣ニ過キス。郡有給吏員ハ 1,602人ニシテ前年ニ比シ 209人ヲ增加ス。是亦府縣ニ依リ其ノ數ニ大差アリテ其ノ最多キハ福岡縣ノ 132人ニシテ山梨縣ハ僅カニ 1人ニ過キス。又北海道及沖繩縣ハ法制上之ヲ存セス。

大正八年末全國市區町村吏員ノ總數 299,635人、中市(區ヲ含ム)吏員ハ市長以下總テヲ合シ 16,702人ニシテ前年ニ比シ 1,230人ヲ增加セリ。其ノ吏員ノ內譯ヲ擧クレハ市長 80人、助役 82人、參事會員 441人、收入役 78人、副收入役 11人、常設委員 1,249人、名譽職區長代理 1,288人、有給區長及代理 25人、書記 5,440人、雇傭及其ノ他 8,013人ナリ。是等ノ吏員中有給吏員ノ俸給年額ハ 5,987,473圓ニシテ前年ヨリ 1,088,148圓ヲ增加セリ。今此ノ俸給ヲ有給吏員 13,649人ニ割當ツルトキハ一人平均年俸 439圓弱ニシテ前年ニ比シ 49圓ヲ增加セリ。

大正八年末現在全國町村吏員ノ總數ハ 282,833人ナリ。本年中町村ノ市トナリタルモノアル結果町村數ヲ減シタルニモ拘ラス 吏員ノ數ハ前年ニ比シ却テ 5,471人ヲ增加セリ。是レ累年ノ趨勢ニシテ本年ノミニ限レルニアラス。右大正八年末ノ 町村吏員ヲ細別スレハ名譽職町村長 9,759人、有給町村長 1,590人、名譽職助役 8,348人 有給助役 3,209人、收入役、11,159人、副收入役 28人、常設委員 59,426人、區長及代理 146,890人、書記 38,176人、雇傭其ノ他 4,749人ナリ。右ノ內町村長ハ有給ヲ減シ、名譽職ヲ增加シ助役ハ有給ヲ增シ名譽職ヲ減ス[illegible]。上記ノ內有給吏員ノ合計ハ 58,910人ニシテ俸給年額 12,879,051圓ナルヲ以テ一人平均年俸 218圓强ニ當リ前年ニ比シ 36圓ヲ增加セリ。

正　誤

頁	表	欄	行	誤	正
12	略說	2	5	夏蠶	春蠶
37	〃	1	23	一箇中	一年中
46	〃	1	1	同機ノ型	同樣ノ型
70	〃	1	23.26.28	機械工	機織工
21	10	6	(比例)	37.94	19.37
〃	〃	〃	(〃)	18.81	8.92
〃	〃	〃	(〃)	19.04	48.81
35	23	2	47	1,023	10,293
〃	〃	〃	51	686	6,186
〃	〃	〃	52	8,154	8,754
〃	〃	〃	56	18,566	18,556
〃	〃	〃	61	12,234	12,734
〃	〃	3	33	646	546
〃	〃	〃	40	1,689	1,687
〃	〃	〃	56	659	1,422
〃	〃	〃	57	1,422	659
〃	〃	4	3	343,334	343,348
〃	〃	5	25	95,188	7,230
〃	〃	6	6	160,968	130,968
〃	〃	〃	59	11,694	11,674
〃	〃	7	4	14,848	13,848
〃	〃	〃	7	598	—598
〃	〃	〃	35	29,093	19,093
39	27			生產死產身分別比例表ハ28表實數表ノ下ニ入ル	
151	111	2	5	255,657,017	255,675,017
253	181	4	19	922	92
271	204	7	14	72.95	71.42
325	296	2	12	2,112,856,908	5,112,856,908
404	375	2	44	19	17
431	400	見	出	地方別(大正七年度)	地方別(大正六年度)
433	403	6	12	1,940,103	1,980,103
469	443	1	16	宮崎控訴院	宮城控訴院
488	464	3	22	436	346
521	490	見	出	罪名別(大正八年)	罪名別(大正七年)
544	513	6	38	兵學枝	兵學校
562	530	1	7	(內務省移管)	(內務省所管)
566	531	表	題	歲出經常部	歲出臨時部
628	577	表	頭	投縣セシモノ	投票セシモノ
681	637	2	43	數量ノ前ニ單位　クヲ脫ス	
687	638	見	出	(州)	(州內)

437